熊本県文化財調査報告第269集

熊本城遺跡群古城上段

２０１２.３

熊 本 県 教 育 委 員 会

熊本県文化財調査報告第 269 集

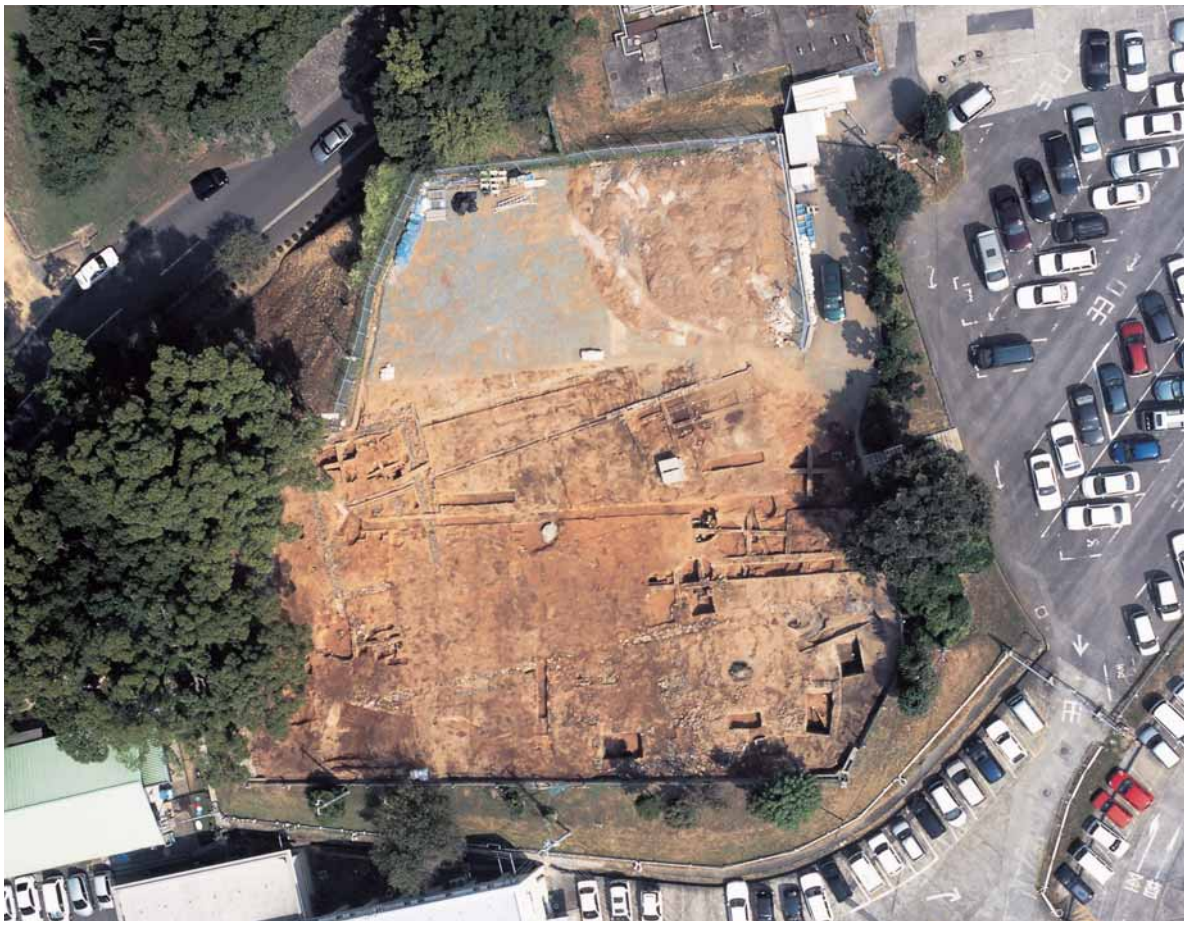
熊本城遺跡群古城上段

衛戍病院遺存建物

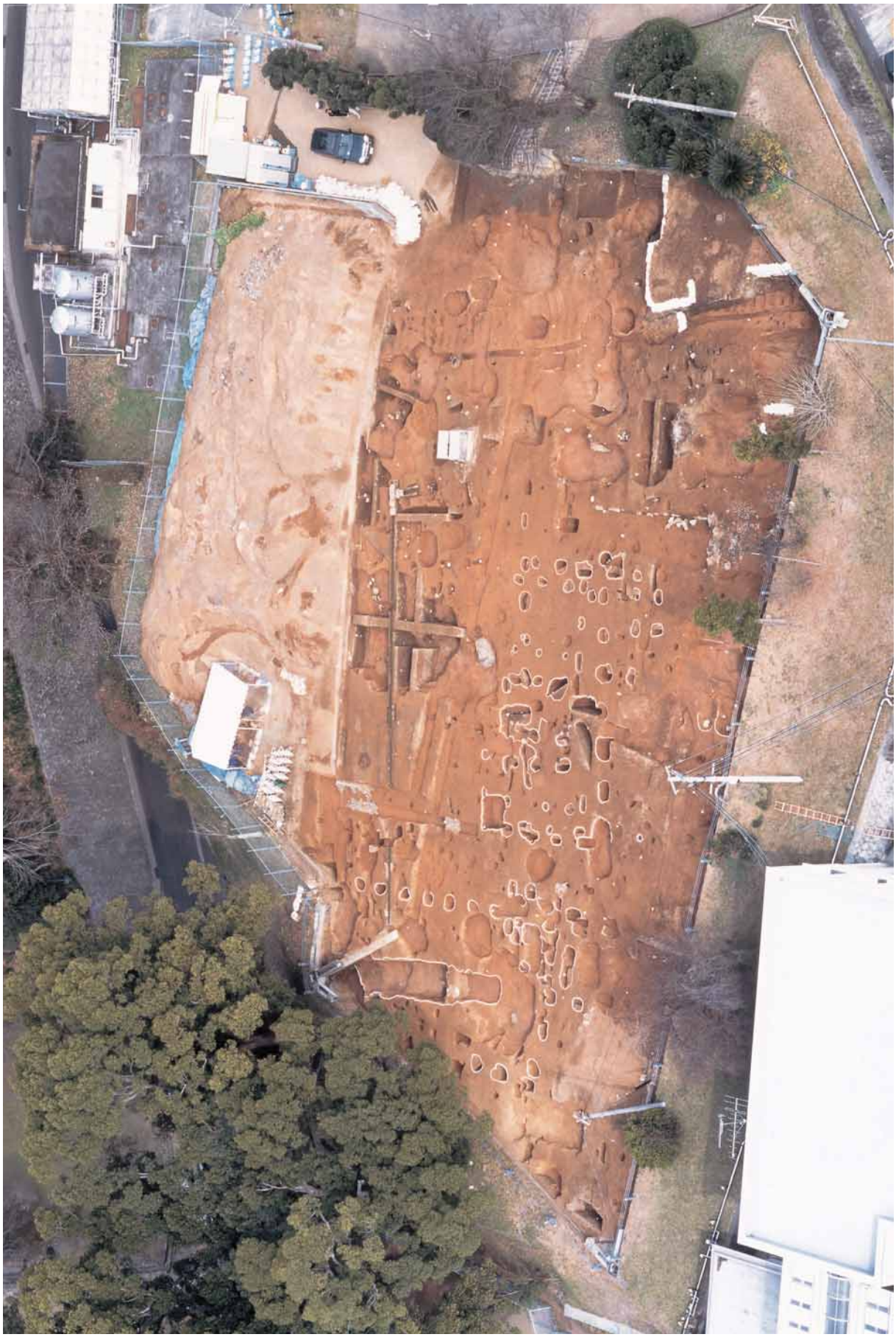
2012.3

熊本県教育委員会

一日亭春秋真景図屏風（秋景）- 松井文庫蔵 -



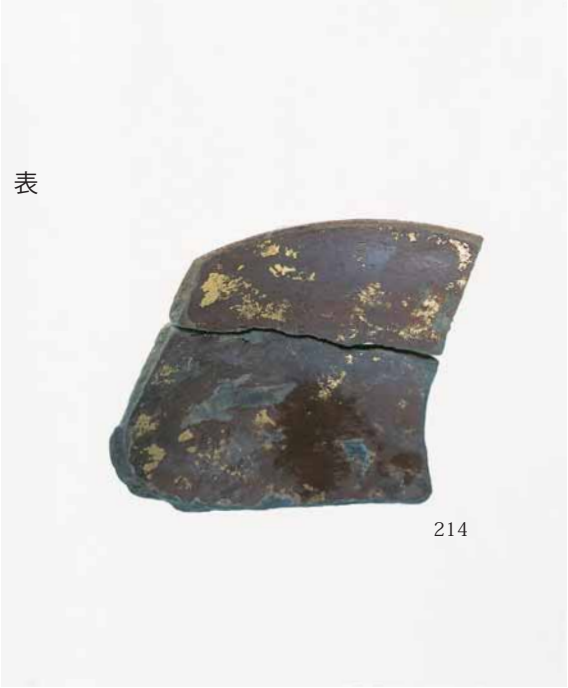
衛戍病院遺構検出状況



熊本城遺跡群古城上段全景写真

隈本城跡遺構検出状況

隈本城跡遺構検出状況



—

漆皿 (金箔)

碗 (象嵌)・香合

初期伊万里 壺・鉢

輸入陶磁器 皿

97

染付芙蓉手大皿

273
268
264
266
274
272
271
265
270
276
263
275
277
261
267
262

焼塩壺

序　　文

本書は、国立熊本病院新築工事に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した、熊本市二の丸に所在する「熊本城遺跡群古城上段」の発掘調査報告書です。

熊本城は、県の中西部に位置し、阿蘇外輪山に源を発する県内の四大河川の一つである白川下流域に広がる熊本平野を望む京町台地の先端部の茶臼山南端に位置し、15世紀後半の出田秀信による隈本城築城（千葉城）にはじまり、その後、鹿子木親員（寂心）が茶臼山南端に築城（古城）し、城親冬、佐々成政を経て、天正16（1588）年に肥後半国の大名として入城した加藤清正が茶臼山一帯を取り込んだ平山城に大拡張し、日本三大名城の熊本城が造られました。

加藤家は寛永9（1632）年に改易となり、細川忠利が豊前小倉より入封して、以来明治維新まで細川氏の居城となりました。

当該調査区からは、加藤期に造られた道路遺構や、細川藩家老松井家の下屋敷にあたる遺構や、茶器を含む大量の陶磁器等が出土しました。

本書では平成14年度に実施した、国特別史跡「熊本城跡」の一角に所在する「熊本城遺跡群」（古城上段）の調査成果を整理・報告したものです。

本書が学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助としてご活用いただけると幸いです。

最後に、埋蔵文化財発掘調査にご理解、ご協力をいただいた熊本市の皆様をはじめ、熊本市教育委員会、事業主体である国立病院機構熊本医療センターに対し、心より感謝申し上げます。

平成24年3月23日

熊本県教育長　山　本　隆　生

例　　言

1　本書は、熊本市二の丸1－5に所在する熊本城遺跡群古城上段の調査報告書である。
2　調査は国立熊本病院新築事業に伴う事前発掘調査として、厚生省から依頼を受けて平成14年度に熊本県教育庁文化課が実施した。
3　遺構の写真撮影は、水野哲郎が担当し、遺跡の空中写真撮影は九州航空株式会社熊本営業所に委託した。
4　遺構の実測は、水野、角田賢治、三宅一生が担当した。
5　遺物の1次整理は、株式会社イビソクに委託した。
6　遺物の実測は、村﨑孝宏、戸田紀美子、藤本香織が担当し、陶磁器類を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
7　遺構、遺物の製図は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
8　遺物の写真撮影は、株式会社写測エンジニアに委託した。
9　本書の執筆は、第Ⅲ章、第Ⅳ章第1節を水野哲郎、第Ⅳ章第2節を竹田知美、第Ⅳ章第3節を青木勝士、その他の文章を村﨑が担当した。
10 本書の編集は村﨑が担当し、戸田、藤本が補助した。
11 本書に掲載した資料は、熊本県文化財資料室で保管している。

凡　　例

1　本書で使用している方位は、座標軸を基準とした北を示している。
2　報告書に掲載した実測図の縮尺は、掘立柱建物跡、堀跡はＳ=1/80、土坑はＳ=1/40（一部を1/80）、道路遺構はＳ=1/150である。
3　土層及び陶磁器類の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版　標準土色帖」（財団法人日本色彩研究所；2004）に準拠した。
4　写真の縮尺は任意である。
5　遺物の実測は一部を除き原則として原寸大で行い、報告書に掲載した実測図の縮尺は挿図ごとにスケールを示した。陶磁器、土師器1/3（一部を1/4）、瓦1/4、煙管1/2とした。
6　遺構の種別については、一部を除いて発掘調査時に判断し略号を付すことができなかった。そのため、本報告では遺構の種別を示す略号を付さず、すべての遺構をＳとし遺構番号を付して表記した。

本 文 目 次

巻頭カラー
序文
例言・凡例
第Ⅰ章　調査の概要
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　調査の方法と経過及び調査の組織 …… 3
　　1　調査の方法と経過 …… 3
　　2　調査の組織 …… 10
第Ⅱ章　遺跡概要
　第1節　地理的環境 …… 11
　第2節　歴史的環境 …… 11
第Ⅲ章　調査とその成果
　第1節　隈本城以前の遺構(Ⅰ期) …… 18
　第2節　隈本城の遺構(Ⅱ期) …… 21
　　1　建物 …… 22
　　2　土坑 …… 31
　　3　堀 …… 33
　第3節　加藤期の遺構(Ⅲ期)
　　1　土坑 …… 36
　　2　道路 …… 41
　第4節　細川期の遺構(Ⅳ期)
　　1　土坑 …… 47
　　2　道路 …… 60
　第5節　細川期の遺構（Ⅴ期） …… 109
　第6節　細川期の遺構（Ⅵ期） …… 131
　第7節　明治からの遺構(Ⅶ期) …… 151
　第8節　その他の遺構 …… 157
　　　　陶磁器・土器以外の遺物 …… 162
第Ⅳ章　まとめ
　第1節　遺構の変遷 …… 179
　第2節　陶磁器及び茶器の考察 …… 183
　第3節　八代松井氏下屋敷「一日亭」について …… 187
参考文献 …… 197
遺物観察表 …… 199
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第1図　周辺位置図
第2図　周辺遺跡分布図(1/20000)
第3図　全体遺構配置図(1/400)
第4図　Ⅰ期遺構配置図(1/400)
第5図　S 164遺構実測図
第6図　Ⅱ期遺構配置図(1/400)
第7図　S 231遺構実測図
第8図　S 234遺構実測図
第9図　S 235遺構実測図
第10図　S 236遺構実測図
第11図　S 237遺構実測図
第12図　S 239遺構実測図
第13図　S 238遺構実測図
第14図　S 240遺構実測図
第15図　S 230遺構実測図
第16図　S 233遺構実測図
第17図　S 232遺構実測図
第18図　S 076遺構実測図
第19図　S 102遺構実測図
第20図　S 113遺構実測図
第21図　S 114遺構実測図
第22図　S 117遺構実測図
第23図　S 132遺構実測図
第24図　S 055遺構実測図
第25図　S 005・S 132・S 143・S 240 出土遺物実測図
第26図　Ⅲ期遺構配置図(1/400)
第27図　S 018遺構実測図
第28図　S 023遺構実測図
第29図　S 025遺構実測図
第30図　S 065遺構実測図
第31図　S 121・S 122遺構実測図
第32図　S 168出土遺物実測図
第33図　S 143・S 144遺構実測図
第34図　S 151遺構実測図
第35図　S 046遺構実測図
第36図　S 018・S 023・S 138・S 151 出土遺物実測図
第37図　Ⅳ期遺構配置図(1/400)
第38図　S 006遺構実測図
第39図　S 014遺構実測図
第40図　S 016遺構実測図
第41図　S 042遺構実測図
第42図　S 047遺構実測図
第43図　S 062遺構実測図
第44図　S 063遺構実測図
第45図　S 072遺構実測図
第46図　S 073遺構実測図
第47図　S 125遺構実測図
第48図　S 131遺構実測図
第49図　S 134遺構実測図
第50図　S 147遺構実測図
第51図　S 152・S 153遺構実測図
第52図　S 005出土遺物実測図
第53図　S 014出土遺物実測図
第54図　S 016出土遺物実測図
第55図　S 047出土遺物実測図
第56図　S 047出土遺物実測図
第57図　S 047出土遺物実測図
第58図　S 047出土遺物実測図
第59図　S 047出土遺物実測図
第60図　S 047出土遺物実測図
第61図　S 073出土遺物実測図
第62図　S 073出土遺物実測図
第63図　S 073出土遺物実測図
第64図　S 073出土遺物実測図
第65図　S 134出土遺物実測図
第66図　S 134出土遺物実測図
第67図　S 134出土遺物実測図
第68図　S 134出土遺物実測図
第69図　S 134出土遺物実測図
第70図　S 134出土遺物実測図
第71図　S 134出土遺物実測図
第72図　S 134出土遺物実測図
第73図　S 134出土遺物実測図
第74図　S 134出土遺物実測図

第75図　S 134出土遺物実測図
第76図　S 134出土遺物実測図
第77図　S 134出土遺物実測図
第78図　S 134出土遺物実測図
第79図　S 134出土遺物実測図
第80図　S 134出土遺物実測図
第81図　S 134出土遺物実測図
第82図　S 134出土遺物実測図
第83図　S 134出土遺物実測図
第84図　S 134出土遺物実測図
第85図　S 153出土遺物実測図
第86図　Ⅴ期遺構実測図(1/400)
第87図　S 010遺構実測図
第88図　S 013遺構実測図
第89図　S 017遺構実測図
第90図　S 020遺構実測図
第91図　S 033・S 037遺構実測図
第92図　S 048遺構実測図
第93図　S 054遺構実測図
第94図　S 057遺構実測図
第95図　S 068遺構実測図
第96図　S 069・S 070遺構実測図
第97図　S 071遺構実測図
第98図　S 089・S 099遺構実測図
第99図　S 100遺構実測図
第100図　S 130・S 133遺構実測図
第101図　S 141遺構実測図
第102図　S 177遺構実測図
第103図　S 142遺構実測図
第104図　S 146遺構実測図
第105図　S 010出土遺物実測図
第106図　S 010出土遺物実測図
第107図　S 010出土遺物実測図
第108図　S 010出土遺物実測図
第109図　S 020・S 054・S 120出土遺物実測図
第110図　Ⅵ期遺構配置図(1/400)
第111図　S 032・S 034・S 036遺構実測図
第112図　S 035遺構実測図
第113図　S 041遺構実測図
第114図　S 049遺構実測図
第115図　S 079・S 081・S 083・S 084・S 085
遺構実測図
第116図　S 091・S 092遺構実測図
第117図　S 106遺構実測図
第118図　S 093遺構実測図
第119図　S 115遺構実測図
第120図　S 137遺構実測図
第121図　S 139遺構実測図
第122図　S 148遺構実測図
第123図　S 149遺構実測図
第124図　S 035・S 093・S 139・S 149
出土遺物実測図
第125図　S 040出土遺物実測図
第126図　S 148出土遺物実測図
第127図　S 195出土遺物実測図
第128図　S 195出土遺物実測図
第129図　Ⅶ期遺構配置図(1/400)
第130図　S 008遺構実測図
第131図　S 156遺構実測図
第132図　S 002出土遺物実測図
第133図　S 163遺構実測図
第134図　ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土遺物実測図
第135図　ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土遺物実測図
第136図　時代不明期遺構配置図(1/400)
第137図　S 021遺構実測図
第138図　S 038遺構実測図
第139図　S 064・S 078遺構実測図
第140図　S 044・S 080遺構実測図
第141図　S 074遺構実測図
第142図　S 088遺構実測図
第143図　S 044出土遺物実測図
第144図　煙管実測図
第145図　銭貨拓本(1/1)
第146図　瓦実測図(1)
第147図　瓦実測図(2)
第148図　瓦実測図(3)
第149図　瓦実測図(4)
第150図　瓦実測図(5)
第151図　瓦の刻印(1)
第152図　瓦の刻印(2)

第153図　瓦の刻印(3)
第154図　瓦の刻印(4)
第155図　瓦の刻印(5)
第156図　遺構配置図
第157図　Ⅲ・Ⅳ期遺構配置図

表　目　次

第1表　熊本城跡遺跡群古城上段
調査検討委員会名簿
第2表　周辺遺跡地名表
第3表　Ⅱ・Ⅲ期陶磁器・土器観察表
第4表　Ⅳ期陶磁器・土器観察表
第5表　Ⅴ期陶磁器・土器観察表
第6表　Ⅵ期陶磁器・土器観察表
第7表　Ⅶ～不明期陶磁器・土器観察表
第8表　銭貨集計
第9表　銭貨観察表
第10表　釘集計
第11表　スラグ集計
第12表　瓦集計
第13表　焼塩壺
第14表　土製品

写　真　目　次

大扉　衛戍病院遺存建物
一日亭春秋真景図屏風（秋景）
衛戍病院遺構検出状況
熊本城跡遺跡群古城上段全景写真
隈本城遺構検出状況
隈本城遺構検出状況
漆皿（金箔）
碗（象嵌）・香合
初期伊万里　壺・鉢
輸入陶磁器　皿
芙蓉手大皿
焼塩壺
PL.1　S 164　土層断面　南西より
S 164　SF硬化面　北より
S 232　遺構検出状況
PL.2　S 231　遺構検出状況
PL.3　S 234　遺構検出状況　西より
S 237　遺構検出状況　北より
PL.4　S 236　遺構検出状況　北より
S 238　遺構検出状況　南より
PL.5　S 239　遺構検出状況　南より
S 046　道路遺構検出状況
PL.6　S 055　土層断面　西より
S 055　遺構検出状況　南より
S 055　遺構検出状況　東より
S 076　土層断面　東より
S 076　完掘状況　南より
S 101　土層断面　東より
S 114　遺構検出状況　東より
S 114　完掘状況　西より
PL.7　S 023　発掘状況　南より
S 023　土層断面　北西より
S 023　完掘状況　北より
S 025　土層断面　西より
S 025　完掘状況　西より
S 046　土層断面　北より
S 065　土層断面　東より
S 114　完掘状況　南より
PL.8　S 117　カーボン層出土状況　東より
S 132　遺構検出状況　南より
S 018　自然木出土状況　北より
S 018　土層断面　西より
S 065　完掘状況　北より
S 143　土層断面　西より
S 143　完掘状況　西より
S 144　土層断面　西より
PL.9　S 144　完掘状況　西より
S 151　出土遺物状況　東より
S 151　完掘状況　東より
S 006　土層断面　東より

S 009　遺構検出状況　北より
S 014　出土遺物状況　北より
S 014　完掘状況　北より
S 016　土層断面　南より
PL.10　S 016　完掘状況　南より
S 027　出土遺物状況　北より
S 027　完形出土遺物状況
S 027　布目瓦出土状況　北より
S 042　土層断面　北より
S 047　出土遺物状況　南より
S 062　土層断面　西より
S 063　土層断面　北より
PL.11　S 066　土層断面　南より
S 066　完掘状況
S 072　土層断面　西より
S 072　完掘状況　西より
S 073　出土遺物状況　南より
S 131　完掘状況　北より
S 134　出土遺物状況　南より
S 134　整地土層状況　南より
PL.12　S 134　出土遺物状況　東より
S 134　出土遺物状況　西より
S 134　出土遺物状況　北より
S 134　遺構検出状況　西より
PL.13　S 134　土層断面　南より
S 134　出土遺物状況　南より
S 134　出土遺物状況　東より
S 134　出土遺物状況　南東より
S 134　出土遺物状況　西より
S 134　出土遺物状況　北より
PL.14　S 134　出土遺物状況　北より
S 134　出土遺物状況　南より
S 134　土層断面　南より
S 134　土層断面　西より
S 134　完掘状況　南より
S 134　出土遺物状況　北より
PL.15　S 134　完掘状況　東より
S 134　完掘状況　北より
S 134　完掘状況　西より
S 147　完掘状況　東より
S 152　遺構検出状況　南より
S 152　完掘状況　北より
S 153　出土遺物状況　南より
S 153　遺構検出状況　東より
PL.16　S 153　完掘状況　北より
S 010　出土遺物状況　東より
S 010　土層断面　東より
S 013　礫出土状況　南より
S 013　完掘状況　北より
S 017　土層断面　西より
S 020　魚骨出土状況　北より
S 020　出土遺物状況　南より
PL.17　S 020　土層断面　北より
S 020　階段遺構状況　北西より
S 020　完掘状況　西より
S 048　礫出土状況　南より
S 048　出土遺物状況　西より
S 053　出土遺物状況　東より
S 057　土層断面　東より
S 068　出土遺物状況　東より
PL.18　S 068　土層断面　北より
S 070　土層断面　東より
S 071　土層断面　南より
S 089　土層断面　西より
S 089　完掘状況　北より
S 099　土層断面　西より
S 100　土層断面　東より
S 100　完掘状況　東より
PL.19　S 124　完掘状況　南より
S 130　土層断面　東より
S 141　土層断面　北より
S 141　完掘状況　東より
S 142　遺構検出状況　南より
S 142　完掘状況　東より
S 177　土層断面　北より
S 035　完掘状況　東より
PL.20　S 041　完掘状況　東より
S 081　完掘状況　南より
S 091　土層断面　西より
S 091　遺構検出状況　南より

S 091　完掘状況　東より
S 092　遺構検出状況　南西より
S 092　カーボン出土状況　西より
S 092　完掘状況　東より
PL.21　S 106　土層断面　北より
S 115　完掘状況　南より
S 137　遺構検出状況　北より
S 139　土層断面　北より
S 139　完掘状況　北東より
S 148　土層断面　南より
S 148　完掘状況　東より
S 149　完掘状況　北より
PL.22　S 148　出土遺物状況　南より
S 156　完掘状況　北より
5Tr　土層断面　北より
6Tr　土層断面　北西より
PL.23　S 014・S 018・S 023・S 138・S 143
S 151　出土遺物
PL.24　S 005・S 014・S 016・S 047
出土遺物
PL.25　S 047　出土遺物
PL.26　S 047　出土遺物
PL.27　S 047・S 073　出土遺物
PL.28　S 073　出土遺物
PL.29　S 073　出土遺物
PL.30　S 073　出土遺物
PL.31　S 073・S 134　出土遺物
PL.32　S 134　出土遺物
PL.33　S 134　出土遺物
PL.34　S 134　出土遺物
PL.35　S 134　出土遺物
PL.36　S 134　出土遺物
PL.37　S 134　出土遺物
PL.38　S 134　出土遺物
PL.39　S 134　出土遺物
PL.40　S 134　出土遺物
PL.41　S 134　出土遺物
PL.42　S 010・S 134・S 153　出土遺物
PL.43　S 010　出土遺物
PL.44　S 010　出土遺物
PL.45　S 010・S 020　出土遺物
PL.46　S 020・S 035・S 149　出土遺物
PL.47　S 035・S 040・S 148・S 195出土遺物
PL.48　S 149・S 195　出土遺物
PL.49　S 002・S 047・S 055・グリッド
出土遺物
PL.50　S 018・S 055・S 114・12Tr出土遺物
PL.51　S 005・S 010・S 047・S 080・S 134
S 136・S 152・S 153・S 154
出土遺物
PL.52　S 010・S 035・S 056・S 141・土師器
出土遺物
PL.53　青銅品・煙管・銭貨
PL.54　土人形・泥面子
PL.55　土人形
PL.56　碁石・硯・五輪塔・貝類
PL.57　瓦 -1-
PL.58　瓦 -2-

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査に至る経緯

平成12年10月2日、厚生省九州地方医務局経営指導課長、同決算係長と国立熊本病院事務部長、同会計課長が来課のうえ、平成13年度から国立熊本病院の増改築及び更新築工事に係る事業開始（「設計Ⅰ」）を予定しており、当該地が熊本城遺跡群に含まれているので着工時期及び工事工程に沿って埋蔵文化財発掘調査の実施を依頼したい旨の申し入れがあり協議を行った。同病院の周囲は特別史跡「熊本城跡」であり、当該地については、国立熊本病院とそれに附属する建物が存在していることから指定範囲から除外された経緯がある。そのため熊本県文化課では、現状、周知の埋蔵文化財包蔵地「熊本城遺跡群」の範囲ではあるが、本来、特別史跡熊本城跡の範囲に含まれるべき地域であること、また、これに先立ち同年8月20日に熊本市文化財課において国立熊本病院駐車場の確認調査が実施され、遺構の存在が確認されていることなどを勘案して、熊本市が策定している「熊本城整備計画(案)」との整合性を確保する必要があると判断し、今後、熊本市経済振興局熊本城総合事務所、同市教育委員会文化財課の意見を聴取することとした。

そこで、この件について平成12年10月17日、熊本市経済振興局熊本城総合事務所、同市教育委員会文化財課との協議を行った。既に熊本市教育委員会文化財課において、平成12年8月30日に確認調査を実施しており、その結果、西区高台では旧地形がよく残り、井戸跡、石垣、土坑、柱穴などが確認されている。また、当該地は、近世熊本城築城以前の「隈本城」の本丸及び外郭の付帯施設が存在した。近世熊本城築城後、長岡帯刀(のちの長岡主水)の下屋敷となり、後に松井家屋敷の庭園に当たることがわかっており、昭和15年までは指定範囲に含まれ、昭和57年に策定された『熊本城跡管理計画』では特別史跡指定範囲に準ずる「第Ⅰ種地域」に位置づけられている。

また、熊本市が『熊本城跡管理計画』を策定した当時、文化庁記念物課中野調査官より「城内であれば、指定の有無に関わらず、地割と旧地形の改変、削平の類はよろしくない」との指導を受けていることから、西区高台についての削平は避けるべきであり、可能であれば同病院並びに附属する施設に関して熊本城外への移転が望ましいが、困難であれば少なくとも周囲の景観との調和に配慮することと「西区高台」の削平を行わないよう設計変更を求めることとした。

平成13年1月12日国立熊本病院より、同病院の更新築工事に関する平成13年度予算内示があり、1月24日に事業説明会を実施する旨の報告がなされた。また、併せて熊本市長との協議を行った結果として、郊外への移転は市北部域における医療拠点がなくなることから、国立病院長が現地での更新築工事は止むを得ないとの感触を得ている。そのため、国立熊本病院としては当該事業に係る埋蔵文化財発掘調査を平成14年度から依頼したい旨の申し出があった。

同年1月24日に、熊本市衛生局企画調整課を主幹課として市関係各部局を対象とする事業説明会が実施された。このことを受けて同年2月13日、市文化財課から事業説明会の概要についての報告がなされ、併せて今後の調査方針について協議を行った。事業説明会では、事業内容の趣旨説明が主で、具体的な建物設計案の提示はなされなかった。これを受けて市文化財課内では「特別史跡熊本城跡に最隣接する国立病院本体の恒久的建造物の新築を容認するか否か」の基本方針について検討を進めた。その後、市文化財課では同年2月26日に国立病院更新築の工事概要の説明会の実施を受けて、同年3月13日県文化課へ概要報告がなされた。提示された設計（「設計Ⅱ」）では、「西区の高台」の削平を含んでおり、熊本市の都市景観条例にも抵触するため、このままの設計では容認は困難であること、市文化財課の調査方針として「現状では建て替え事業は止むを得ない」が、歴史的変遷が明瞭に残される「西区の高台」の削平を行わない基本設計とし、周囲の景観との調和を図る建物設計とすべきであること」、「但し、設計変更ができず発掘調査を実施した際に

重要な遺構が検出された場合、再度協議が必要となる」との考え方が示された。同年6月26日、熊本市文化財保護委員会において、国立熊本病院長から説明がなされ、これを受けて同年9月27日市文化財保護委員会から「重要な遺構等が発見された場合、保存を検討すること」との条件が出された。同年10月5日、ボーリング調査の実施に関する協議を行い、実施にあたっては事前に文化財保護法第57条の3の提出が必要になることを伝えた。その際、国立熊本病院から市文化財保護委員会に説明を行ったが、同委員会では積極的な反対意見等は出なかったとの報告を受けた。

その後、同年10月29日に熊本市文化財課及び熊本城総合事務所と三者で調査の是非と調査体制について協議を行い、県では平成23年3月の九州新幹線全線開業に向けて急激に事業量が増加しており、また、当該事業地が特別史跡熊本城跡のエリア内にあることから管理団体である熊本市での調査対応ができないか打診したが、現状では大規模開発事業を抱えているため対応は困難との回答があり、調査主体については再度協議を行うこととした。

同年10月30日、増築部分に係る確認調査依頼が提出され、同年11月8日に現地調査を実施した。同年11月、次年度予算に熊本病院看護学校・体育館の埋蔵文化財調査費を計上し、同年12月26日九州厚生局・熊本病院から当該地の埋蔵文化財に係る調査依頼が提出された。その際、提示された工事工程は、文化財保護の観点から設計変更に係る数度の協議を重ねた結果である「設計Ⅲ」に基づくものである。平成14年度は、「西区の高台」に看護学校と体育館を建設する予定であるとの説明を受ける。しかし、埋蔵文化財調査の実施にあたっては、期間的に困難であることから、工事工程を含めた再検討を要請した。平成14年1月17日、再度協議を行い、予算的な制約から体育館の調査を先行することとした。同年1月18日、国立熊本病院及び熊本市文化財課と三者で、調査主体に関する協議を行った結果、平成7年度に取りまとめた「市町村との役割分担」に準拠し国事業であることから県が調査主体となることを確認した。同年1月22日、看護学校・体育館建設工事に係る文化財保護法第57条の3の通知を受理した。熊本県では「熊本城遺跡群古城上段調査検討委員会」の指導助言を受けることとし、平成14年8月5日から発掘調査を開始した。調査の経過と進捗については、第Ⅰ章第2節1－2）に詳述する。

平成15年1月25日、26日の両日、現地説明会を開催し、580名の見学者が訪れるなど、当該遺跡の注目の高さを認識した。同年2月3日、国立病院から再度変更設計案（設計Ⅳ）が提示される。同年2月4日、調査Ⅰ区の発掘作業が終了した。同年2月5日～ 17日にかけて、遺跡保存のため遺構を山砂にて埋め、その上から搬入客土により覆土した。同年2月17日、熊本城遺跡群古城上段調査検討委員会において「遺跡を傷つけないよう工法の再考」を要望することとなる。同年2月18日、調査Ⅱ区の発掘調査に着手し、同年3月31日までに現地での調査を終了した。また同日、国立熊本病院より看護学校の構造を軽量化すること、地中に杭を打たない工法を採用する設計案が提示され、同年4月22日の熊本城遺跡群古城上段調査検討委員会において了承され、その旨通知した。

また、従来の文化庁からの指導である「調査と整備は一体のものである」との認識から協議重ねた結果、平成15年度以降の発掘調査等については熊本市で対応することとなり、同年5月21日熊本県文化課から熊本市文化財課へ発掘調査に係る事務引継ぎを行った。同年5月26日、本年度調査については国立熊本病院と熊本市で協議を行うこととし、熊本県文化課も立ち会うこととした。ちなみに国立熊本病院の建て替え計画では、全体の完成は平成25年度頃とされることから現地立替工事と遺跡保存の問題は長期に及ぶこととなり、文化財保護の観点から協議が継続されることとなる。

第2節　調査の方法と経過及び調査の組織

1　調査の方法と経過

第1表　熊本城跡遺跡群古城上段調査検討委員会名簿

	氏　名	専門分野	所属等
専門委員	川口　恭子	歴史学（近世史）	永青文庫資料専門員、熊本県文化財保護審議会委員
	工藤　敬一	歴史学（中世史）	熊本大学名誉教授、熊本市文化財保護審議会委員
	佐藤　征子	民俗学	熊本県文化財保護審議会委員
	白木原和美	考古学	熊本大学名誉教授、熊本市文化財保護審議会委員
	鈴木　喬	歴史学（近世・近代史）	熊本市文化財保護審議会委員
ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ	今村　克彦		熊本市熊本城総合事務所
	成瀬　烈大		熊本県教育庁文化課長
	富田　紘一		熊本市教育委員会文化財課長

1）調査の方法

当該地における発掘調査は、熊本市での調査体制が取れない平成14年度に限って熊本県で対応することとし、実施にあたっては「熊本城遺跡群古城上段調査検討委員会」（第1表）の指導助言を受けることとした。

国立熊本病院長と熊本県知事との間で協定書（平成14年6月17日付け）を締結し、8月1日に発掘調査を開始し現場における全体の発掘作業の終了と遺物の整理、報告書の完了については別途協議することとした。

2）調査の経過

［8月］

1日、器材等を搬入。調査準備を進める。㈱朝日航洋により、空撮を実施。

5日より表土剥ぎを開始。調査区の東側では地山が途切れており、整地されていると思われる。遺物は近世の陶磁器や瓦類が混じり、近代に整地し台地の幅を拡げたものと想定される。

19日、遺跡内に残る井戸の蔦などを除去し内部を観察。弧状にきれいに面取りがなされていることなどから、近代の遺構である可能性が高い。

20日、中央部にある石組みの下水遺構をＳ001とする。U字溝を除去した溝をトレンチとして遺構検出を行う。東側で確認された暗褐色土は土坑状になり、近世の遺物が多く出土した。

21日、Ｓ001を写真撮影。

22日、調査区西側の南北に延びる集石遺構は、一部撹乱を受けてはいるがほぼ直線で、途中で東側にL字状に曲がっている。近世の遺物等を多少含み、一部にコンクリート等も見られる。建物の基礎であろうか。トレンチは、土が固くしまっているため、掘り下げには時間がかかる。上層部からは、コンテナ1箱程の瓦片が出土。

23日、掘立柱建物礎石栗石部分清掃。掘立柱建物遺構は、陸軍病院のころの建物と思われ、遺跡全体に広がる広大なものになると想定される。大正元年の地図では、東西に桁行を長くとる建物が見られるが、平成7年まで残ったものは、コの字形で建て替えがあったと考えられる。今回、検出しているものは、両者の切り合いと思われるが、判然としない。Ｓ001の実測を行う。

26日、掘立柱建物礎石要石部分の清掃を継続して行う。東西に延びる掘立柱建物礎石には、黒砂の混じる礎石部分と、黒砂の混じらない礎石部分とがあり、その中間部分、約1mの長さには栗石の集合体部分が見あたらない。D－4グリッドの掘立柱建物礎石の清掃を行った際、切石が出土。反対側に同じような長方形の切石は出土していないため、溝の可能性は低い。

27日、Ｓ002，003，234を検出。Ｓ004から明代の染付け碗が出土。Ｓ002の基礎に切られている。6トレンチは、熊本市の試掘坑8トレンチに該当。5トレンチでＳ005，006を検出。

29日、Ｃ4グリッドの調査区端にトレンチを設定し、数10cm掘り下げる。地山と黒のラインが明確に出ており、遺構の可能性がある。Ｄ4グリッドの掘立柱建物礎石発掘では、南北に2種類の礎石があり、東側の礎石については長方形のコンクリートなどがあり、西側とは明らかに異なる。東側の礎石は、西側にあったであろう建物の壁であったと思われる。

［**9月**］

2日、竹田知美氏来跡。トレンチ1，2とＳ006から出土した陶磁器について観察。18世紀半～19世紀の遺物が中心であるとの所見を受ける。古いものでは17世紀初めの破片が1点確認された。Ｓ002の礎石、Ｆ－7，8区の掘り下げ。Ｓ001の実測と遺構配置図（1/200）の作成を行う。

3日、Ｓ002礎石、トレンチ6内土坑及びＢ－6区の撹乱を発掘。Ｓ001、トレンチ5の東側土層断面を実測。桟瓦で三つ巴の紋を入れたものは、「旧軍時代の兵舎跡に多量に認められるものと同種のもの」（三の丸報告書）と思われる。熊本城総合事務所西川氏より、桟瓦に三つ笹をデザインしたものは松井家のものであること、また、長岡帯刀下屋敷の遺物と考えられるとのご教示を受けた。

4日、Ｆ－7区の掘り下げ、Ｂ－6，7区の撹乱、Ｓ002基礎部分、トレンチ4内土坑を発掘。トレンチ5土層断面図（東、北）、Ｓ002の実測。

5日、Ｓ002基礎部分、トレンチ4内土坑を発掘。トレンチ5土層断面図（西、北）、Ｓ002、遺構配置図の実測。カクラン1をＳ007，カクラン2をＳ008と変更。トレンチ4内土坑は、Ｓ010と変更した。

6日、Ｓ009とＳ002の基礎部分を発掘。Ｓ002、トレンチ5の南側土層断面図、トレンチ6内Ｓ005，Ｓ006の平面図、遺構配置図の実測を行う。Ｓ009には、平面上、土坑が切り合っているように見えるためベルトを設定した。中心部北西より九曜紋の入った軒丸瓦と思われるものが出土している。上層のカクラン層と下層の遺構埋土（カクラン？）との境あたりである。

9日、Ｓ008東側には、近世の土坑がある模様。とりあえずＳ013とする。Ｅ，Ｆ－6，7区の暗い色調の埋土は、多くの土坑に共通している。全体をＳ009とする。

10日、Ｓ014は長方形の掘り方で、中層に貝殻などの堆積した層を持つ。貝は、サザエ、アワビなど。

11日、2Ｔ内と北側の遺構を検出中。多くの土坑の切り合いがあると思われる。

12日、Ｃ，Ｄ－4区の2Ｔ北土坑群とＧ－7区を掘り下げ。Ｓ002、礫集中部、トレンチ5内土坑及び土層断面図、Ｓ006土層断面の実測を行う。また、1/200で遺構配置図を作成した。

13日、Ｓ017、018、020、025，023の掘り下げを実施。Ｓ002、礫集中部、Ｓ021土層断面の実測を行う。Ｓ009とＳ014の切り合い状況、Ｓ014，020の出土遺物状況の写真撮影を行った。

17日、Ｇ－5～7区、Ｆ－6区の掘り下げを実施。Ｓ002の実測。Ｓ027出土遺物の写真撮影。

18日、Ｇ－6区、Ｓ020、27、28の掘り下げ。Ｓ002，014東側土層断面、礫集中部の実測。Ｓ014の写真撮影。Ｓ027の南西側に多量に瓦が出土した。ただし、浮いた状態である。いい状態でスタンプの残っている瓦が出土。

19日、Ｓ028の北側にある土坑を、Ｓ029とする（Ｆ－6区）。Ｆ－6区には南北に10m余伸びそうな溝状遺構を検出した。近代の井戸跡の東側にある、以前熊本市が実施した試掘坑（9Ｔと表記）を清掃し、南北に伸びる溝の断面を確認した。

20日、遺構の切り合い関係を次のように確認した。Ｓ034⇒Ｓ030⇒Ｓ031⇒Ｓ027（新⇒旧）。Ｓ032，33，37の切り合い関係は不明。

24日、第1回熊本城跡遺跡群古城上段調査検討委員会を開催。カタバミの家紋（瓦当）は、加藤右馬允の

もの。細い三巴紋は中世まで遡る可能性がある。

27日、Ｓ042とＳ043を新たに確認。Ｓ042はＦ－5区で井戸跡の北にあり、Ｓ043はＳ042の東に位置する。3Ｔの北側に東西方向へトレンチを掘り下げたところ、トレンチ西側に遺構埋土と思われる土を確認した。

30日、厚生省関係者が来跡。倉庫隣の南側に仮設トイレを設置する。Ｓ042の中央付近は検出面より20cmほど掘り下げると、炭化物層が堆積している。

［10月］

1日、明日の空撮に備えて、全域清掃を行う。2日、空撮を実施。

4日、Ｆ－5，6区をＳ045と遺構名称を整理する。Ｅ－7区の礫集中部は思っていたよりも深く礫が埋まっている。3Ｔの北側に掘った東西トレンチを8Ｔと呼称する。

10日、Ｓ045の東側、Ｆ－6区に等間隔に並ぶ溝状遺構（Ｓ046）を検出。Ｇ－5区でＳ001の石組みを検出。石組みは傾斜を意図したものと思われ、坂になっている地形を利用して排水されたものと思われる。

11日、Ｓ020には、南東方向より北西方向にかけて階段のような跡が残る。これにより、Ｓ020はただの廃棄土坑とは考え難い。7Ｔ東側延長部には遺構の切り合いがあることは、レベルの差異から明確である。

15日、今日は思いもかけぬ雷雨によって、作業を一時中断する。天候の回復を待って再開したが、各遺構に雨水が溜まりバケツリレーを行い汲みだす。予定していた写真撮影は延期することとした。

16日、Ｓ027～037の土層断面については、今後確認が必要となる。Ｅ－7区の白く硬い地面は人が通って踏み固まったような感じがし、当時の通路ではないかと考えられる。短軸の長さは東西方向に人が二人ほど通れる幅であり、長軸の長さは南北に伸びており、現段階ではどこまで伸びるか不明である。

17日、7Ｔを拡幅したところ、Ｓ047を検出。長方形のプランで深い掘り方をもつ。遺構の名称を次のとおり整理する。Ｓ050＝道路状遺構。

18日、Ｓ050は中央に硬化面をもち道路状遺構と考えられる。途中でクランクし北へ向かう可能性がある。Ｓ046とした不明遺構は、小さな溝の部分には丸太などを敷いた道になるのではという指摘を受ける。そうなればＳ050との接続もありうるか。Ｆ－5，6区のＳ027～037の1/4を完掘したところ、他の3/4より床が高く、やはりＳ031はあると考えるべきである。

21日、雨上がりのため清掃を行い、柱穴を検出する。

22日、Ｓ051は掘りかけて断念したか、廃棄されたものか判然としないが、井戸と判断した。上層は灰白色の目の細かな土が厚く堆積し、下層には淡褐色の目の粗い土と灰白色の目の細かな土が交互に堆積している。2mほど掘削したが最下面まで到達できなかった。

23日、遺跡西側のＳ055は、Ｓ049に切られている土坑と思われるが、北の方に延びる長尺の溝状の遺構になりそうである、Ｓ002の栗石と重なる。

24日、Ｓ033は、Ｓ027～037の切り合い関係を解釈する中で消滅。Ｓ060～064の遺構を検出。遺構の切り合い関係を次のように確認した。Ｓ060⇒Ｓ055、Ｓ059⇒Ｓ064、Ｓ061⇒Ｓ063（新⇒旧）。

25日、Ｃ－5区のＳ055（溝と思われる）から、刻印のある瓦が出土。

28日、Ｓ065の遺構を検出。Ｓ050の実測が終了したところを発掘したところ、石垣が並んでおり、本丸への登城路と思われる。今後も石垣が出るものと思われる。Ｓ055は、南北に軸をとる壕状の遺構と思われる。北及び東方向から埋土が流れ込んでおり、遺物は16世紀前半～半ばと思われるものが中心で「隈本城」の時期の遺構と思われる。

29日、Ｓ066～070の遺構を検出。Ｓ066から中世の遺物が出土。Ｓ065の下に、ロームの混じった土を埋土にもつ土坑が存在する可能性がある。遺構の切り合い関係を次のように確認した。Ｓ066⇒Ｓ065（新

⇒旧)。Ｓ067は撹乱である。

30日、Ｆ－6区のＳ046道路状遺構（東側）にある遺構をＳ071とする。Ｆ－5区の四角い土坑をＳ072とし、その東側にあるＳ072を切っているであろうと思われる遺構をＳ073とする。Ｓ013の下層より阿蘇熔結凝灰岩（ＡＳＯ－4）を素材とし、穿孔された遺物が出土した。

［11月］

6日、Ｓ074 ～ 076の遺構を検出。Ｓ060の下には、中世の別の遺構がある。Ｓ060は、Ｓ055，076を切っている近世の遺構である。

7日、Ｓ077 ～ 079の遺構を検出。Ｓ065は下にロームの混土があることより、下部と上部は別遺構である可能性も考えたが、土層断面の検討の結果、同一遺構であると判断。ローム混土の掘り下げに入る。5Ｔ周辺の黒色土は以下のように土坑が切り合っていると判断する。Ｓ066⇒Ｓ065、Ｓ066⇒Ｓ077⇒Ｓ078⇒Ｓ064（新⇒旧)。

8日、Ｆ－6区の熊本市による試掘トレンチ北に存在する遺構（Ｓ044と切り合う遺構）をＳ080とする。

11日、Ｓ081 ～ 094の遺構を検出。

12日、Ｃ－7区でＳ095 ～ 098の遺構を検出。Ｓ087を地山が出るまで掘り下げ、250cmほどのところで地面にポッカリ空洞（穴）が出現した。この穴の直径は人が一人入れる程度のもので、西へ向かって下り坂のように傾斜していて危険なため掘削作業を中止することとした。Ｓ060のベルトを崩す途中で、Ⅱ層から穿孔された石製品が出土する。使用用途は不明である。

13日、Ｓ099 ～ 102の遺構を検出。

15日、Ｓ103，104の遺構を検出。Ｓ099は完掘したところ2つの土坑であることが判明。切り合い関係は不明。Ｓ047から金箔漆器皿が出土。

18日、16世紀段階の遺構と判断。Ｓ047の遺物タワーの掘り崩しより、金箔を施した漆器皿が3点出土する。赤漆の上に金箔があり、腰や口縁部である。直下には白い繊維質の植物遺体があり、保存状態が良くないために写真のみの記録とした。竹田知美氏の所見より17世紀半ばの遺物を多く含む土坑である。

19日、Ｃ－7区でＳ105の遺構を検出。

20日、Ｓ097東側を約210cm掘削した時点で、ガラス片が出土。それまで出土する遺物から近世期と推定していたが、撹乱である可能性が高い。

21日、Ｓ106 ～ 108の遺構を検出。4Ｔ拡張部について東側に掘り進めたところ、Ｓ046に続く道路遺構を検出した。当初道がクランクするものと想像していたが、Ｓ046は地山を切り通しながら緩やかなスロープで北へ登る道のようである。トレンチ調査によって、東側は石炭灰の廃棄坑により撹乱されていることが分かったため、そこは掘らないこととした。

22日、Ｓ109 ～ 118の遺構を検出。Ｓ106から出土する遺物は、デザインが奇抜なものが多い。また、犬の骨かと思われる遺物も出土する。Ｓ106の北壁はオーバーハングしている。

25日、Ｓ119 ～ 121の遺構を検出。Ｓ119の土色注記は次のとおり。土色は暗褐色で、粒度はやや粗く拳より大きな栗石などが混入する。擂鉢や赤色絵の施された磁器や染付け茶碗片などが出土しているが、黒く薄いプラスチックが混じっていたことから撹乱と判断する。粘性は強くやや硬くしまる。

26日、Ｓ122 ～ 125の遺構を検出。Ｓ093の土層注記は次のとおり。粒度は細かく、土色は暗褐色で礫などの混入は見られない。遺物はわずかである。1cm程度の炭化物をわずかに含む。粘性は強く、よくしまっている。

27日、Ｓ126 ～ 128の遺構を検出。

28日、Ｓ127は礎盤をもつ柱穴。凝灰岩を方形に切ったきっちりしたもの。直径も掘り方も深く、大型

建物の一つになる可能性あり。

29日、Ｓ118は黒色土を埋土として掘り下げたが、その下のロームも埋土であることが分かる。隅丸方形のきれいな土坑となる。

［12月］

4日、Ｄ－5，6区の柱穴の半裁では、明染が出土。掘立には中世のものと、近世の土坑を切っている近世の柱穴もある。土色による柱穴の峻別が必要、近世の掘立柱建物があるのは不思議だが。Ｓ010はかなり深い土坑で遺物の出土も多い。大皿や花瓶など良品も多い。

5日、Ｓ092は、オーバーハングした立ち上がりの円形土坑で地下式庫の可能性がある。サシを通した無紋銭や瓦質土器などが出土している。

6日、Ｓ130 ～ 132の遺構を検出。

9日、Ｓ133の遺構を検出。

10日、Ｓ134の遺構を検出。Ｄ，Ｅ－5区のトレンチは広く深い土坑状の遺構になりそうだが、とりあえず、Ｓ134とする。近世の遺物が多く出土。中に、芙蓉手大皿が含まれる。

12日、Ｓ137は深く半裁中に残土が崩れたために注記ができなかった。長方形のプランをもち、底が狭くなる深い特殊な土坑である。Ｓ040は、瓦の集中する土坑で写真による記録をした後に、遺物を取り上げる（2回目取り上げ済）。Ｓ134は思ったより深く、未だ地山に達しない。ベルトを残して広範囲に掘り下げる方法をとるべきか。Ｓ138は円形の土坑だが直に深く、となりのＳ301と同じ性格となる可能性あり。

13日、Ｅ－5区全面清掃し、遺構の切り合い関係などを探すものの、Ｓ134南北Ｔｒを包含した遺構埋土以外の場所からは、複雑な切り合い関係などがあまり見られない。近代の井戸から1mほど北西付近に円形の土坑があることが分かったが、Ｓ001に切られていたため凝灰岩の切石を数個撤去した。Ｓ138は、2mほど深く掘ったレベルで地山が出てきた。瓦溜まりの下からは遺物の出土がわずかである。

16日、雨天のため作業中止。図面整理及び遺物整理を行う。

17日、Ｓ140 ～ 144の遺構を検出。

18日、Ｓ145，146の遺構を検出。Ｓ005は長方形の土坑だが、直に下げた掘り方をもち深い。2 ～ 3m掘り下げたが地山が出ないため、掘削を中止する。

19日、Ｓ147 ～ 150の遺構を検出。Ｓ145（Ｅ－5，6区）分は番号が重複していたためＳ147とする。

20日、Ｓ134の遺物を取り上げる。取り上げにあたっては、長軸方向を東西に2分割（Ｅ，Ｗ）、中央部東西方向に確認されたＳ001と同方向に設定したベルトによって3分割（Ｎ，Ｓ）し、ＮＥ，ＳＥ1，ＳＥ2，ＮＷ，ＳＷ1，ＳＷ2の都合6分割とした。また、土層は埋土を上層（整地層）、中層（黄褐色土）、下層（暗褐色土・瓦溜まり）に区分した。

24日、Ｓ152 ～ 155の遺構を検出。

25日、Ｓ156，157の遺構を検出。

27日、実測班のみ作業を行う。

［1月］

7日、工藤敬一、今村克彦両氏が来跡。Ｓ158，159の遺構を検出。Ｓ040、遺構中央下層よりコンクリート片が出土、近代と思われる。

9日、Ｓ160の遺構を検出。Ｓ134の南北ベルト南際より五輪塔の水輪部分が露出していることが判明。

10日、Ｓ046については、仙台市教育委員会金森氏より数例の情報提供有り。中世城の千代城の遺構に似たものがあり、道路面にある横溝には砂を入れて突き固めてある。目的は傾斜のついた道の中央が、雨水に浸食されて窪むのを防ぐためのものと考えられる。

14日、Ｓ162の遺構を検出。Ｓ123は遺構であるが、その南側に位置するＳ119は発掘した埋土中からプラスチック片が出土したことから撹乱と判断した。

15日、Ｓ163の遺構を検出。Ｓ148の瓦溜まり出土状況は、その上にのっていた埋土の堆積状況が南に位置するＳ079またはＳ081の瓦溜まりの上にのっていた埋土の堆積状況が酷似している。

16日、午前中は、空撮に備えてのマーキング及び全面清掃を行う。午後よりＳＫ番号とＳ番号による遺物の取扱が不正確であるため、Ｓ番号に統一することとし、遺物整理を行う。

17日、最東端の溝状遺構Ｔｒ掘りで、現在最北のＴｒ（Ｇ－5区）断面を見るに、Ｇ－6区内のＴｒ（2Ｔ）の断面で見える緩やかに段落ちする形ではなく、Ｇ－5区内のＴｒは急に段落ちしていることが分かった。段落ちする地点から下の埋土は、フカフカして黄褐色土がところどころ混じり、暗褐色土をベースに構成されている埋土とはタイプが異なる。当該遺跡では、近世遺構の埋土によく見られるタイプである。Ｓ242の上層から五輪塔の地輪が裏返しの状態で出土。

20日、国立熊本病院の東家会計課長が来跡。山砂を取り扱う業者の情報及び覆土面積が分かれば連絡して欲しいとのこと。Ｓ164の遺構を検出。

21日、毎日新聞社、西日本新聞社が取材のため来跡。Ｓ134は、大型の土坑で地下式倉庫である。2つのセクションをもつ倉庫で入り口のステップをもつ。

22日、熊日新聞社、朝日新聞社、ＮＨＫが取材のため来跡。

24日、現地説明会準備のため全面清掃を行う。

25日、現地説明会。当初の予想をはるかに上回る見学者数（約370人）に、県民の関心の高さ、また当該遺跡のおかれている立場について、改めて考えさせられるものがあった。

26日、現地説明会2日目。

29日、Ｓ164から出土する遺物等は、12 ～ 14世紀のものが割合としては高く、床面より龍泉窯の青磁も出土している。道路状遺構であろうと思われる。

31日、熊本市教育委員会赤星氏が来跡。Ｓ164は中世の道路で、少なくとも3面の路面があることが判明。遺物は龍泉窯青磁Ⅱ類や土師器であり13世紀代の様相を呈する。

［**2月**］

3日、九州文化財研究所に遺構（悉皆図）の実測を委託する。また、八木運送にて遺物の搬送を行う。

4日、Ｓ174 ～ 176の遺構を検出。

5日、山砂養生は西の方からはじめ、柱穴は全てを充填し、土坑は下より20cmまで埋めることとする。山砂は目の粗い花崗岩の腐食土で、下水工事などで穴に充填するもの。

6日、昨日の続きで山砂による遺構養生作業を行う。

12日、予定通り、山砂による養生作業が終了する。明日より、重機による排土埋め戻し作業及び表土剥ぎとなる。

13日、表土剥ぎが終了。大正元年～昭和42年までに建てられた建物の掘立柱建物跡がはっきりしているということが分かった。Ｓ046の北へ伸びる道路が確認できるのではと思ったが、現状では確認できなかった。表土剥ぎが早く終わったので、盛土による地ならしに移行した。

18日、大正時代から昭和40年までの間で建てられた建物の基礎跡を8割ほど確認。小砂利をセメントで固めている。明治時代に建てられた建物の基礎跡を確認。白川の栗石を基礎として利用している。近世の埋土と思われる遺構を数点確認するが、明確なプランは不明。

19日、Ｓ184 ～ 185の遺構を検出。明治時代（旧軍時代）の門の遺構を検出。

20日、熊本市Trより南西側の掘立柱建物遺構はコンクリートではなく白川などの栗石を利用しているも

のと思われるが、南東側のコンクリート掘立柱建物遺構とは、幅が大きく異なっており、時代差があるかどうか遺物等より検証が必要。Ｓ083の上面で出土した円礫群と状態が似ているため、この下層には瓦溜まりがある可能性がある。時代としては近世。

21日、九州文化財研究所に委託して、基準杭の点検を行った。

24日、Ｓ186，187の遺構を検出。

［**3月**］

4日、Ｓ189の遺構を検出。

5日、Ｓ190の遺構を検出。

7日、遺構検出のため10，11Ｔｒの掘り下げを行う。10Ｔｒの出土状況は調査Ｉ区のＳ073と近似しており、特にＳ159から出土する遺物の種類などが似ている。Ｓ195の遺物出土状況を写真撮影。

10日、Ｓ196の遺構を検出。Ｓ194（瓦溜まり）とＳ195遺物出土状況を写真撮影。

11日、遺構の切り合い関係を次のように確認した。Ｓ198⇒Ｓ196、Ｓ198⇒Ｓ199⇒Ｓ200、Ｓ194⇒Ｓ200（新⇒旧）。

12日、Ｓ204の遺構を検出。

13日、Ｓ205の遺構を検出。

14日、Ｓ206（瓦溜まり），207の遺構を検出。

17日、Ｓ208として確認したが、既にＳ157と遺構名を付したものと重複していることが判明した。Ｓ208で取り上げをした遺物はＳ157となるので注意が必要である。

18日、空撮を実施。熊本市富田文化財課長が来跡。また、貝、骨を研究されている樋泉氏が来跡、当該遺跡から出土している貝類はテングニシ、ハイガイ、サルボウガイ、アカガイ、アカニシ、サザエ、オキシジミ、ハマグリ、タイラギなどが多く見られるとのご教示を受けた。

19日、12Ｔｒから出土した骨は洋犬であろうという指摘を受けた。洋犬は、江戸時代の中期以降から愛玩犬として飼われ、従来からいる日本独特の在来種ではないという。在来種と比較すると大きい。出土状況は地下式倉庫を転用して廃棄土坑とした大きな土坑の中層あたりから、先端の尖った二寸釘のような鉄製品3つと一緒に出土しており、ただ単に廃棄されたのか、埋葬されたのか検討を要する。骨部としては頭部、頸部、脚部が出土している。また、同場所より猪か豚の骨と思われる肩甲骨が出土しており、この関節部からは犬による噛み痕が認められた。

20日、悉皆図及び遺構配置図を作成。

24日、悉皆図の作成。遺物取り上げ。Ｄ－3，4、Ｅ－3，4、Ｆ－3区の遺構検出状況を写真撮影。

25日、中世に属すると思われる柱穴3基を半裁。長郷建設により山砂を搬入。山砂による遺構覆土作業を行う。

26日、山砂による遺構覆土作業を実施。調査Ｉ区の重要遺構復元。

27日、機材撤収。

28日、調査事務所内の整理。

31日、調査事務所等を国立熊本病院へ引き渡し、現地調査の全工程が終了。

2　調査の組織

【平成13年度・確認調査】

発掘調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　　阪井大文（文化課長）

調査総括　　髙木正文（主幹兼文化財調査第1係長）

調査担当　　高谷和夫(参事)

【平成14年度・本調査】

発掘調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　　成瀬烈大（文化課長）、島津義昭（教育審議員兼課長補佐）

調査総括　　髙木正文（主幹兼文化財調査第1係長）

調査担当　　水野哲郎（文化財保護主事）、角田賢治（ 同 ）、三宅一生（嘱託）

【平成22年度・整理、調査報告書作成】

発掘調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　　小田信也（文化課長）、木﨑康弘（課長補佐）

調査総括　　村﨑孝宏（文化財調査第1係長）

調査担当　　村﨑孝宏（文化財調査第1係長）、長谷部善一（参事）、戸田紀美子（嘱託）、
藤本香織、今福英子、橋本由美子、中村正子、木村ゆり子、高田清香、中村典子（臨時）

【平成23年度・整理、調査報告書作成】

発掘調査主体　　熊本県教育委員会

調査責任者　　小田信也（文化課長）、川上勝美（課長補佐）

調査総括　　村﨑孝宏（文化財調査第1係長）

調査担当　　村﨑孝宏（文化財調査第1係長）、長谷部善一（参事）、戸田紀美子（嘱託）、
藤本香織、中村正子、木村ゆり子、高田清香、中村典子、本田頼子、井上真優、
樋脇逸子、吉本裕美（臨時）

第Ⅱ章　遺跡の概要

第1節　地理的環境

熊本城が所在する熊本市は県の中西部に位置し、東に立田山（標高152m）、神園山（標高183m）、小山山（標高189m）、戸島山（標高133m）、西に金峰山（標高665m）、北から京町台地が延び、西北部に花岡山（標高133m）がある。西南部には、白川、坪井川、井芹川、加勢川、緑川が西流し、これらの諸河川によって上流から運ばれてきた土砂が堆積し、低平な沖積平野が広がる。

植木台地から延びる京町台地は、井芹川と坪井川の浸食を受け、南北に細長く延びる阿蘇火砕流堆積物に起因する火山性台地である。先端部には台地より僅かに高い茶臼山が存在し、その西側には段山と呼ばれる小丘陵があった。これらの台地は地形分類上では段丘中位面にあたり、段山の周辺が下位面にあたる。金峰山から連なる山塊と立田山の間には、井芹川と坪井川が約2km隔てて南流し、台地の縁辺部は両河川によって浸食され周辺との比高差20 ～ 40mの急崖が取り囲む。台地の標高は、植木付近で約100m、南に向かって次第に低くなり京町付近で約40mとなる。

古い段階の坪井川は台地の東側を南流し、先端部分の茶臼山付近で一度東に流れを変え、再び山を取り囲むように流路をとっている。天正16（1588）年、加藤清正が肥後に入国し、築城に際して茶臼山北側の台地が最も縊れる部分を土取り場とし、以降細川氏入国後この部分を掘り切ったため、現在では独立丘陵のようになっている。茶臼山の南東側を中心に著しく平坦化が進んでおり、旧地形を復元することは不可能である。西側の段山は、かつては井芹川まで延びていたとされ、その先端は氾濫原であったとされる。段山については、大正元（1912）年の陸軍測地部の地図に鉄道で寸断された段山が描かれていることから、完全になくなったのは大正時代以降である。段山の範囲は、現在の井芹川沿いに山の輪郭線が道路として残っているのみである。当地の地質は、殆どが火砕流堆積物であるが、部分的に熔結凝灰岩の露頭が見られる。

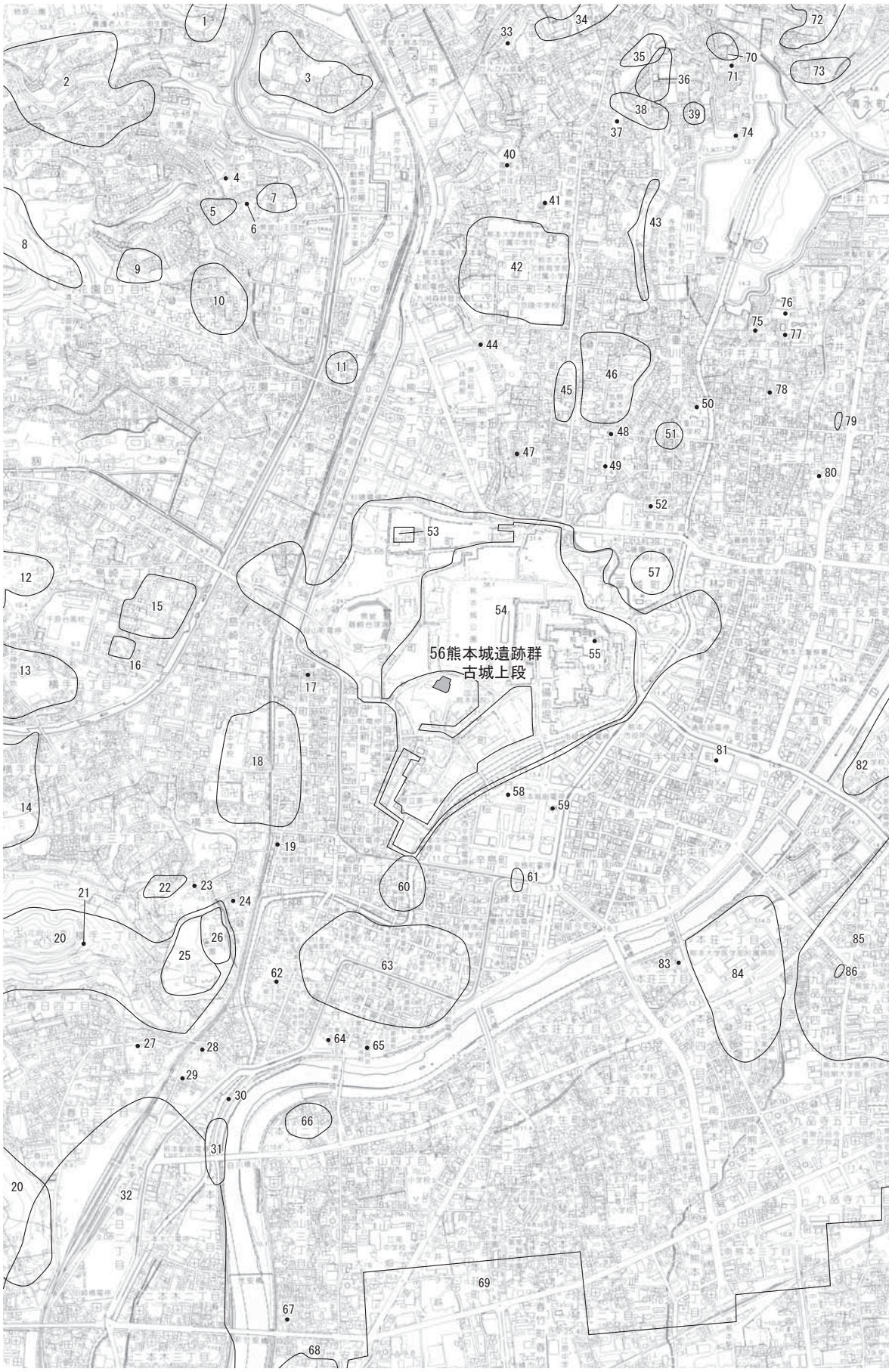
第2節　歴史的環境

熊本城遺跡群・古城上段遺跡は、植木台地から南北に延びる阿蘇火砕流堆積物に起因する火山性台地である京町台地と、先端部の僅かに高い茶臼山一帯に所在する。周辺の遺跡を概観すると、旧石器時代では金峰山系の丘陵上で谷尾崎遺跡、桑鶴遺跡や、立田山麓で龍田陣内遺跡、谷口遺跡、神園山麓で石の本遺跡群など数ヶ所の遺跡が知られるが、平野部では確認されていない。縄文時代早期の遺跡は、丘陵端部に立地するものが多い。野添平遺跡、島崎遺跡で炉穴や集石遺構などが確認されている。前期から中期の遺跡としては、高橋貝塚がある。後晩期になると再び丘陵上に遺跡が見られるようになり、島崎遺跡、石神原遺跡、戸坂遺跡、野添平遺跡、高橋町遺跡群上高橋遺跡などがある。千原台遺跡群第1次調査では、鐘ヶ崎式から黒川式までの土器が出土し、拠点的集落であった可能性が指摘されている。また、石神原遺跡では打製・磨製石斧が多量に採集され、島崎遺跡では太郎迫式から山ノ寺式までの土器群が出土している。熊本城跡でも鳥居原式がまとまって出土し、京町台地の先端部にも縄文時代の遺跡が存在したことが知られる。弥生時代の遺跡は、井芹遺跡、牧崎遺跡、京町台遺跡群、藤園中学校校庭遺跡、千原台遺跡群、石神原遺跡、戸坂遺跡、高橋町遺跡群、八島町遺跡、南新宮遺跡、平田町遺跡等がある。前期の遺構・遺物が確認された遺跡はほとんどないが、二本木遺跡群春日地区第8次調査において板付Ⅱ式と類推される刻目突帯文の口唇部破片が出土したと報告がなされている。中期では、井芹遺跡、牧崎遺跡、藤園中学校校庭遺跡、船場町遺跡、高橋町遺跡群上高橋高田遺跡で甕棺が出土し、古町遺跡、高橋町遺跡群上高橋高田遺跡では竪穴住居が検出されている。後期では、千原台遺跡群、石神原遺跡、戸坂遺跡、古町遺跡、八島町遺跡、平田町遺跡等で竪穴住居が検出

されている。特に八島町遺跡は、二本木遺跡群から伸びる自然堤防上に位置し、九州新幹線建設に伴って行われた発掘調査で後期の竪穴住居が多く検出され、大規模な集落が形成されていたことが窺われる。戸坂遺跡から小形彷製鏡と舶載の方規矩鏡が、平田町遺跡、八島町遺跡では小形彷製鏡が出土している。古墳時代の遺跡では、京町台地から熊本城周辺にかけては多くの横穴墓が存在している。熊本城がある茶臼山の東麓から南麓にかけて千葉城横穴群、磐根橋際横穴群、古城横穴群が確認されている。茶臼山の遺跡としてはこれらが最も古い遺跡である。茶臼山には古代あるいは中世の寺院（茶臼山廃寺）があったとされている。古代の時期に相当する遺物は城域から2点出土している。1点は昭和50(1975)年に二の丸で出土した唐草文入りの軒平瓦で、もう1点は平成4(1992)年に三の丸で出土した石銙である。また、城内各所で中世の板碑が確認されている。現在までに、天守閣前の天文5（1536）年銘「阿弥陀三尊種子板碑」、地蔵門脇の大永2（1522）年銘「釈迦立像線刻板碑」、午砲台の大永4（1524）年銘「如意輪観音図像線刻板碑」など銘があるだけでも12基確認されている。このことから、茶臼山廃寺は中世寺院とする説もある。文明年間に菊池氏の庶子家である出田秀信が茶臼山の東に迫り出したところに千葉城を築いた後、永正4（1507）年に鹿子木親員（寂心）が山の南端に城を築き隈本城と称した。その後、天文19（1550）年に城親冬、天正15（1587）年に佐々成政が入城し、かれらの居城として存続した。中世の隈本を近世に描いた『茶臼山ト隈本城之絵図』の写しが残っており、それには南斜面に四ツ木社（代継社）、頂上に観音堂が描かれているが、城が存在していないことから、文明年間以前を想定して描かれたものといえる。また、その絵図によると茶臼山と坪井川の接するところは小豆谷（現在の千葉城付近）といわれ、そこから山沿いに流れ、松原の渡し（現在の長六橋付近）で白川と合流している。天正16（1588）年加藤清正の入国以降、熊本城築城にあわせて茶臼山周辺が大規模に整備されたため、現在の流路とは異なっている。

隈本城は、15世紀後半の出田秀信の築城（千葉城）にはじまり、その後鹿子木親員が茶臼山南端に築城（古城）し、城親冬、親賢、久基、佐々成政を経て、天正16（1588）年に肥後半国の大名として入城した加藤清正は茶臼山一帯を取り込んだ平山城に大拡張し、慶長12（1607）年に「隈本」の表記を「熊本」に改めた。加藤家は寛永9（1632）年に改易となり、細川氏が豊前小倉より入封して明治維新まで続いた。明治4（1871）年に鎮西鎮台が置かれ、鎮西鎮台病院が併設された。明治8（1875）年、現在地で診療を行うなど、終戦まで陸軍の管轄下におかれた。西南戦争により天守閣をはじめとする本丸中心部の大半の櫓が焼失するなど、陸軍による様々な改変を受けたが、大正末頃から城跡の保存・顕彰が叫ばれるようになり、昭和8（1933）年に宇土櫓ほか12棟の建造物が重要文化財に指定され、昭和30（1955）年には特別史跡に指定されている。

第1図　周辺位置図（1/5000）



第2図　周辺遺跡分布図(1/20000)

第2表　周辺遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
1	柿原宮ノ原廃寺	弥生
2	経塚道跡群	弥生・古墳
3	池亀	弥生
4	井芹五輪塔・宝塔群	中世
5	井芹城跡	中世
6	井芹城跡推定地	中世
7	井芹	弥生
8	本妙寺A箱式石棺群	古墳
9	本妙寺北	古墳～中世
10	中尾丸城跡	中世
11	牧崎	弥生
12	石神原	弥生～平安
13	千原台遺跡群	縄文～平安
14	戸坂	弥生～平安
15	迎田	縄文～平安
16	遠矢塚	中世
17	新町古寺跡・高麗門跡	近世
18	新馬借	古墳～平安
19	古往生院跡	近世
20	花岡山・万日山遺跡群	古墳
21	花岡山陸軍埋葬地	明治
22	吉祥寺横穴群	古墳
23	横手町寺院群	近世
24	願行寺跡	近世
25	妙解寺細川家霊廟及び門	江戸
25	妙解寺細川家墓地	江戸
26	細川家菩提寺妙解寺跡	江戸
27	山由雲院（春日寺）	江戸
28	北岡神社境内古墳	古墳
29	北岡横穴群	古墳
30	熊本駅前の石塘	近世
31	石塘（白川橋）	弥生～中世
32	二本木遺跡群	弥生～中世
33	池田城跡	中世
34	池田町（池田小学校）	弥生～平安
35	津浦一ノ谷横穴群	古墳
36	一ノ谷	古墳～平安
37	出町土居跡	近世
38	稗田横穴群	古墳
39	舟場	縄文～中世
40	池田八幡放牛地蔵	近世
41	往生院境内石造物	中世・近世
42	京町台遺跡群	弥生～中世
43	寺原横穴群	古墳

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
44	釈将寺跡	近世
45	京町２丁目	縄文～近世
46	伝大道寺遺跡群	縄文～近世
47	円光寺跡	近世
48	金剛寺南乾山跡	中世
49	仙勝院跡	中世
50	浄国寺跡	中世
51	内坪井	弥生
52	夏目漱石内坪井旧居	明治
53	旧細川刑部邸	近世
54	熊本城跡遺跡群	古墳～近世
55	熊本城跡	近世
56	熊本城跡遺跡群古城上段	中世～近世
57	籐園中学校校庭	弥生～平安
58	山崎古墳	古墳
59	花畑館跡	近世
60	船場町	弥生
61	辛島町	弥生・古墳
62	板屋町・細工町寺院群	近世
63	古町（旧唐人町）	弥生～明治
64	光明寺跡	近世
65	浄信寺跡	中世
66	本山城跡（本庄城跡）	弥生～中世
67	無漏寺跡	中世
68	世安池田	弥生～中世
69	熊本平野条里跡	古代・中世
70	舟場山古墳	古墳
71	船場山古墳	古墳
72	打越遺跡群	弥生・中世
73	打越貝塚	縄文
74	宗厳寺跡	中世
75	峰雲院跡墓地	中世
76	採釣園跡	近世
77	長岡監物屋敷跡	近世
78	成就院大喜山覚勝寺跡	中世
79	安元元年笠塔婆塔身	古代
79	安元元年笠塔婆	古代
80	報恩禅寺境内石造物	中世
81	小泉八雲熊本旧居	明治
82	新屋敷	弥生～中世
83	代継神社の層塔	中世
84	本庄（熊大病院敷地）	古墳～平安
85	大江遺跡群	縄文～明治
86	不動院跡の六地蔵塔	中世

第Ⅲ章　調査とその成果

第3図 全体遺構配置図（1/400）

調査の成果については、確認された遺構を以下の時期区分に沿って紹介をして行きたい。遺構はその正確に関わらず、確認順にＳの番号から命名している。古い時代から節を設けて、節の中の遺構ごとに若い番号から紹介をしていく。遺物は、時代観を得る尺度となるため、陶磁器と土師器を節ごとに掲載をし、その他の遺物は本章末に「陶磁器・土師器以外の遺物」として紹介をした。

また調査工程上の排土置き場関係より、２回に分けて表土剥ぎを行っており、最初に着手をした概ね5～8グリッドを調査Ⅰ区、概ね3～4グリッドを調査Ⅱ区と呼ぶ。なお、調査検討委員会で遺構の保存が決まった後、調査Ⅰ区の一部と調査Ⅱ区は、遺構プランの確認のみに留め、完掘は行っていない。

【時期区分】

Ⅰ期　13世紀～
Ⅱ期　16世紀前葉～後葉（鹿子木氏、城氏統治期）
Ⅲ期　16世後葉～17世紀前葉（加藤氏統治期）
Ⅳ期　17世紀前葉～後葉（細川氏統治期）
Ⅴ期　18世紀前葉～後葉（細川氏統治期）
Ⅵ期　19世紀前葉～中葉（細川氏統治期）
Ⅶ期　19世紀中葉～20世紀中葉（鎮台・陸軍管理期）

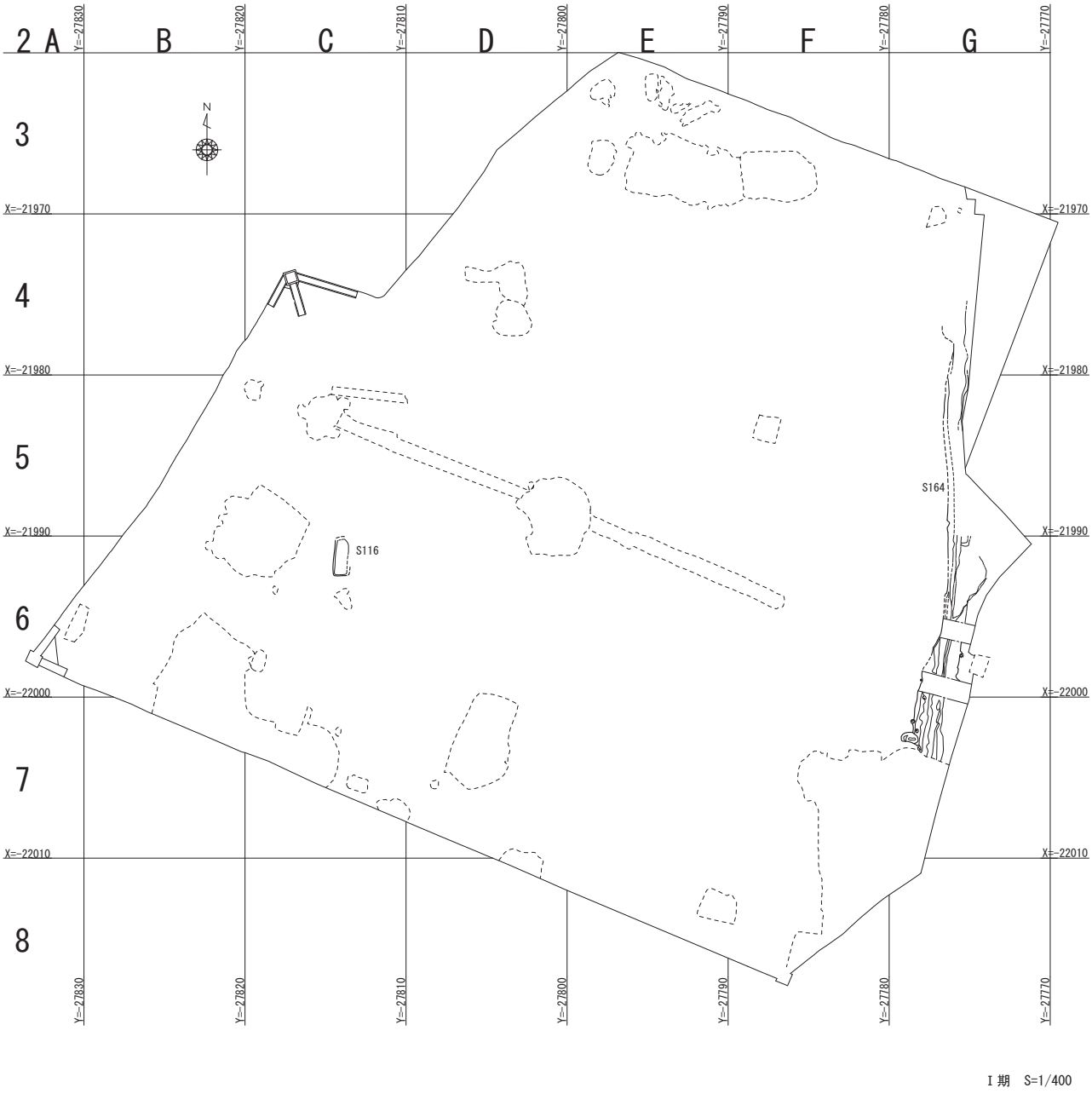
第1節　隈本城以前の遺構（Ⅰ期）

現在古城と呼ばれる茶臼山南尾根に隈本城を構えたのは、鹿子木親員（寂心）と言われている。時代は大永・享禄頃で西暦では1521年から1532年ころには在城しているものと思われる。それ以前は茶臼山に寺院が存在したこと、付近を大宰府と肥後国府を結ぶ官道が通っていたことが判っている。　調査地の立地としては、東側と南側には駐車場が設けられ、北側は近代に入って切りとおされた道路、西側は自然丘の斜面となっており、調査区自体が小高い丘になっている。隈本城以前の遺構として調査区東側に道路遺構が1条検出された。

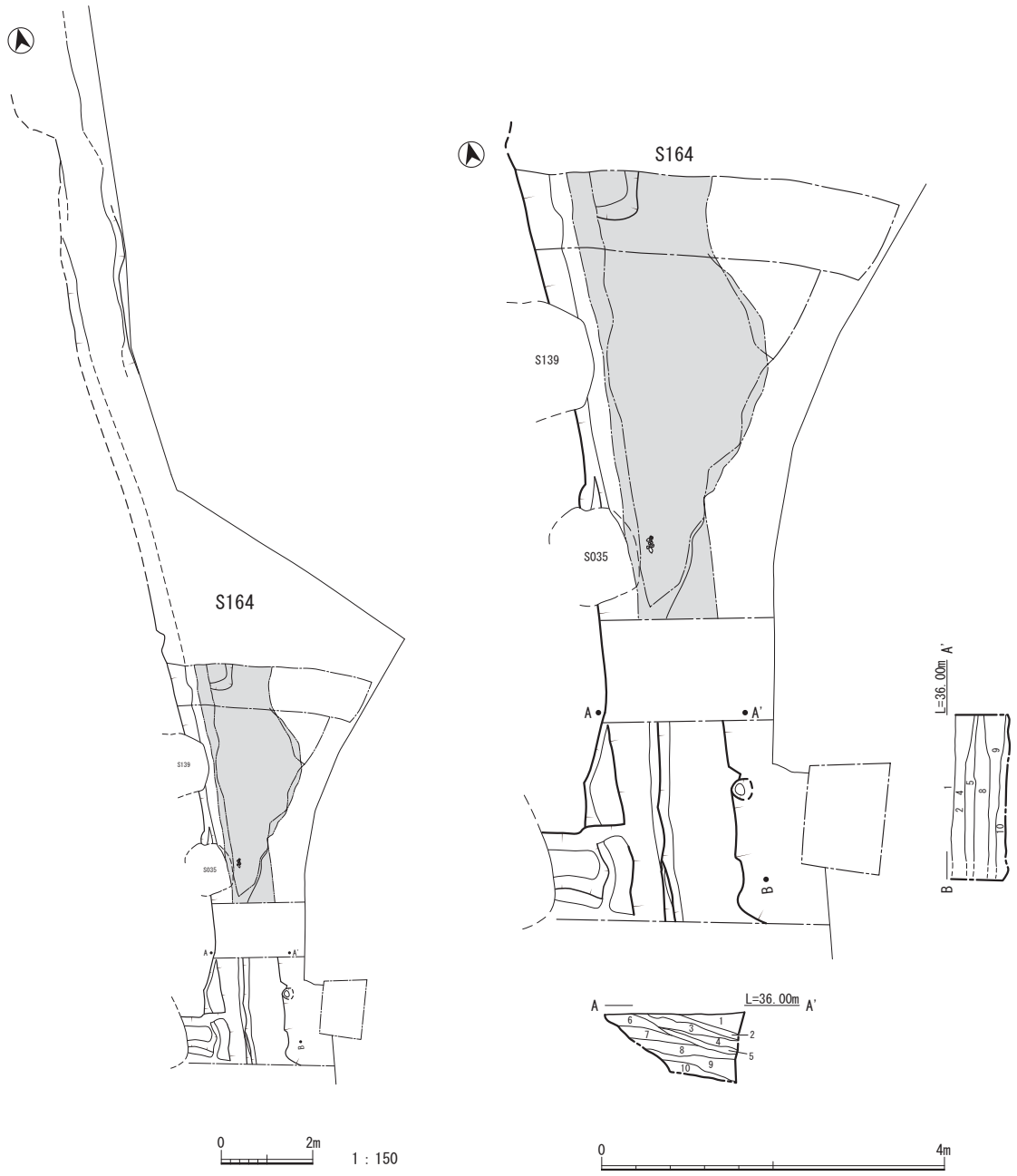
Ｓ164(第5図)

Ｇ－5、6、7区に位置する遺構。逆台形の掘り方を持ち、黄褐色土の地山を削った底面は東側に緩やかに落ちながら平坦な底面を持つ。堆積土である9層は地山と同質に黄褐色であり、8層は黄褐色土が暗褐色土の中にブロック状に混じり込んだもので、それぞれ整地層と思われる。両層上面には強い硬化面が広がり、調査Ⅱ区まで続いている。硬化面直上には龍泉窯青磁碗Ⅱｂ類の破片や土師皿片が出土し、13世紀半ばころの遺構と考えられる。

第1節　隈本城以前の遺構(Ⅰ期)



第4図　Ⅰ期遺構配置図（1/400)



1層	暗褐色土	粘性を持つ細かな土層で、2mm大の細かなロームの粒が混じり、固くしまっている。
2層	橙褐色土＋暗褐色土	橙色のロームを基本に暗褐色土が混じる。
3層	暗褐色土	1に似る
4層	橙褐色土＋暗褐色土	2に似る
5層	黒褐色土	1に橙色のロームの混じりが少ない土
6層	暗褐色土＋黄褐色土	黄褐色土は、2cm大のブロックで暗褐色土と混じり合う。
7層	黄褐色土	黄褐色土を基本に暗褐色土が少量混じる。
8層	暗褐色土＋黄褐色土	黄褐色土のブロックは、大きく5～10cm大で暗褐色土に混じる。上面は、硬化面あり。
9層	黄褐色土	ほぼ純粋な黄褐色土で、上面には、硬化面あり。
10層	暗褐色土	粘性を持ち、純粋、しまりがある。

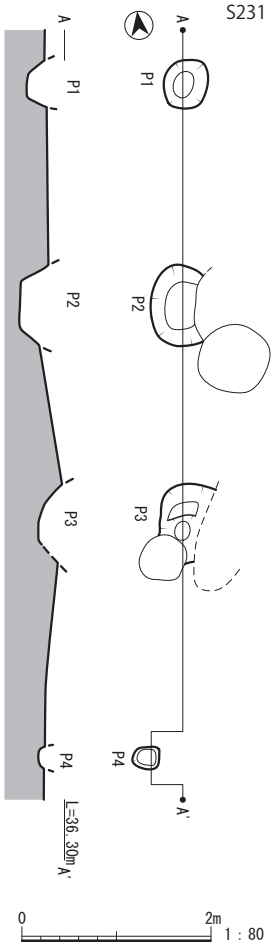
第5図　S164遺構実測図

第2節　隈本城の遺構（Ⅱ期）

第6図　Ⅱ期遺構配置図（1/400）

調査区は近世熊本城の造営や、近現代に入っての病院の建設に伴って大規模な整地が行われている。主に北側では削平を受け、南側では盛り土が行われているが、中世後期の隈本城の遺構は調査区西側、南側より検出されている。遺構検出面は近世のそれと同面であるが、遺構を埋める埋土は灰味がかった砂質の暗褐色土で、近世の遺構との峻別はしやすかった。ここでは各遺構を命名の番号順に取り上げて、その特徴について述べて行きたい。

柱穴で建物としての単位を為すものを掘立柱建物とし、全部で7棟を検出した。柱列は全部で4列。堀が1基。土坑は全部で10基である。



第7図　Ｓ231遺構実測図

1　建物

Ｓ234(第8図)

Ｃ－6区に位置する遺構。Ｓ235と重複しており、Ｓ235を切っている。東西行350cm（約11.7尺）、南北行450cm（15尺）の2間×2間の総柱建物で、南北を軸にした柱列方向はＮ15°Ｓである。柱の南北列の角度よりＳ232とセットの構造を持つものと思われ、櫓と思われる。柱間寸法は東西行Ｐ1～Ｐ3で210cm（7尺）＋130cm（約4.3尺）である。Ｐ7～Ｐ9では210cm（7尺）＋170cm（約5.7尺）であり、北に向かって柱間が広がる傾向にある。南北行Ｐ1～Ｐ7では230cm（約7.7尺）＋210cm（7尺）で、Ｐ3～Ｐ9では210cm（7尺）の等間隔であり、西に向かって柱間が狭まる傾向にある。

柱穴は直径40～80cm、深さは水準線より50～92cmである。柱穴の下端のレベルはほぼ一定である。柱列はほぼ直線に整列する。柱痕跡は確認できなかった。埋土は砂質の暗褐色土に黄褐色土（ローム）の5～10mmの粒が混じった柔らかい土である。

Ｓ235(第9図)

Ｃ－6区に位置する遺構。Ｓ234と重複しており、Ｓ234に切られている。柱穴Ｐ5、6はＳ013に切られている。東西行420cm（約14尺）、南北行360cm（約12尺）の2間×2間の総柱建物で、南北を軸にした柱列方向はＮ16°Ｅである。

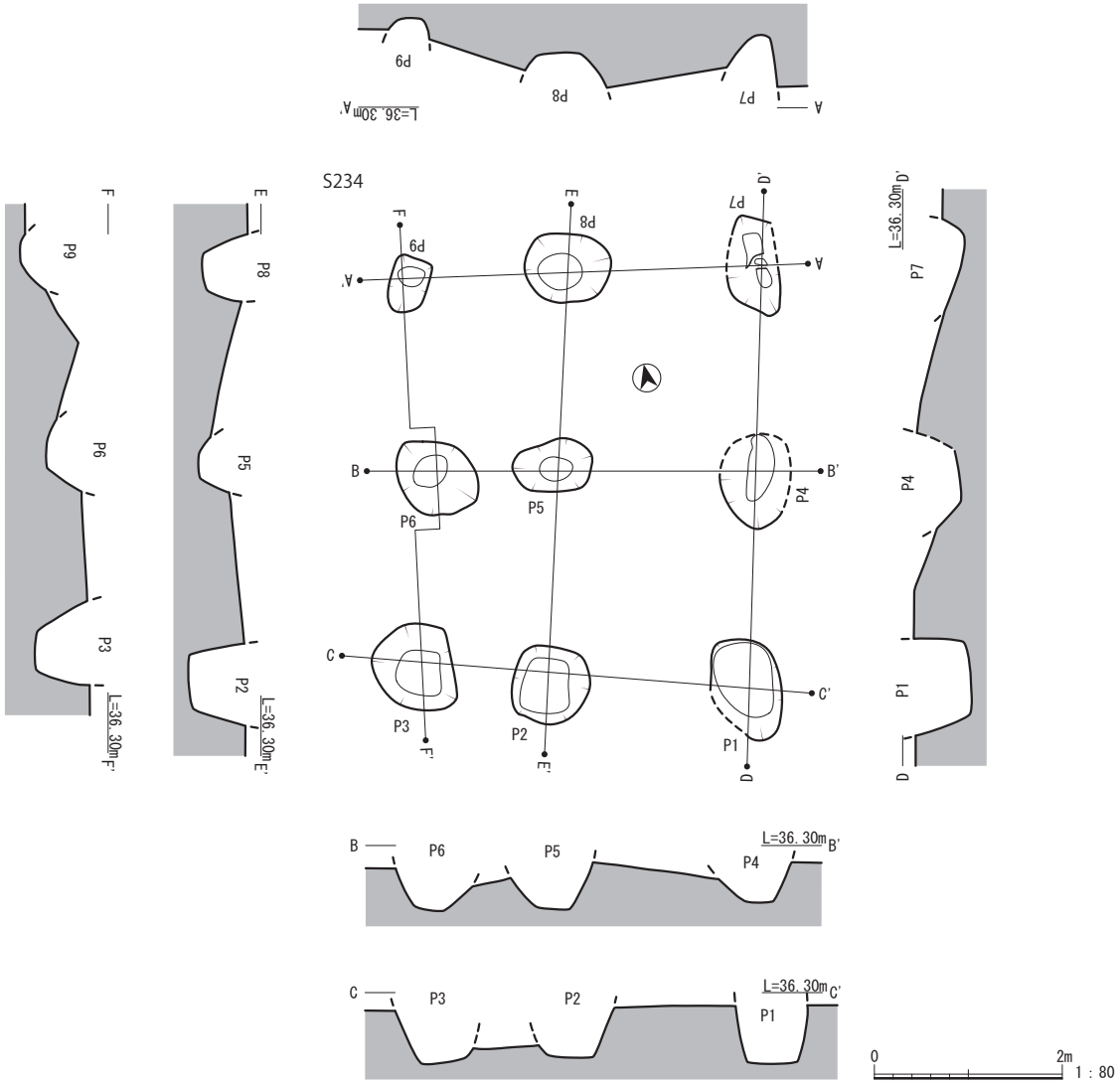
柱間寸法は東西行Ｐ1～Ｐ3で210cm(7尺)の等間隔である。Ｐ7～Ｐ9では200cm(約6.7尺)＋190cm(約6.3尺)の間隔で、寸法が縮まる傾向にある。南北行Ｐ1～Ｐ7では210cm（7尺）＋150cm（5尺）で等間隔で、Ｐ3～Ｐ9では210cm（7尺）＋170cm（約5.7尺）であり、北側の柱間が狭い。

柱穴は直径48～110cm、深さは水準線より50～110cmである。Ｐ2、Ｐ5、Ｐ6は他の遺構によって切られているため上端形が崩れている。柱穴の下端のレベルはＰ9を除いてほぼ一定である。柱列はほぼ直線に整列する。柱痕跡はＰ2、4で確認できた。埋土は砂質の暗褐色土に黄褐色土（ローム）の5～10mmの粒が混じった柔らかい土である。埋土は砂質の暗褐色土に黄褐色土（ローム）の5～10mmの粒が混じった柔らかい土である。

Ｓ236(第10図)

Ｃ・Ｄ－6区に位置する遺構で、Ｓ238に切られ、Ｓ240と重複するが切りあいは不明。桁行680cm（約22.7尺）、梁行470cm（15.7尺）の2間×2間の東西棟建物で、桁行方向はＥ2°Ｓである。

柱間寸法は梁行Ｐ1～Ｐ7で210cm（7尺）＋260cm（約8.7尺）、Ｐ3～Ｐ5で180cm（約7尺）+310cm（10.3尺）であり、桁行Ｐ1～Ｐ3で430cm（14.4尺）＋250cm（約8.4尺）、Ｐ7～Ｐ5で430cm（約14.3尺）＋



第8図　Ｓ234遺構実測図

210cm（7尺）であり、不均等である。

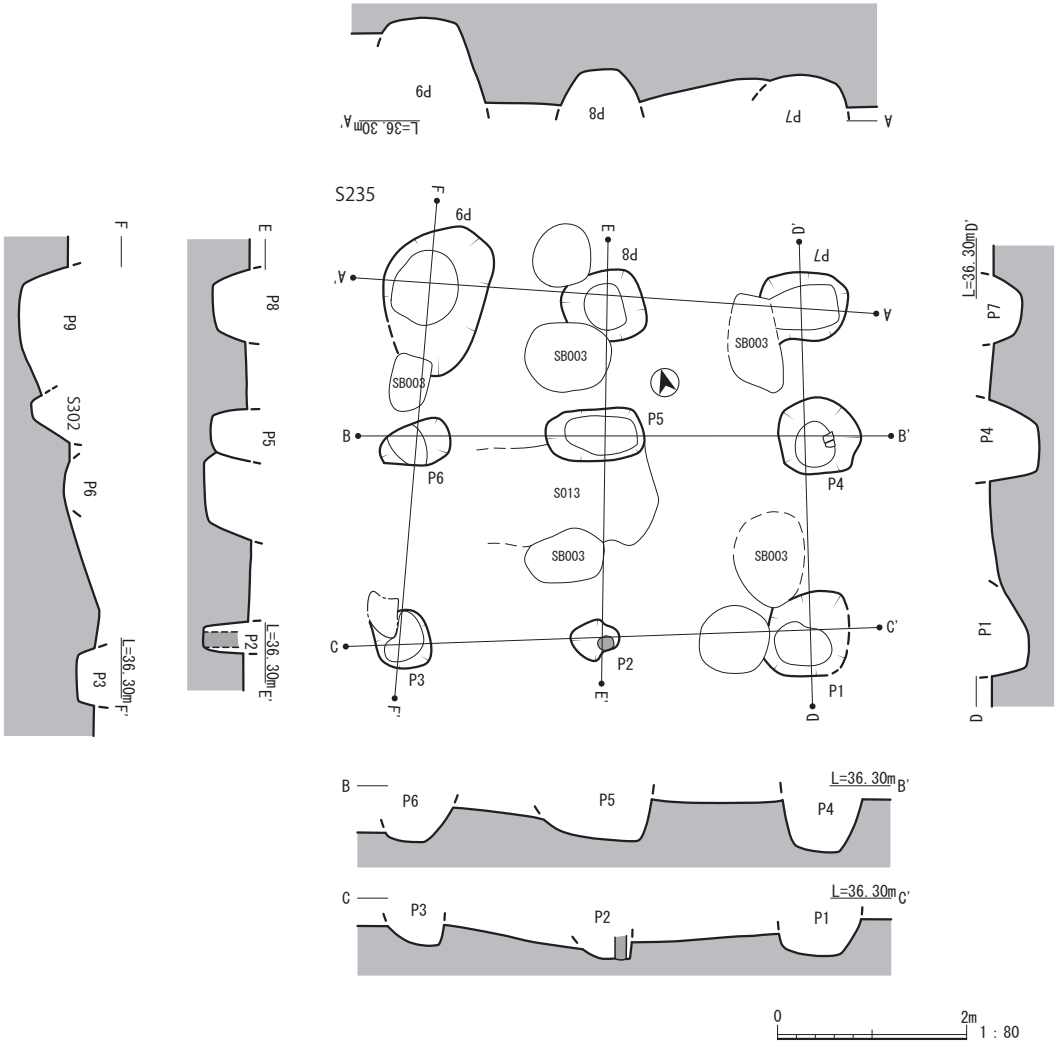
柱穴は直径40 ～ 70cm、深さは水準線より40 ～ 100cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。埋土は砂質の暗褐色土に黄褐色土（ローム）の5 ～ 10mmの粒が混じった柔らかい土である。柱痕跡はなかった。

Ｓ237(第11図)

Ｄ－6･7区に位置する遺構で、Ｓ240と重複しているが、Ｓ237が切る。柱間420cm（14尺）×400cm（約13.3尺）の2間×2間の建物で、南北を軸にした柱列方向はＮ11°Ｅである。

柱間寸法はＰ3～Ｐ1、Ｐ5～Ｐ7で200cm(約6.7尺)＋230cm(約7.7尺)である。Ｐ3～5では200cm(約6.7尺)の等間隔であるがＰ1～Ｐ7では間の柱穴がＳ240のＰ15と重複しており、検出することができなかった。

柱穴は直径40 ～ 60cm、深さは水準線より30 ～ 70cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列はほぼ直線に整列する。埋土は砂質の暗褐色土に黄褐色土（ローム）の5 ～ 10mmの粒が混じった柔らかい土である。柱痕跡は観察できなかった。



第9図　Ｓ235遺構実測図

Ｓ239(第12図)

Ｄ－6・7区に位置する遺構である。Ｓ240と重複するが、Ｓ239が切る。Ｓ237とは近接するが、柱方向がほぼ同一のため、同一建物の可能性もある。柱間460cm（15.3尺）×380cm（約12.7尺）の2間×1間の建物で、南北を軸にした柱列方向はＮ11°Ｅである。

柱間寸法はＰ2～4で210cm（7尺）＋180cm（6尺）、Ｐ1～Ｐ5で200cm（約6.7尺）の等間隔。Ｐ2～Ｐ1、Ｐ4～Ｐ5で180cm（6尺）。

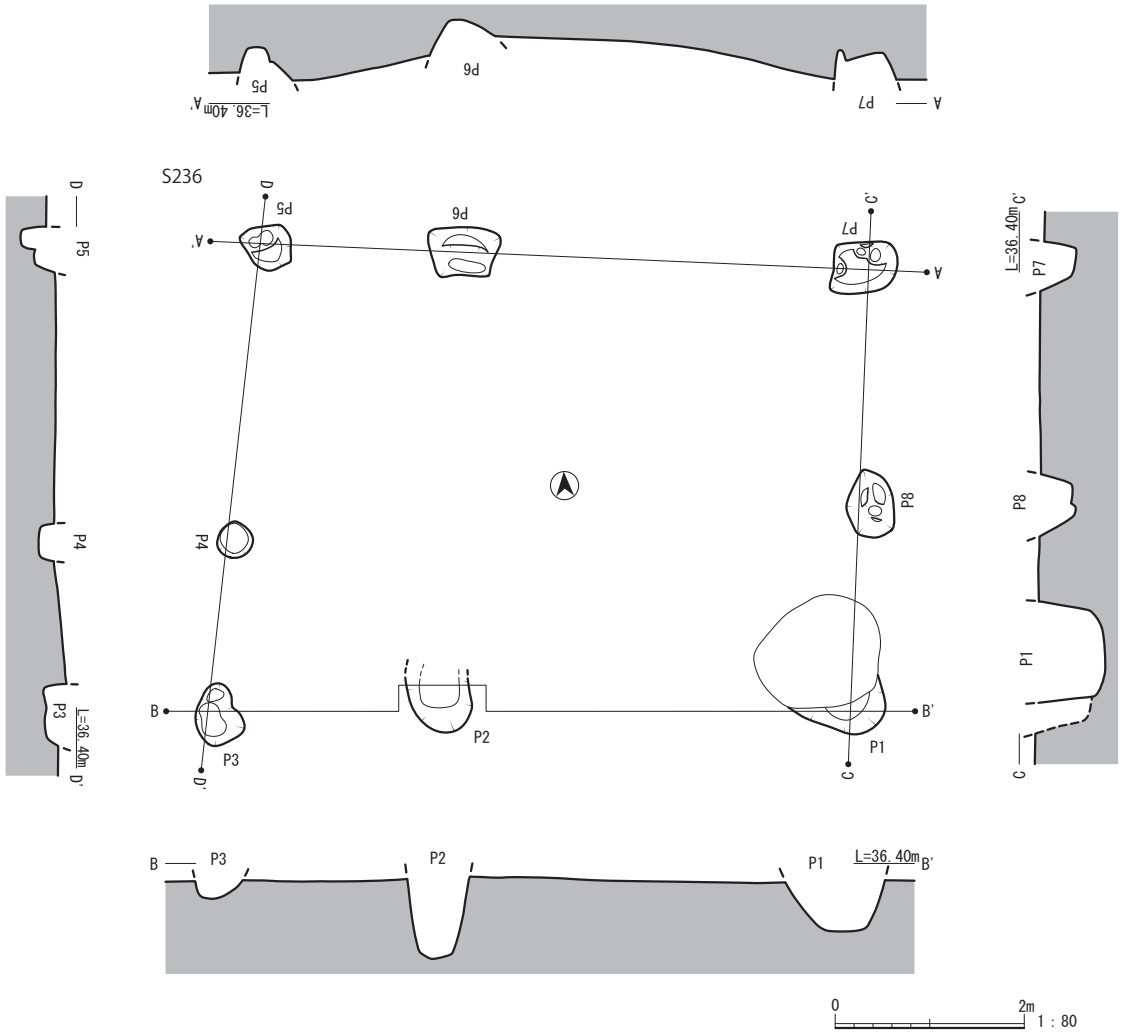
柱穴は直径30～60cm、深さは水準線より30～50cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱列の並びはほぼ整列する。

柱痕跡はＰ3で確認でき、直径は10cmである。

Ｓ238(第13図)

Ｃ・Ｄ－6区に位置する遺構で、Ｓ240を切っている。桁行820cm（約27.3尺）、梁行400cm（13尺）の4間×2間の南北棟建物で、桁行方向はＮ8°Ｅである。

柱間寸法は梁行Ｐ1～Ｐ3、Ｐ9～Ｐ7で200cm（約6.7尺）の等間隔であるが、桁行Ｐ9～Ｐ1で210cm（7尺）＋190cm（約6.3尺）＋220cm（約7.3尺）＋150cm（5尺）、Ｐ7～Ｐ3で210cm（7尺）＋210cm（7尺）



第10図　Ｓ236遺構実測図

＋190cm（約6.3尺）＋210cm（7尺）であり、不均等である。

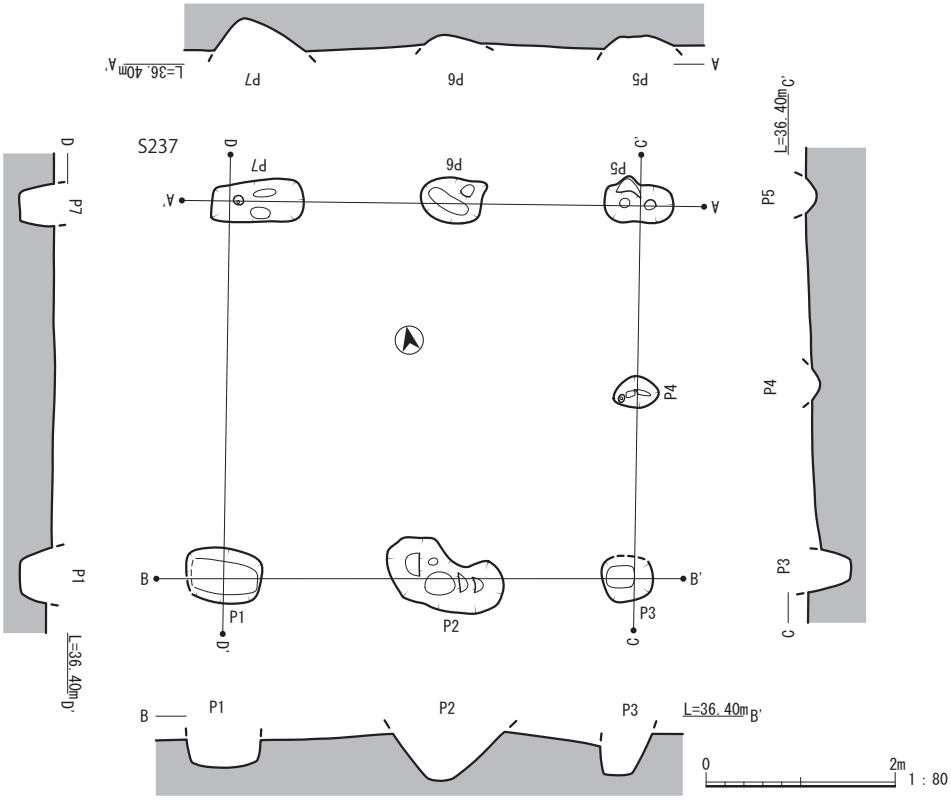
柱穴は直径30 ～ 100cm、深さは水準線より40 ～ 100cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではない。柱痕跡はＰ4で確認できた隅柱にあたるＰ1、3、7、9は隅丸長方形。

Ｓ240(第14図)

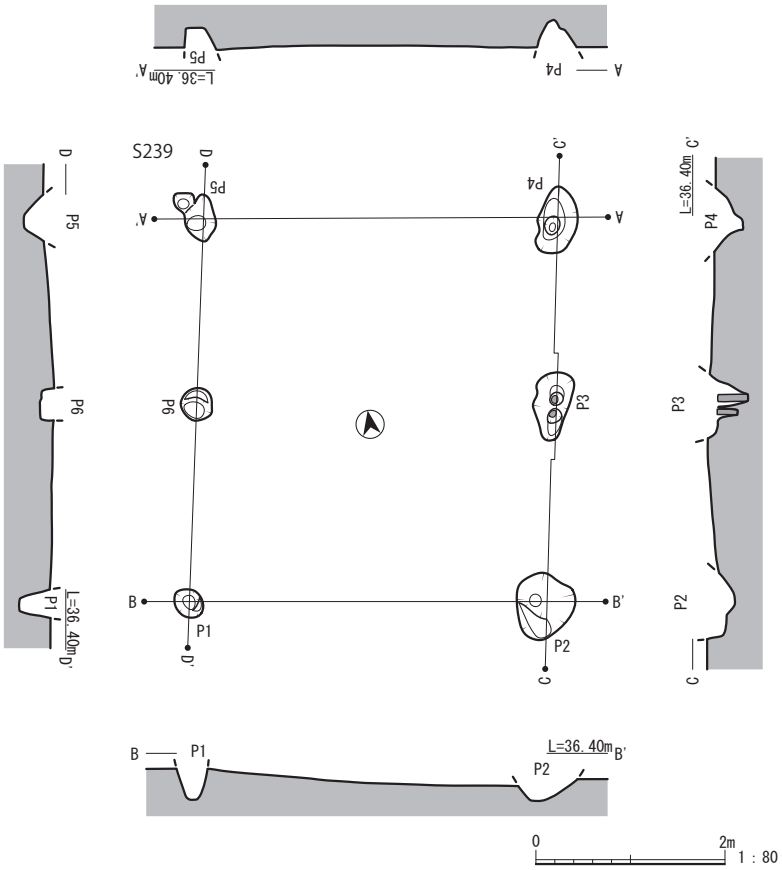
Ｃ・Ｄ－6・7区に位置する遺構で、Ｓ238、Ｓ237、Ｓ239と重複し、いずれも切られている。Ｓ236とは建物の向きより存在時期が近いと思われるが、切りあい関係は不明。桁行1410cm（47尺）、梁行610cm（約20.3尺）の7間×2間の東西棟建物で、桁行方向はＥ6°Ｓである。

柱間寸法は桁行Ｐ13 ～Ｐ1、Ｐ11 ～Ｐ4で200cm（約6.7尺）＋200cm（約6.7尺）＋190cm（約6.3尺）＋210cm（7尺）＋200cm（約6.7尺）＋210cm（7尺）＋200cm（約6.7尺）である。梁行Ｐ13 ～Ｐ11では320cm（約10.7尺）＋290cm（約9.7尺）である。Ｐ1 ～Ｐ4では290cm（約9.7尺）＋120cm（4尺）＋210cm（7尺）である。西側梁行を作るＰ2、Ｐ3は大きさ、深さ共に不十分であるが、埋土より同期の柱穴と判断した。

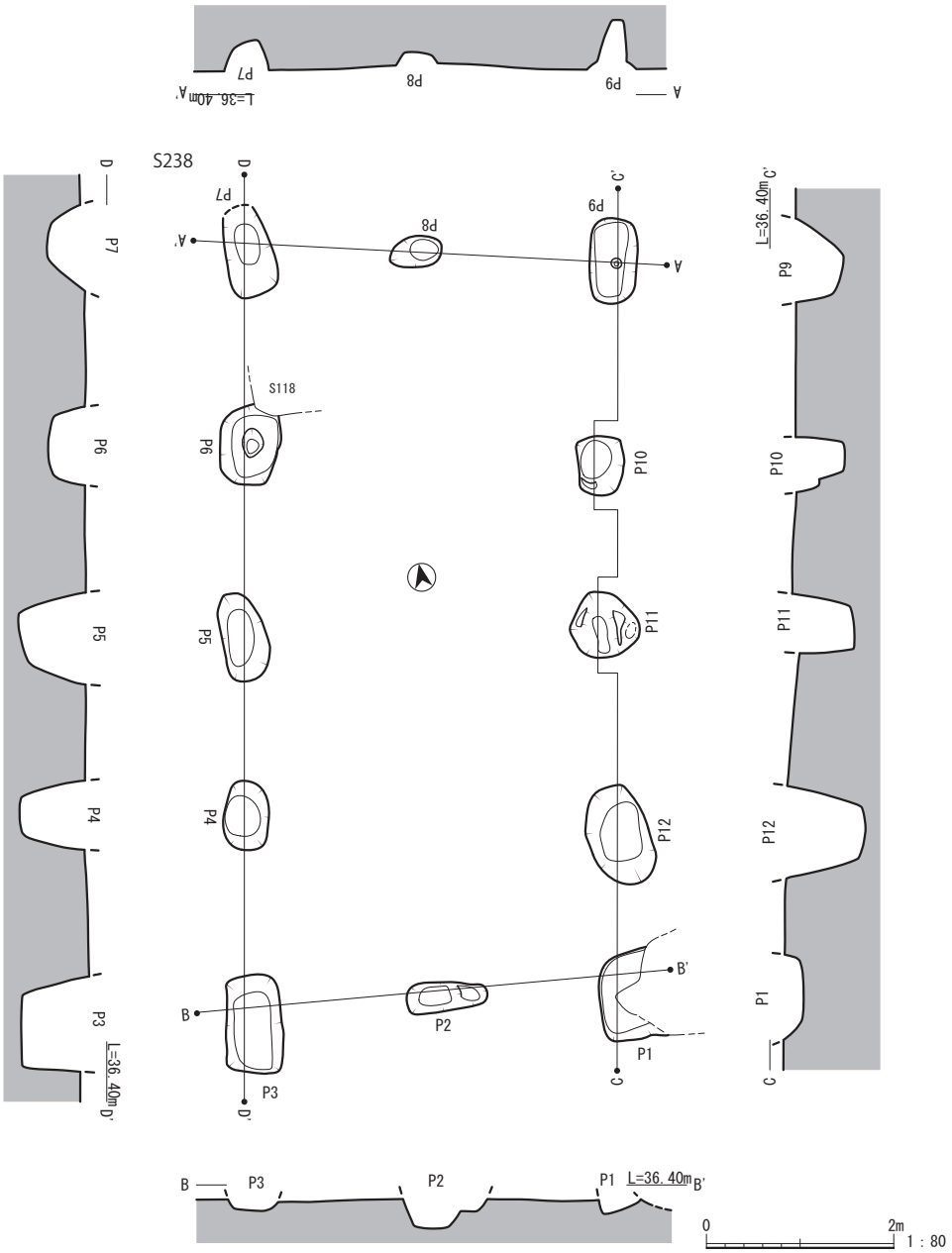
柱穴は直径40 ～ 110cm、深さは水準線より500 ～ 120cmである。Ｐ1、4、7、10、11、18には礎盤があり、Ｐ1は五輪塔の水輪、Ｐ4は火輪、Ｐ10水輪、Ｐ18は地輪を転用したものである。Ｐ1、8、16、18、



第11図　Ｓ237遺構実測図



第12図　Ｓ239遺構実測図



第13図　Ｓ238遺構実測図

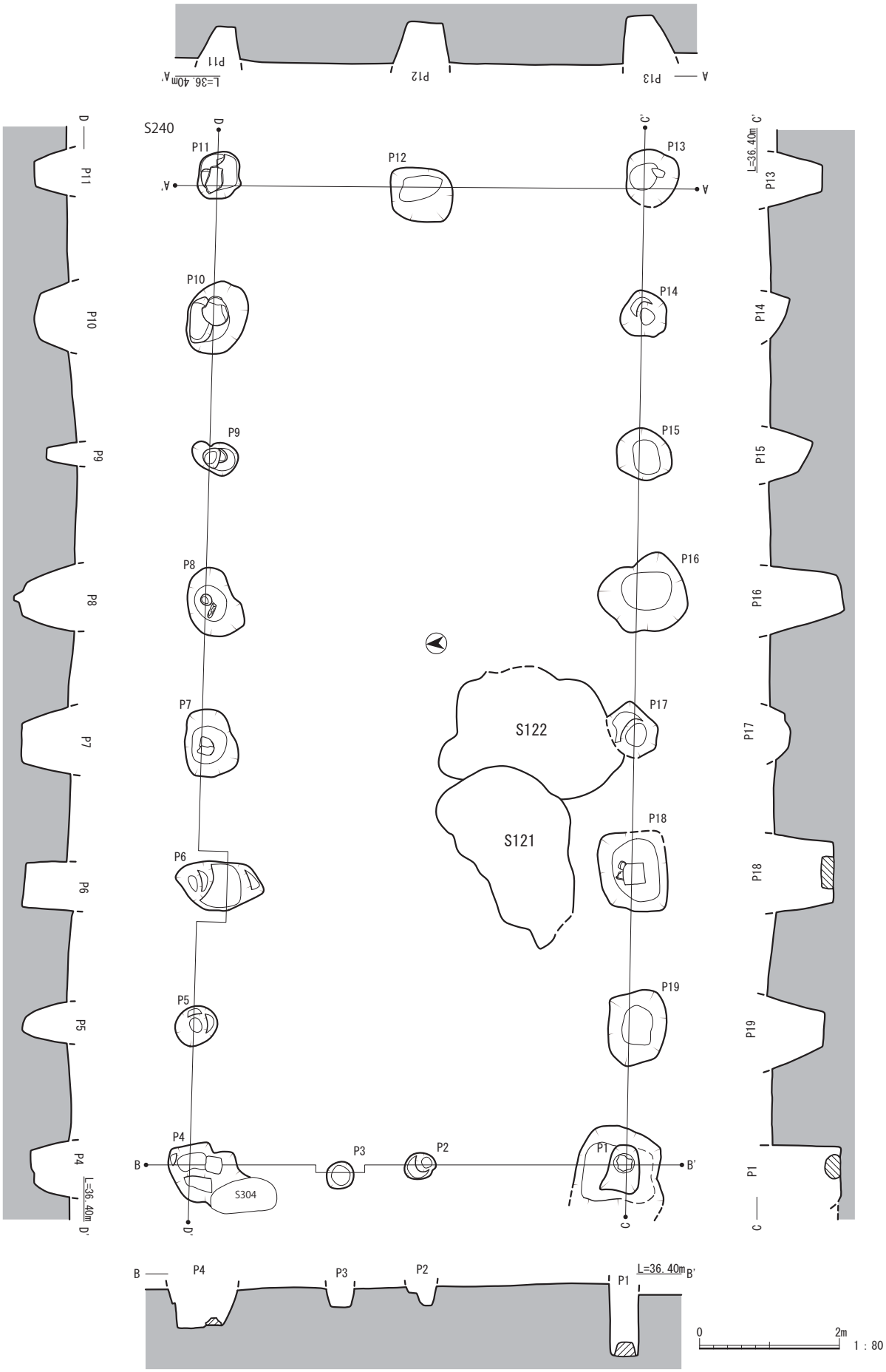
19では柱痕跡が確認できた。柱列は基本的には直線に整列する。埋土は砂質の暗褐色土に黄褐色土（ローム）の5 ～ 10mmの粒が混じった柔らかい土である。

Ｓ230(第15図)

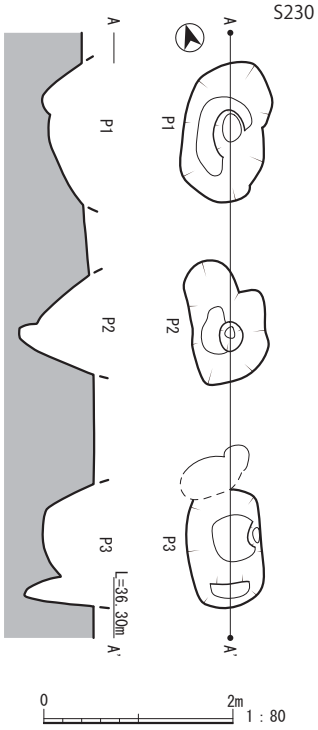
Ｂ－5・6区に位置する。長さは440cm（約14.7尺）、柱間隔はＰ３～Ｐ１で220cm（約7.3尺）の等間隔で2間である。柱列の軸はＮ15°Ｅである。柱穴は直径100 ～ 125cm。深さは水準線より50 ～ 70cmで、下端のレベルはほぼ一定である。櫓の前に設置された鍵曲がり状の柵である。

Ｓ233(第16図)

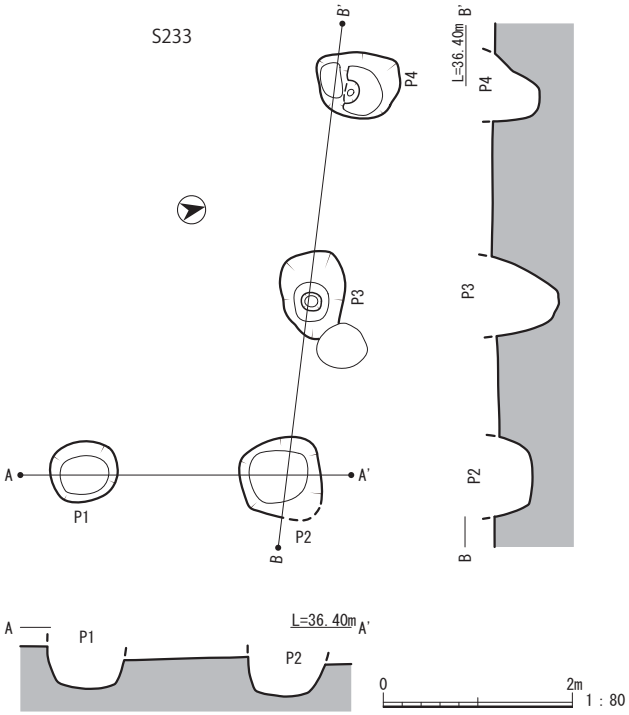
Ｂ－5・6区に位置する。長さは東西420cm（約14尺）、南北200cm（約6.7尺）である。柱間隔はＰ１～Ｐ２で200cm（約6.7尺）。Ｐ２～Ｐ４で180cm（6尺）＋230cm（約7.7尺）の2間である。柱列の東西軸はＥ15°Ｓである。柱穴は直径65 ～ 86cm。深さは水準線より60 ～ 100cmで、下端のレベルはほぼ一定では



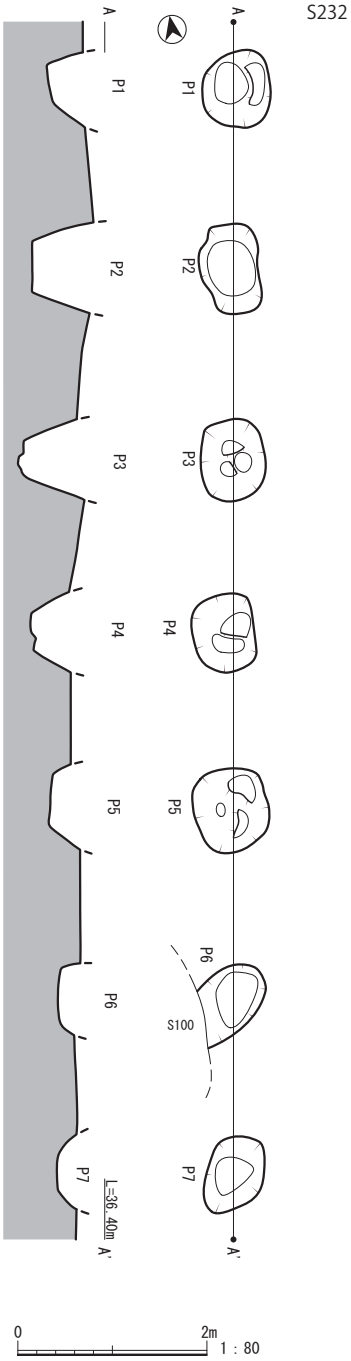
第14図　Ｓ240遺構実測図



第15図　Ｓ230遺構実測図



第16図　Ｓ233遺構実測図

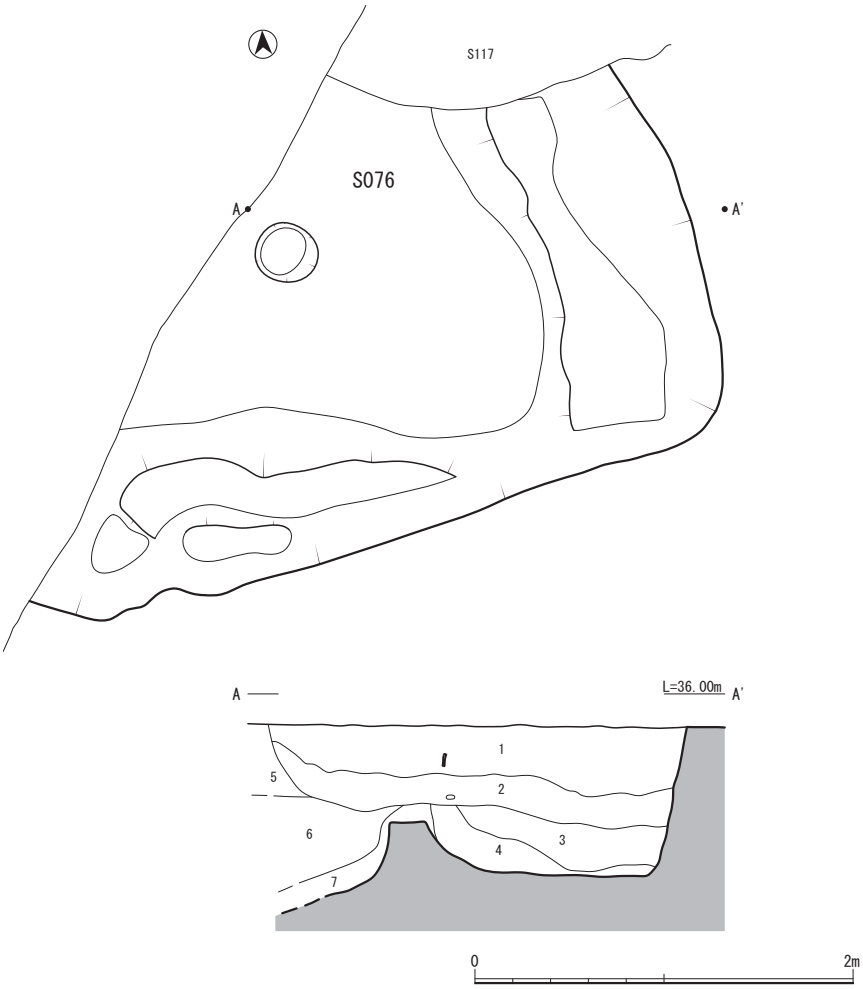


第17図　Ｓ232遺構実測図

ない。Ｓ230と一体となる櫓の前に設置された鍵曲がり状の柵である。

Ｓ232(第17図)

Ｃ－4・5区に位置する。長さは1070cm（約35.7尺）で、柱間隔はＰ7～Ｐ1で180cm（6尺）＋200cm



S076

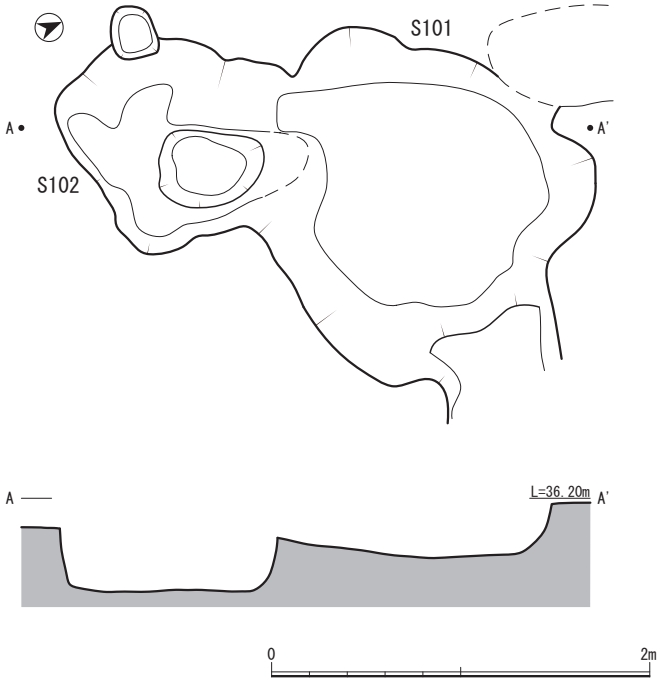
1層 暗褐色土	目の細かな粘質土で1mm大の砂粒やカーボンがまばらに混じる。
2層 暗褐色土	1層に似るが、1層より軟らかく、カーボンや砂粒の混じりが多い。
3層 褐色土	目が粗く、ほくほくとしている土で大きめのカーボンが混じる。
4層 淡褐色土	砂粒の土で5mm大の橙色ロームの粒がまばらにまじる。
5層 暗褐色土	粘性をもち、10mm大のロームの粒が混じる。
6層 暗褐色土	5～10mm大にかたまった粘質土で粒の間に隙間があり、ザクザクしている。
7層 暗褐色土＋黄褐色土	6層に5cm大のロームの粒が混じる。粘性があり、よくしまる。

第18図　Ｓ076遺構実測図

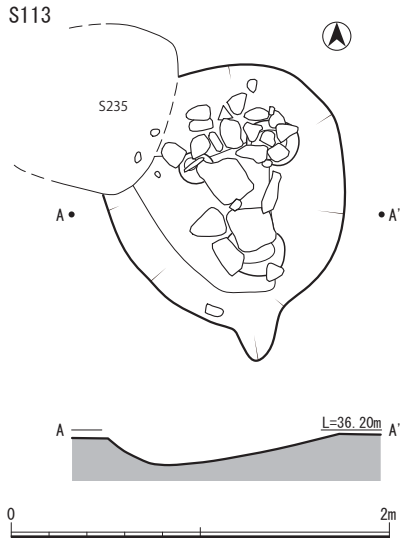
（約6.7尺）＋180cm（約6尺）＋200cm（約6.7尺）＋200cm（約6.7尺）＋200cm（約6.7尺）の6間である。柱列の軸はＮ10°Ｅである。柱穴は直径70 ～ 90cm。深さは水準線より50 ～ 80cmで、下端のレベルは一定でない。遺構検出面ではかなり削平を受けていると思われる。また､柱列の並びの傾きより､Ｓ Ｂ03に伴って櫓と柵の遺構を作っているものと推測される。埋土は砂質の暗褐色土に黄褐色土（ローム）の5 ～ 10mmの粒が混じった柔らかい土。Ｐ2に柱痕跡が残る。

Ｓ241

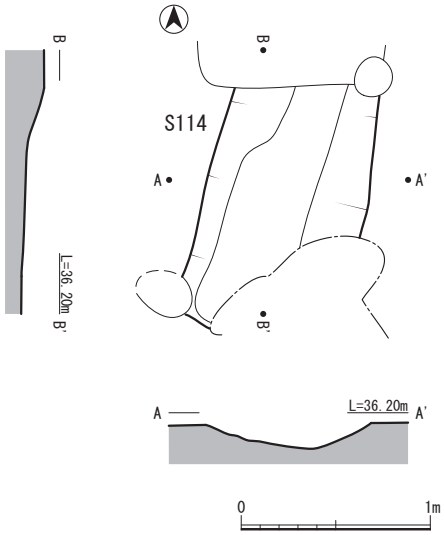
Ｄ－7区に位置する。南北に並ぶ柱列で柱間は180cmの等間隔に並ぶ。Ｐ1は撹乱よって底面の痕跡が残る程度であるが、Ｐ2、3は礎盤を残している。



第19図　Ｓ102遺構実図



第20図　Ｓ113遺構実測図



第21図　Ｓ114遺構実測図

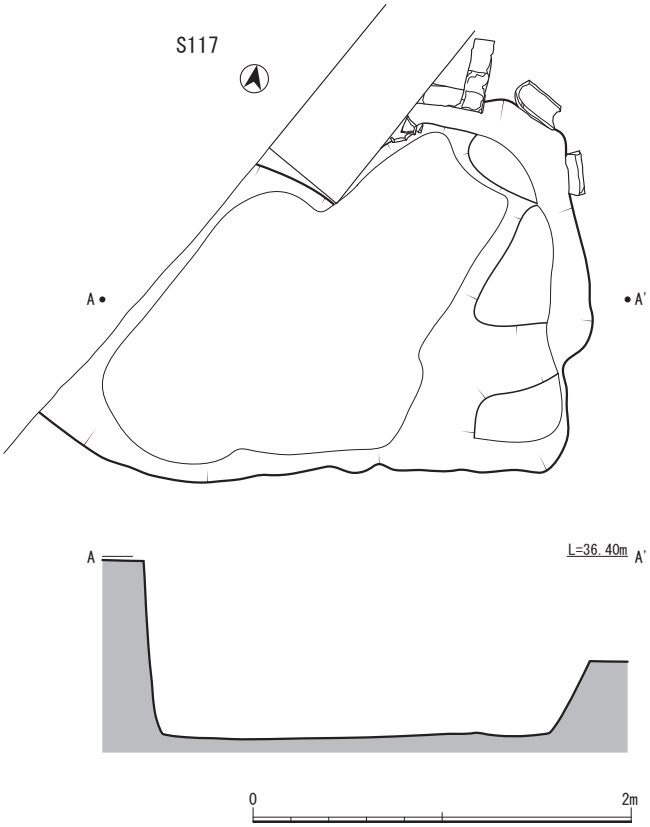
2　土坑

Ｓ076(第18図)

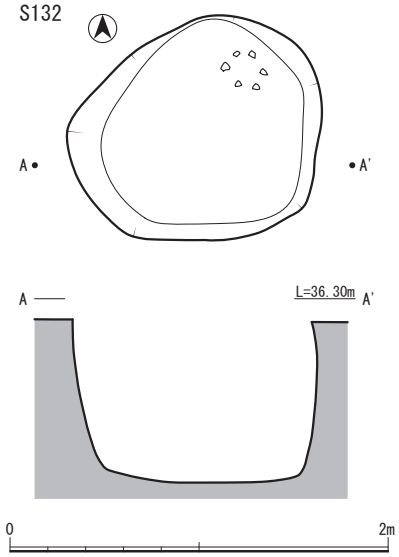
Ｃ－4区に位置する。堀であるＳ055と接しており、東側斜面に伸びる竪掘りの可能性がある。埋土はＳ055と同質のもの。

Ｓ101(第19図)

Ｃ－7区に位置する。南北軸160cm、東西軸180cmのほぼ円形の土坑で、深さは水準線より35cm。Ｓ102に切られる。2つに分層ができ、砂質の締まった埋土を持つ。底面は平坦である。



第22図　Ｓ117遺構実測図



第23図　Ｓ132遺構実測図

Ｓ102(第19図)

Ｃ－7区に位置する。南北軸150cm、東西軸110cmの土坑で、深さは水準線より45cm。Ｓ101を切る。4つに分層ができ、固く締まった埋土を持つ。中央部に柱痕状の窪みがあるが、底面は平坦である。

Ｓ113(第20図)

Ｃ－6区に位置する。南北軸140cm、東西軸125cmの土坑で、深さは水準線より20cm。浅い土坑で礫が埋めてあり、遺構の性格が柱穴であれば礎石のグリ石の可能性がある。

Ｓ114(第21図)

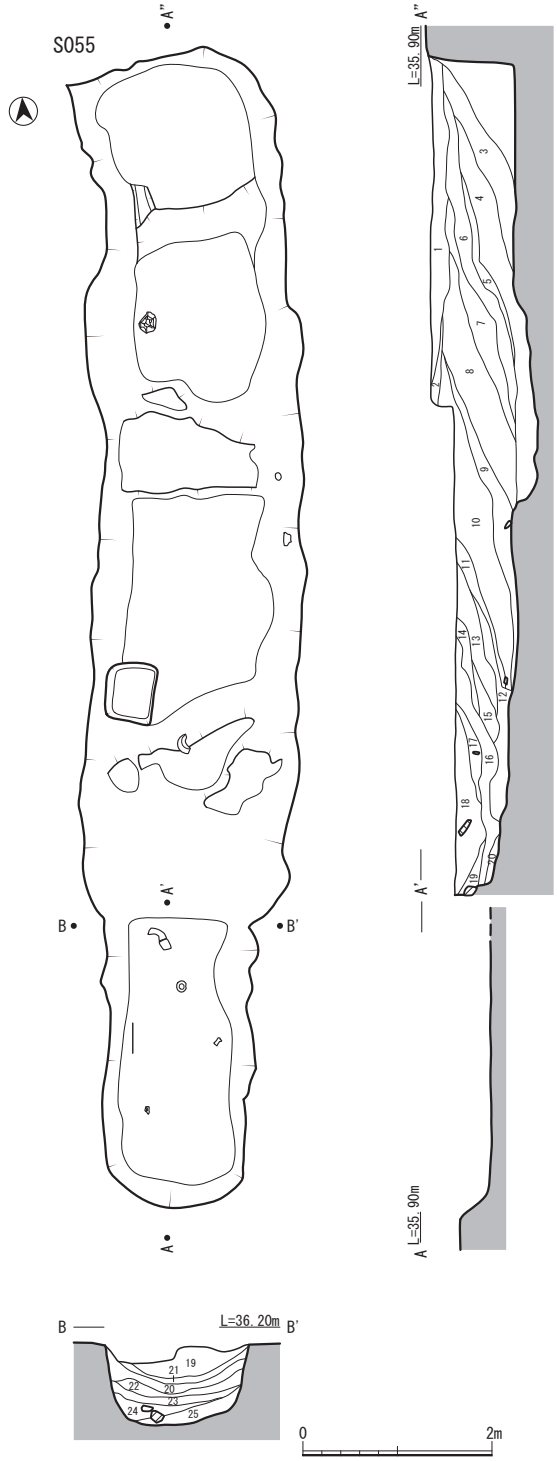
Ｃ－6区に位置する。南北に延びる溝状遺構。Ｓ235との切り合いは見られず、同時期のものと思われる。

Ｓ117(第22図)

Ｃ－4区に位置する。底面が平坦なしっかりとした掘り方を持つ土坑で、不定形であるが南北軸220cm、東西軸220cmである。深さは水準線より100cm。3つに分層することができたが、中層は厚い炭の層である。下層は黄褐色土で厚く、スラグが多く出土した。

Ｓ132(第23図)

Ｄ－6区に位置する。南北軸120cm、東西軸130cmのほぼ円形の土坑で、深さは水準線より90cm。ほぼ垂直に掘り下げた遺構で、Ｓ240の中央付近にあり、遺構に伴う土坑と思われる。



S055

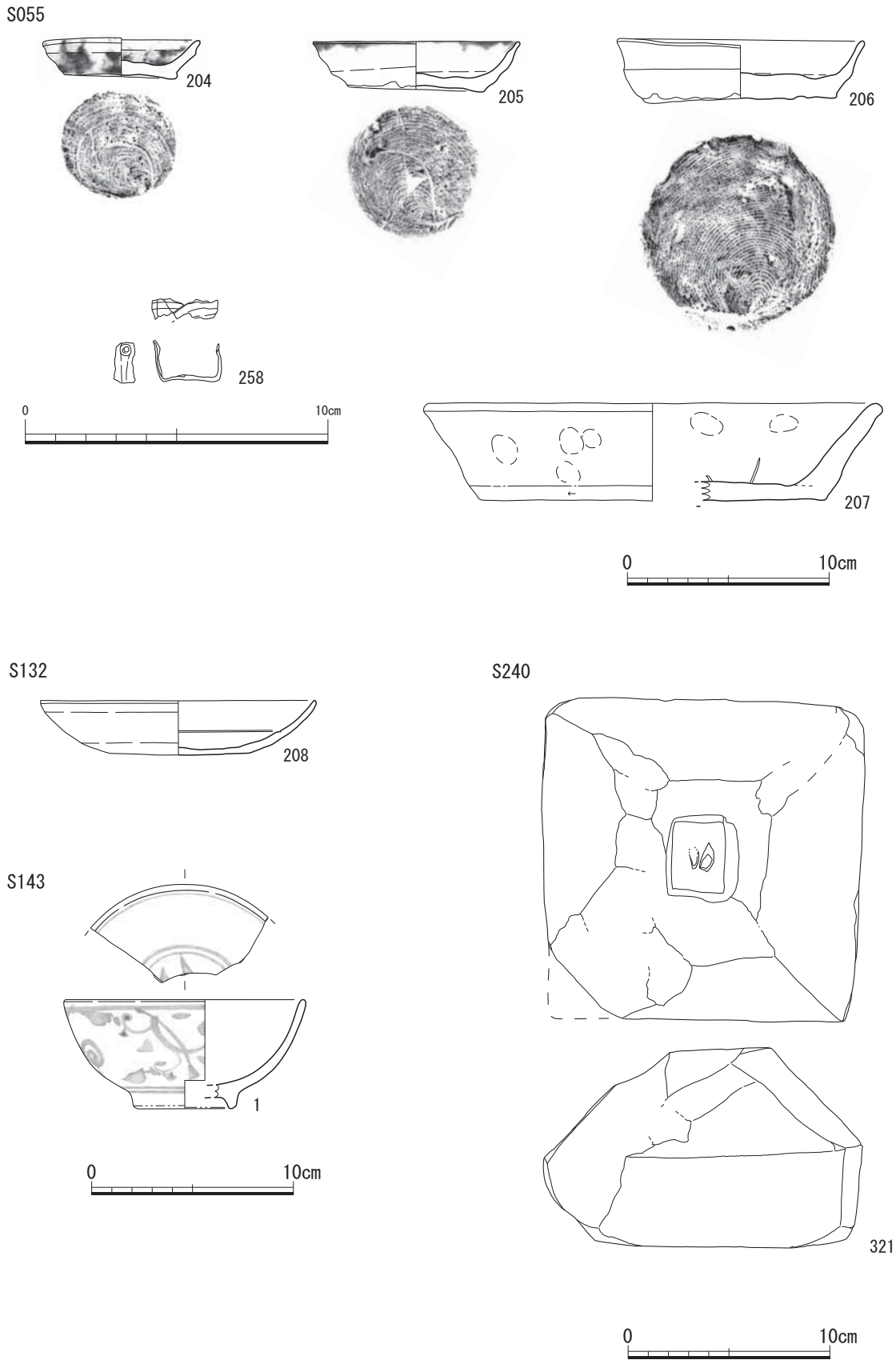
1層	黒褐色土	目の細かな粘質土で、固くしまる。5mm大のロームの粒が混じる。
2層	黄褐色土	ロームの大きなブロックが固まった層
3層	黒褐色土	ボロボロと粒がまとまり、もろい。
4層	暗褐色土	黄褐色土の粒と混じり合い、ボロボロとした粒状でもろい。
5層	灰色土	暗褐色土に細かな灰層が混じり、ボロボロともろい。
6層	暗褐色土	しまりのある暗褐色土で砂粒や大きなローム状のブロックが混じる。
7層	暗褐色土	ボロボロと粒状にまとまる土で、もろい。
8層	黒褐色土	ボロボロと粒状にまとまる土で、もろい。他の混じりは少ない。
9層	暗黄褐色土	暗褐色土と黄褐色土が均等に混じり合う、粘質でしまりがある。
10層	黒褐色土	粘質土で砂粒や、1cm大の黄褐色土の粒が混じる。
11層	橙色土	ほぼ純粋な橙色粘質土
12層	暗褐色土	粒がまとまり、ボロボロとした土でもろい。
13層	黄褐色土＋暗褐色土	ボロボロとした土質で、互いが均等に混じり合う。
14層	暗褐色土	目の細かな砂質土でサラサラとしているが、しまりがある。
15層	黒褐色土	粘質をもった土で、2～3cm程の黄褐色土のロームが混じる。
16層	暗褐色土	目が細かくしまりがある。
17層	暗褐色土＋灰色土	互いが混じり合い、ボロボロとまとまりがない。
18層	暗褐色土	粘質の暗褐色土の粒が、カーボンなどを含みながらかたmる。
19層	暗褐色土＋黄褐色土	2cm大の黄褐色土が混じり合い、ボロボロともろい。
20層	暗褐色土	目が細かく粘性をもつ。上面にはカーボン層
21層	橙色土	橙色のロームを主体に暗褐色土が混じる。
22層	橙色土＋暗褐色土	暗褐色土の割合が21層より多い。
23層	暗褐色土	5cm大の暗褐色土のブロックに黄褐色土が混じる。
24層	褐色土	暗褐色土と黄褐色土が均等に混じり合う。
25層	暗褐色土＋灰白色土	暗褐色土と灰白色土が均等に混じり合う。

第24図　Ｓ055遺構実測図

3　堀

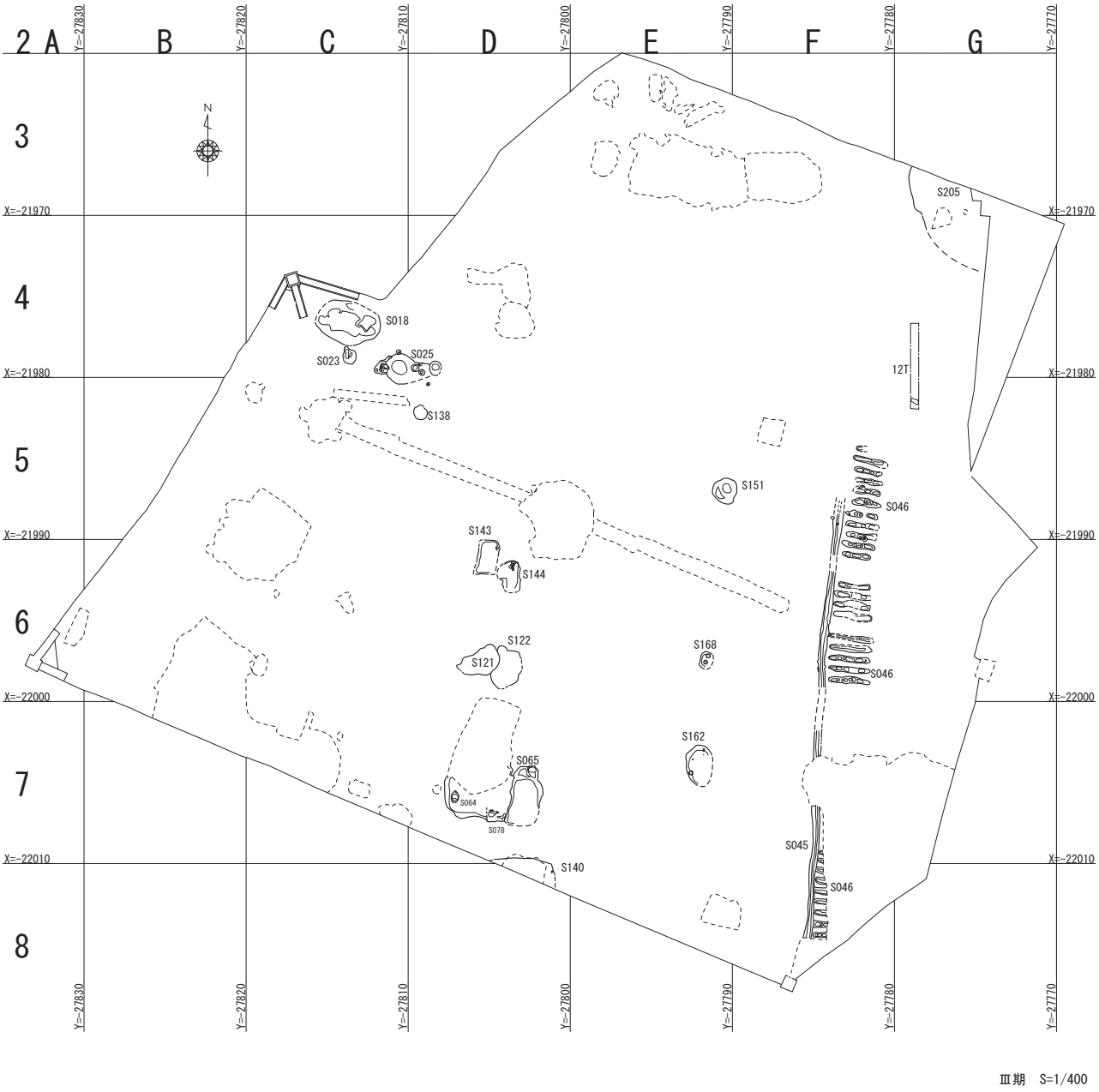
Ｓ055(第24図)

Ｃ－4・5区に位置する遺構で、長さ1220cm、幅220cmほどの堀状の遺構。底部は所々で深さが違うが、北側からしっかりとした掘り込みがあるように、底部もほぼ140cmで一定しており、深さも水準線より100cmほどの深さで掘り進められたものと思われる。柵や櫓と一体となった遺構で、廃棄時は北側より徐々に埋まっていったことが判る。



第25図　Ｓ055・Ｓ132・Ｓ143・Ｓ240出土遺物実測図

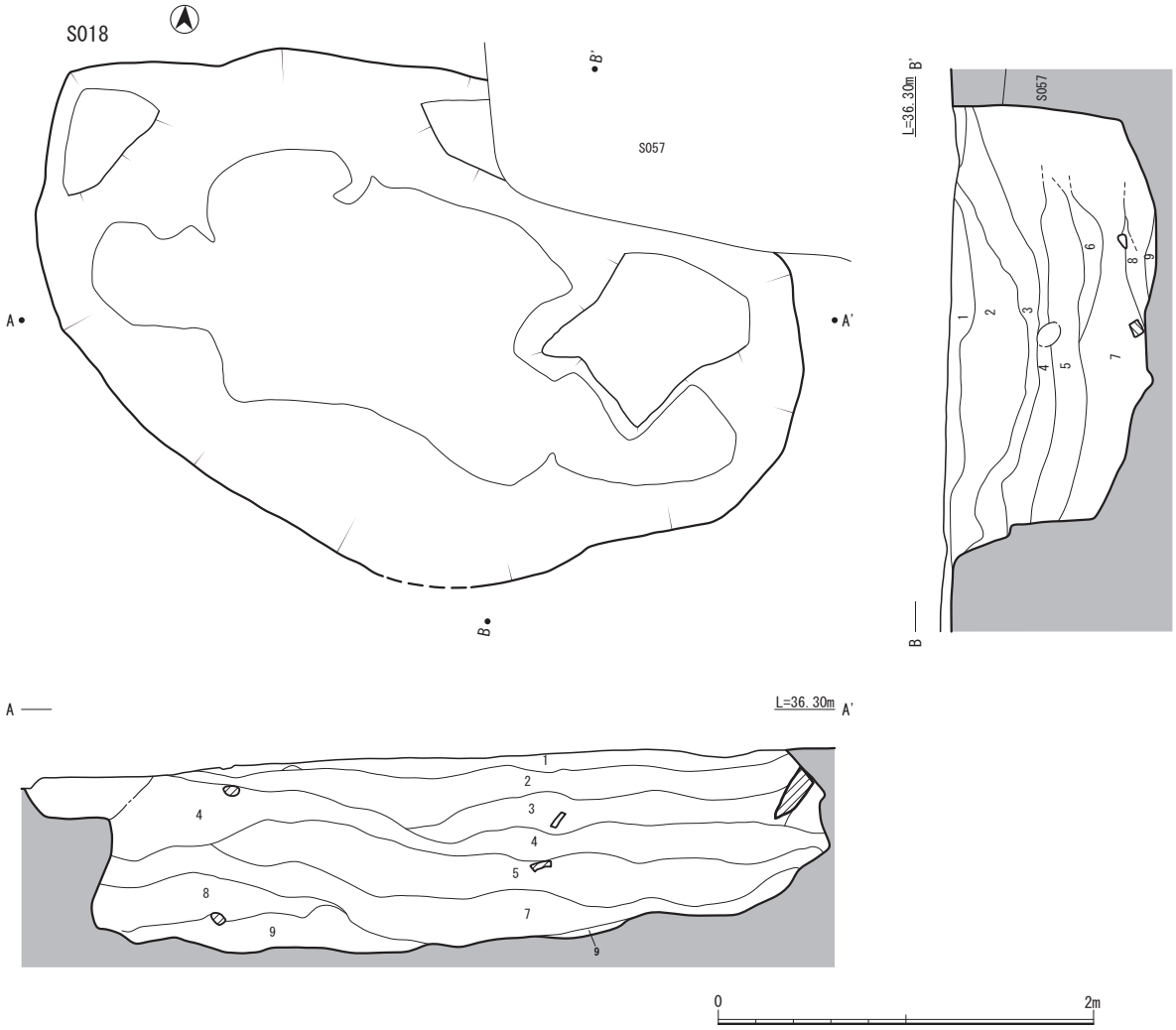
第3節　加藤期の遺構（Ⅲ期）



第26図　Ⅲ期遺構配置図(1/400)

熊本城の建設には諸説あるが1590（天正18）年に着工し、大まかな工事の終了が1600（慶長5）年、内装・障壁画等の完成が1607（慶長12）年との説をとると、加藤清正が熊本城を築城する時期の遺構と考えられるものをこの時期に区分した。遺構検出面は近世のそれと同面であるが、遺構を埋める埋土はⅣ期行のものと鮮明な違いを見出せず、出土遺物を基準に時期区分を行った。

確認できた遺構は道路が1基。土坑は全部で16基である。



S018

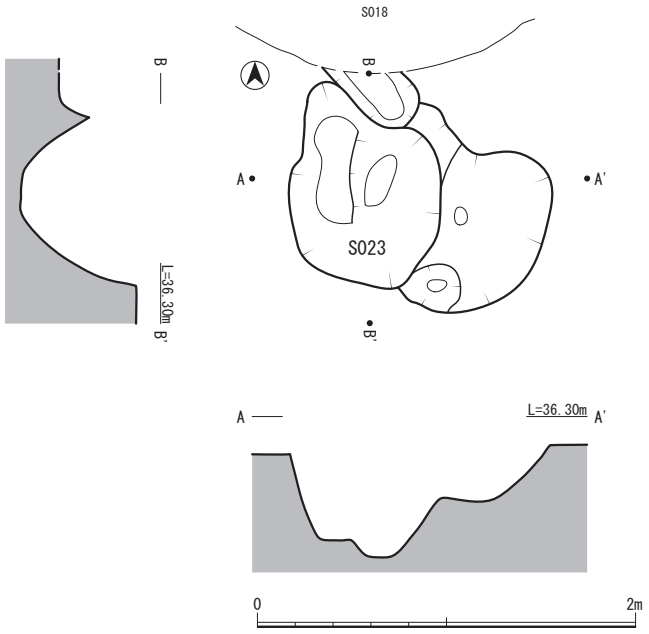
1層	暗褐色土	細かな砂質の暗褐色土に5～10mm大の砂利が混じる。さらさらともろく、崩れやすい。
2層	灰白色土	灰白色の粘土中に高い密度で、5～30mm大の砂利が混じる。
3層	橙色土	橙色の粘質土が10～100mm大のブロックでバラバラと混じる。
4層	暗褐色土＋橙色土	粒状の暗褐色土に3層が混じる。
5層	暗褐色土	5～10mm大の砂質土でかたくまとまる。カーボンが混じる。
6層	暗褐色土	5層よりまとまりがなく、ボロボロしている。
7層	暗褐色土	粘性がありやわらかい。
8層	暗褐色土	7層より色が黒く、まとまりがある。
9層	黄褐色土	黄褐色ロームを中心に暗褐色土が混じる。

第27図　S018遺構実測図

1　土坑

S018(第27図)

C－4区に位置する。東西に長軸をとり、東西軸は425cm、南北軸は260cmの楕円形の土坑で、深さは水準線より130 ～ 110cm。底面はほぼ平坦になるが、西側端にはテラス状の段があり、東側壁面は内湾する。



S023
1層　暗褐色土　　1～3mmほどの砂状の暗褐色土で、カーボンが混じりポロポロともろい。
2層　暗褐色土＋黄褐色土ブロック　黄褐色のブロックが均等に混じり、しまっている。

第28図　Ｓ023遺構実測図

Ｓ023(第28図)

Ｃ－4区に位置する。柱穴の切り合いの可能性がある。東西軸140cm、南北軸100cm。深さは水準線より75cm。

Ｓ025(第29図)

Ｃ－4、5区に位置する。検出中に熊本城跡遺跡群古城上段調査検討委員会で遺構の保存が決まったため、遺構東側の発掘を終えていない。土坑と幾つかの柱穴の切りあいであると思われる。Ｓ025は東西軸は190cm、南北軸は180cmのほぼ円形の土坑と思われる。深さは水準線より60cm。底面はほぼ平坦になる。

Ｓ064

Ｄ－7区に位置する。Ｓ078、066に切られる。東西に長軸をとる大型の土坑。

Ｓ065(第30図)

Ｄ－7区に位置する。南北に長軸をとる遺構で、東西軸は180cm、南北軸は380cm。深さは水準線より70cm。北側にテラス状の段があるが、底面はほぼ平坦になる。南東隅は調査用トレンチに削られ、プランは不明。

Ｓ078

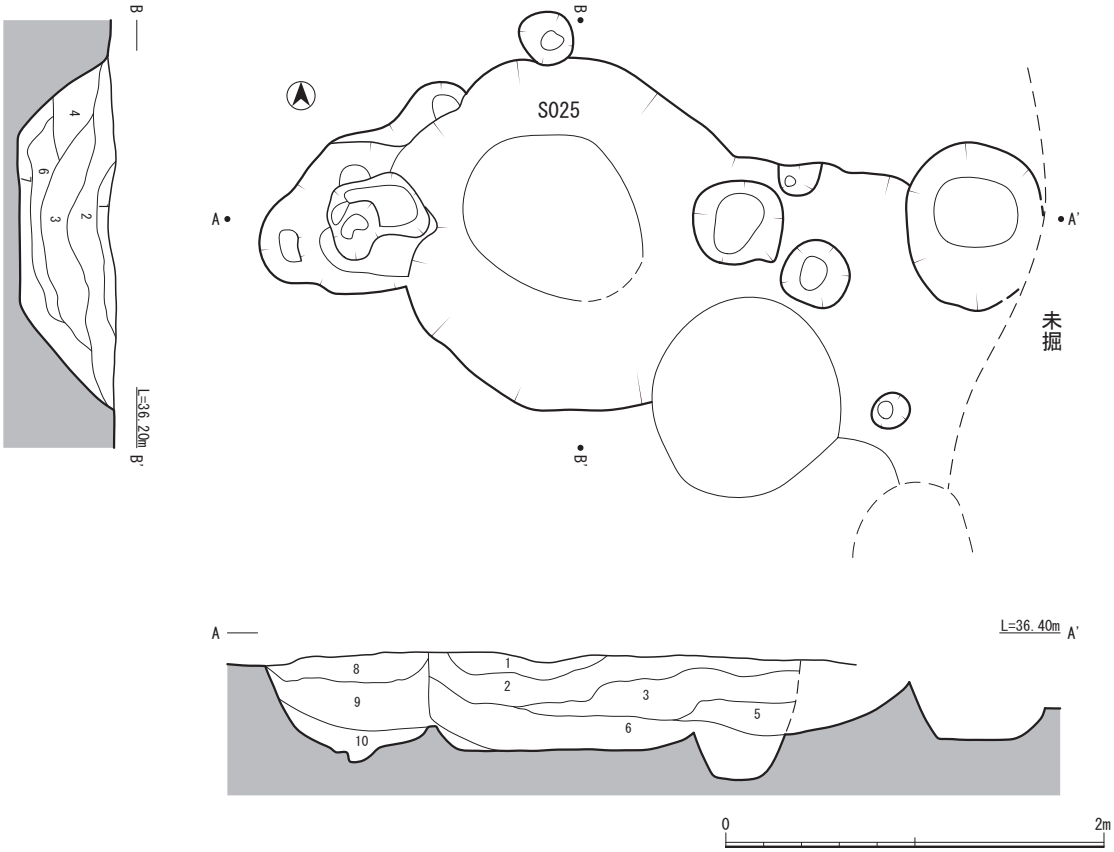
Ｄ－7区に位置する。Ｓ064を切り、Ｓ065に切られる。東西に長軸をとる土坑で、堀方も深く、5つに分層できる。

Ｓ121(第31図)

Ｄ－6区に位置する。Ｓ122と接し、Ｓ121がＳ122を切る。東西に長軸をとる遺構で、ほぼ垂直に掘り方があり、深いために完掘を断念する。井戸の可能性がある。

Ｓ122(第31図)

Ｄ－6区に位置する。Ｓ121に切られる。南北に長軸をとる遺構で、これもほぼ垂直に掘り方があり、深いために完掘を断念する。井戸の可能性がある。



S025

1層	カクラン	暗褐色土に白いコンクリート片のような建材がまじる。
2層	褐色土	暗褐色土に黄褐色ロームがまじり込む。サラサラとした砂質土でしまりはある。
3層	暗褐色土	1～3mm大の砂質土でバラバラとまとまりがない。
4層	暗褐色土	3層に似るが、黄褐色のロームのブロックがまとまっている。
5層	暗褐色土	粘質の暗褐色土と黄褐色のロームが混じり合いよくしまっている。
6層	黄褐色土	黄褐色ロームを中心に暗褐色土が混じりよくしまっている。
7層	褐色土	細かな砂質で、ふかふかとやわらかい。
8層	暗褐色土＋黄褐色土	1～3mm大の砂粒に10mm大のロームのブロックが混じりよくしまる。
9層	暗褐色土＋黄褐色土	黄褐色土の割合が高く、全体にボロボロとしている。
10層	暗褐色土	1～3mm大の砂粒で他の混じりが少ない。

第29図　Ｓ025遺構実測図

Ｓ138

Ｃ－5区に位置する。ほぼ円形の土坑で土師皿、瓦質土器、砂目積のある肥前系陶器が出土。

Ｓ140

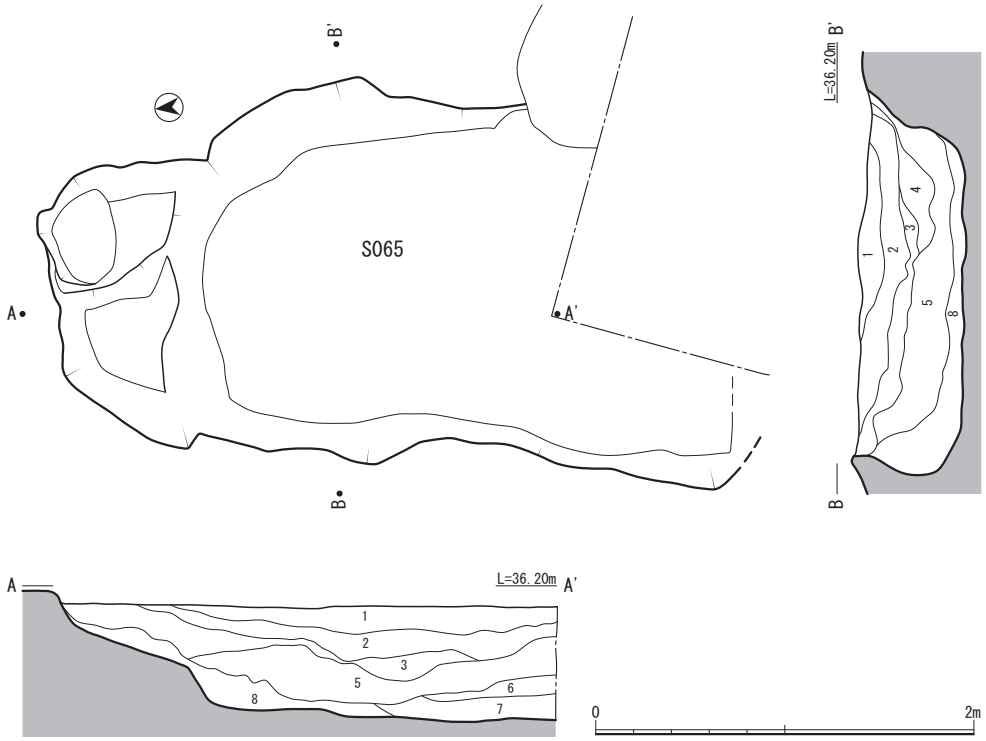
Ｄ－7区に位置する。東西に軸をとる大型の土坑で、中央部に撹乱を受ける。土師皿、瓦質土器、陶染付が出土。

Ｓ143(第33図)

Ｄ－6区に位置する。Ｓ238、Ｓ236と重複し、同遺構を切る。Ｓ144との切りあいは不明。南北軸210cm、東西軸125cmの隅丸長方形の土坑で、深さは水準線より40cm。底部が平坦になる遺構で、墓坑の可能性もある。埋土は2つに分層できる。

Ｓ144(第33図)

Ｄ－6区に位置する。Ｓ240と重複し、同遺構を切る。Ｓ143との切りあいは不明。南北軸200cm、東西



S065

1層 暗褐色土	粘質の暗褐色土に5～10mm大の橙色ロームの粒や軽石がまじる。固くしまる
2層 暗褐色土	1層より、黄褐色土のブロックが少なく、やわらかい。
3層 黒褐色土	キメの細かい粘質土でやわらかい。
4層 暗黄褐色土	黄褐色粘質土をベースに暗褐色土がマーブル状にまじる。
5層 黄褐色土	黄褐色粘質土に橙色土や黒褐色土のブロックがまじり、しまる
6層 黄褐色土＋暗褐色土	両者がほぼ同じ割合でまじり、やわらかい。
7層 橙色土＋暗褐色土	橙色ロームをベースに暗褐色土が層状にはいる。
8層 暗黄褐色土＋黒褐色土	10～20cm大のかたい暗黄褐色土のブロックにやわらかい黒褐色土が層状にはいる。

第30図　Ｓ065遺構実測図

軸100cmの隅丸長方形の土坑で、深さは水準線より70cm。北隅底部直上には2～30cm大の角礫が数個ある。底部が平坦になる遺構で、墓坑の可能性もある。埋土は5つに分層ができ、南側でＳ240、北側でＳ236の柱穴を切る。底面には30cm大の礫がある。

Ｓ151(第34図)

Ｅ－6区に位置する。ほぼ円形の土坑で南北軸1.6cm、東西軸1.5cm。深さは水準線より75cmで南西隅にテラス状の段差がある。埋土は2つに分層できる。

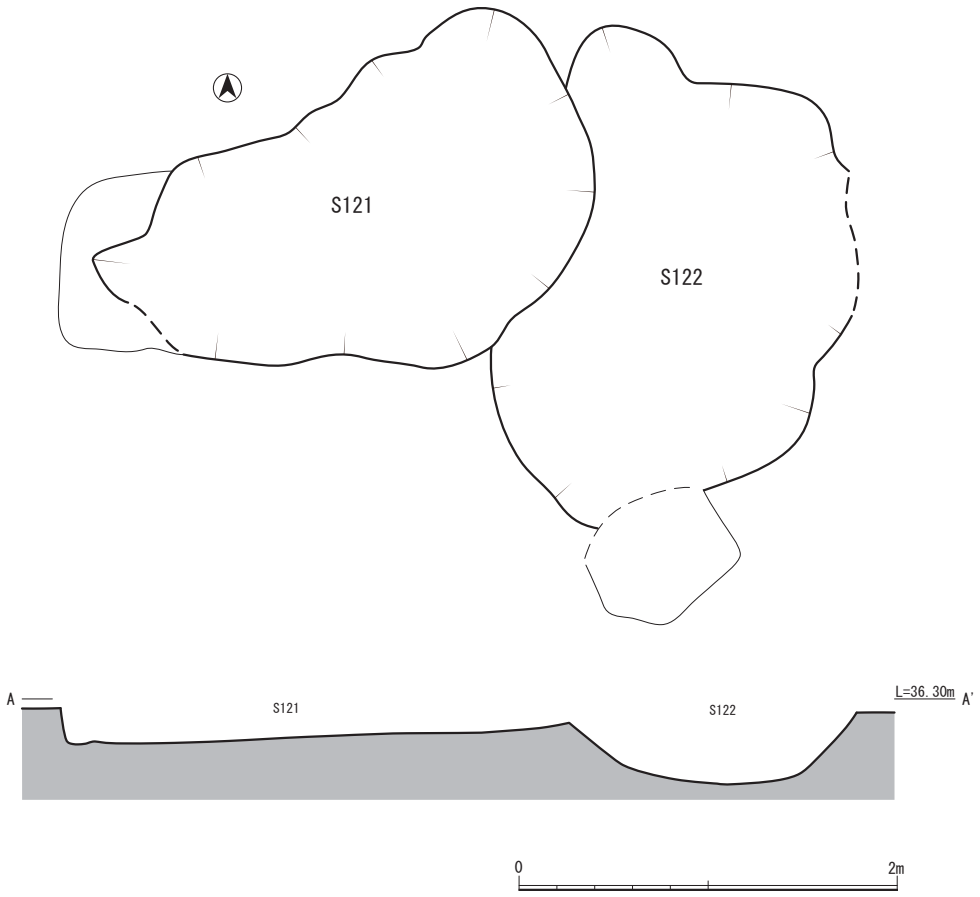
Ｓ162

Ｅ－7区に位置する。南北に軸をとる大型の土坑で、Ｓ148に切られる。輸入染付皿、古唐津、砂目積のある肥前系陶器が出土。

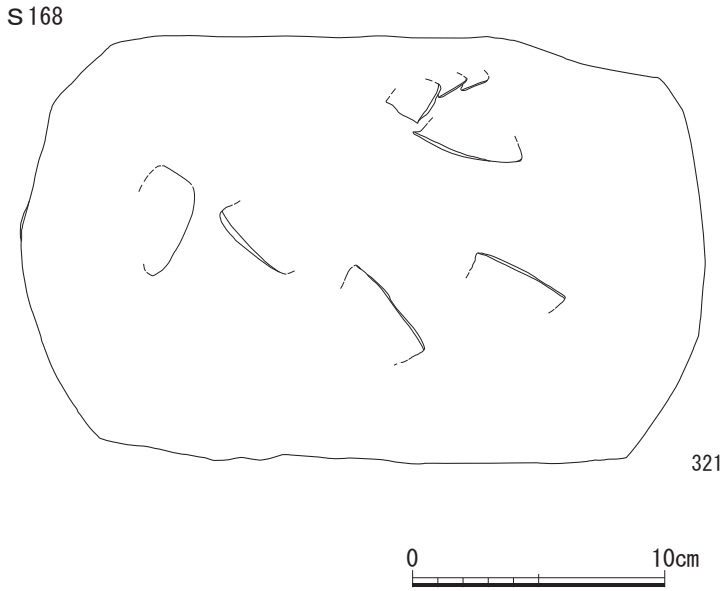
Ｓ172

Ｅ－7区に位置する。東西に軸をとる土坑で、Ｓ009に切られる。輸入染付皿、灰釉溝縁皿が出土。

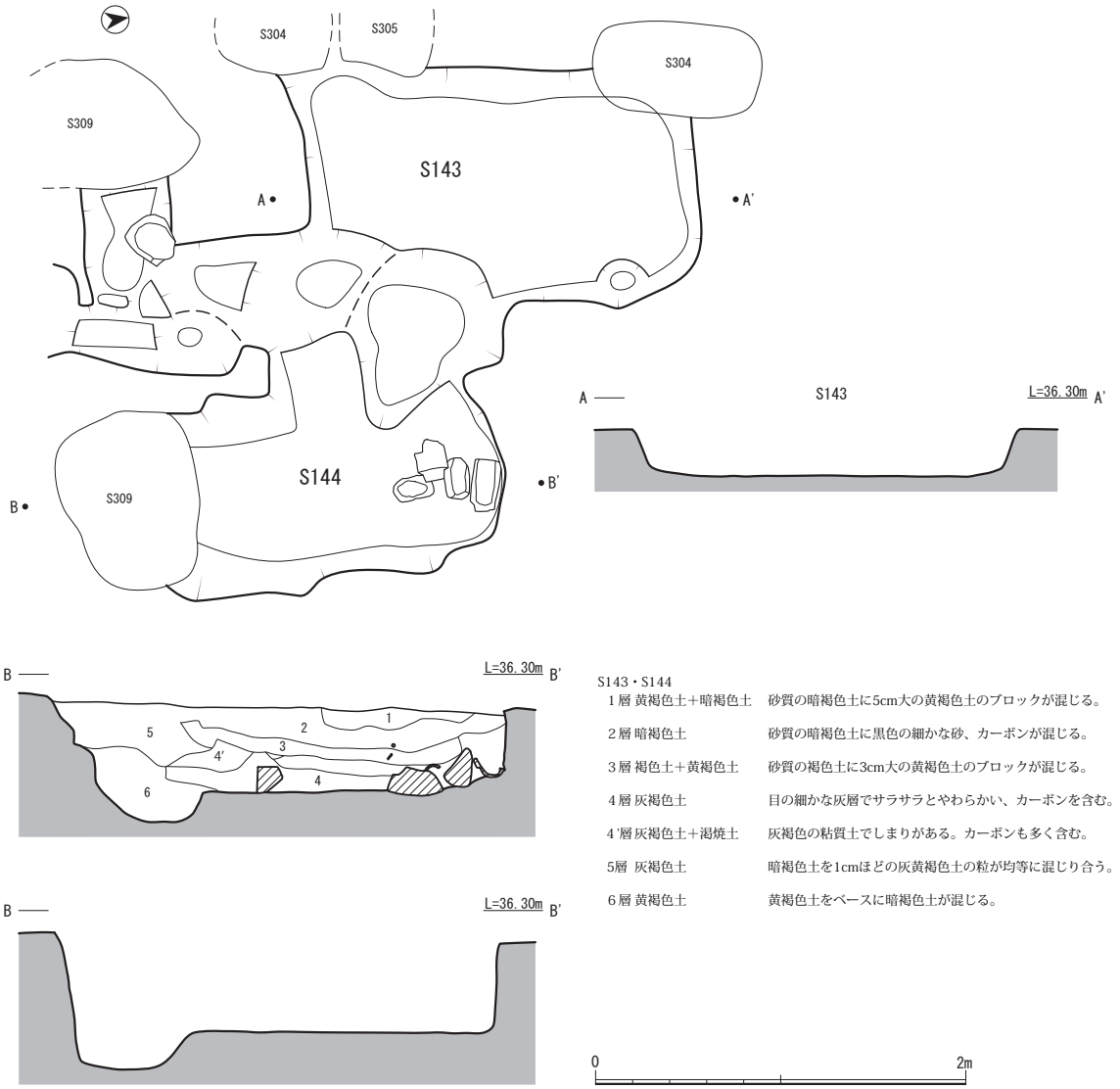
Ｇ－3区に位置する。遺構保存のために検出のみに留めたが遺物よりこの時期の可能性がある。



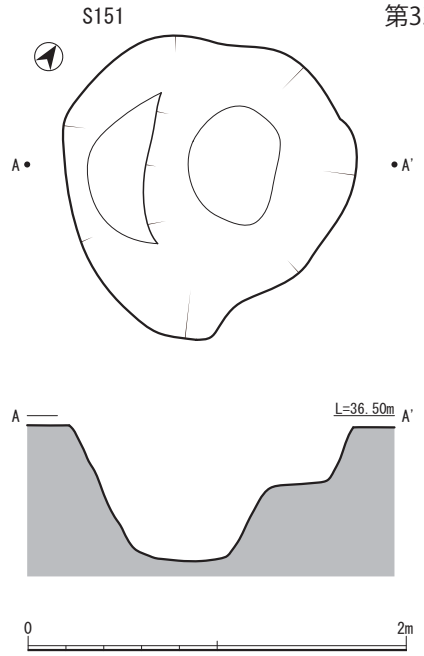
第31図　Ｓ121・Ｓ122遺構実測図



第32図　Ｓ168出土遺物実測図



第33図　Ｓ143・Ｓ144遺構実測図

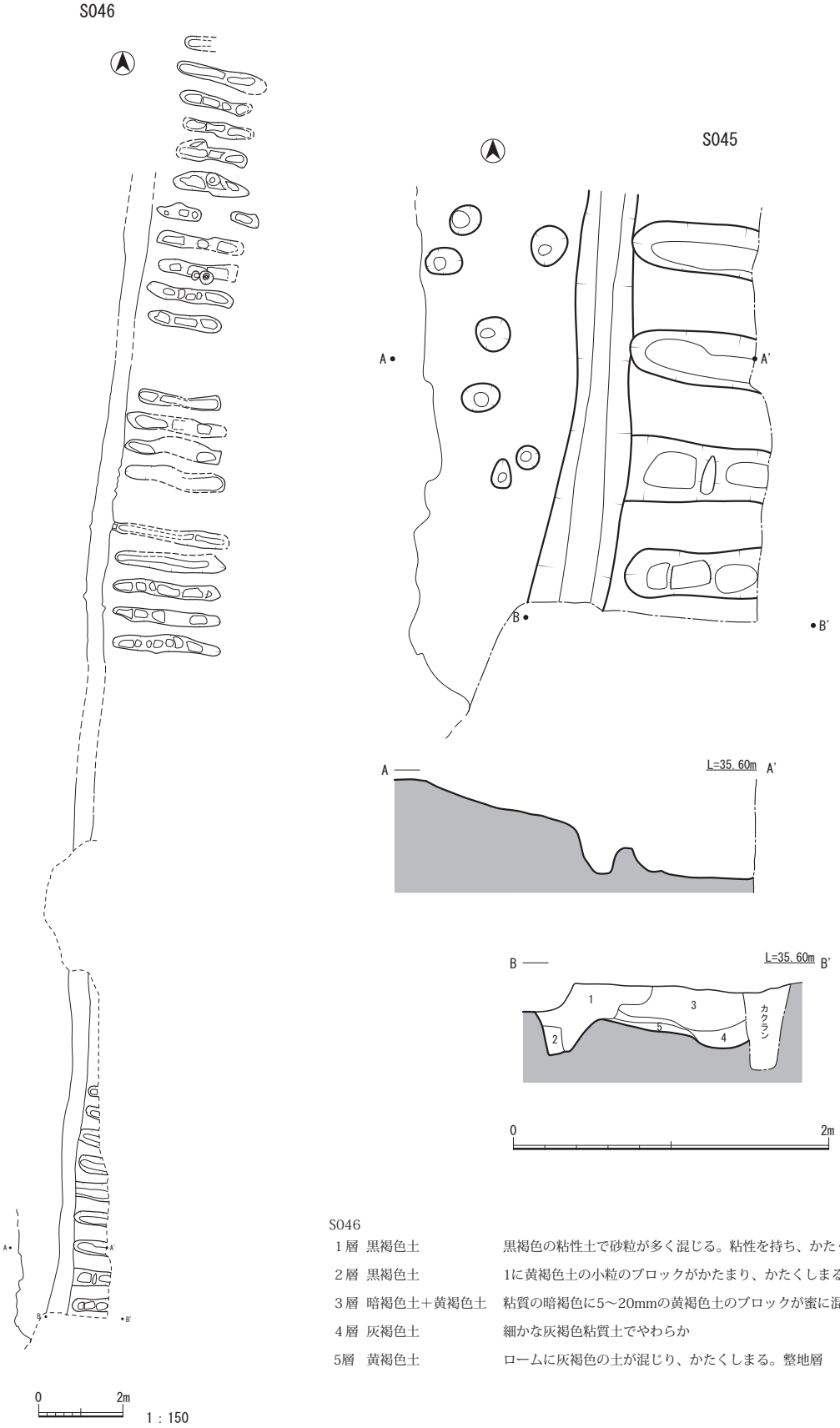


第34図　Ｓ151遺構実測図

２　道路

Ｓ046(第35図)

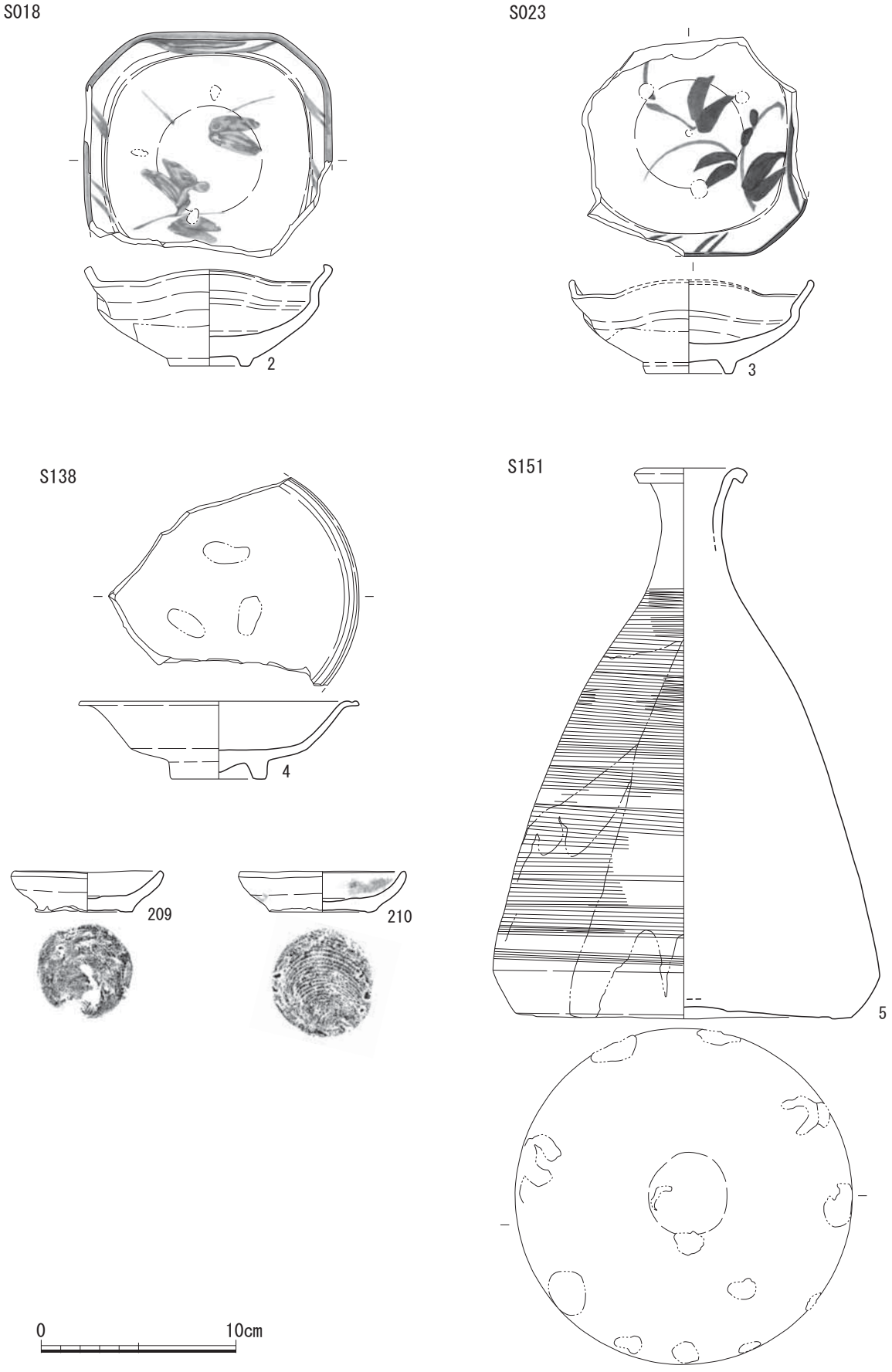
Ｆ、Ｇ－5～8まで続く遺構で、南より北へかけて傾斜を上げていく。Ｓ164と並行する。路面には規則的に横断する形で溝が穿ってある。溝の規格は、路面上20～30cm間隔で、幅は約30cmである。長さ180～260cmの路面を横断する形で掘ってあり、深さは10cmほどであるが、掘り方はまちまちで、底面は一定にならない。溝には細かな砂質土が小さな砂利と共に埋め込んである。固く締まっているため、粘性のある土を混ぜて固く突き固めてあるものと思われる。Ｆ、Ｇ－7、8区では撹乱によって破壊されており、Ｆ、Ｇ－5区より北では標高が上がり、後世に削平されたものと思われる。



S046

１層	黒褐色土	黒褐色の粘性土で砂粒が多く混じる。粘性を持ち、かたくしまる。
２層	黒褐色土	1に黄褐色土の小粒のブロックがかたまり、かたくしまる。
３層	暗褐色土＋黄褐色土	粘質の暗褐色に5～20mmの黄褐色土のブロックが蜜に混じる。
４層	灰褐色土	細かな灰褐色粘質土でやわらか
5層	黄褐色土	ロームに灰褐色の土が混じり、かたくしまる。整地層

第35図　Ｓ046遺構実測図



第36図　Ｓ018・Ｓ023・Ｓ138・Ｓ151出土遺物実測図

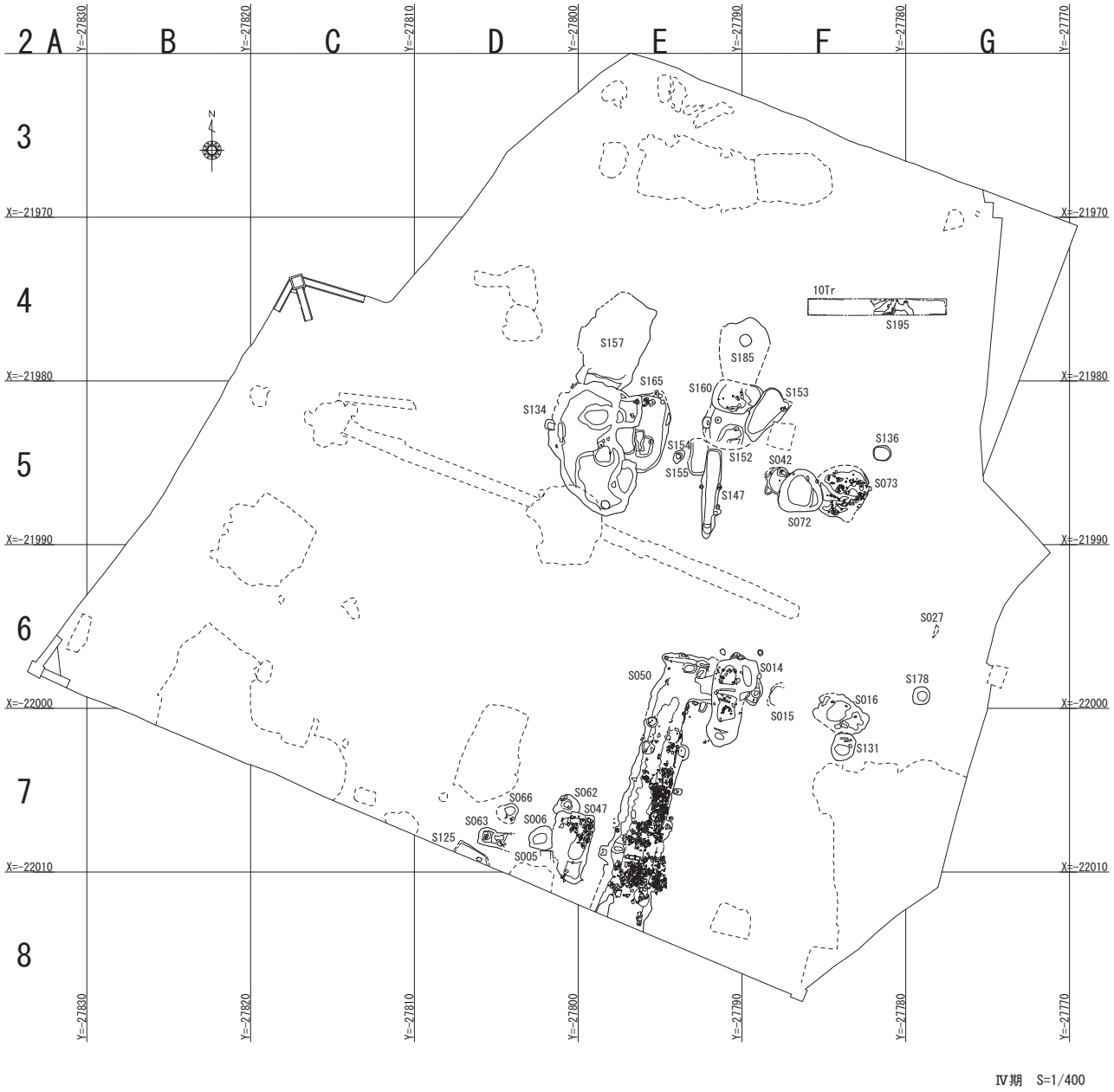
第3表　陶磁器・土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	産地	出土位置		部位	法量 (cm)				外器面
					遺構	グリッド		口径	底径	器高	高台高	
25	1	染付	碗	中国 景徳鎮	S 143		口縁～底部	(12.0)	(5.1)	5.4	0.9	-
36	2	陶器	皿	肥前	S 018		口縁～底部	12.7	4.1	5.2	0.4	一部ｹｽﾞﾘ
36	3	陶器	皿	肥前	S 023		口縁～底部	(12.55)	4.4	4.8	0.6	ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ
36	4	陶器	皿	肥前	S 138		口縁～底部	(14.4)	5.0	4.0	0.9	-
36	5	陶器	瓶		S 151		口縁～底部	(5.8)	17.3	28.3	-	ｶｷﾒ
25	204	土師器	小皿	-	S 055		口縁～底部	7.8	5.5	2.0	-	回転ﾅﾃﾞ
25	205	土師器	小皿	-	S 055		口縁～底部	10.3	6.7	2.5	-	回転ﾅﾃﾞ
25	206	土師器	坏	-	S 055		口縁～底部	12.25	9.6	3.2	-	回転ﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ
25	207	瓦質土器	鉢	-	S 055		口縁～底部	(22.7)	(17.2)	4.9	-	回転ﾅﾃﾞ
25	208	瓦質土器	皿	-	S 132		口縁～底部	(13.7)	7.0	2.7	-	回転ﾅﾃﾞ
36	209	土師器	小皿	-	S 151		口縁～底部	7.8	5.0	2.1	-	ﾅﾃﾞ
36	210	土師器	小皿	-	S 151		口縁～底部	8.6	5.5	2.1	-	回転ﾅﾃﾞ 後ﾅﾃﾞ

調整			色調		備考	写真図版
外底面	内器面	内底面	胎土	釉		
釉の掻き取り	-	-	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	ﾌﾛｽﾃｨｸﾞﾚｲ	内外面に貫入有　16C	PL.23
ｹｽﾞﾘ ﾅﾃﾞ上げ	-	見込みに目跡	れんが色	ｵﾘｰﾌﾞﾄﾞﾗﾌﾞ～ ﾗｾｯﾄｺﾞｰﾙﾄﾞ	内外面共に細かく貫入有 釉が厚い部分など部分的に白色化する 高台最終調整のﾅﾃﾞを施す 絵唐津　鉄絵 (草文)　1590-1610 年代	PL.23
ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	-	-	ｷｬﾒﾙ	ｵﾘｰﾌﾞﾄﾞﾗﾌﾞ～ 鳶色	見込み足付ハマ痕有 内外面細かい貫入有　鉄絵 (草文)	PL.23
釉の掻き取り	-	目跡 (3 ヶ所)	ｵｲｽﾀｰ	ｵｲｽﾀｰ	内面に貫入有　外面底部に付着物有	PL.23
板状圧痕	-	-	鳶色	焦茶	底部に目跡 13 ヶ所 外面に釉の掛け分け ?	PL.23
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	油煙付着　灯明皿	PL.52
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	油煙付着 灯明皿　器面が磨滅	-
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 5YR6/6	外底面に 1cm の石付着	-
-	工具痕	ﾊｹﾒ	灰白 2.5Y8/1	にぶい黄橙 10YR7/2		PL.49
切離し後ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	灰白 10YR7/1	灰白 10YR8/1		PL.52
糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6 ～ 6/6	橙 7.5YR7/6	灯明皿	-
糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	煤付着　灯明皿	PL.52

S 046 道路遺構検出状況

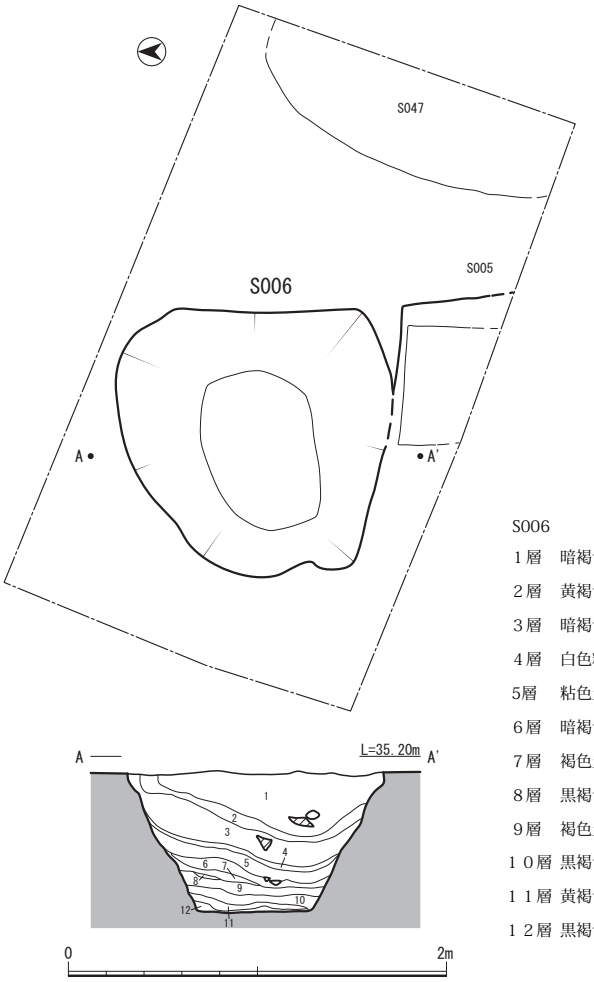
第4節　細川期の遺構（Ⅳ期）



第37図　Ⅳ期遺構配置図(1/400)

1632（寛永9）年、加藤氏の廃絶とともに細川忠利が新城主として熊本城に入城した。以後、明治の世になるまで細川氏の支配が続くのであるが、調査地は家老松井氏の下屋敷があり、幕末まで続いたようである。この時期にあたる遺構をⅣ、Ⅴ、Ⅵ期の3つの時期に分けて記述を行う。すなわちⅣ期17世紀前葉～後葉にかけての時期、Ⅴ期は18世紀前葉～後葉にかけての時期、Ⅵ期は19世紀前葉～中葉にかけてである。

主に土坑が主であるが、Ⅳ期のものが25基、Ⅴ期のものが44基、Ⅵ期のものが39基で、Ⅳ期には道路が1条ある。



S006

１層	暗褐色土	礫‐砂粒が混じり粗い。カーボン含む。
２層	黄褐色土	ロームを基調に黒褐色土が混じり含む。
３層	暗褐色土	礫、砂粒が混じり粗い。
４層	白色粘土層	パラパラと分散する粘土状のものが薄く入る。
5層	粘色土＋暗褐色土	暗褐色土を基調にロームが混じる。
６層	暗褐色土	混じりが少なくフカフカと軟らかい。
７層	褐色土＋暗褐色土	ロームの割合が多い。
８層	黒褐色土	
９層	褐色土	ロームを基調に黒褐色土が混じる。
１０層	黒褐色土	フカフカとやわらかい土にロームが少々混じる。
１１層	黄褐色土	ロームを基調に黒褐色土が混じり込む。
１２層	黒褐色土	粘性を持ちやわらかい。

第38図　Ｓ006遺構実測図

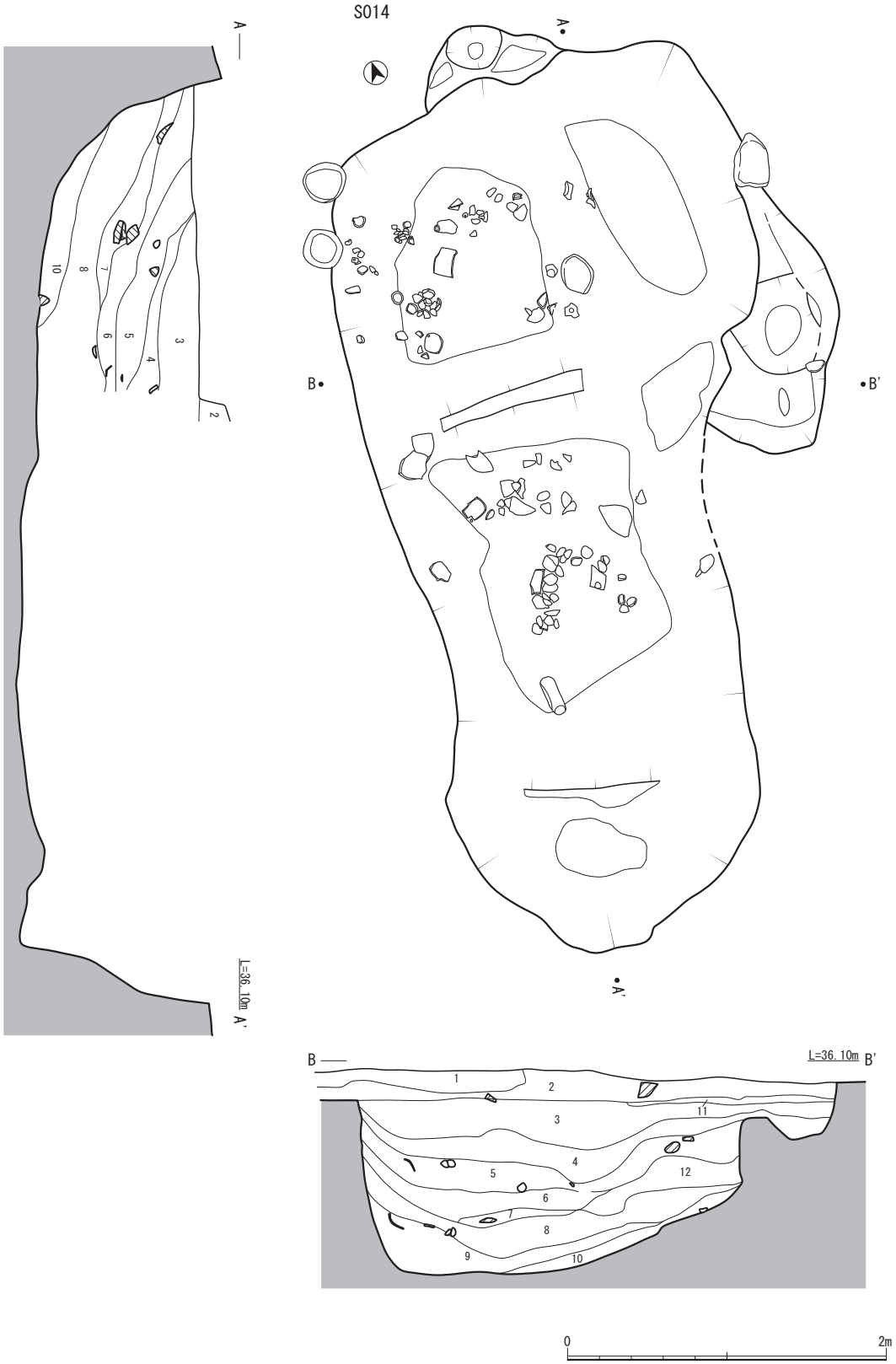
1　土坑

Ｓ005(第38図)

Ｄ－7区に位置する。調査区南側は黒い土に覆われており、土層の堆積状況を確認するために掘ったトレンチ5内より検出した遺構である。接するＳ006を切っている。トレンチを掘りきることで全体のプランは不明となったが、方形の土坑と思われる。

Ｓ006(第38図)

Ｄ－7区に位置する。Ｓ005と同じくトレンチ5内より検出した土坑。Ｓ005に切られる。検出面で南北軸145cm、東西軸140cmのほぼ円形の土坑で、深さは水準線より85cm。



第39図　Ｓ014遺構実測図

Ｓ014(第39図)

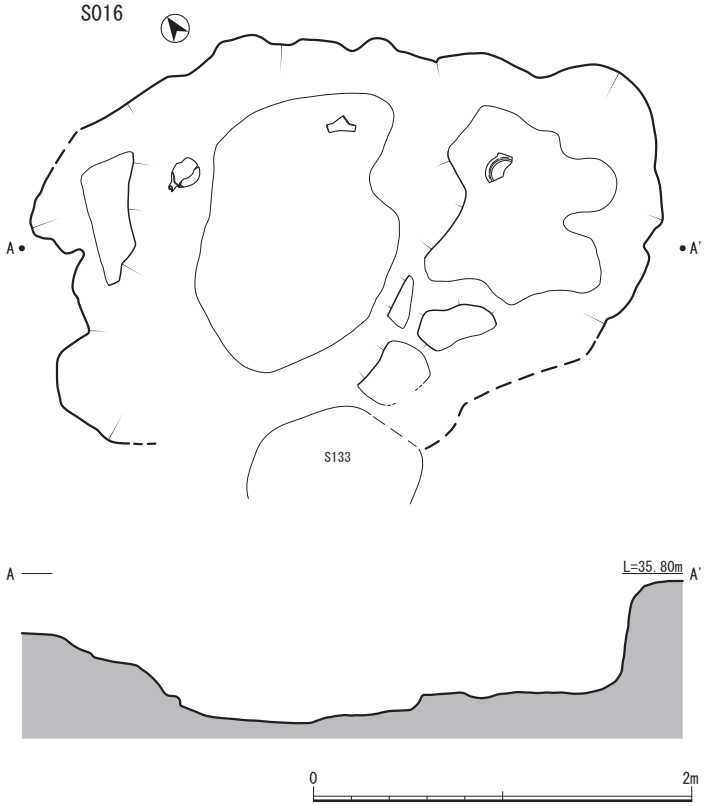
Ｅ、Ｆ－6、7区に位置する。南北軸570cm、東西軸250cmの土坑で、深さは水準線より135cm。道路遺構であるＳ009を切っている。大型の土坑で、陶磁器などの大量の遺物と共に貝殻や魚骨、鳥獣類の骨など

S014

1層	暗褐色土	暗褐色土をベースに2層のロームがブロックで混じる。カーボンを含み、よくしまっている。(近代の整地層)
2層	灰白色粘質土	灰白色土をベースに橙色粘質土や暗褐色土が混じる。(近代の整地層)
3層	暗褐色土	砂質の暗褐色土に10～50mm大の砂利、カーボンが混じる。砂質でジャリジャリとしている。
4層	暗褐色土	3層に似るがカーボンを多く含み、やわらかい。
5層	暗褐色土	5mm大の砂粒を中心としており、まとまりがなく、やわらかい。貝を多く含む。
6層	暗褐色土	暗褐色土をベースにカーボンと貝を夥しく含む。
7層	暗褐色土	砂質でやわらかく、まとまりがない。
8層	暗褐色土	カーボンやロームのブロックが混じり、粘性を持つ。
9層	暗褐色土	粘性を持った暗褐色土をベースに砂粒が混じるがやや少ない。上面には貝層あり。
10層	暗褐色土＋黄褐色土	大きな黄褐色土のブロックが混じる。
11層	黄褐色土	黄褐色粘質土をベースに暗褐色土の5mmぐらいの粒が混じる。
12層	黄褐色土	純粋で大きなブロックで混じったもの。

S 006　土層断面　東より

S 014　出土遺物状況　北より



第40図　Ｓ016遺構実測図

も出土した。規模・規格より地下式倉庫と思われるが、埋土は消臭目的と思われる炭が互層となっており、最終形態は、廃棄用土坑と思われる。

Ｓ015

Ｆ－6区に位置する。Ｓ014に切られる。残存部分で南北軸140cm、東西軸70cm。深さは水準線より50cm。

Ｓ016(第40図)

Ｆ－6、7区に位置する。Ｓ131に切られる。Ｓ046を切る。東西軸300cm、南北軸220cmの土坑で、深さは水準線より80cm。

Ｓ042(第41図)

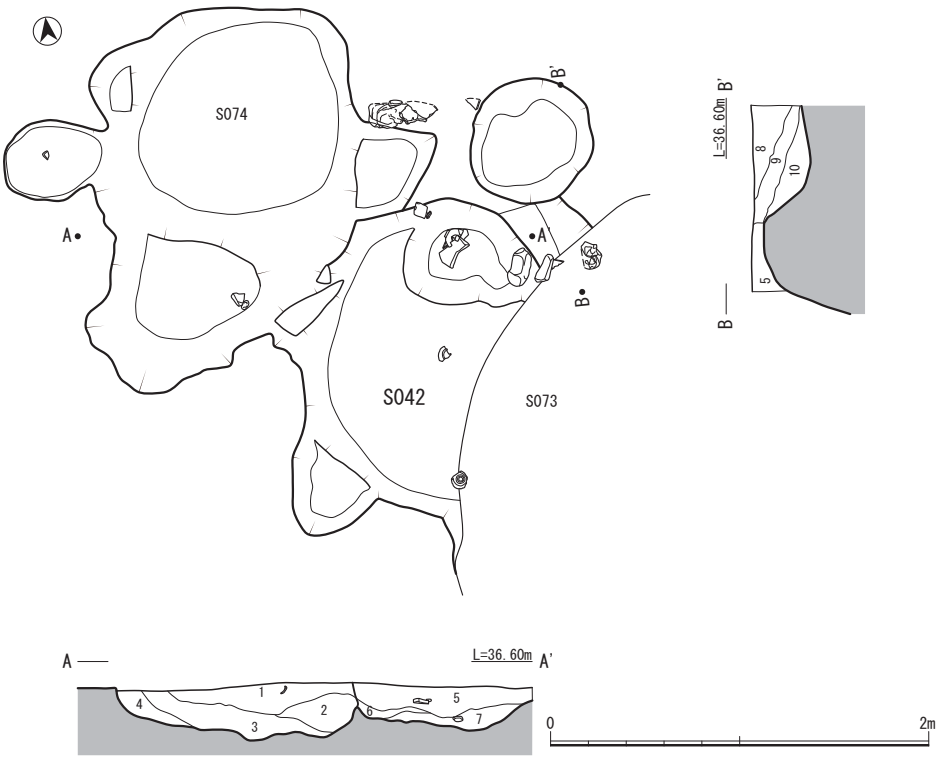
Ｆ－5区に位置する。Ｓ073に切られる。ほぼ円形の土坑と思われるが残存部で東西軸90cm、南北軸160cmの土坑で、深さは水準線より35cm。

Ｓ047(第42図)

Ｄ、Ｅ－7区に位置する。逆Ｌ字型をなす不定形土坑で南北軸420cm、東西軸170cmである。北側は西方向にクランクをして伸び、東西軸は2.4mになる。多くの遺物が出土し、遺構底面付近より金箔の漆皿の破片が出土した。規模・規格より地下式倉庫と思われるが、埋土は炭が互層となっており、廃棄用土坑と思われる。

Ｓ062(第43図)

Ｄ－7区に位置する。接するＳ047に切られる。残存するところで南北軸110cm、東西軸140cmのほぼ円形の土坑で、深さは水準線より70cm。底面の中央部に一段の窪みがある。



S042

1層　暗褐色土	砂質の暗褐色土に１cm大の黄褐色土のブロックがまじる。
2層　黒褐色土	砂質でザラザラしており礫が混じる。
3層　黒褐色土	2層より砂粒が大きく、ザラザラしている。
4層　黄褐色土＋褐色土	
5層　暗褐色土	砂質土でザラザラとし、やわらかい。
6層　暗褐色土＋暗黄褐色土	5層に1cmほどの暗黄褐色土のブロックが混じる。
7層　暗褐色土＋暗黄褐色土	暗黄褐色土の割合が高く、5mmほどのブロックで混じりあう。
8層　暗褐色土	粘質の暗褐色土に1cm大の黄褐色土のブロックが混じる。
9層　黄褐色土	黄褐色粘質土をベースに暗褐色土が混じる。
10層 暗褐色土	暗黄褐色土に1cmほどの暗黄褐色土ブロックが混じり、やわらかい。

第41図　Ｓ042遺構実測図

Ｓ063(第44図)

Ｄ－7区に位置する。Ｓ120に切られ、Ⅱ期隈本城時代の遺構であるＳ241の柱穴を切る。現存するところで南北軸100cm、東西軸110cmの土坑で、深さは水準線より55cm。

Ｓ066

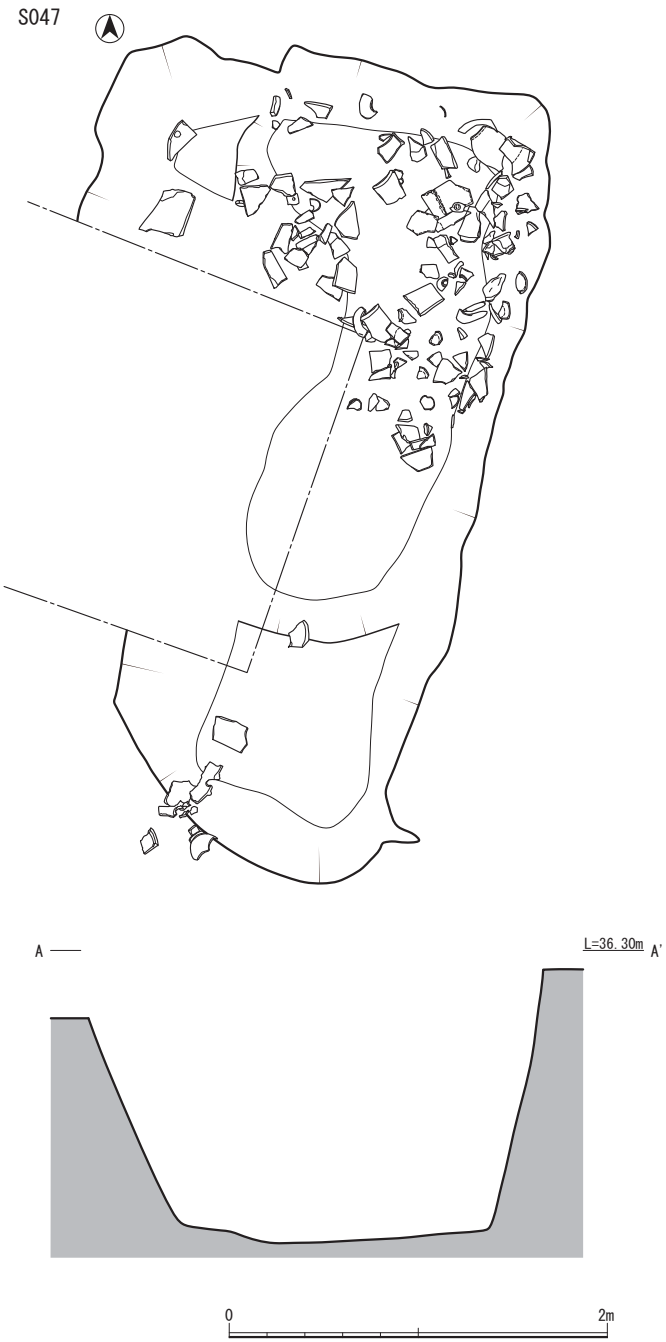
Ｄ－7区に位置する。Ｓ064、Ｓ078と接するが、切り合いは不明。南北軸100cm、東西軸90cmのほぼ円形の土坑で、深さは水準線より50cm。

Ｓ072(第45図)

Ｆ－5区に位置する。Ｓ042、Ｓ073と接し、いずれも切っている。南北軸260cm、東西軸260cmのほぼ円形の土坑で、深さは水準線より80cm。

Ｓ073(第46図)

Ｆ－5区に位置する。Ｓ072に切られる。南北軸320cm、東西軸320cmのほぼ円形の土坑で、深さは水準線より85cm。陶磁器などの多くの遺物と共に炭層が互層となって堆積しており、廃棄土坑として利用されたものと思われる。



第42図　Ｓ047遺構実測図

Ｓ125(第47図)

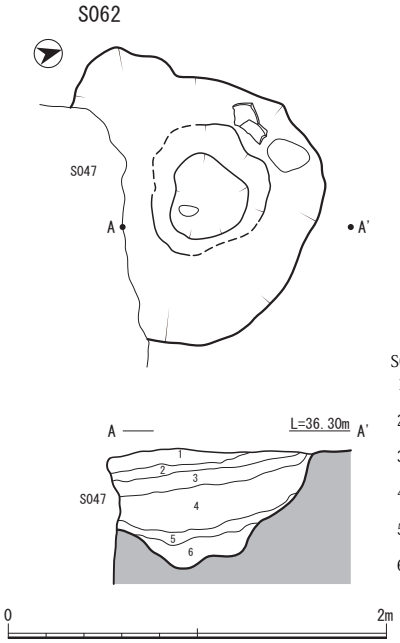
Ｄ－7区に位置する。Ｓ124に切られる。確認面で南北軸80cm、東西軸210cmの方形の土坑で、深さは水準線より35cm。底面はほぼ平坦である。埋土は脆い暗褐色土。

Ｓ131(第48図)

Ｆ－6区に位置する。Ｓ016と接する。南北軸175cm、東西軸140cmのほぼ円形の土坑で、深さは水準線より95cm。北側の掘り方は緩やかな傾斜を持つ。埋土は5つに分層できる。細やかな砂質土が堆積し、炭が混じる。

Ｓ134(第49図)

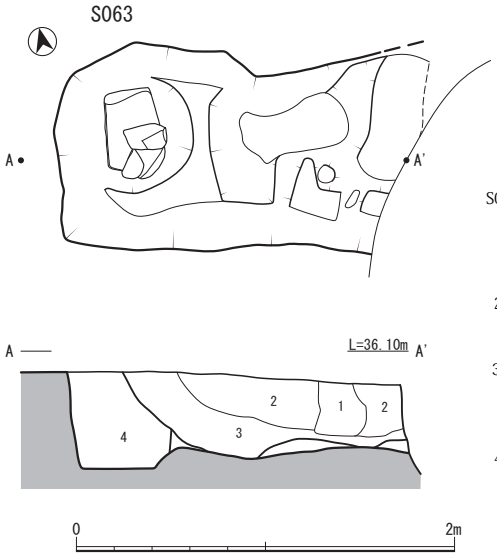
Ｄ、Ｅ－5区に位置する。Ｓ016と接する。南北軸760cm、東西軸700cmの大型土坑。東側にテラス状の



S062

1層	暗褐色土＋明橙色土	細かな暗褐色土に5～10cm大の礫や石などがまじり固くしまる。
2層	褐色土	砂質土で目がつまり、しまりがある。（細かな砂質土）
3層	褐色土	2層の土に3～5cm大の軽石の粒、カーボンの粒などが混じる。
4層	暗褐色土	目の粗い砂質土で、5cm大の軽石や、カーボン、砂などが混じりザラザラとしている。
5層	褐色土	砂質の褐色土に黄褐色ロームが層状にまじりこむ。少しやわらか
6層	黄褐色土	黄褐色粘質土を基本に褐色土が混じり込む。粘性をもちしまりがある。

第43図　Ｓ062遺構実測図



S063

1層　極暗褐色＋粘性土
粒度は基本的には細かいのであるが、ところどころ5mmほどの砂粒がまじる。
土質は軟らかく、1cmほどのピンク色のロームが点々とまじる。
カーボンや遺物等はまじっていない。粘性は強く湿っている。

2層　淡極暗褐色＋弱粘性土
粒度は1層より精確。砂礫等の混入も微量である。土質は1層より軟らかく、
カーボンが微量にまじる。粘性水分保湿度は1層よりも弱いが1層よるも固くしまる。

3層（褐色＋暗褐色）＋弱粘性土
土色は褐色が混じるかと思えば、淡い暗褐色も混じる。粒度は2層より精確。
肉眼で確認できる砂粒等の礫の混入はない。土質は2層よりも弱冠、硬い。
灰褐色の1cm大のロームがまれにまじる。粘性、水分保湿度は2層より弱い。

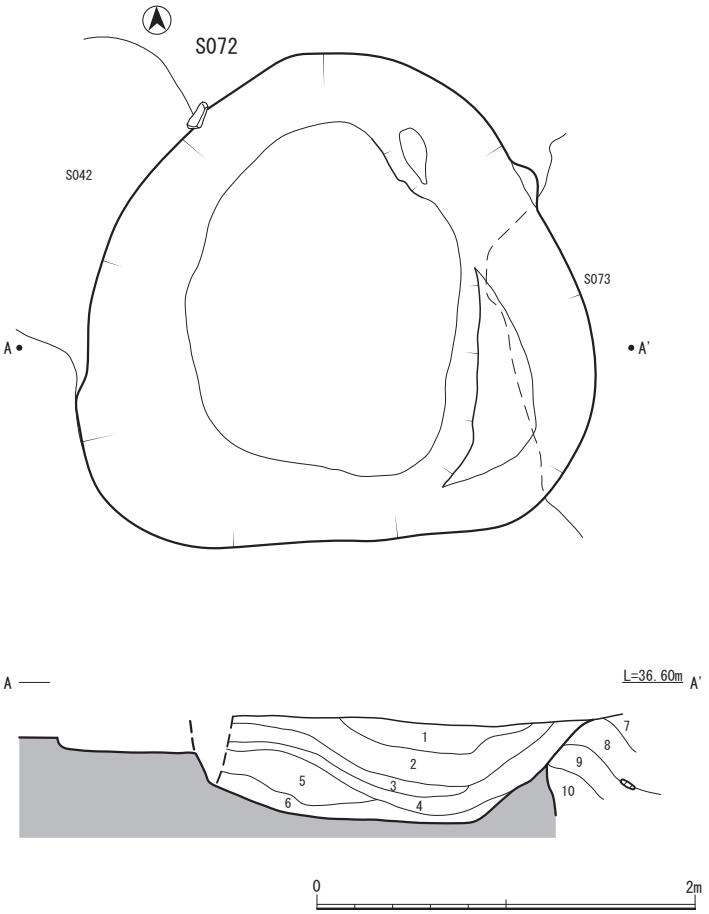
4層　極暗褐色＋ロームまじり土
粒度は2層より精確、3層より粗い。2cm大のパミスの固まりが微量に混じり
ピンクと褐色のロームが多くまじる。カーボンが微量に混入する。
土質は3層よりやや硬い。粘性、水分保湿度は3層よりやや強い

第44図　Ｓ063遺構実測図

平坦面を持ち、水準線からの深さは95cm。底辺部は中央部に東側から張り出した稜を境に北側と南側で段差がある。北側、南側の深さはそれぞれ水準線より170cm、190cm。北側、南側にはそれぞれの東側壁面にテラス状の小段差があり、大型の地下式倉庫と思われる。遺構の最終形態は廃棄用土坑となったものと思われ、土層の観察より、最初に北側よりが自然堆積で埋まった後に一気に埋められ、整地されたものと推測される。出土する遺物は大量で、多彩であり、大皿や茶器類など奢侈的な遺物が多い。

Ｓ136

Ｆ－5区に位置する。ほぼ円形の土坑で、肥前系陶器の染付や青磁、阿蘭陀と思われる彩色陶器が出土している。



S072

1層	暗褐色土	粘質の暗褐色土に黄褐色のロームの粒（カーボン粒）が混じり、しまりがある。
2層	暗褐色土＋黄褐色土	カーボンが層状に挟まり、フカフカとやわらかい。2～10 cmのロームのブロックが入る。
3層	暗褐色土	10～20cm大の黄褐色のロームにカーボンが層状に挟まる、フカフカとやわらかい。
4層	黒褐色土	目の細かな粘質土でブロックを作りながら、バラバラと堆積する。
5層	黒褐色土＋黄褐色土	黒褐色土に1～5cmの黄褐色土が稀に混じる。土質はやわらかい。
6層	暗褐色土＋黄褐色土	暗褐色土と黄褐色土のブロックが半々の割合で混じり合う。
7層	暗褐色土	砂質土でロームのブロックやカーボンが混じる。よくしまっている。
8層	暗褐色土	7にカーボンが著しく混じる。
9層	暗褐色土＋橙色粘質土	砂質の暗褐色土に10ｃｍ大のロームのブロックが入る。
10層	褐色土	やや粘性を帯び、カーボンや灰褐色の粘性土が混じる。

第45図　Ｓ072遺構実測図

Ｓ147(第50図)

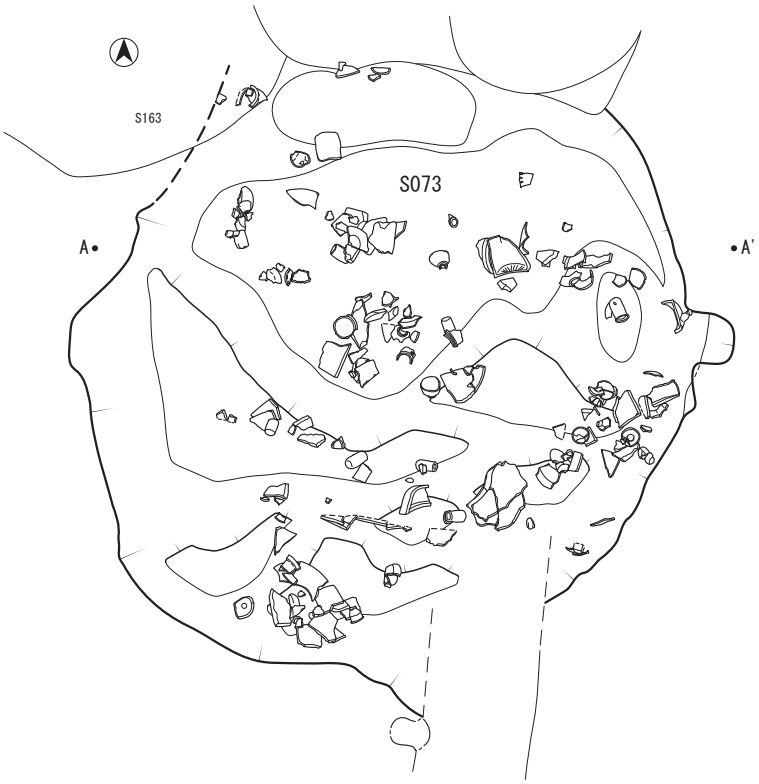
Ｅ－5区に位置する。Ｓ155を切り、Ｓ142に切られる。南北軸550cm、東西軸105cmの溝状の土坑で、深さは水準線より90cm。底面は平坦。

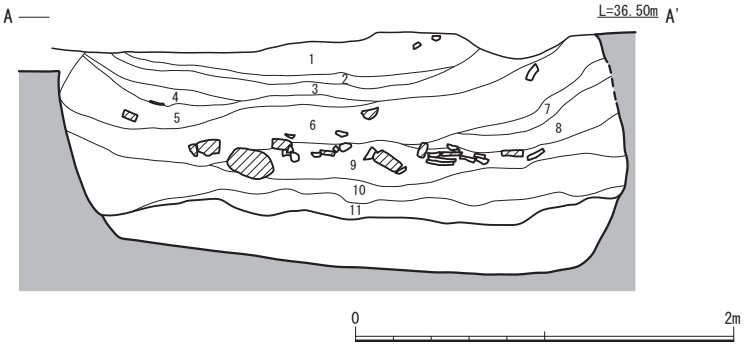
Ｓ152(第51図)

Ｅ、Ｆ－5区に位置する。Ｓ153、Ｓ160に切られる。確認面で南北軸185cm、東西軸260cmの土坑で、深さは水準線より55cm。底面はほぼ平坦。埋土は2つに分層できる。

Ｓ153

Ｅ、Ｆ－5区に位置する。Ｓ152を切り、Ｓ160との切りあいは不明。南北軸320cm、東西軸170cmの土坑で、深さは水準線より95cm。底面はほぼ平坦。埋土は4つに分層ができる。

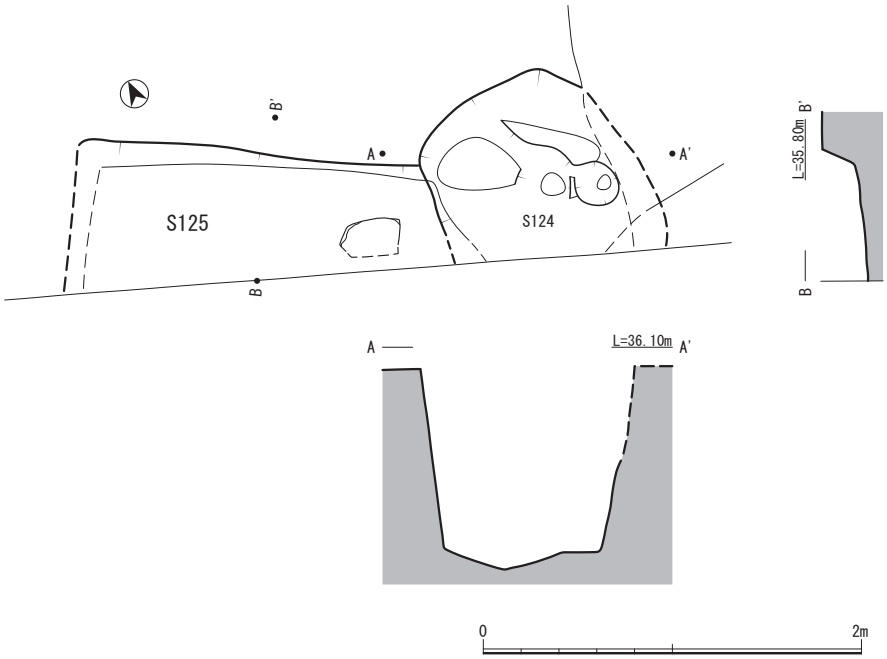




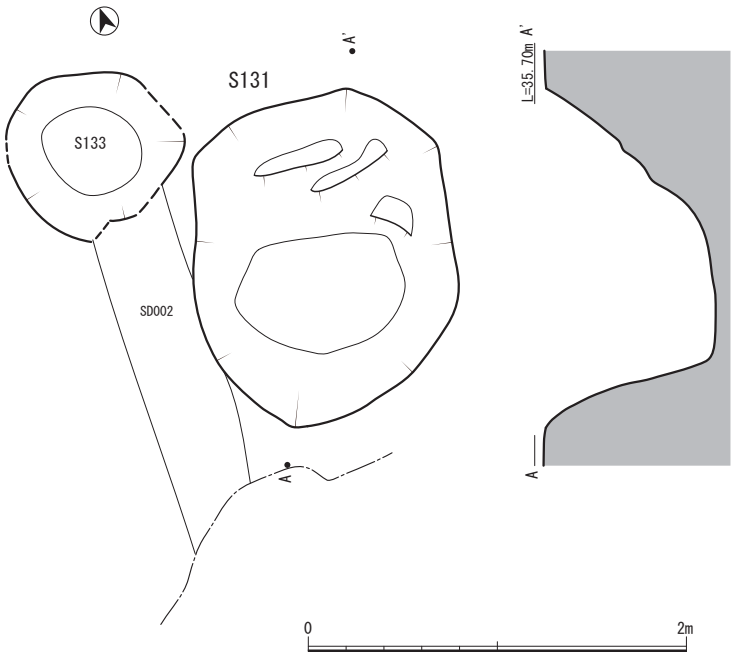
S073

1層	暗褐色土	暗褐色粘質土に5cm大の礫や砂粒が混じり、しまっている。カーボンも多く混じる。
2層	暗褐色土＋暗黄褐色土	1層の土に暗黄褐色土のブロックが混じり、しまっている。
3層	黒褐色土	砂粒の多い土でザラザラして混じり合いやわらかい。大きな炭のかたまりも混じる。
4層	褐色土	暗褐色土と黄褐色土が均等に混じり合い、やわらかい。
5層	暗褐色土	粘性を持ち1cm大の砂粒が多く混じる。暗黄褐色土も粒状にしばしば混じり、やわらかい。
6層	暗褐色土＋黄褐色土	粘性を持った暗褐色土に5cm大の暗黄褐色土のブロックが混じる。カーボンが夥しく混じる。
7層	暗黄褐色土＋暗褐色土	暗褐色土に暗黄褐色土のブロックが層状にまとまってある。
8層	黒褐色土	暗褐色土に１ｃｍ程の炭のブロックの層が夥しくまじる。
9層	暗褐色土	粘質でやわらかな土に１ｃｍ大の大きな砂粒が多くまじり、ザラザラしている。遺物を多く含む。
10層	暗褐色土	目の細かな粘質土で小さなブロックを作り、やわらかい。
11層	暗褐色土＋黄褐色土	10層に5～10ｃｍ大の暗黄褐色土のブロックを含む。

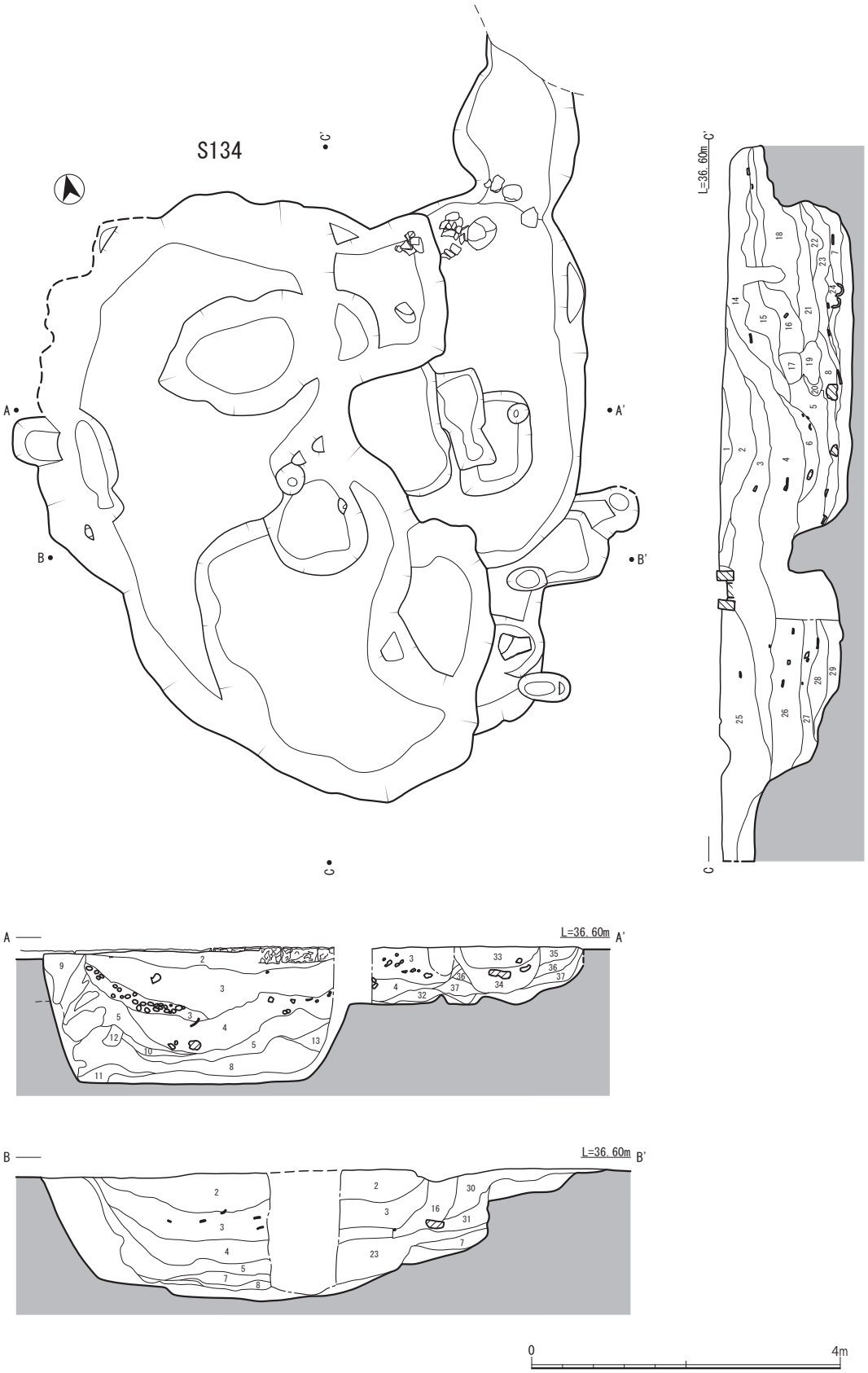
第46図　Ｓ073遺構実測図



第47図　Ｓ125遺構実測図



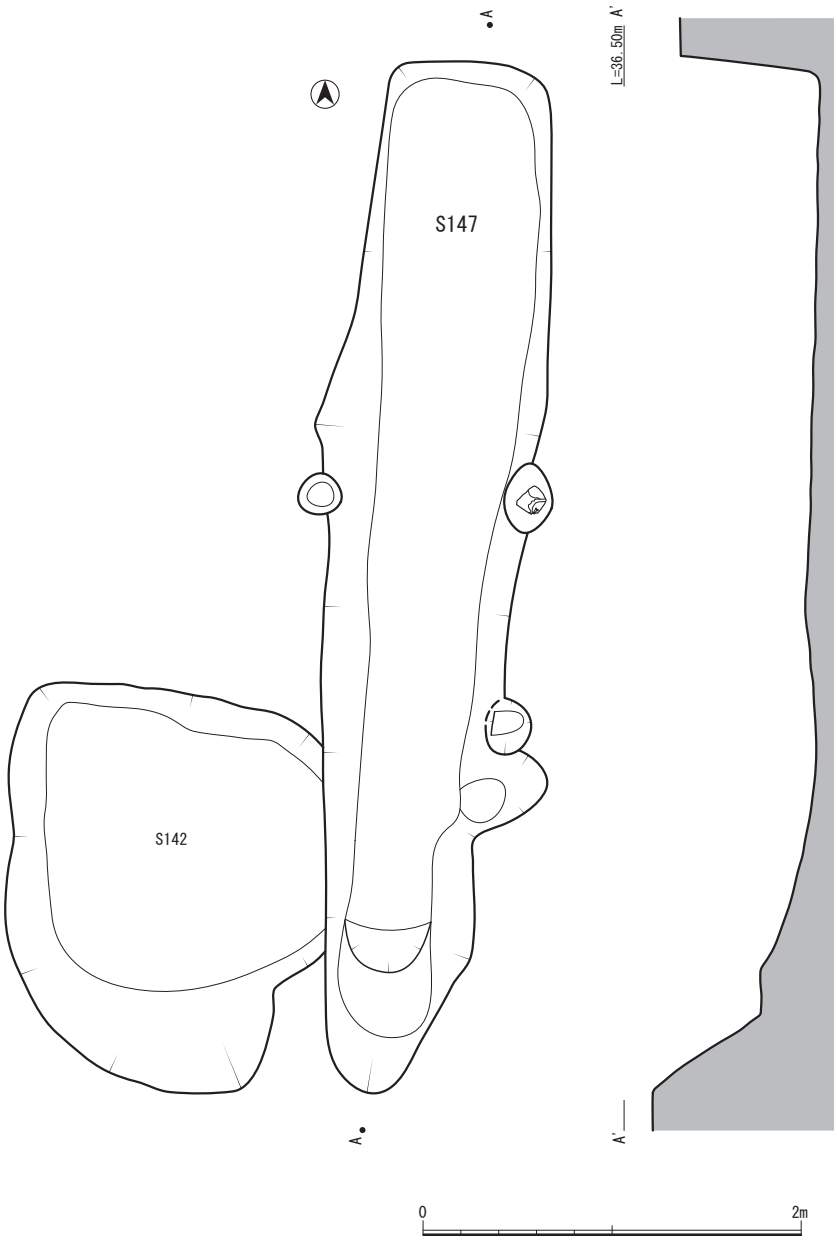
第48図　Ｓ131遺構実測図



第49図　Ｓ134遺構実測図

S134

1層	暗褐色土	砂質の暗褐色土でザラザラしてしまりがある。下層に黄褐色ロームの層ができる。
2層	暗褐色土	目の細かな暗褐色土で、橙色の５～10ｃｍ大のブロックがまじりしまっている。
3層	暗灰褐色土	やや砂の土でロームなどのまじりが少ない。カーボンや遺物が著しくまじる。
4層	灰褐色土	粘性があり、ブロックごとにまとまる。カーボンや土器が多くまじる。
5層	淡灰褐色土	粘性のキメの細かな土で鉄分の堆積が多い。地山側には黄褐色土のブロックがまじる。
6層	濃灰色粘質土	灰色の粘土で純粋な灰層が２層はいる。
7層	ロームまじりの土	橙色粘質土と暗褐色土ががまじり、かたくしまる。地山の崩落土
8層	暗褐色土	暗褐色粘質土でボロボロともろい
9層	淡褐色土	粘質の褐色土に黄褐色のロームがまじり込む。地山の崩落したさけ目に褐色土がまじり込んだもの
10層	淡黄褐色土	黄褐色土と褐色土の細かな粒がまじりあい、ザラザラとしている。
11層		８層に暗黄褐色土のブロックがまじり込んだもの。
12層		黒褐色土、灰褐色土がツートンに分かれ、固くしまっている。
13層	灰褐色砂質土	やや目が粗く、ザラザラとしているが、しまりがある。下層にロームのブロックの層がある。
14層	暗褐色土	粘質が５ｍｍ大の砂粒が多くまじり、しまっている。カーボンや鉄分がおくなる。
15層	灰暗褐色土	14層より灰包味がかり、砂分も多い。
16層	灰暗褐色土＋黄褐色土	15層に黄褐色土の、10～20ｃｍ大のブロックがはいる。
17層	灰暗褐色土	ボロボロで柱痕跡のような土質。
18層	灰褐色土	サラサラとした砂質土で鉄分が多くまじる。
19層		黄褐色土のブロック。
20層	灰褐色土	粘質の灰褐色土で１ｃｍほどのブロックにまとまる。鉄分多し。
21層	灰褐色土＋黄褐色土	20層に３～５ｃｍ大の黄褐色のブロックがまじる。
22層		21層の両者が均等にまじりあい淡い褐色となる。
23層	灰褐色土	１ｃｍ大の石粒がまじり、バラバラとしている。カーボンの層がある。
24層	淡黄褐色土	灰褐色土に黄褐色土がまじる。１cm大の石粒が多くバラバラとしている。
25層		２層に似る。橙色の３ｃｍ大のブロックがまじる。
26層	暗褐色土	粘質の暗褐色土にカーボンや橙色のロームのブロックがまじる。
27層	暗褐色土	26層よりロームのまじりが少ない。
28層	暗褐色土	27層よりロームのまじりが増え、しまりがある。
29層	黒褐色土	上面に橙色のロームのブロックが帯状に入る。粘質土。
30層	淡褐色土	目の細かな土でよくしまる。鉄分がまじる。
31層	淡褐色土＋黄褐色土	30層に黄褐色土のブロックがまじる。
32層	黄褐色土	ロームを基本に暗褐色土がまじる。
33層	暗褐色土＋橙色土	暗褐色土に橙色の5ｃｍほどのブロックがまじる。
34層	暗褐色土＋橙色土	33層より粒が細かく交じり合う。
35層	暗褐色土	粘質土でよくしまっている。
36層		粘質土で10cm大の橙色土のブロックがまじる。下層にはカーボン層あり
37層	淡褐色土	粘質でしまりがある。



第50図　Ｓ147遺構実測図

Ｓ154

Ｅ－5区に位置し、Ｓ155を切る。南北軸250cm、東西軸150cm。織部の破片が出土している。

Ｓ155

Ｅ－5区に位置し、Ｓ147、Ｓ154に切られ、Ｓ152を切る。検出面で南北軸190cm、東西軸110cm土坑。

Ｓ157

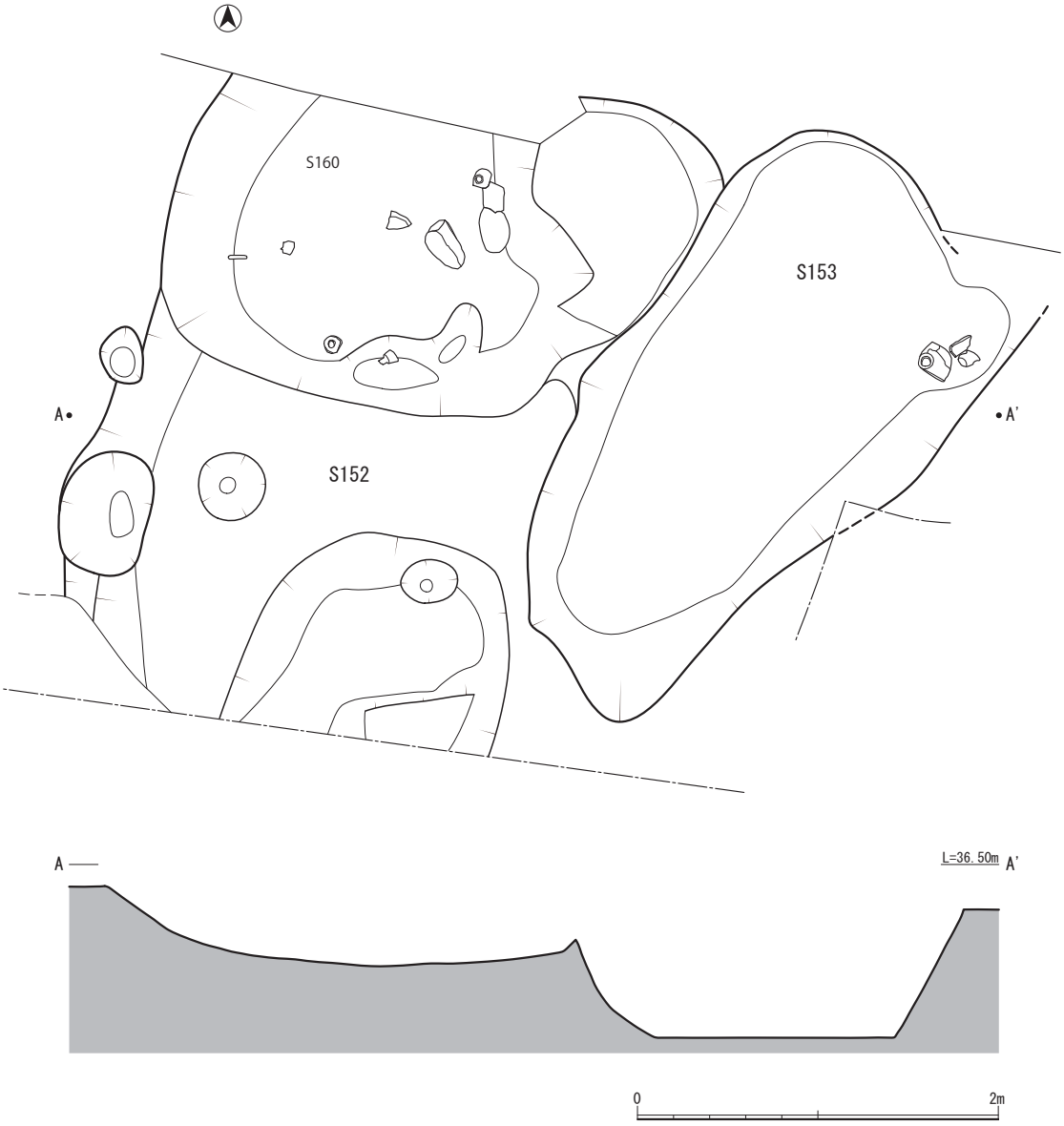
Ｄ、Ｅ－4、5区に位置する大型土坑。Ｓ134に接し、同遺構に切られている。調査中に保存が決まったため遺構検出のみを行う。

Ｓ160

Ｅ、Ｆ－5区に位置する。Ｓ152を切る。検出面で南北軸160cm、東西軸270cmの土坑。

Ｓ178

Ｇ－6区に位置する円形土坑で切り合いはない。溝縁皿や肥前系陶器染付とともに水滴が出土。



第51図　Ｓ152・Ｓ153遺構実測図

Ｓ185

Ｅ，Ｆ－4区に位置する大型土坑。調査Ⅱ区にあたり、保存が決定したため、遺構検出のみに留める。

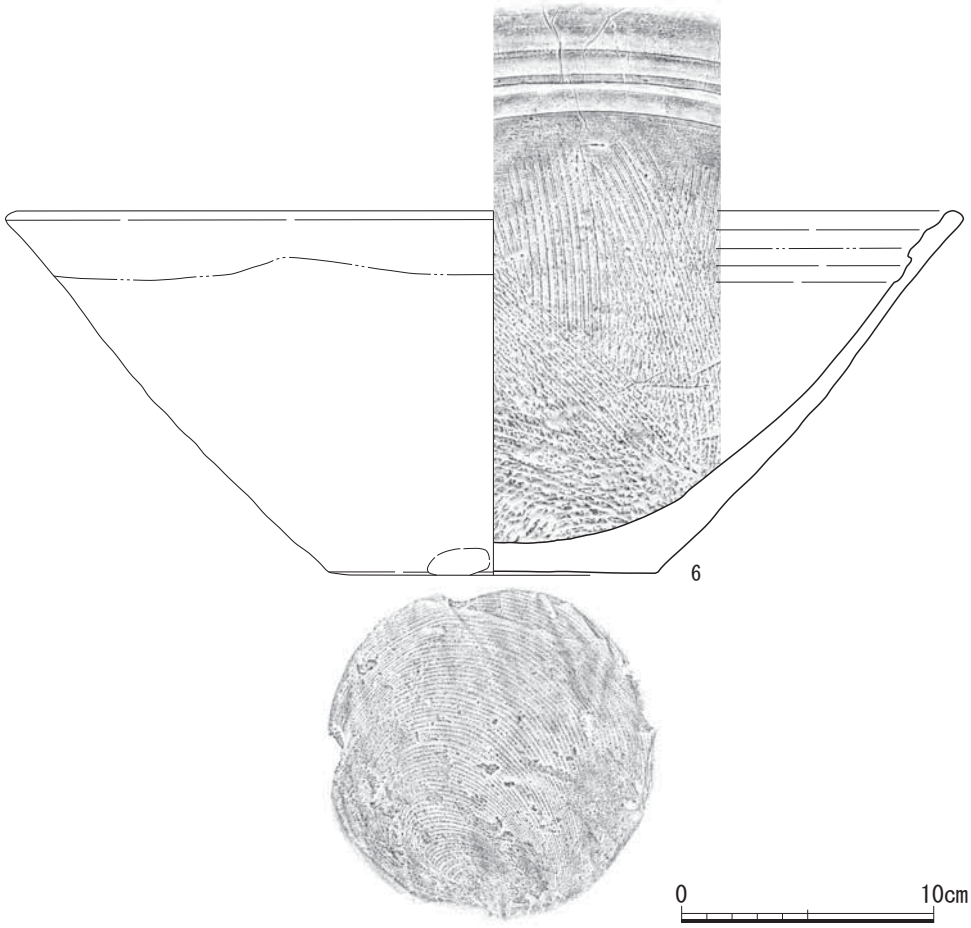
Ｓ195

Ｇ－4区に位置する。調査Ⅱ区あたり、トレンチ調査を行ったところのみ底面まで掘り下げる。方形土坑の一部で遺物は豊富に出土した。

2　道路

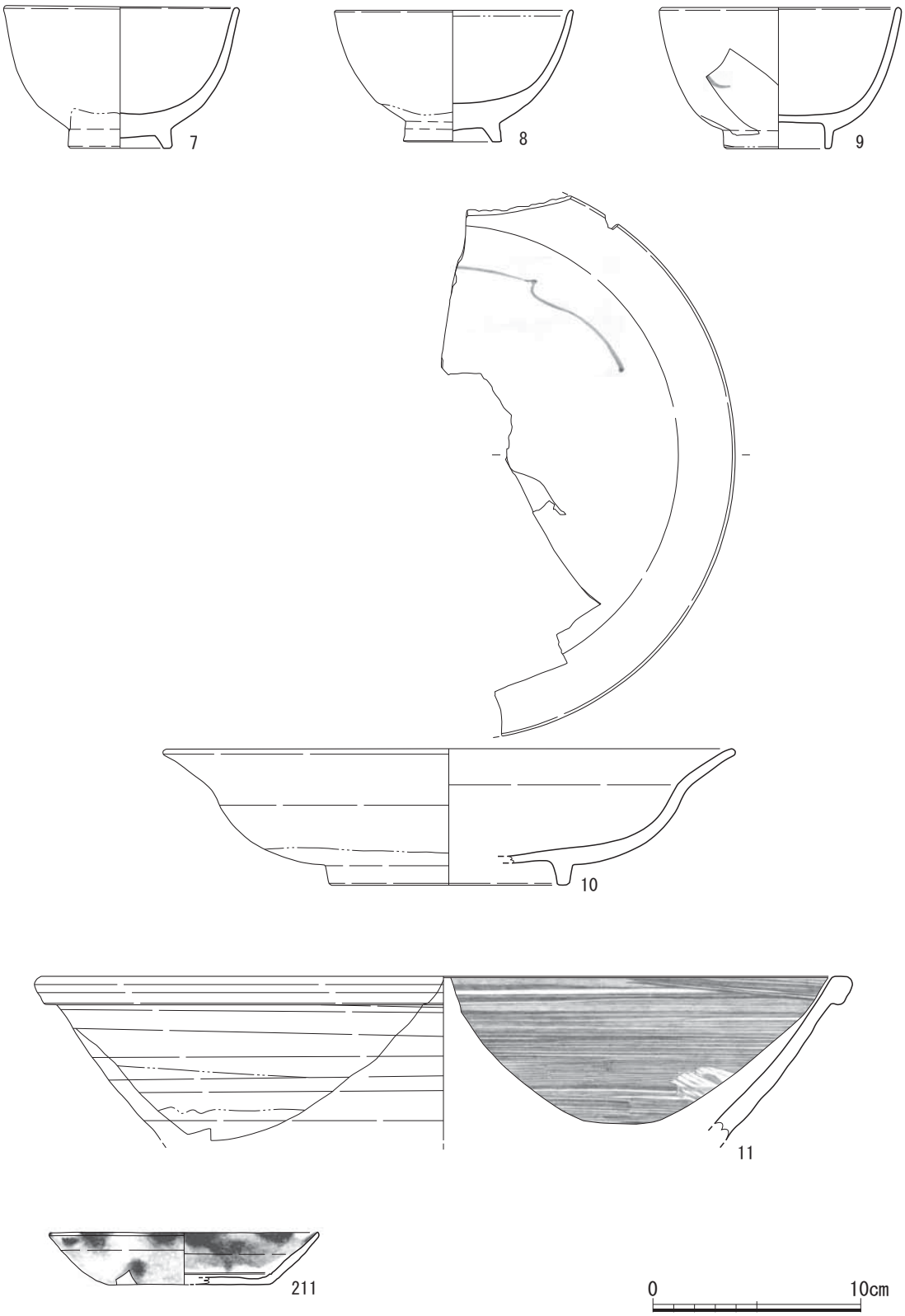
Ｓ050

Ｅ－6、7、8区に位置する。上端幅2.5m程の道で、検出面より両側から10～50cmほど掘り下げてある。路底の幅は180cm程で、南側より北にむけて緩やかに上りの勾配がある。道路中央部は硬化面が80～100cmの幅のぼりで形成されている。Ｅ－6区で東側に折れ曲がり、Ｓ014で切られてその後の継続は不明

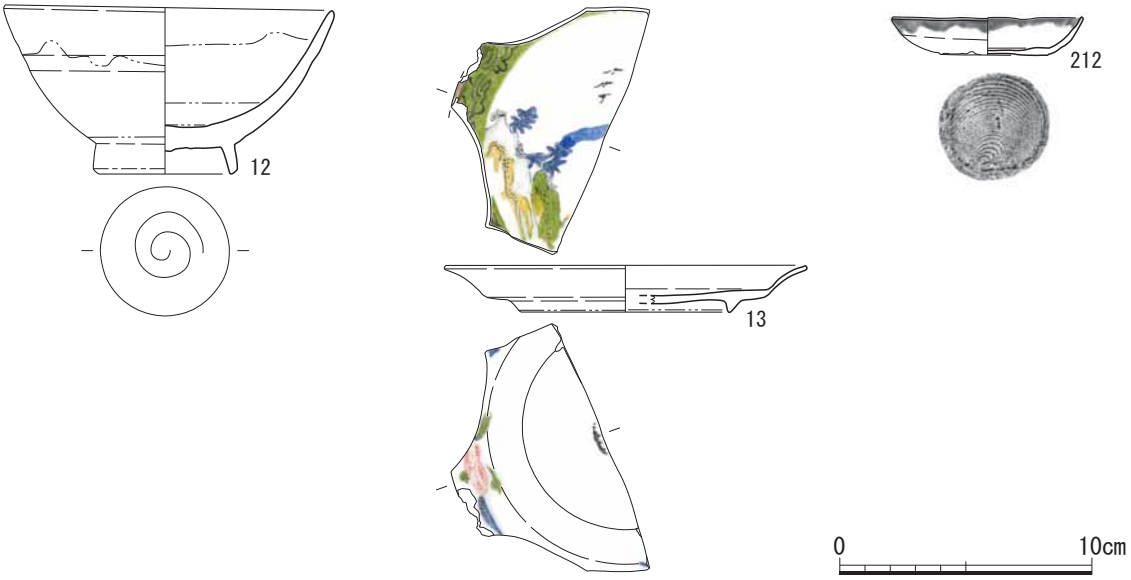


第52図　Ｓ005出土遺物実測図

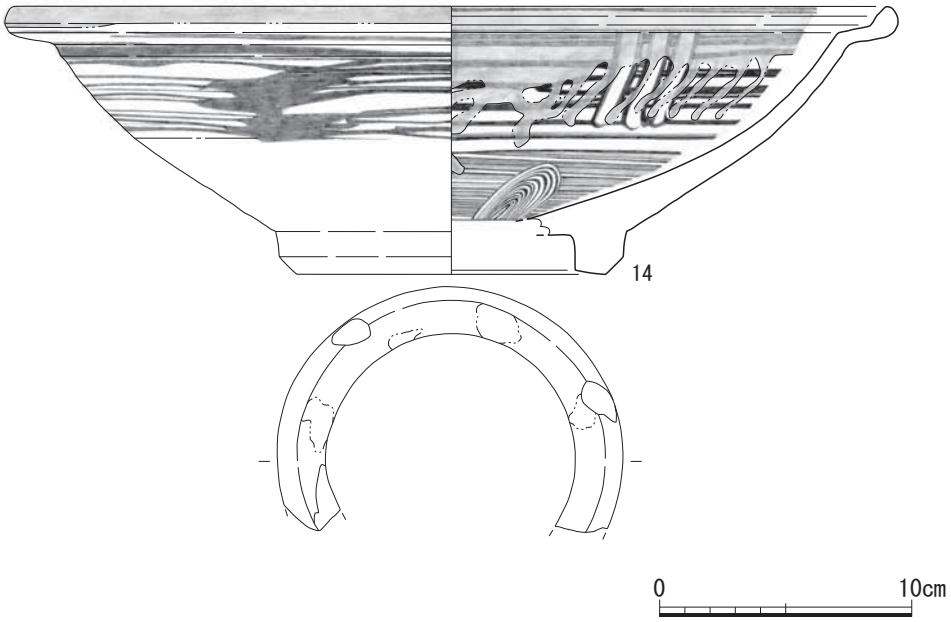
である。Ｅ－6、7区の東側には石列が残っており、屋敷等を区画する道であったと思われる。Ｅ－7、8区には大量の瓦が廃棄されており、区画を切り直す時に一気に埋められたものであろう。瓦については検討ができなかったため、年代観を得るための史料とはしなかった。



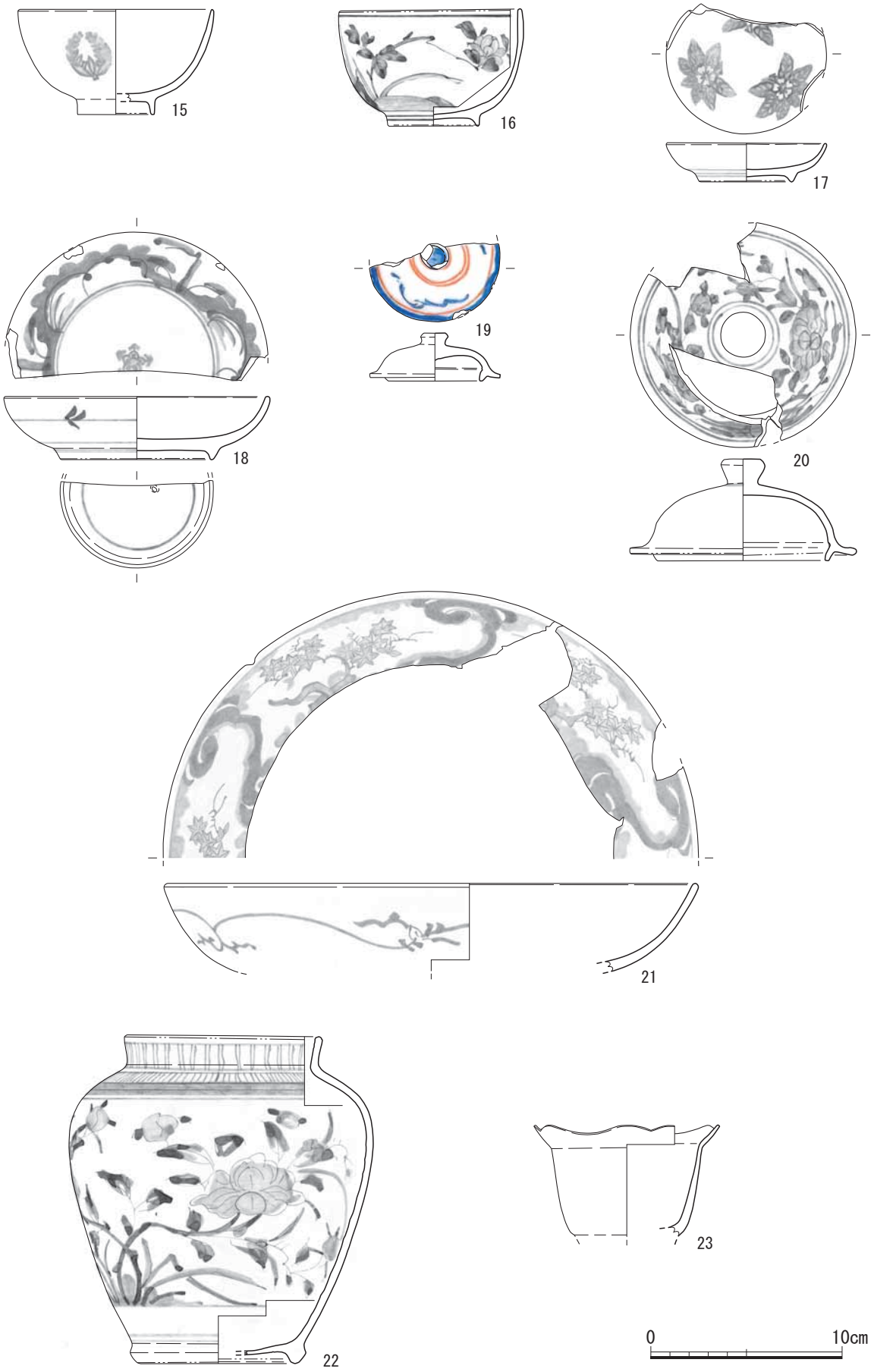
第53図　S014出土遺物実測図



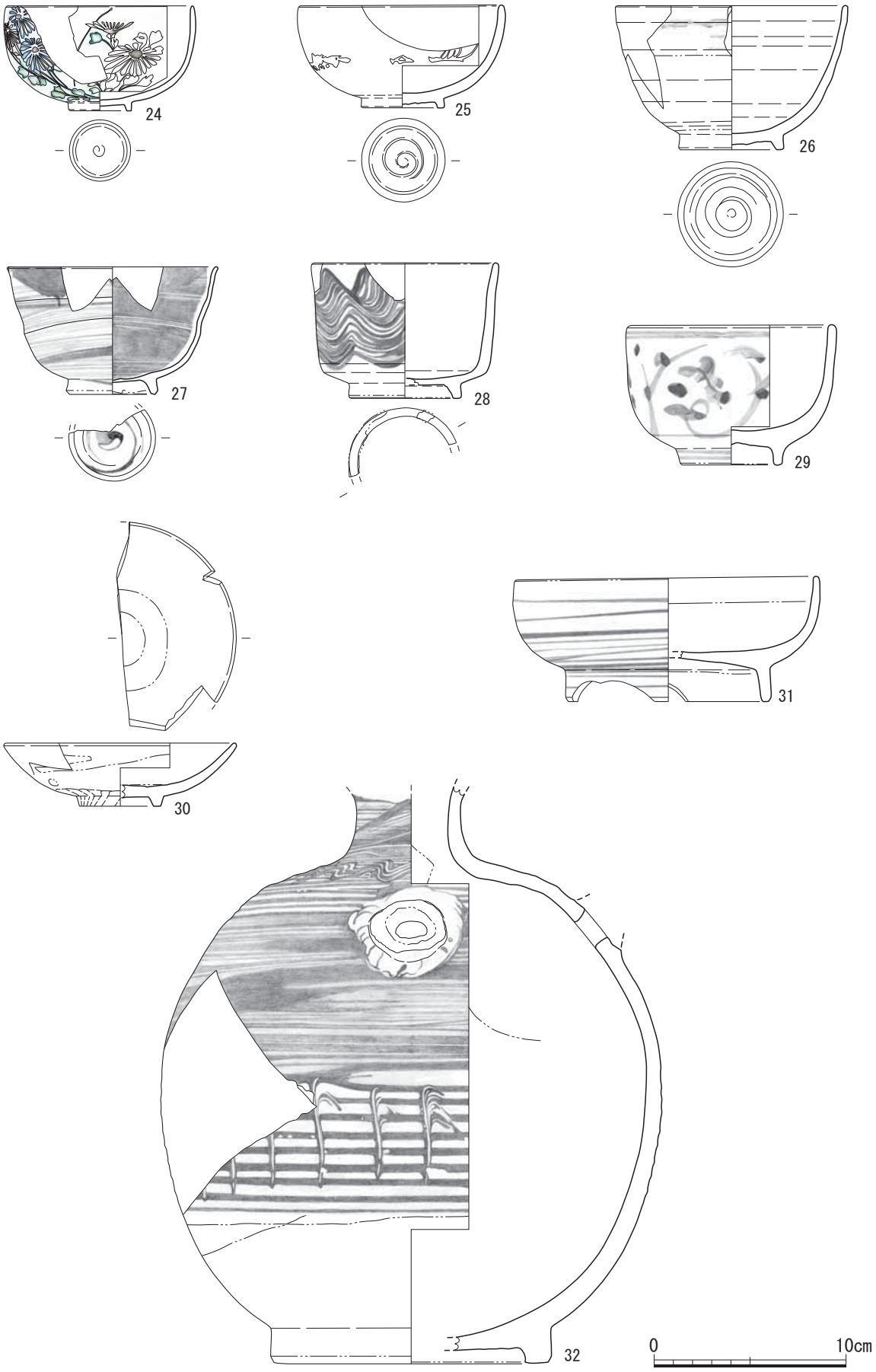
第54図　Ｓ016出土遺物実測図



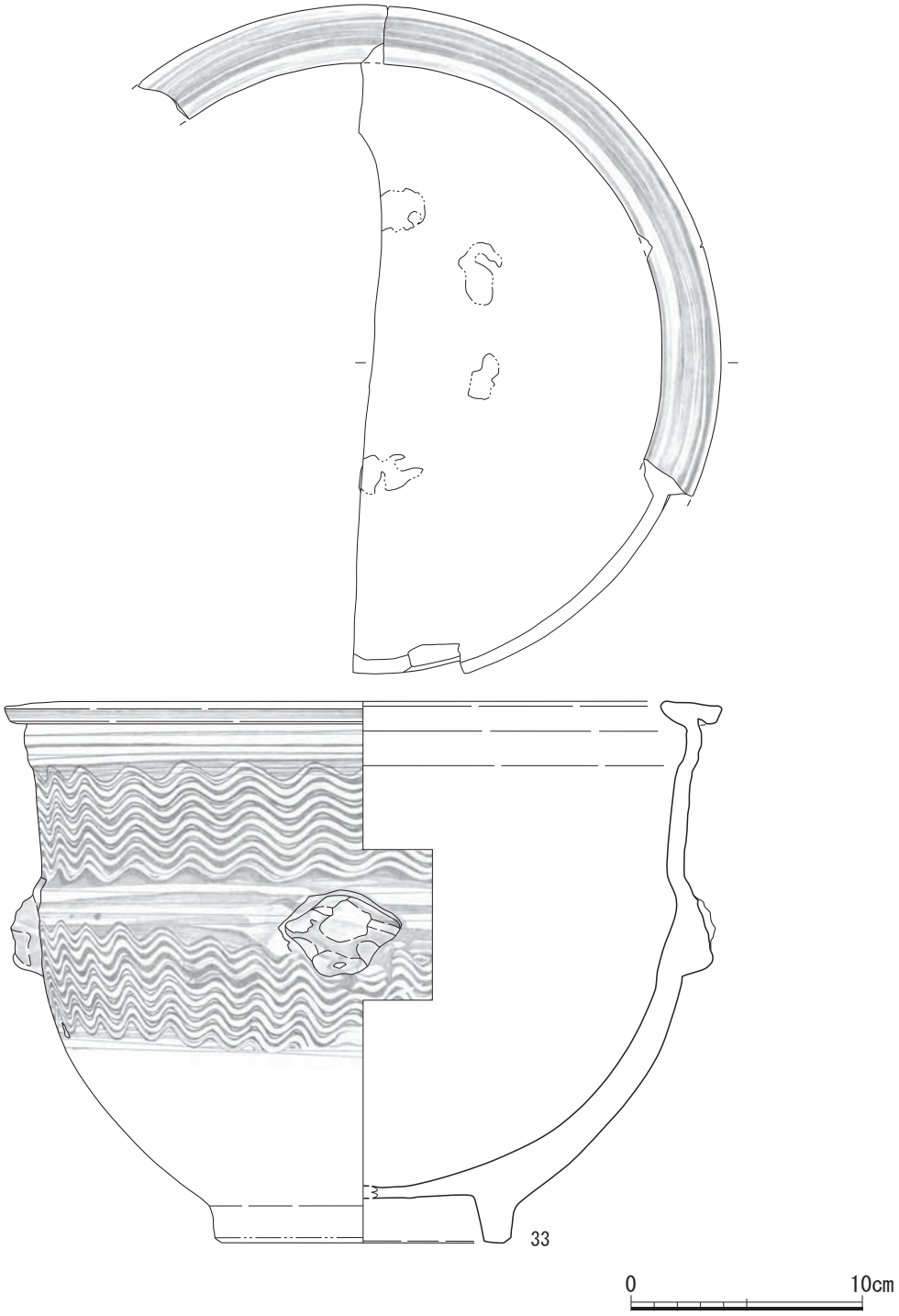
第55図　Ｓ047出土遺物実測図



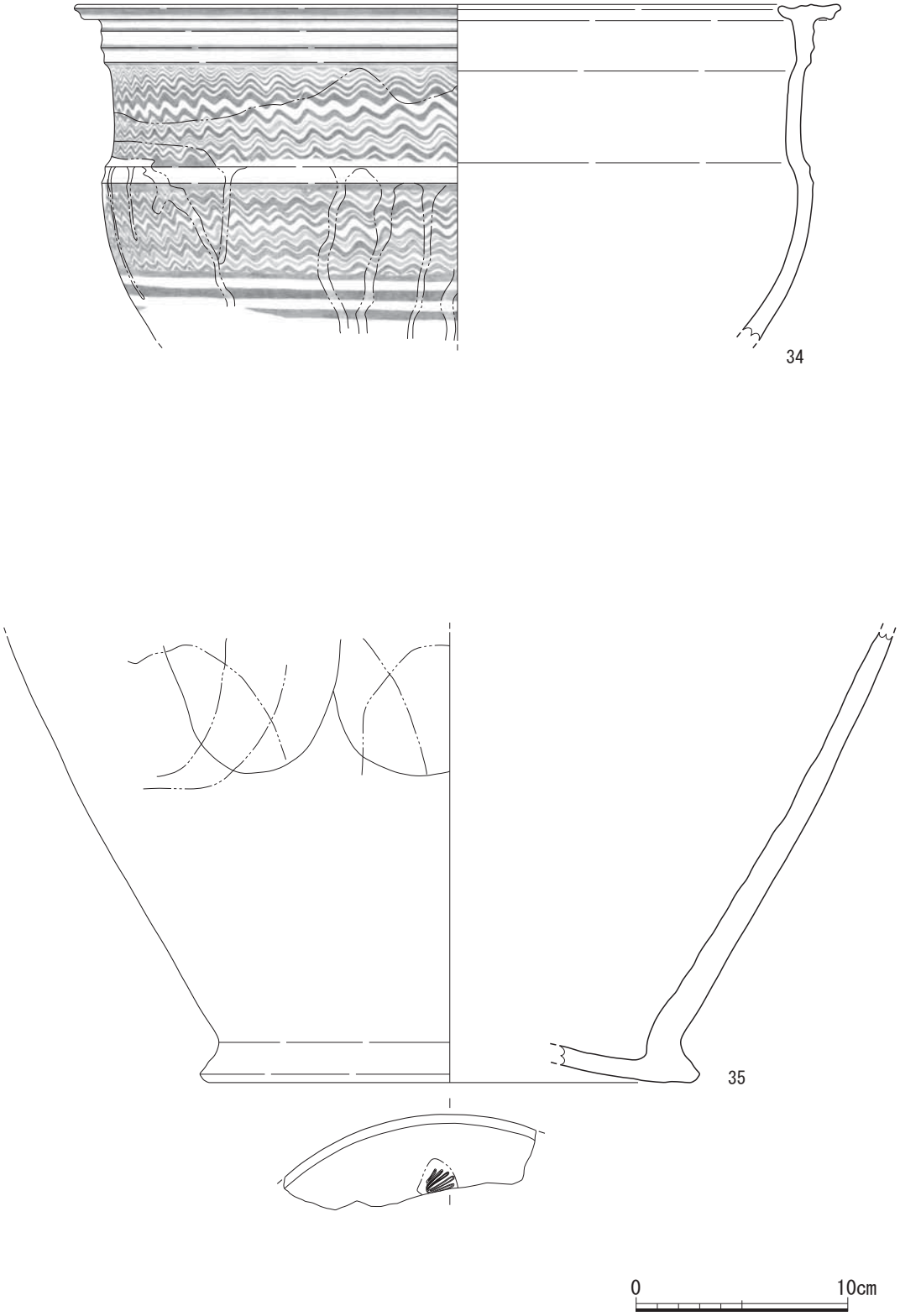
第56図　S047出土遺物実測図



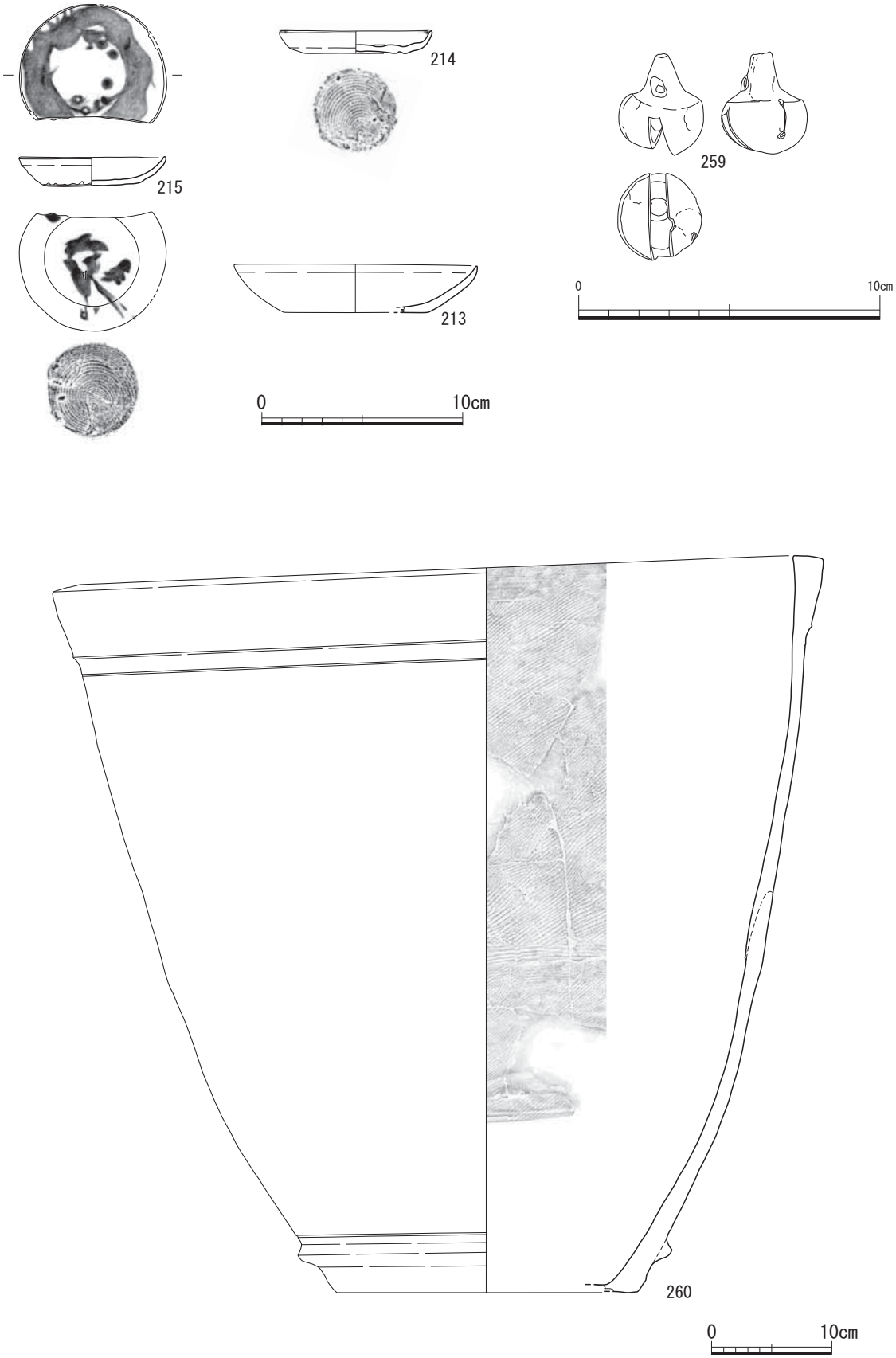
第57図　Ｓ047出土遺物実測図



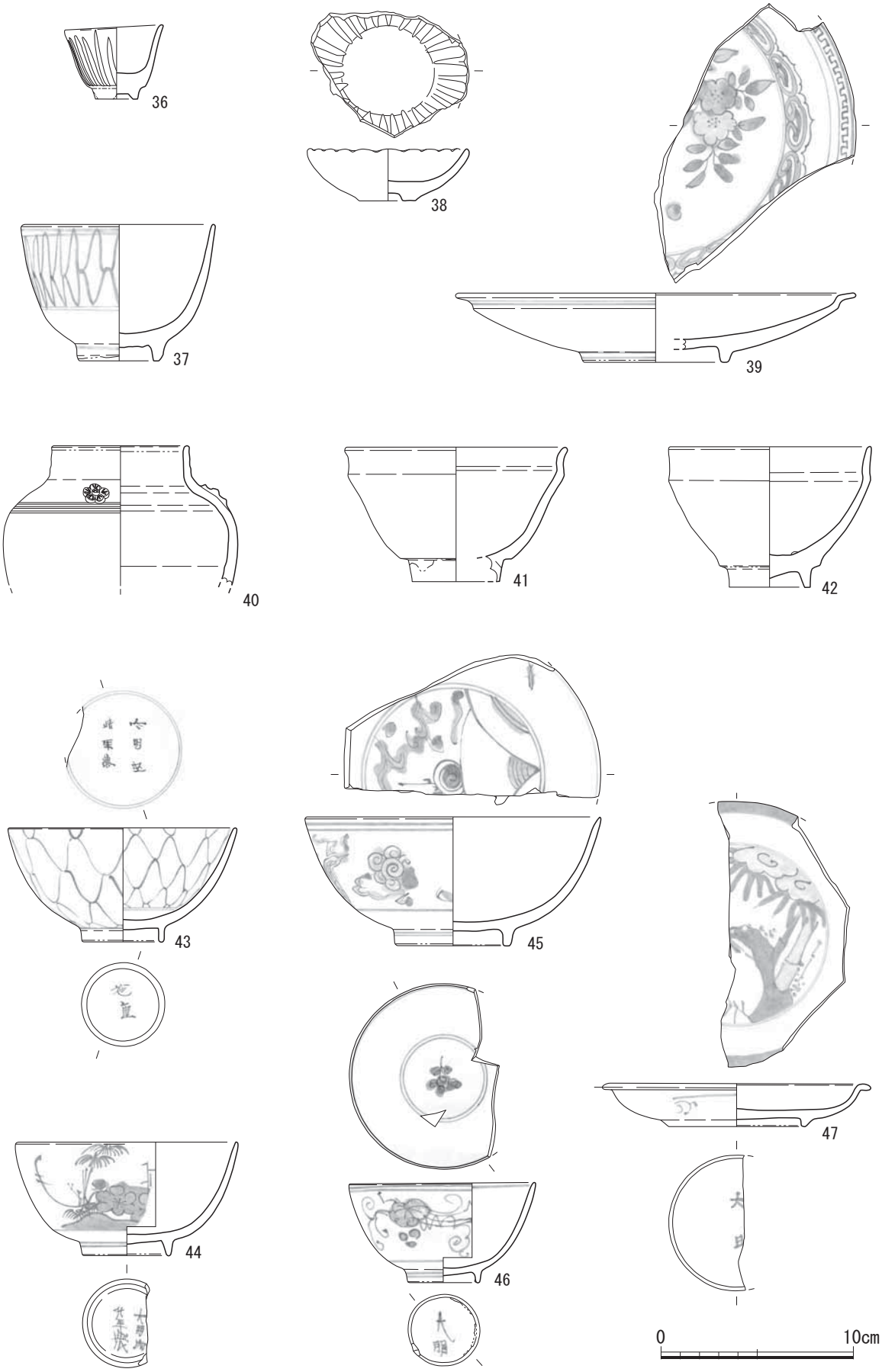
第58図　Ｓ047出土遺物実測図



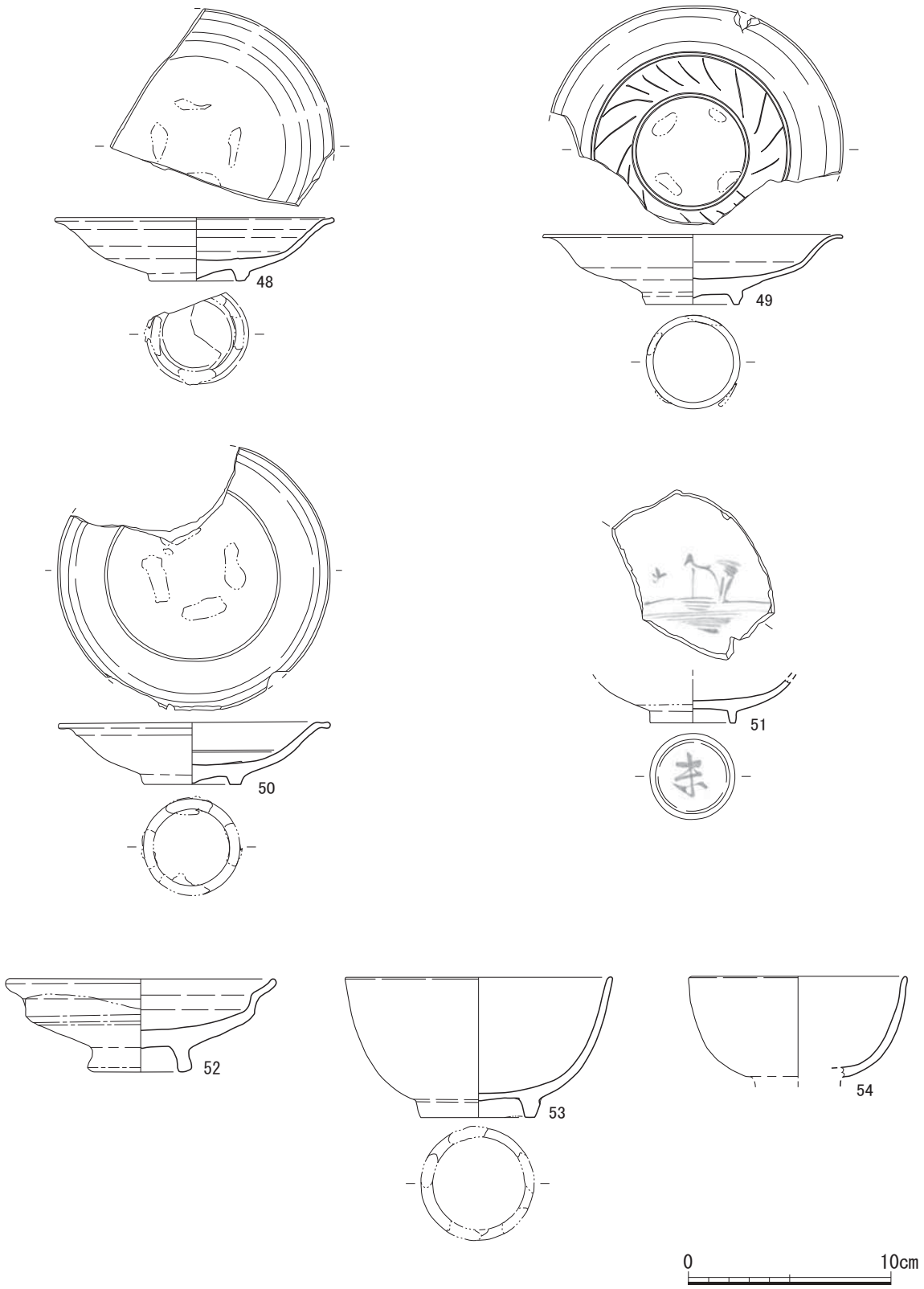
第59図　Ｓ047出土遺物実測図



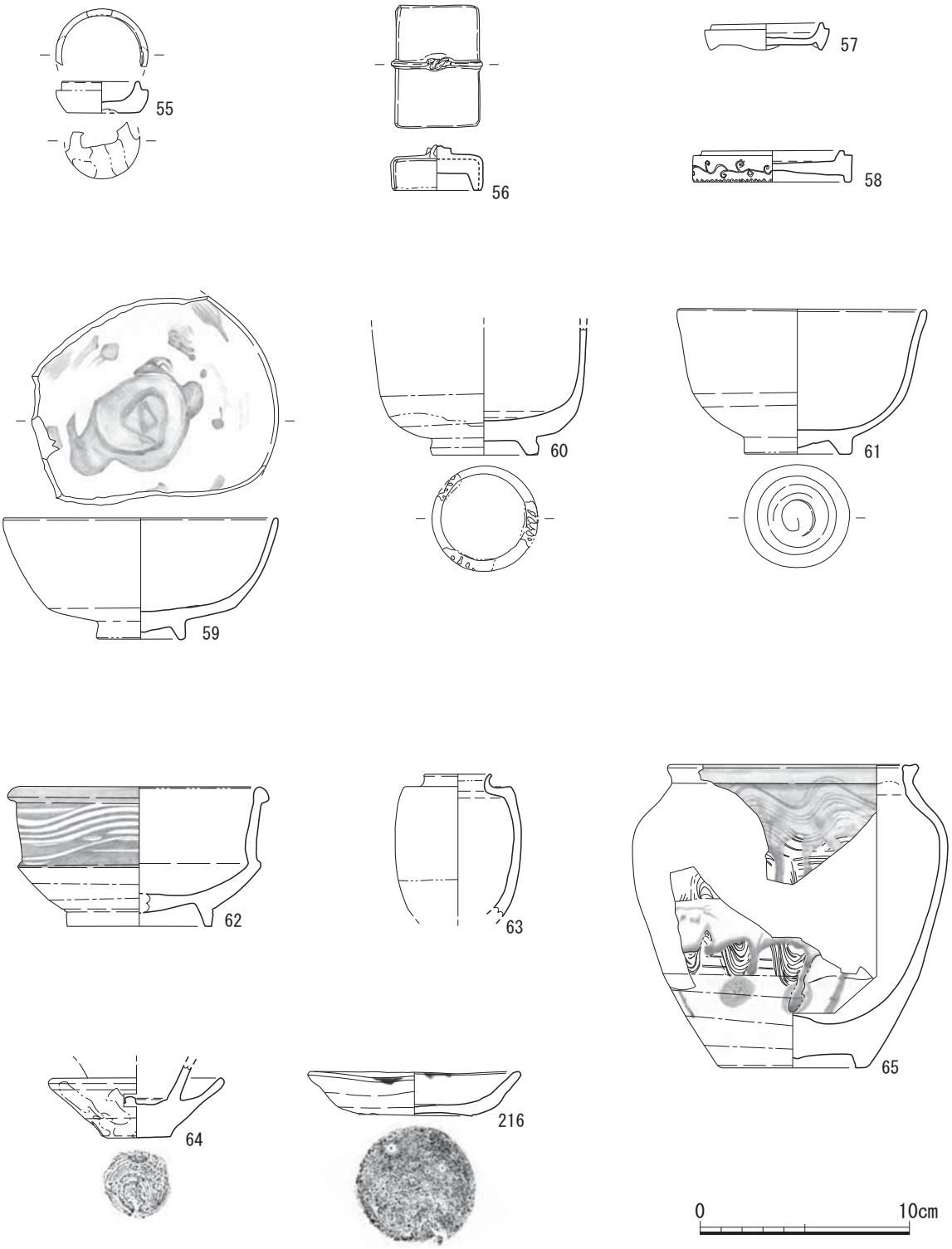
第60図　Ｓ047出土遺物実測図



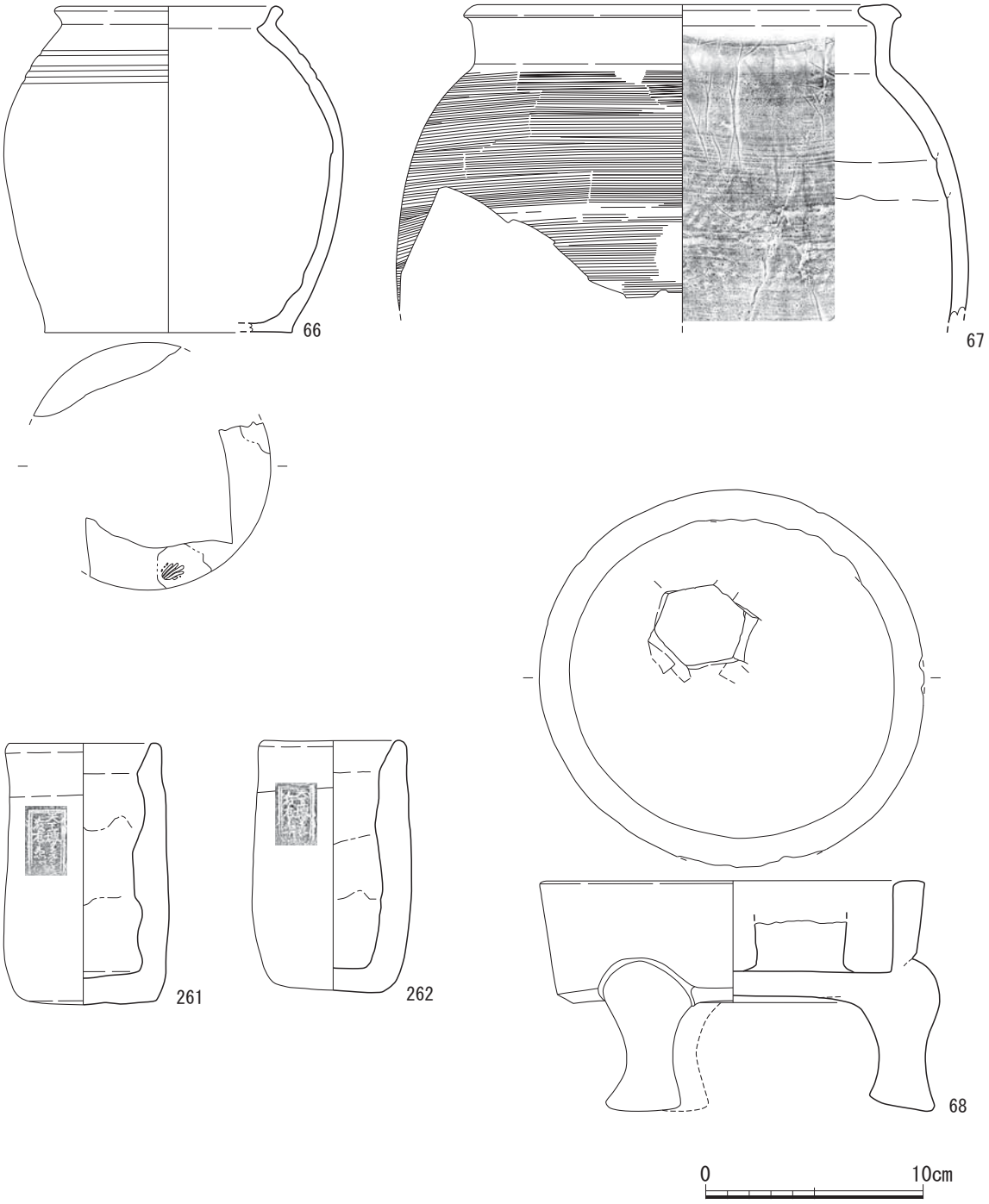
第61図　Ｓ073出土遺物実測図



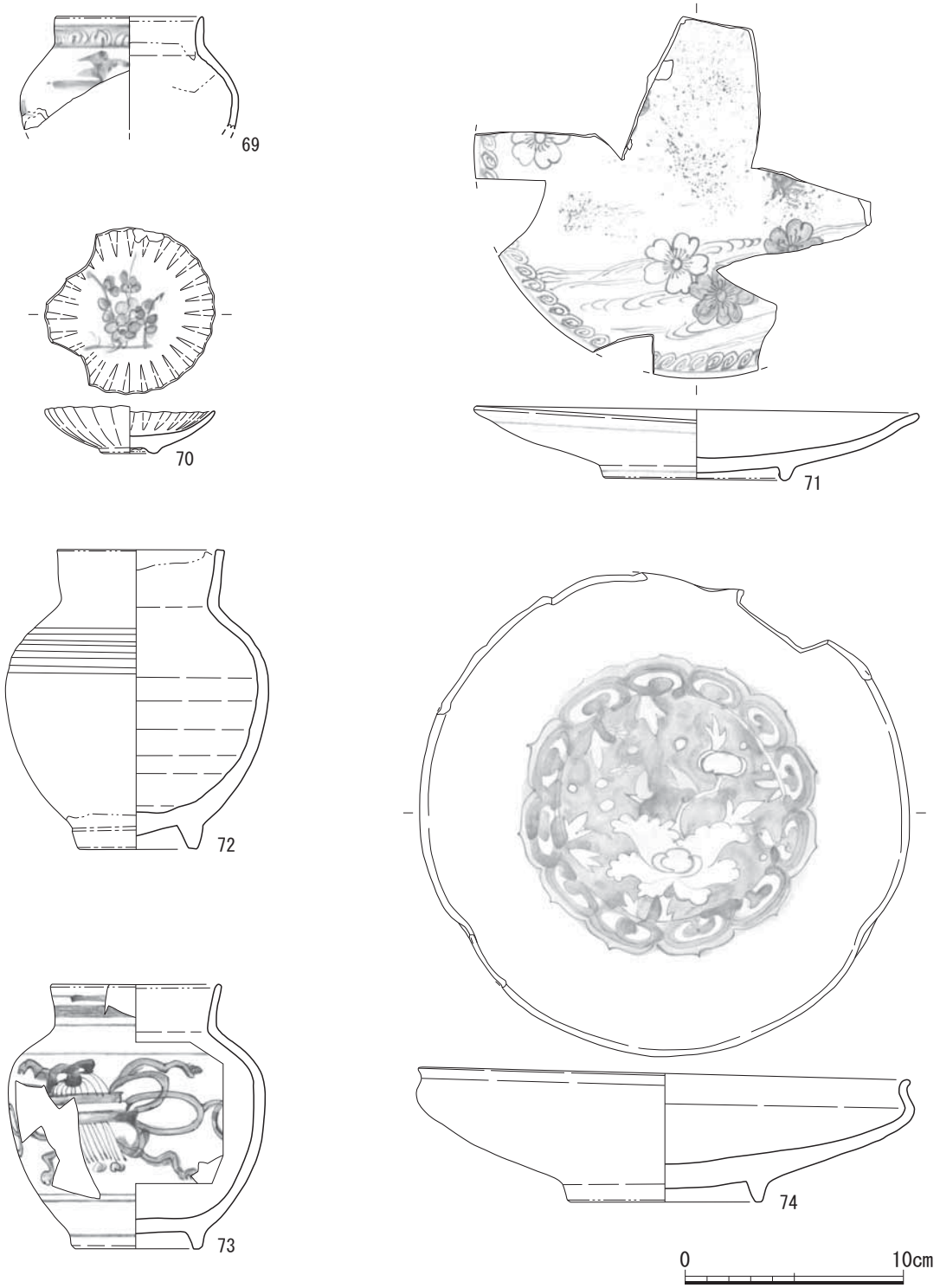
第62図　Ｓ073出土遺物実測図



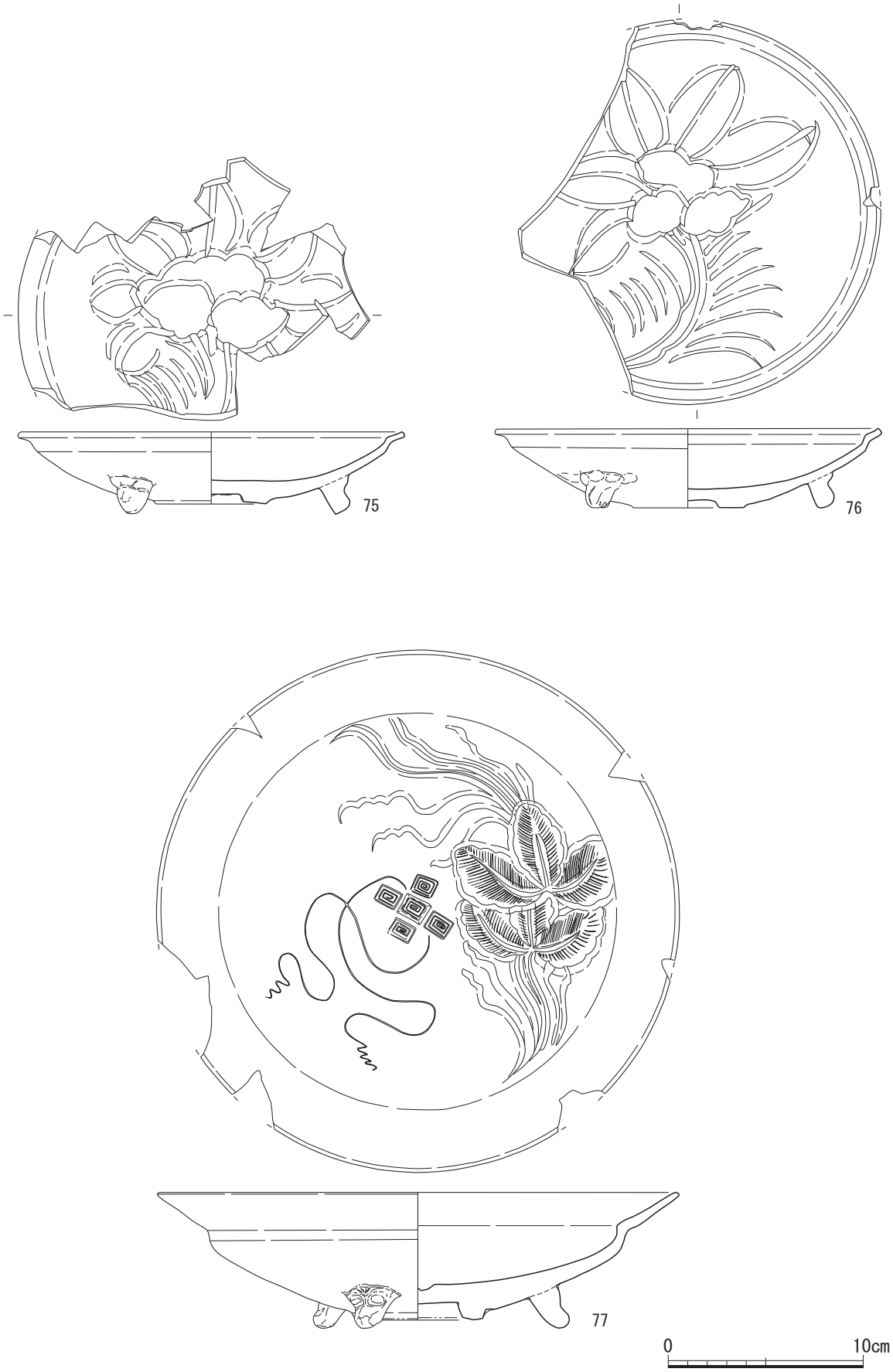
第63図　Ｓ073出土遺物実測図



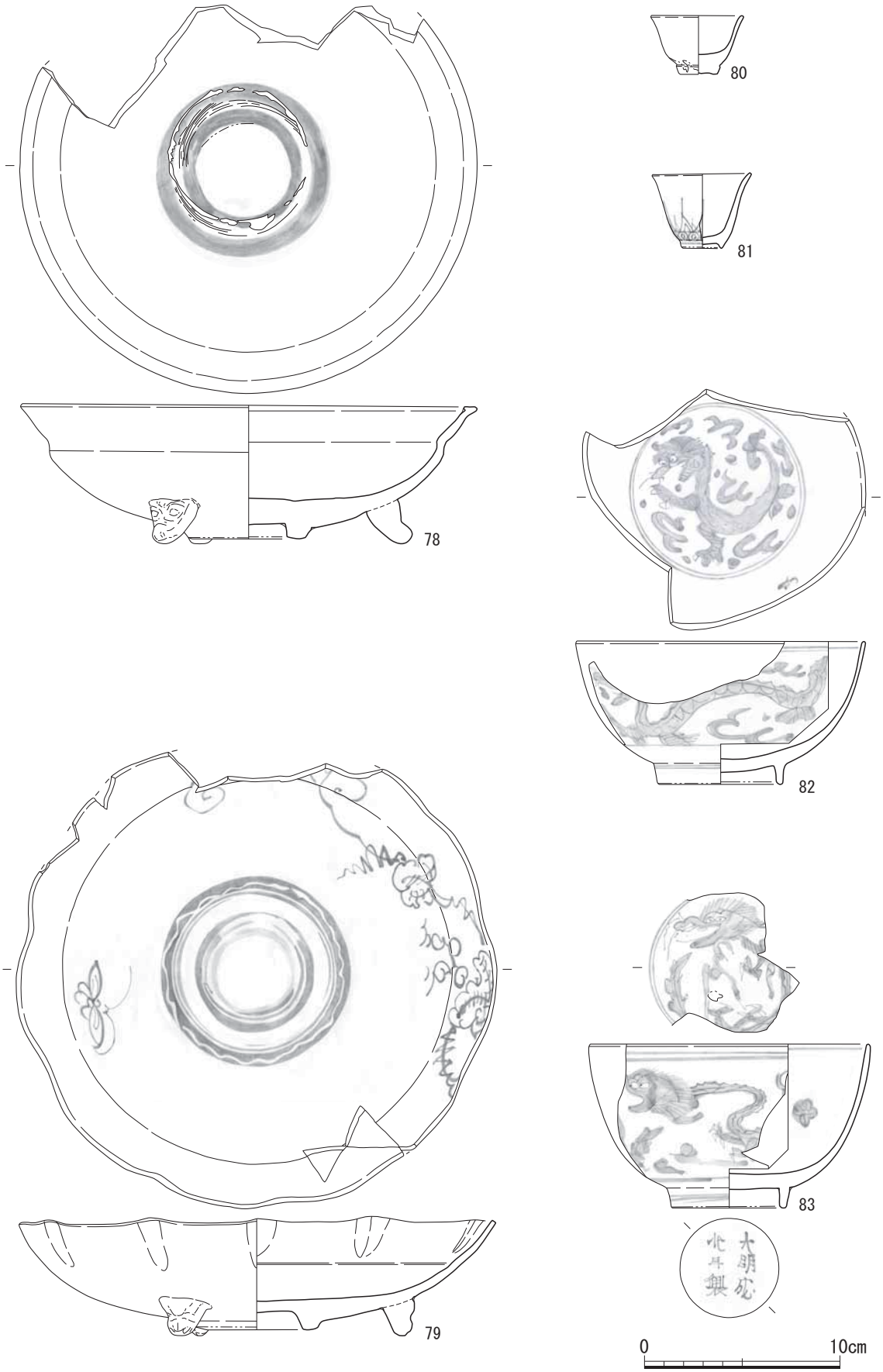
第64図　Ｓ073出土遺物実測図



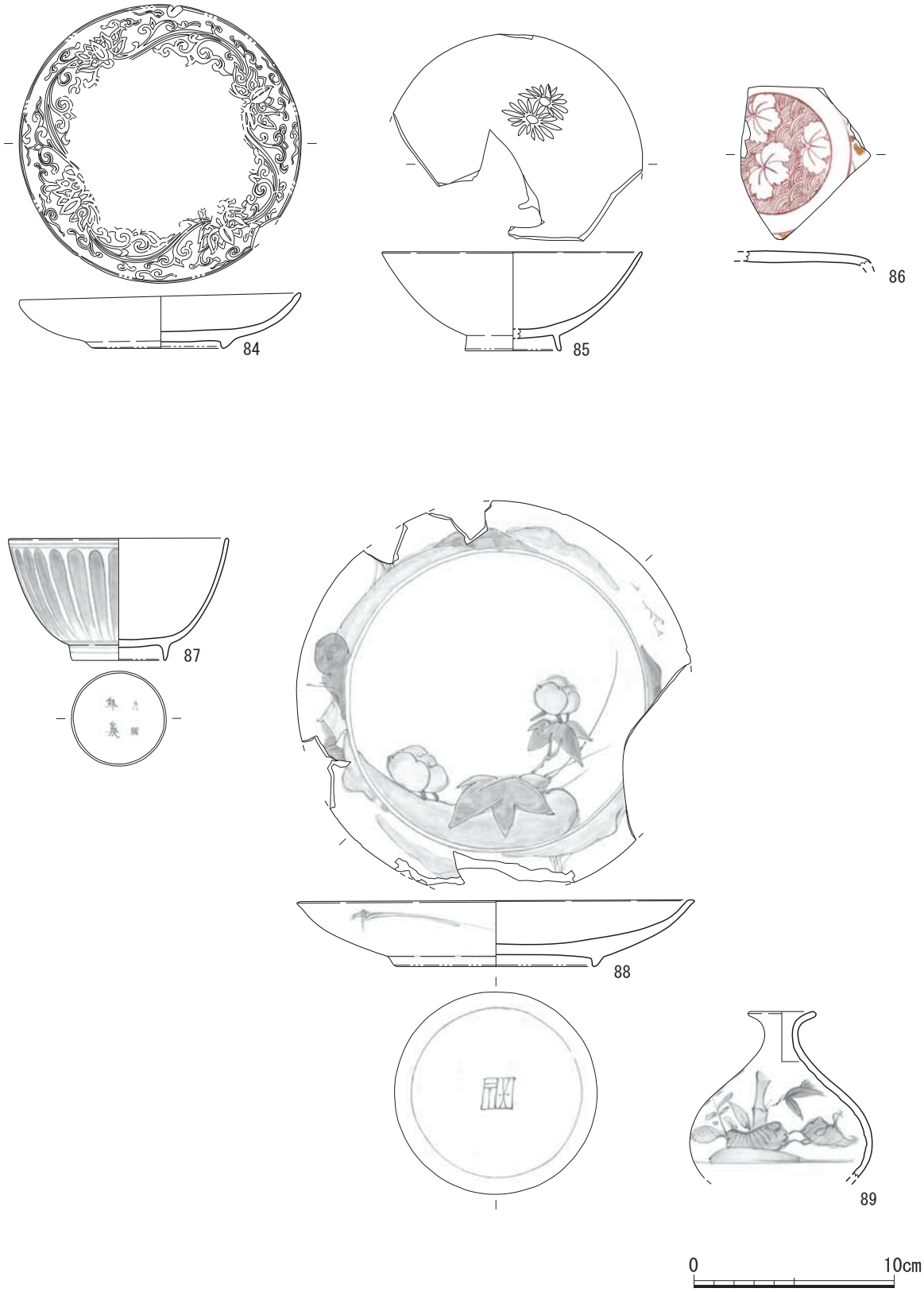
第65図　Ｓ134出土遺物実測図



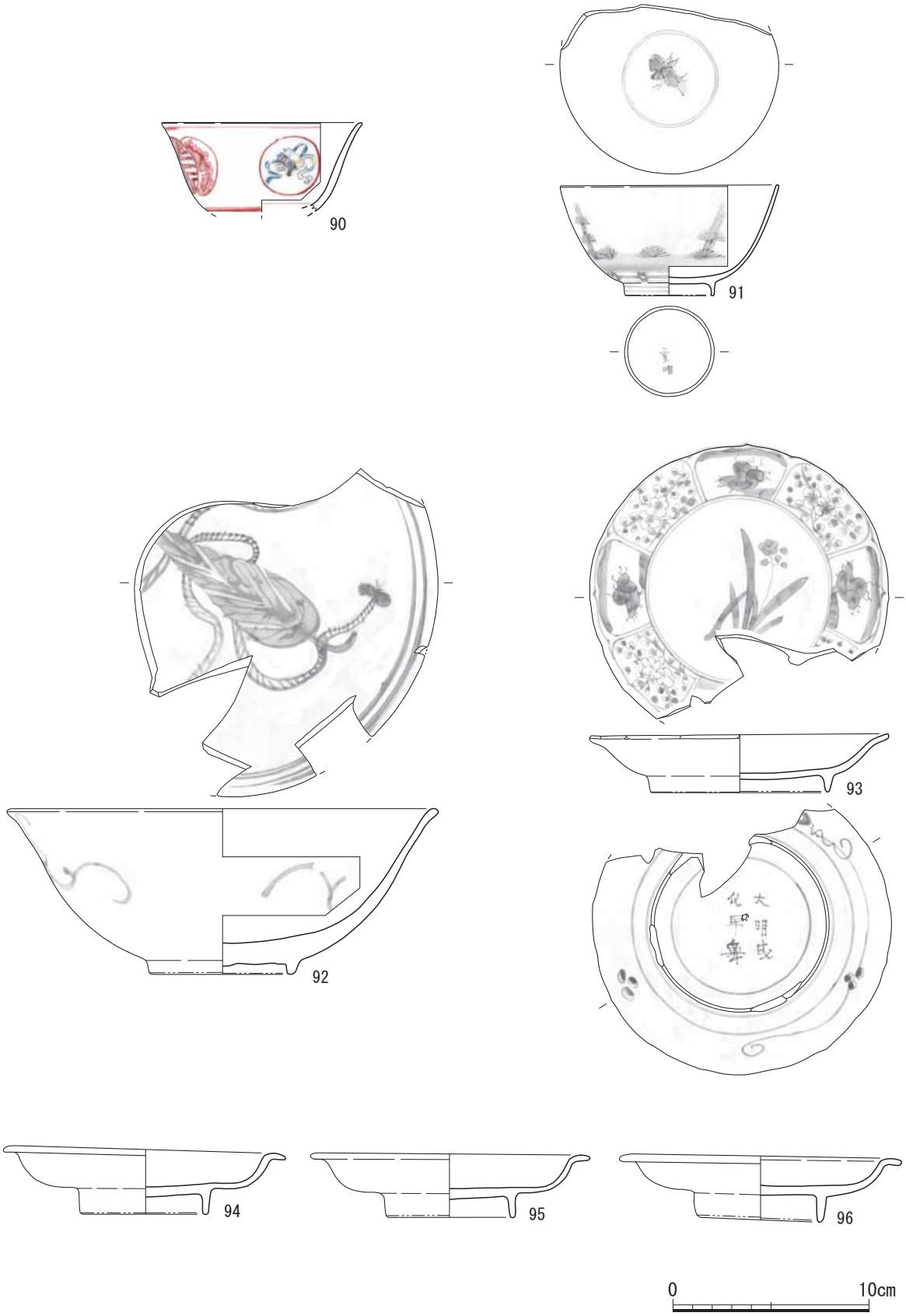
第66図　Ｓ134出土遺物実測図



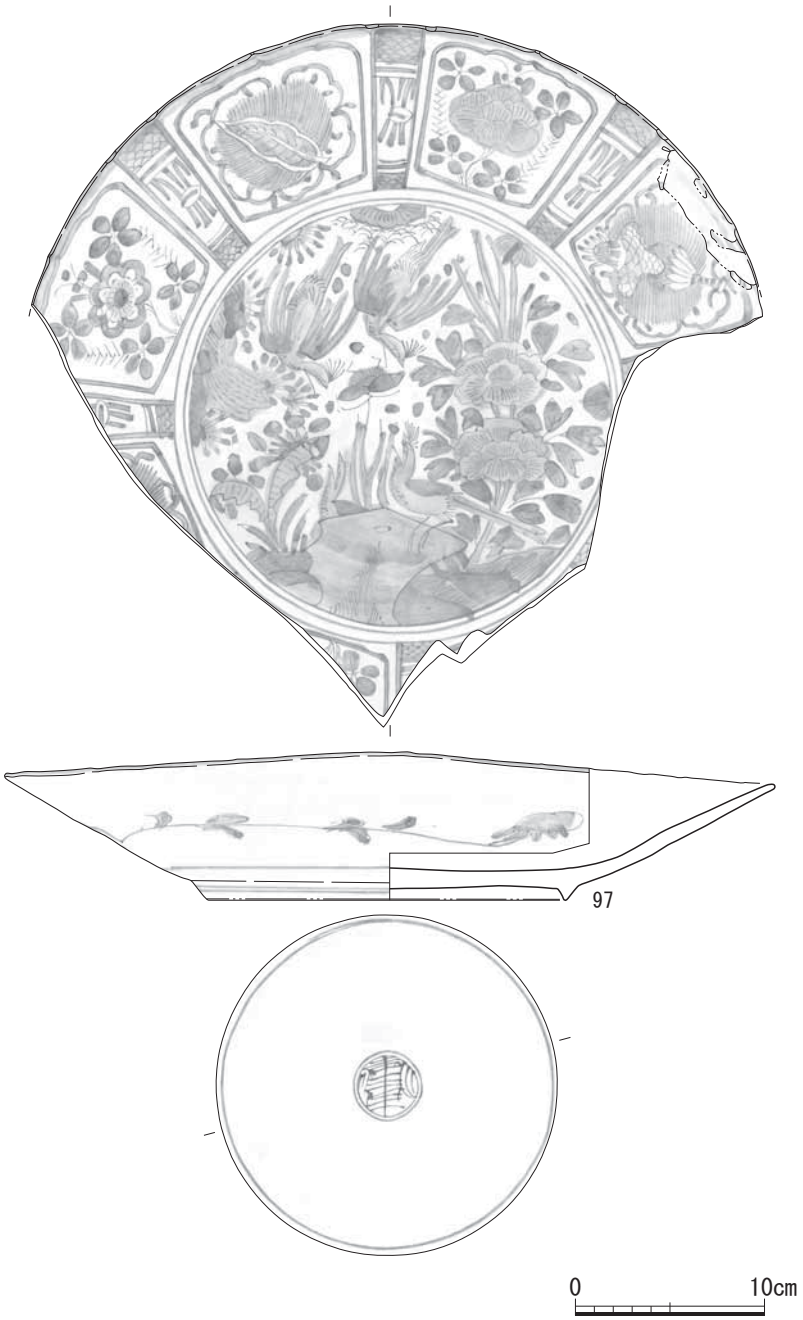
第67図　Ｓ134出土遺物実測図



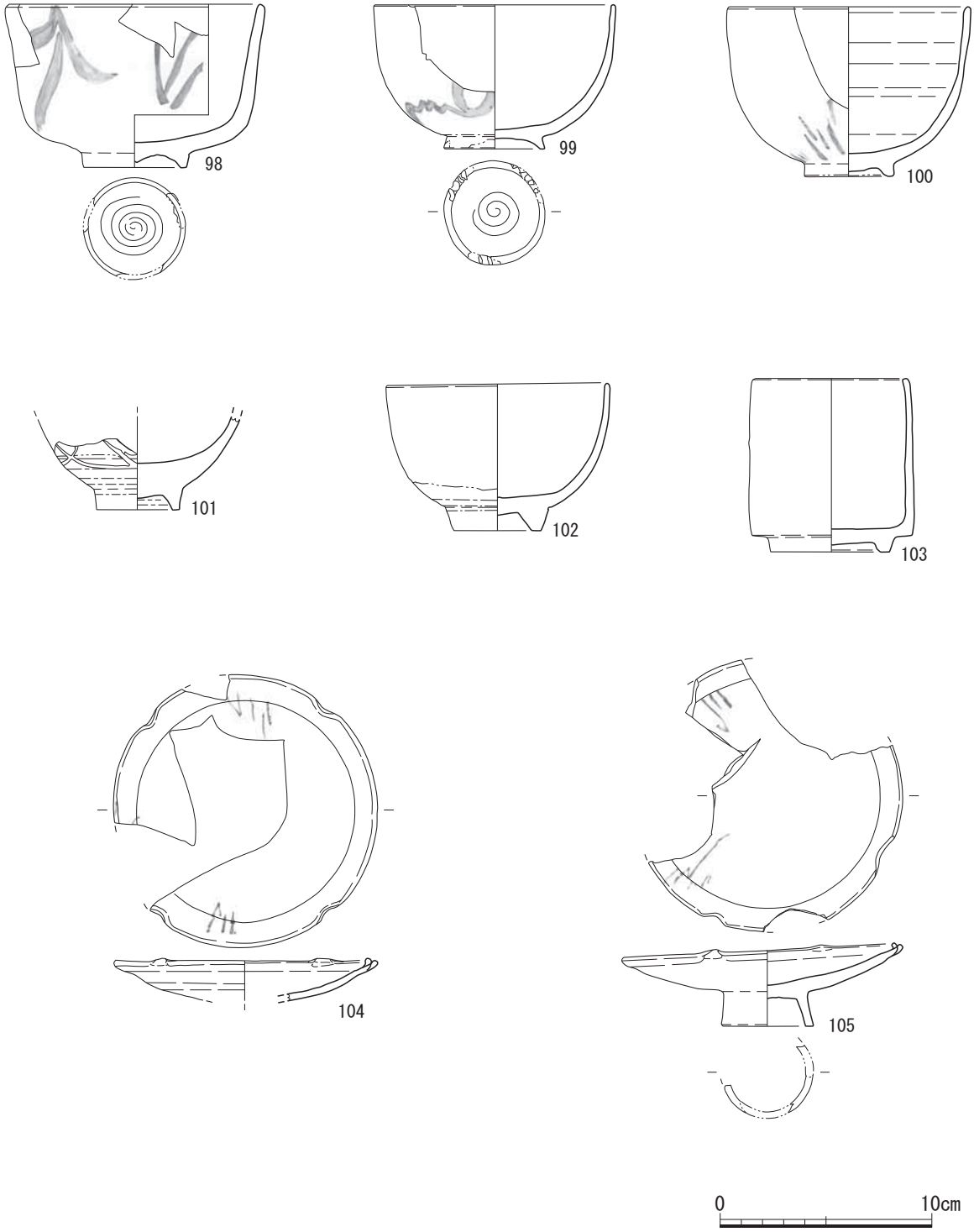
第68図　Ｓ134出土遺物実測図



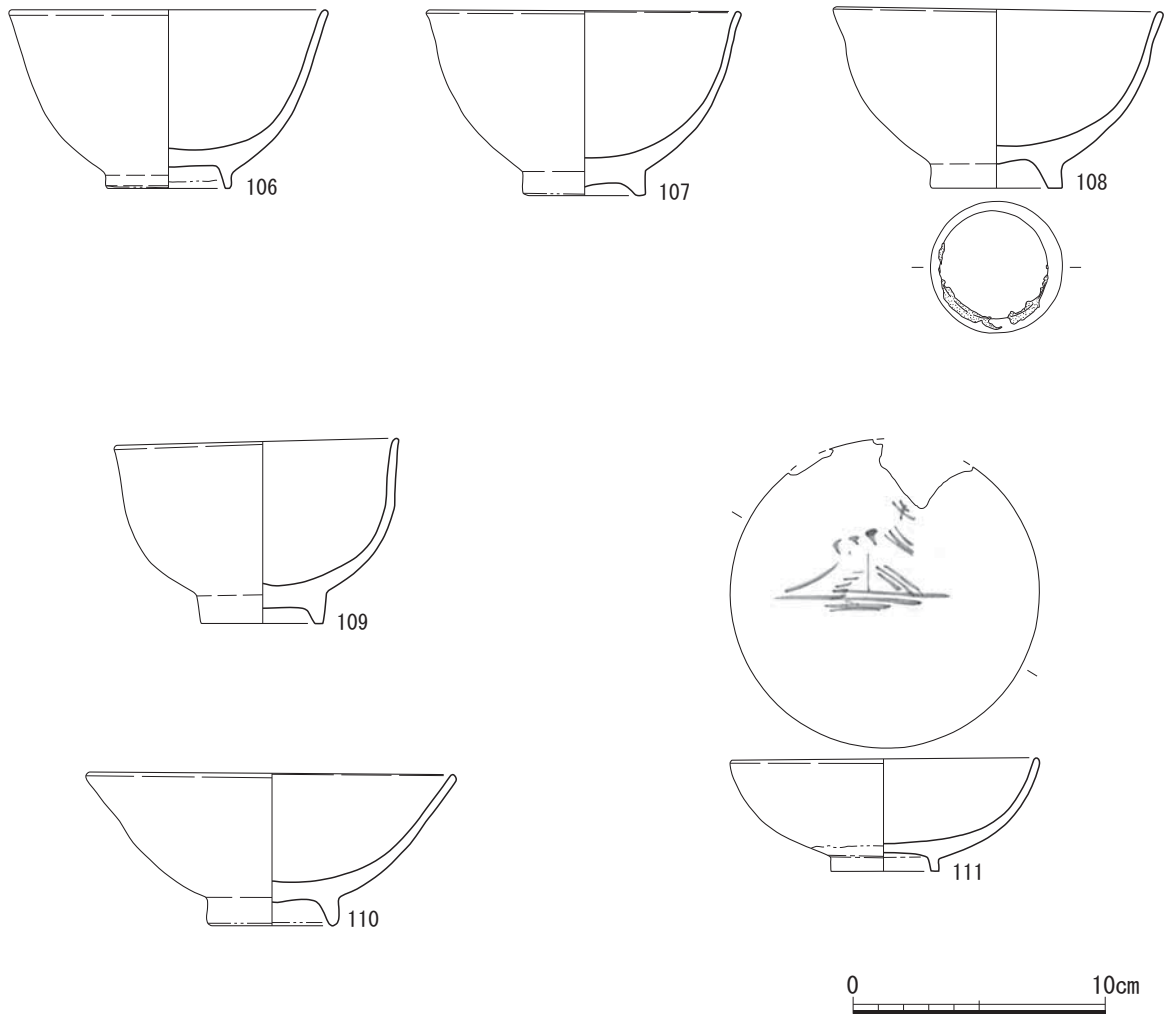
第69図　Ｓ134出土遺物実測図



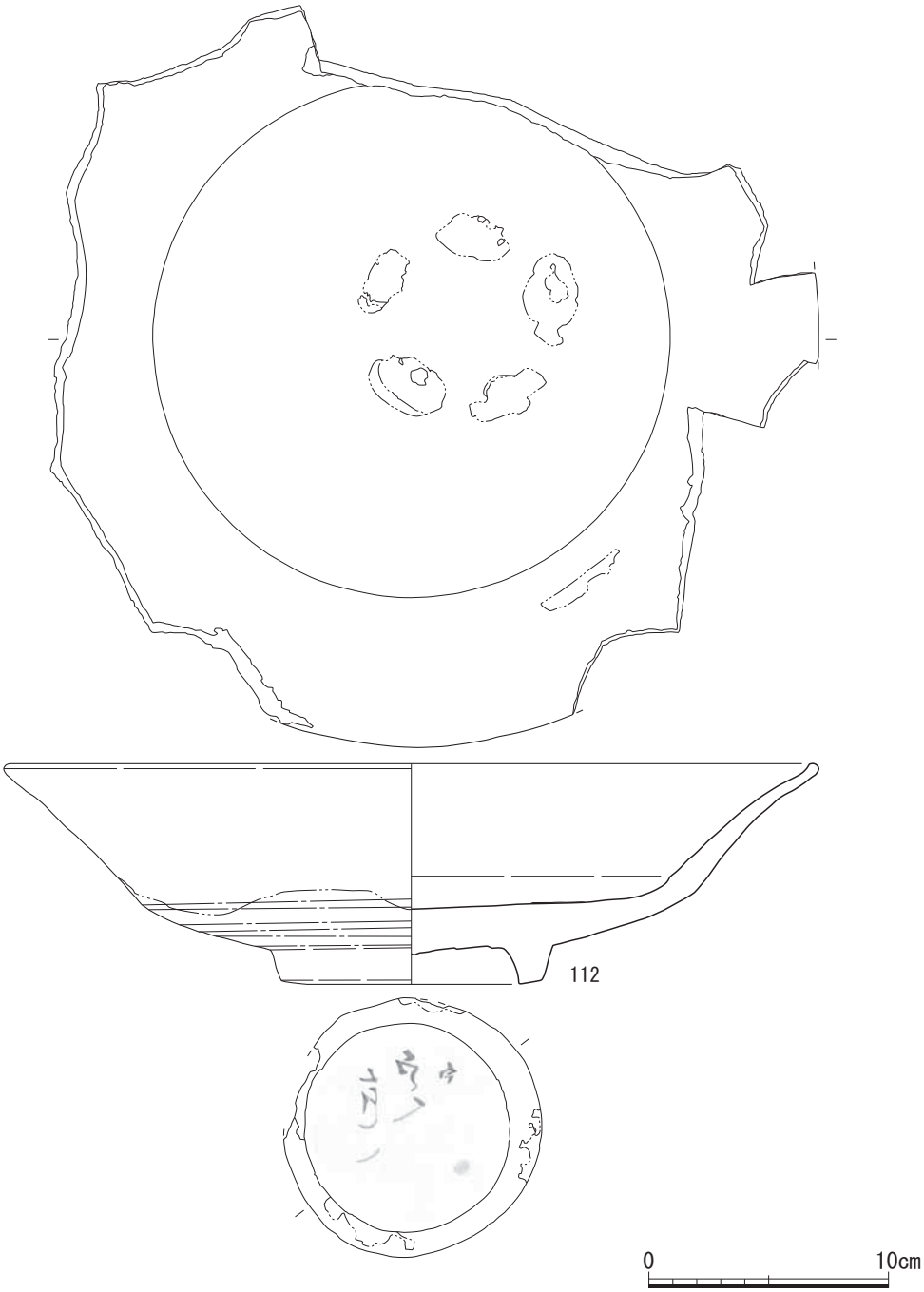
第70図　Ｓ134出土遺物実測図



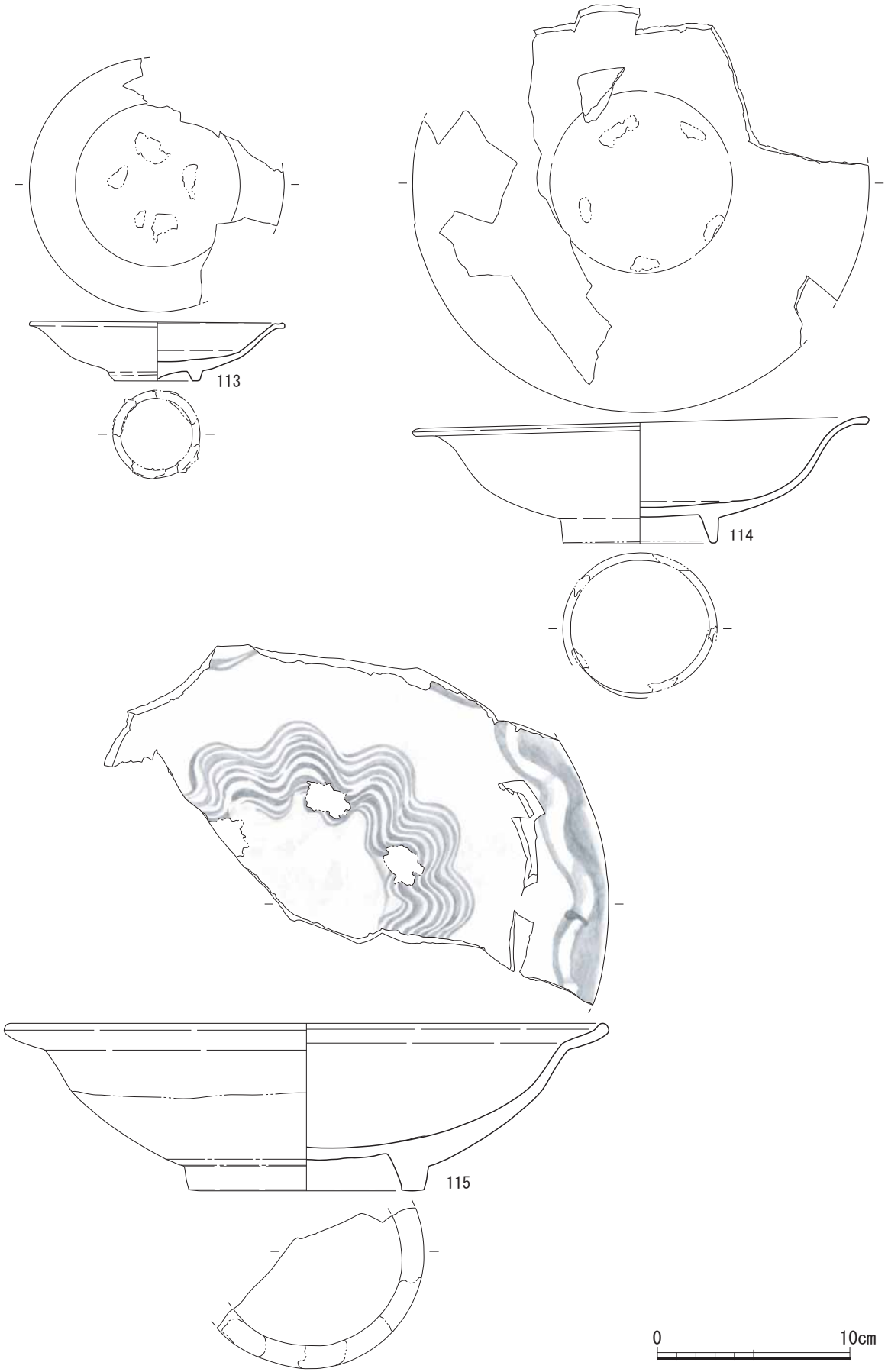
第71図　Ｓ134出土遺物実測図



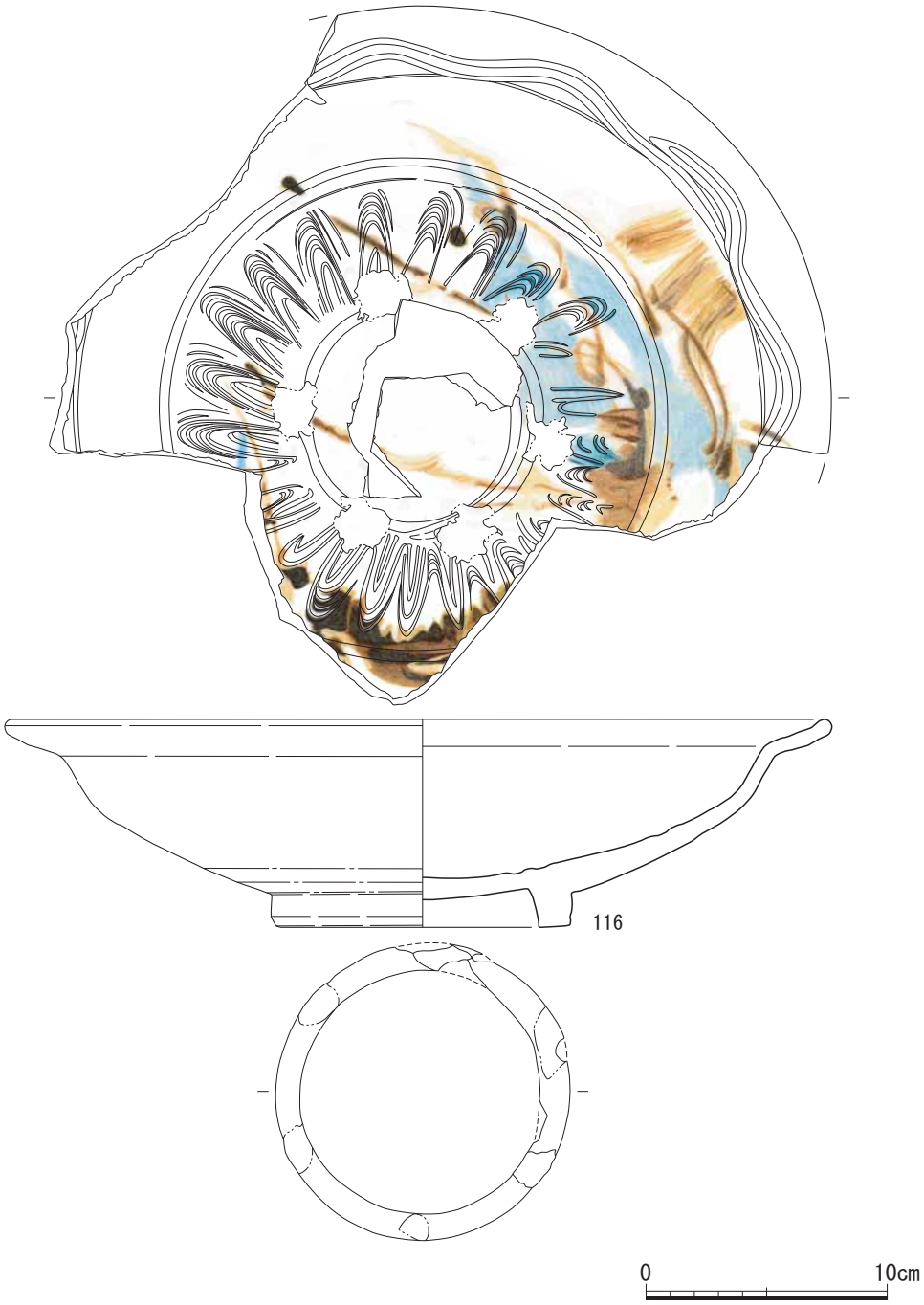
第72図　Ｓ134出土遺物実測図



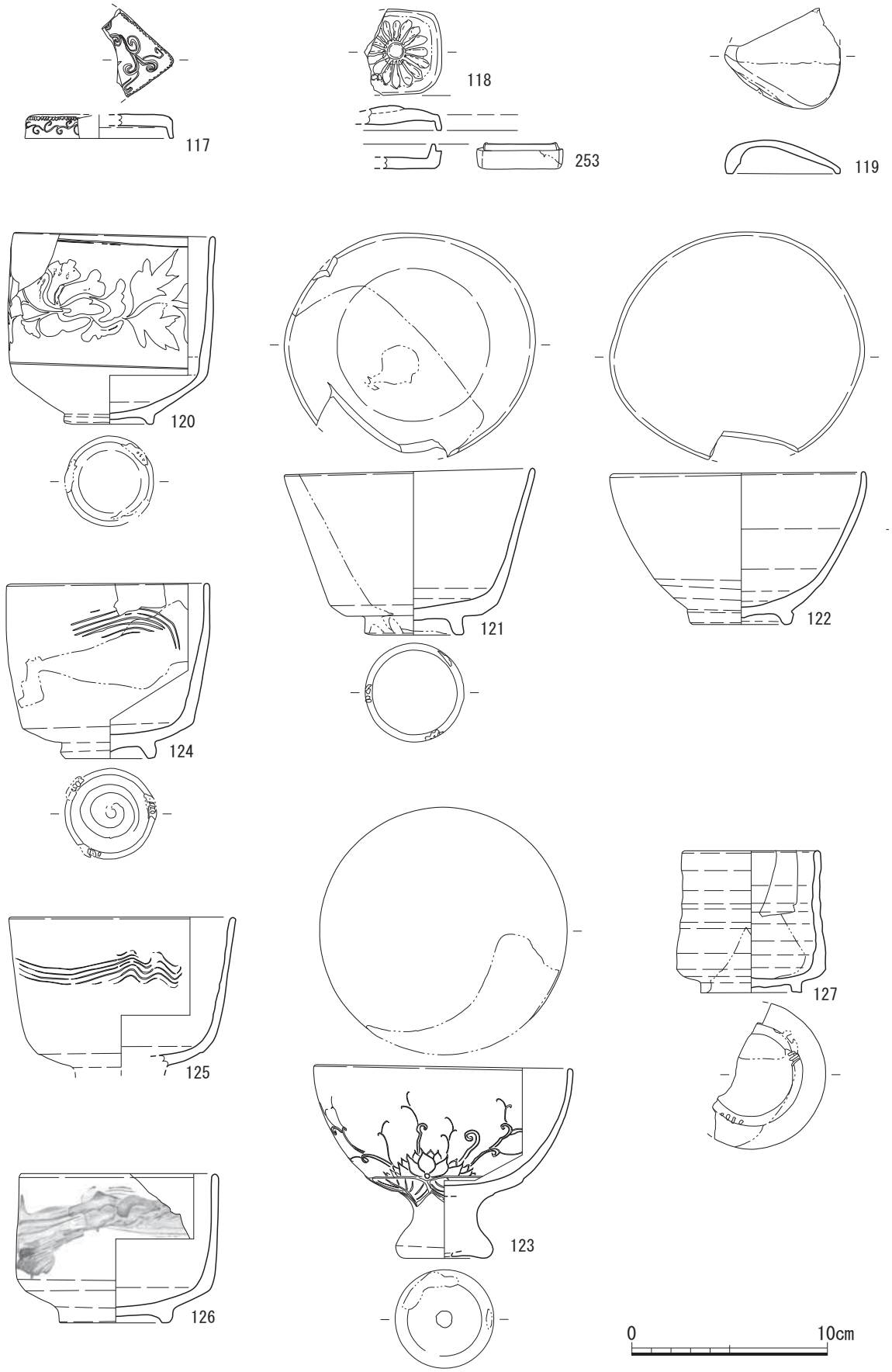
第73図　Ｓ134出土遺物実測図



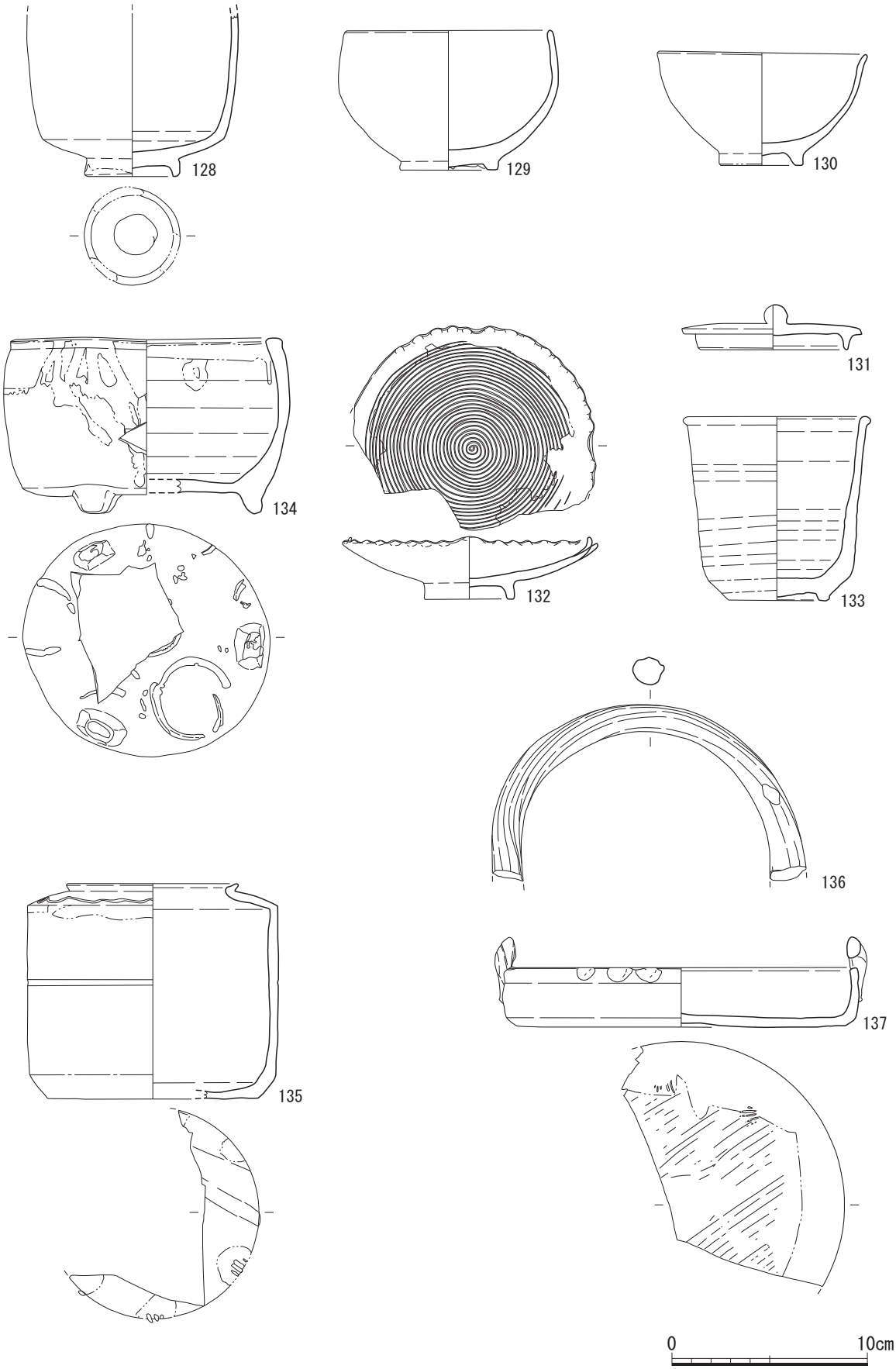
第74図　Ｓ134出土遺物実測図



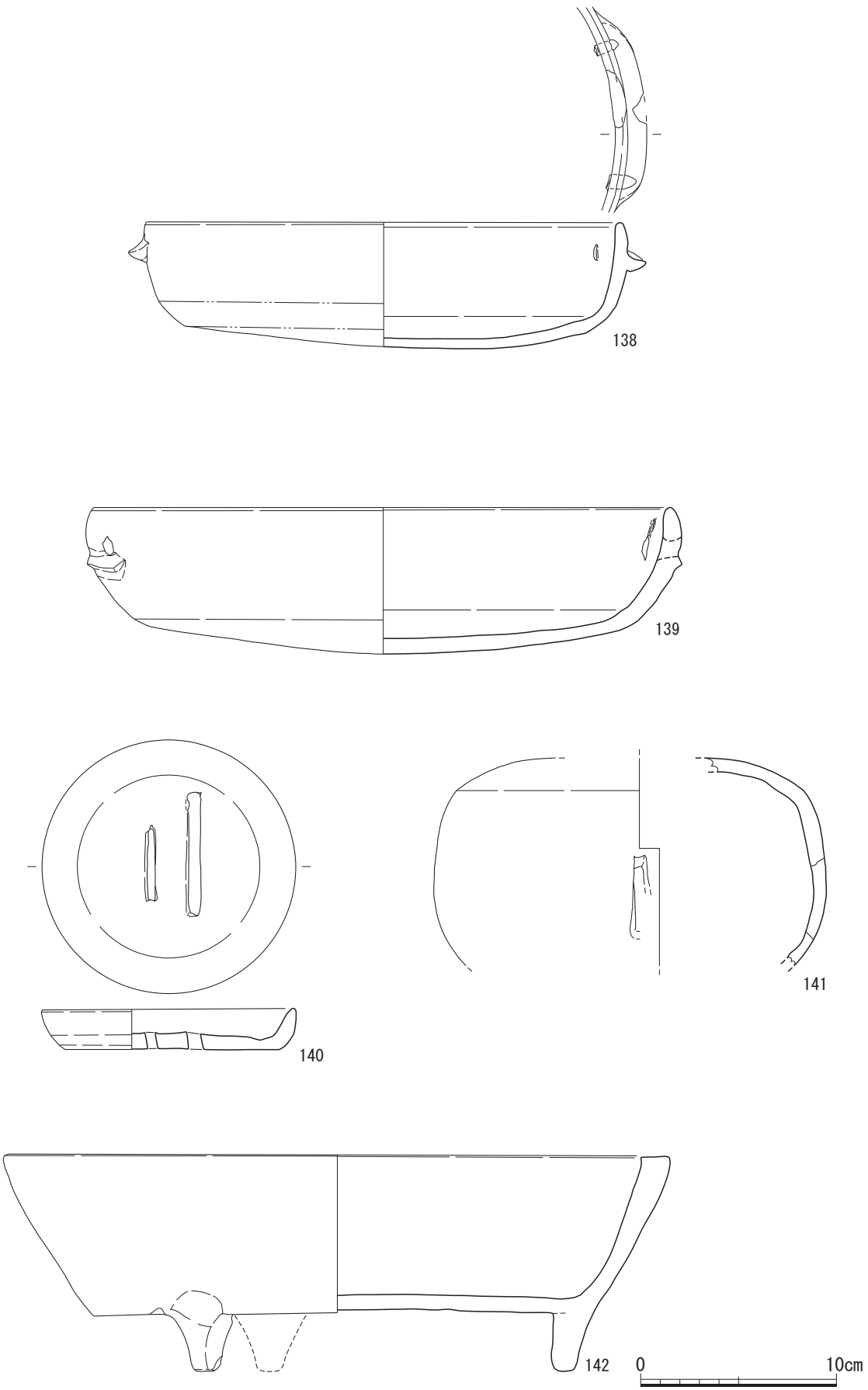
第75図　Ｓ134出土遺物実測図



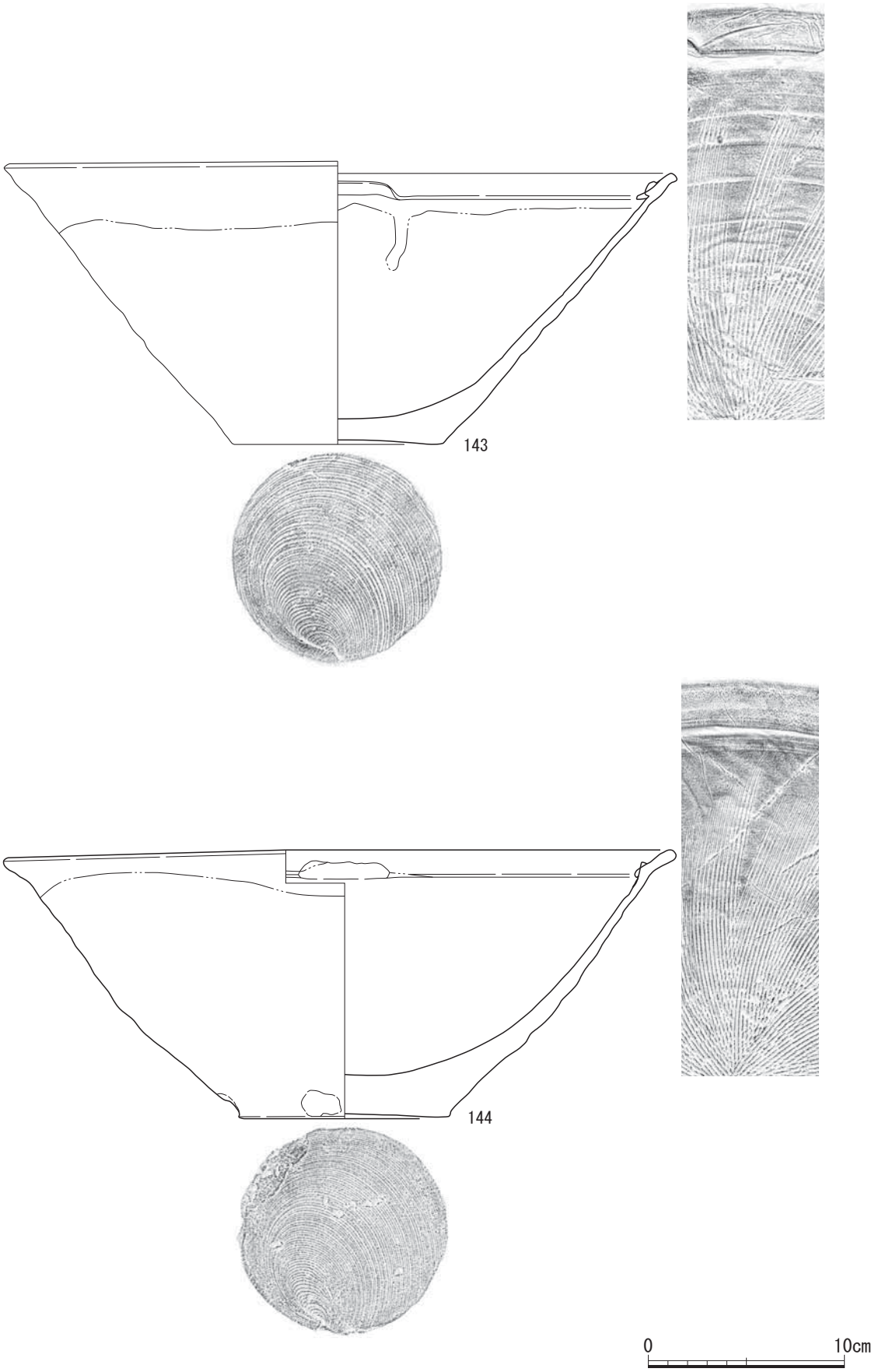
第76図　Ｓ134出土遺物実測図



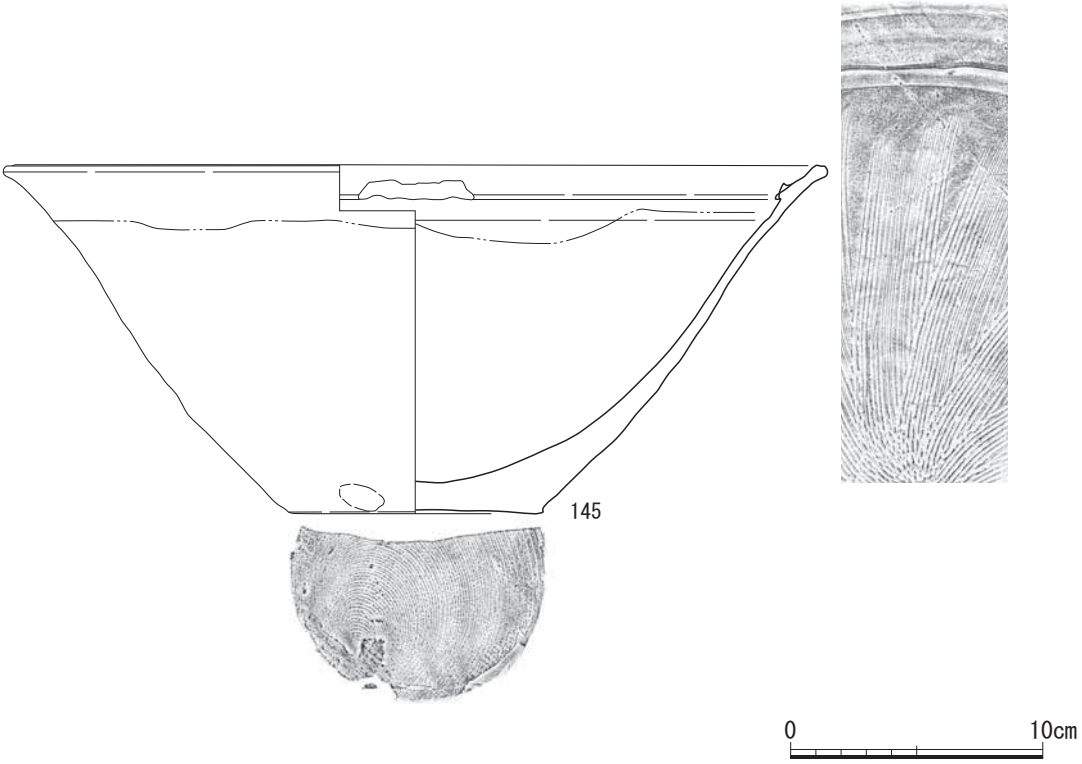
第77図　Ｓ134出土遺物実測図



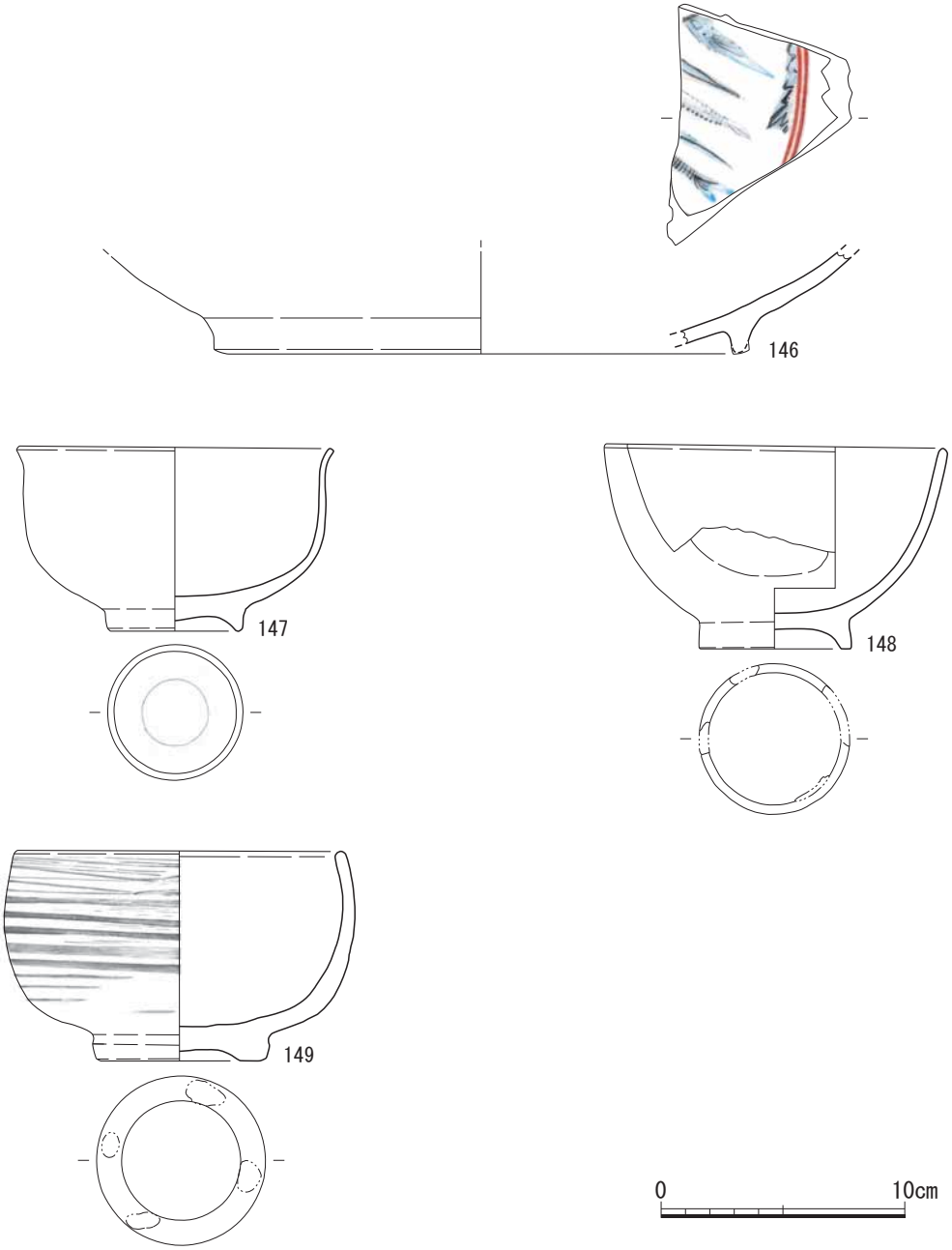
第78図　Ｓ134出土遺物実測図



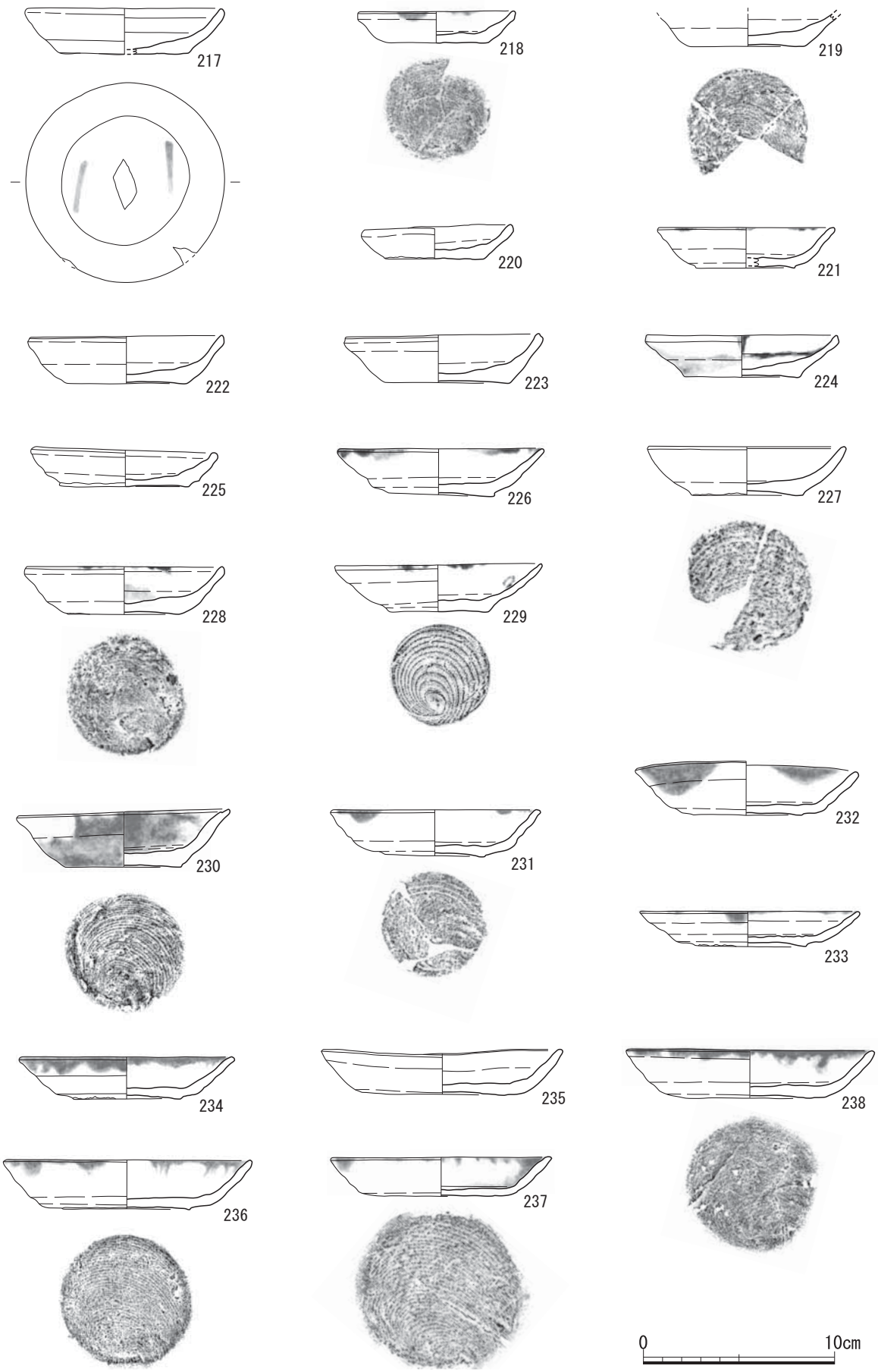
第79図　Ｓ134出土遺物実測図



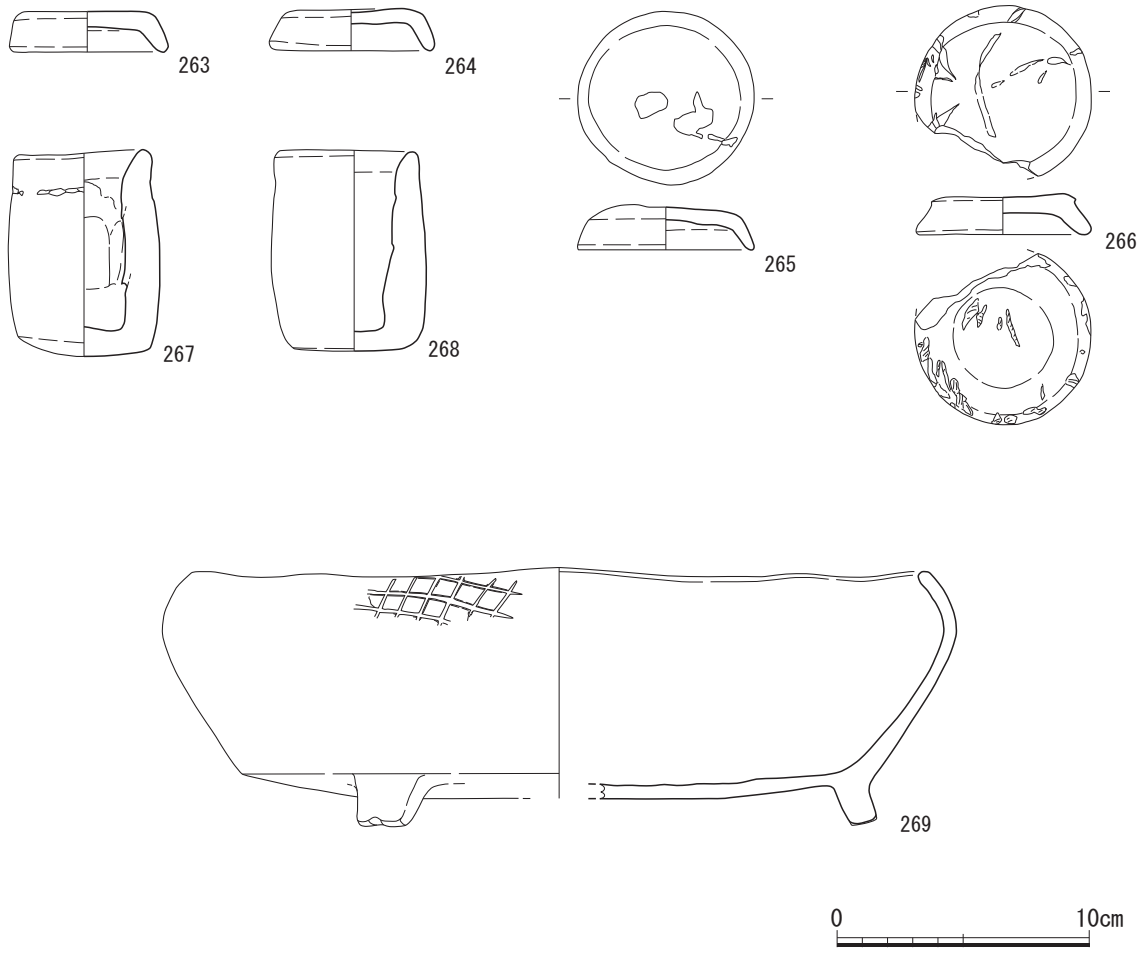
第80図　Ｓ134出土遺物実測図



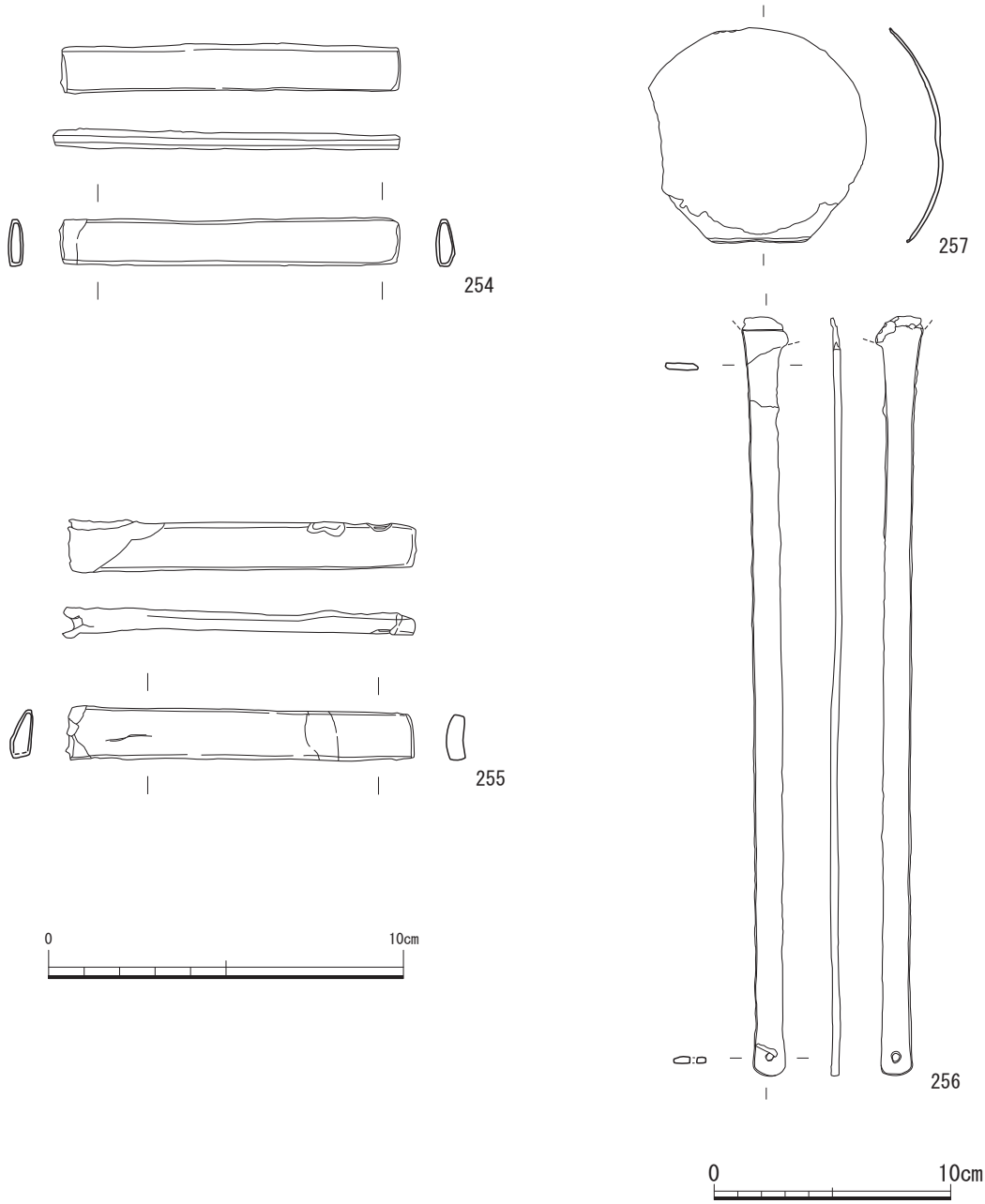
第81図　Ｓ134出土遺物実測図



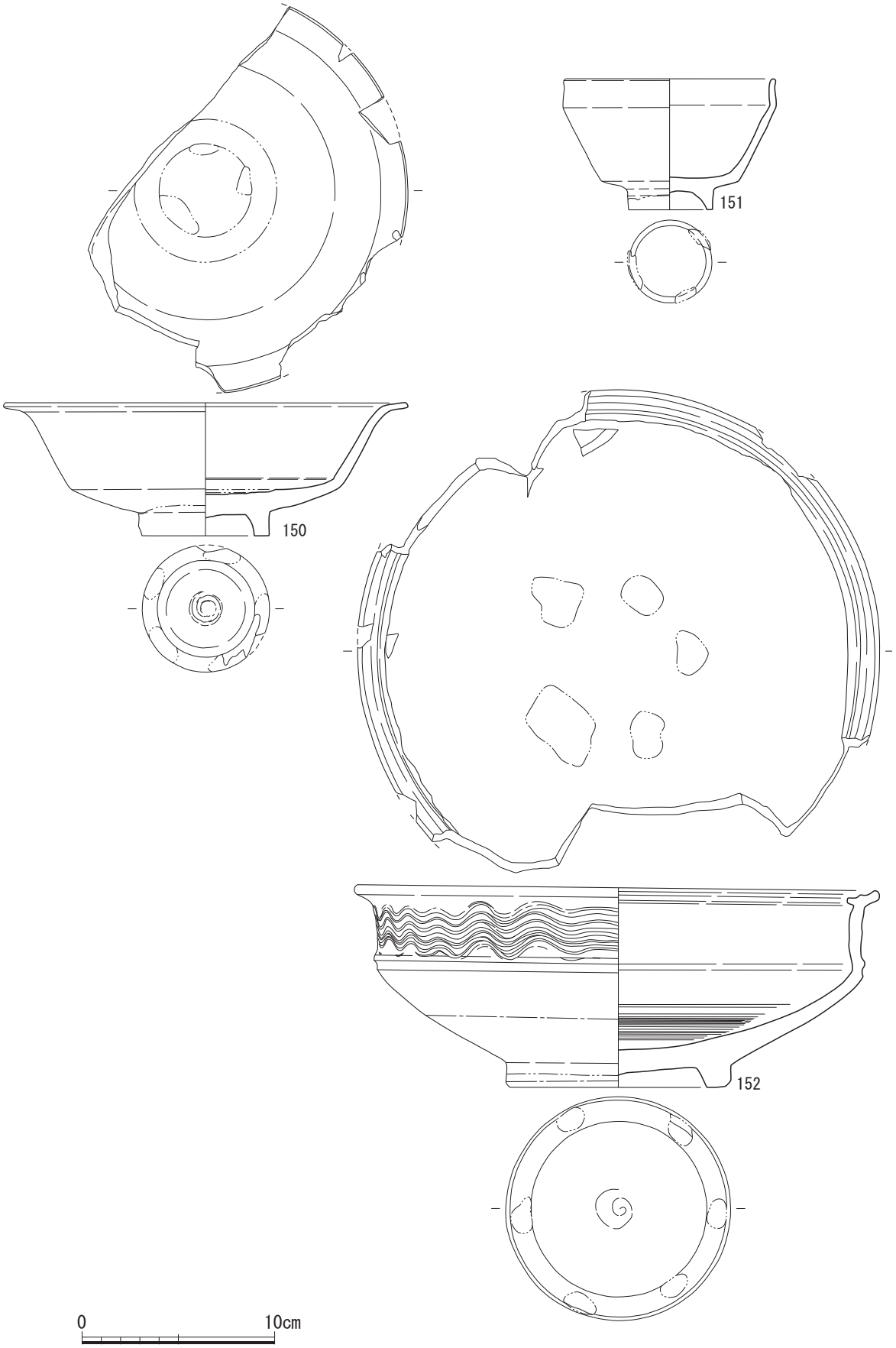
第82図　Ｓ134出土遺物実測図



第83図　Ｓ134出土遺物実測図



第84図　Ｓ134出土遺物実測図



第85図　Ｓ153出土遺物実測図

第４表　陶磁器・土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	産地	出土位置		部位	法量 (cm)				外器面
					遺構	グリッド		口径	底径	器高	高台高	
52	6	陶器	擂鉢		S 005		口縁～底部	(38.0)	13.1	14.45	-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ
53	7	陶器	碗	肥前	S 014		口縁～底部	11.35	5.0	6.85	0.9	-
53	8	陶器	碗	肥前	S 014		口縁～底部	(11.5)	4.7	6.85	0.9	-
53	9	陶器	碗	肥前	S 014		口縁～底部	(11.65)	5.2	6.8	0.9	-
53	10	陶器	鉢	肥前	S 014		口縁～底部	(27.5)	(11.6)	6.55	1.0	-
53	11	陶器	鉢		S 014		口縁～体部	(39.4)	-	(7.9)	-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ
54	12	陶器	碗		S 016		口縁～底部	13.1	5.7	6.7	1.2	-
54	13	磁器	皿	肥前	S 016		口縁～底部	(14.4)	(8.3)	1.85	0.45	-
55	14	陶器	鉢	肥前	S 047		口縁～底部	(35.4)	(13.6)	10.65	1.7	ﾊｹﾒ ｹｽﾞﾘ
56	15	染付	碗	肥前	S 047		口縁～底部	(10.2)	(4.0)	5.5	0.8	-
56	16	染付	蓋付碗	肥前	S 047		口縁～底部	9.5	4.8	6.1	0.65	-
56	17	染付	皿	肥前	S 047		口縁～底部	8.4	4.95	2.05	0.5	-
56	18	染付	皿	肥前	S 047		口縁～底部	(13.9)	(8.0)	3.3	0.6	-
56	19	色絵	蓋	肥前	S 047		上面～底部	(6.8)	-	2.5	-	-
56	20	染付	蓋	肥前	S 047		上面～底部	11.8	-	5.3	-	-
56	21	染付	大皿		S 047		口縁～体部	27.95	-	(4.6)	-	-
56	22	染付	蓋付壺	肥前	S 047		口縁～底部	10.35	9.2	17.2	-	-
56	23	白磁	猪口	肥前	S 047		口縁～体部	9.7	-	(5.8)	-	-
57	24	陶器	碗	京焼系	S 047		口縁～底部	(9.8)	3.3	5.45	0.4	-
57	25	陶器	碗	在地	S 047		口縁～底部	10.7	4.4	5.35	0.5	-
57	26	陶器	碗	在地	S 047		口縁～底部	(12.1)	5.0	7.5	0.8	-
57	27	陶器	碗	現川	S 047		口縁～底部	(11.0)	4.75	6.65	0.8	ﾊｹﾒ
57	28	陶器	碗	肥前	S 047		口縁～底部	(9.8)	(5.8)	7.05	0.8	ﾊｹﾒ
57	29	陶胎染付	碗	肥前	S 047		口縁～底部	(11.0)	5.3	7.3	0.9	-
57	30	陶器	皿	肥前	S 047		口縁～底部	(12.1)	(4.2)	3.8	0.55	断続的なｹｽﾞﾘ
57	31	陶器	蓋付鉢		S 047		口縁～底部	15.8	10.7	6.5	1.7	ﾊｹﾒ
57	32	陶器	雲助		S 047		口縁～底部	-	(14.6)	(30.1)	0.9	-

調整			色調		備考	写真図版
外底面	内器面	内底面	胎土	釉		
回転糸切離し	擂り目 ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	擂り目 ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	鳶色	ｱﾝﾃｨｯｸﾌﾞﾗｳﾝ	擂り目 1 単位 14 本	PL.24
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｸﾘｰﾑ色	焦茶～ ｺｰﾋｰﾌﾞﾗｳﾝ	鉄釉 銅緑釉の碗の胎土に似る	PL.23
ｹｽﾞﾘ後 ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	-	-	ｸﾘｰﾑ色	ｵﾘｰﾌﾞｸﾞﾘｰﾝ 鉄紺 他	内外面に貫入有　内面に透明釉　釉の掛け分け 銅緑釉は厚みがあり釉境に段が出来る	PL.23
釉の掻き取り	-	-	ｸﾘｰﾑｲｴﾛｰ	ﾊﾆｰｽｨｰﾄ	内外面全体に貫入有 鉄絵　17C 後半	PL.24
釉の掻き取り	-	-	ｻﾛｰ	油色　ﾏﾙｰﾝ 高台錆釉	鉄絵 内外面全体に貫入有 外低面に錆釉	PL.24
-	刷毛目	-	ﾃﾗｺｯﾀ	焦茶～鳶色	刷毛目文様　白化粧	PL.24
ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ　櫛目	-	ｷｬﾒﾙ～ ﾃﾗｺｯﾀ	ｵﾘｰﾌﾞｸﾞﾘｰﾝ 灰汁色	高台に面取り　白化粧土 目跡（胎土目）	PL.24
釉の掻き取り	口銹	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白	色絵　1640-50 年代	PL.24
ｹｽﾞﾘ	-	-	ﾁｬｺｰﾙ ｸﾞﾚｰ	ｼﾀﾞｰｸﾞﾘｰﾝ		PL.24
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白	内外面に貫入有 コンニャク印判 による上り藤	PL.24
釉の掻き取り	釉の掻き取り	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ		PL.25
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白	コンニャク印判	PL.25
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾘﾘｰﾎﾜｲﾄ	ﾊﾘ目（ﾊﾘｻｻｴ痕）コンニャク印判	PL.25
-	釉の掻き取り ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	色絵	PL.25
釉の掻き取り	-	-	ｱｲﾎﾞﾘﾎﾜｲﾄ	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	1660-70 年代	PL.25
-	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白	外面に貫入有　型摺り 5 区画の間に同じ文様が入る	PL.25
釉の掻き取り	釉の掻き取り	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾘﾘｰﾎﾜｲﾄ	外面一部に貫入有	PL.25
-	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	口縁輪花　17C 末 -18C 初	PL.26
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｸﾘｰﾑｲｴﾛｰ	白百合色	貫入有　色絵 金彩（劣化している）　18C	PL.26
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｸﾘｰﾑ色	油色	カキ目の痕跡　白土象嵌　17C-18C	PL.26
回転ｹｽﾞﾘ	口縁の一部に ﾊｹﾒ模様	-	灰 汁 色 ～ 枯葉色	鳶色～焦茶	内外面全体に貫入有 白釉による文様	PL.26
釉の掻き取り	-	-	鳶色	焦茶	貫入有	PL.26
釉の掻き取り	-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	鳶色	焦茶	砂目積み痕跡　　白化粧土	PL.26
釉の掻き取り	-	-	ｵｲｽﾀｰ ｷｬﾒﾙ	利休ねずみ他	貫入有	PL.26
ｹｽﾞﾘ	-	見込みに 蛇の目釉剥ぎ	ｸﾘｰﾑ色	ｵﾘｰﾌﾞｸﾞﾘｰﾝ 他	銅緑釉　部分的に釉が流れる　蛇の目釉剥ぎ	PL.26
径 5.5cm 程 の重ね焼き痕 回転ｹｽﾞﾘ	釉の掻き取り	-	ﾍﾞｰｼﾞｭ～ 小麦色	油色	灰釉 高台内側に重ね焼きの痕跡有 口縁端部から内面口縁下まで釉の掻き取りが ある為段重の最下部の可能性有	PL.27
釉の掻き取り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	-	ｷｬﾒﾙ	鳶色 他	化粧土	PL.27

挿図番号	番号	種別	器種	産地	出土位置		部位	法量 (cm)				外器面
					遺構	グリッド		口径	底径	器高	高台高	
58	33	陶器	鉢		S 047		口縁～底部	(31.0)	(12.8)	23.4	1.6	-
59	34	陶器	鉢	肥前	S 047		口縁～体部	(36.2)	-	(15.9)	-	-
59	35	陶器	甕		S 047		体部～底部	-	(23.6)	(21.3)	-	-
61	36	白磁	小坏	肥前	S 073		口縁～底部	5.2	2.2	3.85	0.55	-
61	37	染付	碗	肥前	S 073		口縁～底部	10.1	4.2	7.1	0.9	-
61	38	青磁	小皿	肥前	S 073		口縁～底部	(8.4)	3.0	2.7	-	-
61	39	染付	皿	肥前	S 073		口縁～底部	(20.8)	(7.7)	3.6	0.55	-
61	40	青磁	蓋付壺	肥前	S 073		口縁～体部	(7.1)	-	(7.25)	-	-
61	41	青磁	天目茶碗	肥前	S 073		口縁～体部	(11.6)	(4.4)	7.0	1.1	-
61	42	陶器	天目茶碗	肥前	S 073		口縁～底部	(10.6)	(4.2)	7.3	0.95	-
61	43	染付	碗		S 073		口縁～底部	(11.9)	4.3	5.95	0.8	-
61	44	染付	碗	肥前	S 073		口縁～底部	(11.8)	4.6	5.9	0.8	-
61	45	染付	碗	肥前	S 073		口縁～底部	(15.4)	6.0	6.7	0.85	-
61	46	染付	碗		S 073		口縁～底部	9.7	3.75	5.2	0.7	-
61	47	染付	皿		S 073		口縁～底部	(14.0)	7.1	2.25	0.4	-
62	48	陶器	皿		S 073		口縁～底部	(14.8)	4.75	3.15	0.5	ｹｽﾞﾘ
62	49	陶器	皿	肥前	S 073		口縁～底部	(14.8)	4.6	3.45	0.7	-
62	50	白磁	皿	肥前	S 073		口縁～底部	13.4	4.8	3.05	0.4	-
62	51	陶器	碗	肥前	S 073		体部～底部	-	4.2	(2.15)	0.55	-
62	52	陶器	皿	福岡？	S 073		口縁～底部	(13.3)	5.15	4.6	1.2	ｹｽﾞﾘ
62	53	陶器	碗	肥前？	S 073		口縁～底部	(13.2)	5.6	6.95	0.95	-
62	54	陶器	碗	在地？	S 073		口縁～体部	(10.8)	-	5.0	-	-
63	55	青白磁	合子		S 073		口縁～底部	3.7	(3.45)	1.5	-	-
63	56	陶器	合子蓋		S 073		完形	5.9	5.6	2.15	-	-
63	57	陶器	合子（身）	在地	S 073		完形	5.3	5.3	1.3	-	-

調整			色調		備考	写真図版
外底面	内器面	内底面	胎土	釉		
ｹｽﾞﾘ	-	-	鳶色	ﾗｾｯﾄｺﾞｰﾙﾄﾞ	耳 1 ヶ所残存　化粧土　砂目跡 (4 ヶ所)	PL.27
-	-	-	ﾃﾗｺｯﾀ	ｺｰﾋｰﾌﾞﾗｳﾝ 他	二彩 銅緑釉　鉄柚 化粧土　内器面に貫入有	PL.27
-	-	-	ｼﾙﾊﾞｰｸﾞﾚｲ	焦茶 他	化粧土　外底面に貝目有	PL.27
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｸﾘｰﾑ色	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	片切彫の文様 内外面に粗い貫入有 文様の入れ方と釉の厚みが不均一 焼成時の付着物有	PL.27
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｼﾙﾊﾞｰｸﾞﾚｲ	ﾌﾛｽﾃｨｸﾞﾚｲ 他	網目紋 釉のかかりが不均一	PL.28
釉の掻き取り	-	-	ｱｲﾎﾞﾘ ﾎﾜｲﾄ	裏葉色	口縁は輪花　1630-40 年代 型打ち成形 内外面貫入有 高台碁笥底気味	PL.28
釉の掻き取り	-	-	ｱｲﾎﾞﾘ ﾎﾜｲﾄ	ﾌﾛｽﾃｨｸﾞﾚｲ 他	内面櫛歯文　如意頭　草花文 内外面に貫入有	PL.28
-	-	-	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	ﾌﾛｽﾃｨｸﾞﾚｲ 他	貼り付け文　口唇部は釉剥ぎ 胴部上位に 3 条の沈線　1630-40 年代	PL.28
ｹｽﾞﾘ	-	-	生成色	裏葉色 他	やや高台が大きい	PL.28
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｼﾙﾊﾞｰ ｸﾞﾚｲ	ｴﾎﾞﾆｰﾌﾞﾗｯｸ	付着物有	PL.28
釉の掻き取り	-	-	ｱｲﾎﾞﾘ ﾎﾜｲﾄ	藍白	内面見込みと高台内に銘有 外面に貫入有 網目文	PL.28
-	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ｱｲﾎﾞﾘﾎﾜｲﾄ	草花文 内外面に貫入有 高台内に「大明成化年製」の銘有 足付ハマ痕の跡が 3 ヶ所	PL.28
釉の掻き取り	-	-	ｱｲﾎﾞﾘ ﾎﾜｲﾄ	ﾌﾛｽﾃｨｸﾞﾚｲ	雲流荒磯紋　内外面に貫入有	PL.29
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｫｯｼｭ～ ﾌﾛｽﾃｨｸﾞﾚｲ	高台内に「大明」の銘有	PL.29
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾌﾛｽﾃｨｸﾞﾚｲ	高台内に「大明」の銘有	PL.29
-	-	-	ｼﾙﾊﾞｰ ｸﾞﾚｲ	ﾐｽﾄｸﾞﾘｰﾝ	灰釉　高台見込み兜巾 重ね積みの砂付着　外面若干貫入有	PL.29
釉の掻き取り	-	-	ｱｲﾎﾞﾘ ﾎﾜｲﾄ	ﾊﾆｰｽｨｰﾄ	内外面に細かい貫入有 内面底部目跡（4 ヶ所） 高台底部目跡（4 ヶ所）　線刻文	PL.29
-	沈線	-	ｼﾙﾊﾞｰ ｸﾞﾚｲ	ﾌﾛｽﾃｨｸﾞﾚｲ	砂目積み おれふち皿 内外面に貫入有 内面底部目跡（4 ヶ所） 高台底部目跡（4 ヶ所）	PL.29
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｸﾘｰﾑ色	ﾊﾆｰｽｨｰﾄ 他	鉄絵　内外面に細かい貫入有 高台内に墨書　京焼き風陶器	PL.30
-	-	-	ﾍﾞｰｼﾞｭ	ｵｲｽﾀｰ 他	藁灰釉　内面に貫入有 上野の可能性有　17C 初	PL.29
釉の掻き取り	ﾊﾏ痕？	-	ｸﾘｰﾑｲｴﾛｰ	枯草色	内外面に貫入有　畳付に目跡（5 ヶ所） 17C 前半	PL.29
-	-	-	香色	ｻﾛｰ 他	部分的に釉が剥げている　17C ？	PL.30
釉の掻き取り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	裏葉色	蓋の合わせ部（3 ヶ所）　砂粒付着 底面に 2 ヶ所砂粒付着	PL.30
-	ﾅﾃﾞ	-	ｼﾙﾊﾞｰｸﾞﾚｲ	ﾌﾞﾛﾝｽﾞ	釉剥げ部分有	PL.30
-	-	-	ｼﾙﾊﾞｰｸﾞﾚｲ	ｺｰﾋｰﾌﾞﾗｳﾝ	鉄柚　17C 外面はヘラ削りで 4 足に成形 底部に「籾殻」の痕跡？	PL.30

挿図番号	番号	種別	器種	産地	出土位置		部位	法量 (cm)				外器面
					遺構	グリッド		口径	底径	器高	高台高	
63	58	陶器	合子（身）		S 073		-	(6.8)	(7.6)	1.5	-	釉の掻き取り
63	59	陶器	碗	北部九州	S 073		口縁～底部	(13.2)	4.2	5.8	0.9	-
63	60	陶器	碗		S 073		体部～底部	-	5.05	(6.1)	0.85	-
63	61	陶器	碗	肥前	S 073		口縁～底部	11.95	5.2	6.95	0.8	ｹｽﾞﾘ
63	62	陶器	火入れ	肥前	S 073		口縁～底部	12.5	6.9	6.7	0.8	ｹｽﾞﾘ
63	63	陶器	茶入れ	肥前	S 073		口縁～胴部	3.2	-	(6.8)	-	ﾅﾃﾞ
63	64	陶器	灯明皿		S 073		口縁～底部	-	3.35	(3.5)	-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ
63	65	陶器	壺	肥前	S 073		口縁～底部	(12.0)	7.25	14.5	-	ｹｽﾞﾘ
64	66	陶器	壺	在地？	S 073		口縁～底部	(10.5)	(11.4)	15.0	-	沈線
64	67	陶器	甕		S 073		口縁～体部	(20.1)		(14.65)	-	ｶｷﾒ
64	68	瓦質 土器	三足鉢		S 073		口縁～底部	17.7	16.2	10.6	-	ﾅﾃﾞ
65	69	陶器	蓋付壺	肥前	S 134		-	(6.8)	-	5.2	-	-
65	70	染付	小皿	肥前	S 134		口縁～底部	7.8	2.65	2.2	-	-
65	71	染付	皿	肥前	S 134		口縁～底部	(20.4)	8.6	(3.4)	0.6	-
65	72	青磁	蓋付壺	肥前	S 134		口縁～底部	(7.65)	5.3	13.75	1.1	-
65	73	染付	蓋付壺	肥前	S 134		口縁～底部	(7.8)	(6.0)	12.15	0.95	-
65	74	染付	鉢	肥前	S 134		口縁～底部	22.5	9.0	6.2	1.0	-
66	75	青磁	皿	肥前	S 134		口縁～底部	(19.8)	5.7	4.2	-	-
66	76	青磁	皿	肥前	S 134		口縁～底部	(19.8)	5.65	4.05	-	-
66	77	青磁	鉢	波佐見	S 134		口縁～底部	26.8	6.6	6.95	-	-
67	78	青磁	鉢	肥前	S 134		口縁～底部	23.3	6.0	7.15	-	-
67	79	染付	鉢	肥前	S 134		口縁～底部	24.4	6.3	6.1	-	-
67	80	白磁	小盃	肥前	S 134		口縁～底部	4.75	1.9	3.0	0.4	-
67	81	染付	小盃		S 134		口縁～底部	5.1	2.15	3.85	0.45	-
67	82	染付	碗	肥前	S 134		口縁～底部	(14.8)	6.4	7.3	1.1	-
67	83	染付	碗	肥前	S 134		口縁～底部	(14.4)	5.9	8.4	1.1	-
68	84	白磁	皿	肥前	S 134		口縁～底部	14.0	6.45	2.75	0.5	-
68	85	磁器	碗	肥前	S 134		口縁～底部	(13.0)	4.8	4.95	0.75	-

調整			色調		備考	写真図版
外底面	内器面	内底面	胎土	釉調		
釉の掻き取り 刻み目	-	-	ｵｲｽﾀｰ	レンガ色	唐草文線刻　　平面菱形を呈す	PL.38
釉の掻き取り	-	-	ｵｲｽﾀｰ	ﾐｽﾄｸﾞﾘｰﾝ	白化粧による文様　17C ？	PL.30
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｻﾛｰ	ｺｰﾋｰﾌﾞﾗｳﾝ	釉の掛け分け 高台畳付に 3 ヶ所貝目跡	PL.30
高台見込み 兜中	-	-	ｻﾛｰ 他	ｺｰﾋｰﾌﾞﾗｳﾝ	柿釉　17C 中 - 後半	PL.30
-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	鳶色	焦茶	櫛描文　口縁玉縁状　17C 中 - 末	PL.30
-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	-	れんが色	焦茶		PL.31
回転糸切離し	-	-	ｷｬﾒﾙ	焦茶	内面中央に粘土　内面一部に砂粒付着	PL.31
-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	-	ｼﾙﾊﾞｰｸﾞﾚｲ	ﾗｾｯﾄｺﾞｰﾙﾄﾞ	化粧土	PL.31
-	-	-	鳶色	ﾌﾞﾛﾝｽﾞ	貝目跡　17C ？	PL.31
-	ﾀﾀｷ	-	樺色	鳶色		PL.31
-	ﾅﾃﾞ ｹｽﾞﾘ	-	灰色	灰色	一足欠損　内面に突起上部欠損	PL.31
-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　釉の 掻き取り	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾌﾛｽﾃｨｸﾞﾚｲ	外面に唐草文線刻　1630-50 年代	PL.32
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｫｯｼｭ	高台内に重ね積みの砂付着 口縁輪花（型打ち成形）	PL.32
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎｳｨﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｫｯｼｭ	高台内に重ね積みの砂付着　吹墨	PL.32
ｹｽﾞﾘ	部分的に露胎 ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 釉の掻き取り	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾎﾞﾄﾙｸﾞﾘｰﾝ	釉の掛け分け 外面の貫入	PL.32
釉の掻き取り ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	一部露胎 口縁釉の掻き 取り　ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	-	ｱｲﾎﾞﾘ ﾎﾜｲﾄ	ﾘﾘｰﾎﾜｲﾄ	1630-40 年代	PL.32
釉の掻き取り	-	-	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	白　藍色	1630-40 年代	PL.33
釉の掻き取り	-	片切彫（花文）	ﾌﾞﾙｰ ｳｫｯｼｭ	裏葉色	獣頭形の脚三足　碁笥底高台 貫入有 型押し成形後貼りつけ	PL.33
釉の掻き取り	-	片切彫（花文）	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	裏葉色	獣頭形の脚 2 ヶ残存　　型押し成形後貼りつけ 見込みに片切彫による花文　　碁笥底高台	PL.33
釉の掻き取り	-	片切彫（花文）	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	裏葉色	見込み片切彫 (草花文) 雷文印花 型押し成形後後貼りつけ 貫入有獣　頭形の脚 3 ヶ残存　1630-40 年代	PL.33
面取り 釉の掻き取り	-	片切彫（花文）	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ｺｰﾋｰﾌﾞﾗｳﾝ他	蛇の目釉剥ぎ部分に溶着痕有	PL.34
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	うす水色	銹釉　　三足 (型押し成形後貼り付け） 獣頭形の脚　口縁輪花（型打ち成形）	PL.34
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾌﾛｽﾃｨｸﾞﾚｲ	貫入有	PL.33
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｫｯｼｭ		PL.33
釉の掻き取り	-	-	ｱｲﾎﾞﾘ ﾎﾜｲﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｫｯｼｭ	雲龍文　1655-60 年代	PL.34
釉の掻き取り	-	-	ｱｲﾎﾞﾘ ﾎﾜｲﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｫｯｼｭ	雲龍文 高台内に「大名成化年製」の銘	PL.32
釉の掻き取り	口銹 型打陽刻	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｫｯｼｭ	型成形 碁笥底気味	PL.34
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ｱﾝﾃｨｯｸﾌﾞﾗｳﾝ	色絵 銹釉　金彩？　1650-60 年代	PL.34

挿図番号	番号	種別	器種	産地	出土位置		部位	法量 (cm)				外器面
					遺構	グリッド		口径	底径	器高	高台高	
68	86	磁器	蓋	肥前	S 134		口縁～底部	-	-	(0.75)	-	-
68	87	染付	碗	肥前	S 134		口縁～底部	11.0	4.7	6.1	0.75	-
68	88	染付	皿	肥前	S 134		口縁～底部	19.85	10.1	3.35	0.5	-
68	89	染付	瓶	肥前	S 134		口縁～胴部	3.4	-	(8.3)	-	-
69	90	染付	碗		S 134		口縁～体部	(10.2)	-	(4.0)	-	-
69	91	染付	碗	肥前	S 134		口縁～底部	11.15	4.55	5.65	0.7	-
69	92	染付	鉢		S 134		口縁～底部	(22.0)	7.5	8.45	0.7	-
69	93	染付	皿	肥前	S 134		口縁～底部	15.25	9.1	3.0	0.85	-
69	94	白磁	皿	肥前	S 134		口縁～底部	14.35	6.55	3.5	1.3	-
69	95	白磁	皿		S 134		口縁～底部	14.3	6.6	3.3	1.2	-
69	96	白磁	皿		S 134		口縁～底部	14.4	(6.5)	3.5	1.3	-
70	97	染付	大皿	肥前	S 134		口縁～底部	(40.8)	18.4	7.4	0.8	-
71	98	陶器	碗	肥前	S 134		口縁～底部	(12.25)	4.85	7.7	0.6	-
71	99	陶器	抹茶碗	肥前	S 134		口縁～底部	(11.4)	4.8	6.8	0.6	-
71	100	陶器	碗		S 134		口縁～底部	(11.5)	4.25	8.0	0.6	-
71	101	陶器	素麺手茶碗	肥前	S 134		体部～底部	-	3.9	(4.4)	1.0	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ｹｽﾞﾘ
71	102	陶器	碗	肥前	S 134		口縁～底部	10.55	4.15	7.0	1.1	-
71	103	陶器	向付？		S 134		口縁～底部	(7.35)	7.7	8.2	0.7	-
71	104	陶器	皿		S 134		口縁～体部	12.45	-	(1.9)	-	-
71	105	陶器	皿	肥前	S 134		口縁～底部	(13.4)	(4.3)	3.85	1.6	-
72	106	陶器	碗	肥前	S 134		口縁～底部	(12.6)	(5.0)	7.1	0.55	-
72	107	陶器	碗		S 134		口縁～底部	12.5	4.85	7.35	1.0	-
72	108	陶器	緑釉碗	肥前	S 134		口縁～底部	13.1	5.2	7.2	0.95	-
72	109	陶器	碗	肥前	S 134		口縁～底部	11.3	4.85	7.4	1.2	-
72	110	陶器	碗	肥前	S 134		口縁～底部	14.7	5.1	6.1	1.1	-
72	111	陶器	碗	肥前	S 134		口縁～底部	12.3	4.3	4.5	0.5	-
73	112	陶器	皿	肥前	S 134		口縁～底部	(34.0)	10.9	9.2	1.6	-
74	113	陶器	皿	肥前	S 134		口縁～底部	13.3	4.5	3.1	0.5	-
74	114	陶器	鉢 or 皿	肥前	S 134		口縁～底部	23.7	8.0	6.6	1.35	-
74	115	陶器	皿	肥前	S 134		口縁～底部	(31.4)	(12.2)	8.7	-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ
75	116	陶器	皿		S 134		口縁～底部	(34.3)	12.2	8.6	0.95	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ
76	117	陶器	合子（蓋）		S 134		-	(7.6)	-	1.2	-	刻み目

調整			色調		備考	写真図版
外底面	内器面	内底面	胎土	釉調		
-	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	初期色絵	PL.34
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	高台内「大明年製」の銘　1670-90 年代	PL.35
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白	貫入有　1655-60 年代 見込みにぼたん文様 高台内に銘有	PL.35
-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白	貫入有	PL.35
-	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	色絵　　丸窓宝文 人形 (顔)?	PL.35
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白		PL.35
釉の掻き取り	-	-	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｫｯｼｭ	宝文、呉須と褐色の顔料の 2 色で絵付け	PL.35
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白	高台内にはり支え痕 1 ヶ所 芙蓉手 ? 高台内に「大明成化年製」の銘	PL.35
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｫｯｼｭ	貫入有　歪み有	PL.35
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｫｯｼｭ	貫入有	PL.35
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｫｯｼｭ	貫入有	PL.35
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	口縁輪花を呈す　輸出品 貫入有　高台内に銘	巻頭
ｹｽﾞﾘ	-	-	ﾍﾞｰｼﾞｭ	ｻﾛｰ	鉄絵　貫入有	PL.36
-	-	-	ｴﾎﾞﾆｰ	灰汁色	貝目跡 3 ヶ所	PL.36
釉の掻き取り 籾殻 ?	-	見込みに降灰	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	ﾐｽﾄｸﾞﾘｰﾝ	鉄絵　絵唐津　貫入有	PL.36
-	-	-	ﾃﾗｺｯﾀ	墨色	素麺手（イッチン描き）	PL.36
ｹｽﾞﾘ	-	-	ﾍﾞｰｼﾞｭ	焦茶		PL.36
釉の掻き取り	-	-	ｵｲｽﾀｰ	ｵｲｽﾀｰ	貫入有	PL.36
-	-	-	枯葉色	焦茶	鉄絵　口縁輪花	PL.36
釉の掻き取り	-	-	ｷｬﾒﾙ	枯葉色	鉄絵　口縁輪花 砂目跡	PL.36
釉の掻き取り 面取 ｹｽﾞﾘ	-	-	ｻﾛｰ	ｵﾘｰﾌﾞｸﾞﾘｰﾝ	銅緑釉	PL.36
釉の掻き取り	-	-	ｸﾘｰﾑ色	ﾊﾆｰｽｨｰﾄ	内面に貫入有	PL.37
釉の掻き取り	-	-	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	ｵﾘｰﾌﾞｸﾞﾘｰﾝ	貫入有 銅緑釉 高台に砂付着	PL.37
釉の掻き取り	-	-	ｸﾘｰﾑ色	枯葉色	京風　目跡　貫入有	PL.37
釉の掻き取り	-	-	ｸﾘｰﾑ色	鳥の子色	貫入有	PL.37
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｸﾘｰﾑ色	ｸﾘｰﾑｲｴﾛｰ	鉄絵　京焼き風　貫入有 高台内外に煤 ?	PL.37
ｹｽﾞﾘ	-	-	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	ｻﾛｰ ｷｬﾒﾙ	見込みに砂目 5 ヶ所有 外面底部に墨書有 高台にも砂目の痕跡有	PL.37
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｵｲｽﾀｰ	ｼﾙﾊﾞｰｸﾞﾚｲ	砂目積み 外面に釉のかからない部分有	PL.37
釉の掻き取り	-	-	ｸﾘｰﾑ色	ｸﾘｰﾑｲｴﾛｰ	見込みと高台畳付に 5 ヶ所砂目跡　貫入有	PL.37
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｲｴﾛｰｵｰｶｰ	ﾌﾞﾛﾝｽﾞ ﾓｽｸﾞﾘｰﾝ	内面貫入有 二彩唐津 (銅緑釉) 見込みに 3 ヶ所砂目の痕跡 高台に 3 ヶ所砂目の痕跡	PL.38
ｹｽﾞﾘ	-	-	焦茶	ﾌﾞﾛﾝｽﾞ ﾎﾞﾄﾙｸﾞﾘｰﾝ	内面貫入有 二彩唐津 鉄釉 銅緑釉 化粧土 見込みに 6 ヶ所砂目跡 高台に 6 ヶ所目跡	PL.38
-	ﾅﾃﾞ 釉の掻き取り	ﾅﾃﾞ	ｵｲｽﾀｰ	ｱﾝﾃｨｯｸﾌﾞﾗｳﾝ	天井部と側面に唐草文線刻	PL.38

挿図番号	番号	種別	器種	産地	出土位置		部位	法量 (cm)				外器面
					遺構	グリッド		口径	底径	器高	高台高	
76	118	陶器	合子（蓋）		S 134		-	(4.4)	-	1.3	-	-
76	253	陶器	合子（身）		S 134		-	(4.4)	-	1.4		釉の掛け分け
76	119	染付	合子（蓋）	肥前	S 134		-	(5.9)	-	1.7	-	-
76	120	陶器	抹茶碗		S 134		-	10.3	-	9.8	0.5	-
76	121	陶器	茶碗		S 134		口縁～底部	12.8	5.05	8.5	0.95	-
76	122	陶器	碗		S 134		口縁～底部	13.05～11.8	5.15	7.8	0.7	-
76	123	陶器	碗	在地	S 134		口縁～底部	13.3	5.0	9.9	3.3	-
76	124	陶器	抹茶碗		S 134		口縁～底部	10.4	4.6	8.95	0.85	部分的に露胎
76	125	陶器	碗（象嵌）	在地	S 134		口縁～体部	11.6	-	(7.6)	-	-
76	126	陶器	刷毛目碗		S 134		口縁～底部	10.2	5.8	7.6	0.7	-
76	127	陶器	向付		S 134		口縁～底部	(7.1)	(5.2)	7.25	0.55	-
77	128	陶器	茶碗	在地	S 134		口縁～底部	-	4.9	(8.3)	0.9	-
77	129	陶器	碗	在地？	S 134		口縁～底部	(10.6)	5.0	7.15	0.45	-
77	130	陶器	碗	肥前	S 134		口縁～底部	10.8	4.3	5.85	0.6	-
77	131	陶器	蓋		S 134		完形	7.7	-	2.3	-	-
77	132	陶器	皿	在地	S 134		口縁～底部	(13.05)	4.6	3.15	0.9	-
77	133	陶器	向付		S 134		口縁～底部	(9.6)	5.2	14.5	-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ
77	134	陶器	火入れ（三足）		S 134		口縁～底部	13.9	12.5	9.0	-	-
77	135	陶器	水指	在地？	S 134		口縁～底部	(8.8)	(10.7)	11.1	-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 部分的に露胎
77	136	陶器	把手		S 134		-	長さ 9.0	幅 16.1	厚さ 1.6	-	-
77	137	陶器	菓子鉢		S 134		口縁～底部	(18.0)	(16.8)	3.05	-	-
78	138	瓦質	鍋		S 134		口縁～底部	24.5	20.5	6.5	-	回転ﾅﾃﾞ ｹｽﾞﾘ
78	139	瓦質	鍋		S 134		口縁～底部	(29.8)	-	7.5	-	回転ﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ
78	140	瓦質土器	蓋？		S 134		完形	13.0	10.95	2.1	-	回転ﾅﾃﾞ ｹｽﾞﾘ
78	141	瓦質	-		S 134		胴部	-	-	(10.6)	-	ﾅﾃﾞ　ｶｷﾒ後粗いﾅﾃﾞ

調整			色調		備考	写真図版
外底面	内器面	内底面	胎土	釉調		
-	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ｼﾙﾊﾞｰｸﾞﾚｲ ｵｲｽﾀｰ	ｵﾘｰﾌﾞｸﾞﾘｰﾝ ｺｰﾋｰﾌﾞﾗｳﾝ	花形の貼りつけ文様 釉の掛け分け	PL.38
釉の掻き取り	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ　ﾅﾃﾞ	ｼﾙﾊﾞｰｸﾞﾚｲ ｵｲｽﾀｰ	ｵﾘｰﾌﾞｸﾞﾘｰﾝ ｺｰﾋｰﾌﾞﾗｳﾝ		PL.38
-	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｫｯｼｭ	施釉（呉須・透明釉・錆釉） はまぐり型の蓋　17C	PL.38
-	-	-	ｵｲｽﾀｰ	ﾗｾｯﾄｺﾞｰﾙﾄﾞ	白化粧土による型摺り 高台に貝目跡 口縁部と腰部分の線は象嵌？　　貫入有	PL.38
釉の掻き取り	-	-	ｼﾙﾊﾞｰ ｸﾞﾚｲ	ｻﾛｰ	一部釉変が不完全で剥げているところあり 口縁平面楕円形を呈す 釉の掛け分け 畳付に貝目跡	PL.39
釉の掻き取り	-	-	ｵﾘｰﾌﾞ ﾄﾞﾗﾌﾞ	油色　ﾌﾞﾛﾝｽﾞ	沓形碗 目跡 内底面に降灰	PL.38
-	-	-	ｽｶｲｸﾞﾚｲ	油色 ｻﾛｰ	外面は線刻（蓮華文）　　畳付に目跡 腰部は貼り付け文（葉状） 脚部は袋状になり脚底面中央に穿孔有	PL.39
-	-	-	灰汁色	ｵﾘｰﾌﾞﾄﾞﾗﾌﾞ	象嵌　畳付に貝目跡	PL.38
-	-	-	ﾍﾞｰｼﾞｭ	ﾌﾞﾛﾝｽﾞ	象嵌	PL.39
釉の掻き取り	-	-	ｵｲｽﾀｰ	ﾐｽﾄｸﾞﾘｰﾝ	象嵌　高台内に砂粒付着　化粧土を厚く塗り刷毛目文様を施す　　貫入有	PL.39
-	-	-	弁柄色	焦茶 油色	釉の掛け分け　　畳付に貝目跡	PL.39
釉の掻き取り	-	-	灰汁色	ｵﾘｰﾌﾞﾄﾞﾗﾌﾞ	畳付に目跡　17C	PL.39
釉の掻き取り	-	-	ｻﾛｰ	れんが色	17C ？	PL.39
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｻﾛｰ	鳶色		PL.39
-	-	-	焦茶	ｱﾝﾃｨｯｸﾌﾞﾗｳﾝ	内面柿釉　外面に化粧土	PL.40
-	-	-	灰汁色	ﾗｾｯﾄｺﾞｰﾙﾄﾞ	口縁輪花 (一部平らになっている) 内面は渦巻文　畳付に目跡　17C ？	PL.40
ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	-	れんが色 ～弁柄色	-	無釉	PL.40
-	-	-	灰汁色	ｱﾝﾃｨｯｸﾌﾞﾗｳﾝﾌﾞﾛﾝｽﾞ　焦茶	内外面に鉄釉を施した後、口縁部のみ藁灰釉を施し、最後に口縁部を残し外面部に灰釉を掛ける　　承台痕多数有	PL.40
-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 部分的に露胎	-	ﾚﾝｶﾞ色	鳶色 ｺｰﾋｰﾌﾞﾗｳﾝ	肩部に 1 条の波状文　　高台内に貝目跡 胴部に 1 条の沈線 板状圧痕　17C	PL.40
-	-	-	灰汁色	ﾌﾞﾛﾝｽﾞ	把手のみ残存 菓子鉢？	PL.40
ﾅﾃﾞ	-	-	ﾚﾝｶﾞ色	ｱﾝﾃｯｸﾌﾞﾗｳﾝ	板状圧痕　貝目跡	PL.40
ﾅﾃﾞ 板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰白色	-	内外共に煤付着 特に外器面が厚い 2 ヶ所に耳があり、耳の長さは不均一で、 長いものに孔が 2 個短いものに、孔が 1 個つく	PL.40
板状圧痕	-	ﾅﾃﾞ	灰黄褐色	-	細い粘土を接合した耳が 1 ヶ所残存 耳の両端近くの上部に 1 個ずつ穿痕有り	PL.40
ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	灰黄色 にぶい黄 橙色	-	内面と外面一部煤付着 底部に 2 本の細い切りこみ有	PL.41
回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	-	にぶい黄 橙色	-	内面に厚く油煙付着 透かし有	PL.41

挿図番号	番号	種別	器種	産地	出土位置		部位	法量 (cm)				外器面
					遺構	グリッド		口径	底径	器高	高台高	
78	142	陶質土器	脚付鉢		S 134		口縁～底部	34.05	24.7	11.1	-	ﾅﾃﾞ
79	143	陶器	擂鉢		S 134		口縁～底部	34.3	10.8	14.4	-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ
79	144	陶器	擂鉢		S 134		口縁～底部	34.3	10.75	13.7	-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ
80	145	陶器	擂鉢		S 134		口縁～底部	(32.7)	10.1	16.8	-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ
81	146	磁器	大皿	漳州窯	S 134		体部～底部	-	(22.0)	(4.2)	1.4	-
81	147	陶器	碗	在地？	S 134		口縁～底部	13.0	5.6	7.6	0.95	-
81	148	陶器	碗	肥前	S 134		口縁～底部	14.1	6.25	8.45	1.2	凹み (1 ヶ所)
81	149	陶器	碗	在地	S 134		口縁～底部	13.6	7.0	8.65	1.1	-
85	150	磁器	緑釉皿	内野山窯	S 153		口縁～底部	(22.0)	6.6	6.9	1.25	-
85	151	陶器	碗	内野山窯	S 153		口縁～底部	(11.0)	4.3	6.8	1.1	-
85	152	陶器	鉢		S 153		口縁～底部	27.3	11.65	10.2	1.3	沈線 ｹｽﾞﾘ
53	211	土師器	皿	-	S 014		口縁～底部	(13.0)	7.8	2.5	-	回転ﾅﾃﾞ
54	212	土師器	小皿	-	S 016		口縁～底部	7.6	3.8	1.5	-	回転ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ
60	213	瓦質土器	漆皿	-	S 047		口縁～底部	(12.2)	7.2	2.4	-	-
60	214	土師器	小皿	-	S 047		口縁～底部	(7.6)	4.0	1.1	-	ﾅﾃﾞ
60	215	土師器	小皿	-	S 047		口縁～底部	7.3	4.75	1.5	-	回転ﾅﾃﾞ
60	260	瓦質土器	甕	-	S 047		口縁～底部	(63.8)	(25.0)	61.2	-	ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ
63	216	土師器	小皿	-	S 073		口縁～底部	10.1	5.45	2.1	-	回転ﾅﾃﾞ
82	217	土師器	小皿	-	S 134		口縁～底部	10.4	6.8	2.4	-	回転ﾅﾃﾞ
82	218	土師器	小皿	-	S 134		口縁～底部	(8.3)	5.3	1.7	-	回転ﾅﾃﾞ
82	219	土師器	皿	-	S 134		口縁～底部	-	6.0	1.7	-	回転ﾅﾃﾞ
82	220	土師器	小皿	-	S 134		口縁～底部	7.7	5.2	1.8	-	回転ﾅﾃﾞ
82	221	土師器	小皿	-	S 134		口縁～底部	(9.15)	(5.2)	2.1	-	回転ﾅﾃﾞ
82	222	土師器	小皿	-	S 134		口縁～底部	10.3	6.4	2.5	-	回転ﾅﾃﾞ
82	223	土師器	小皿	-	S 134		口縁～底部	10.4	6.5	2.6	-	回転ﾅﾃﾞ
82	224	土師器	小皿	-	S 134		口縁～底部	(10.0)	6.1	2.2	-	回転ﾅﾃﾞ
82	225	土師器	小皿	-	S 134		口縁～底部	9.8	2.1	6.7	-	回転ﾅﾃﾞ

調整			色調		備考	写真図版
外底面	内器面	内底面	胎土	釉調		
ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	-	内外面に部分的に煤付着	PL.41
回転糸切り離し	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 擂目	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 擂目	ｷｬﾒﾙ	黒柿色	擂目 1 単位 9 本	PL.41
回転糸切り離し	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 擂目	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 擂目	ｷｬﾒﾙ	焦茶	擂目 1 単位 16 本	PL.41
回転糸切り離し	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 擂目	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 擂目	鳶色	ｱﾝﾃｯｸﾌﾞﾗｳﾝ	擂目 1 単位 15 本	PL.41
-	-	-	ｼﾙﾊﾞｰ ｸﾞﾚｲ	ﾐｽﾄｸﾞﾘｰﾝ	色絵　錆釉　　見込み魚文？　17C 前半 全体に釉が厚く、高台畳付部に砂粒が付着	PL.41
沈線	-	-	ｸﾘｰﾑ色	白ゆり色 ｴｸﾘｭ	内面一部と高台内に貫入有　高台に煤付着 畳付に目跡？　17C	PL.42
釉の掻き取り	-	-	ｱｲﾎﾞﾘ ﾎﾜｲﾄ	ｸﾘｰﾑ色	内外共貫入有　畳付に目跡 輸入　17C 前半	PL.41
-	-	-	ｵｲｽﾀｰ	ｵﾘｰﾌﾞﾄﾞﾗﾌﾞ	畳付に貝目跡　　刷毛文様　17C 前半	PL.42
ｹｽﾞﾘ	-	蛇の目釉剥ぎ	ｵｲｽﾀｰ	ｴﾒﾗﾙﾄﾞｸﾞﾘｰﾝ ｻｯｸｽﾌﾞﾙｰ	内外面に粗い貫入有　　見込みに目跡（3 ヶ所） 畳付に目跡（5 ヶ所）　17C 後半	PL.42
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｵｲｽﾀｰ	ｵﾘｰﾌﾞｸﾞﾘｰﾝ ﾅｲﾙﾌﾞﾙｰ	銅緑釉 高台のつけ根部分にくぼみがあり 釉がたまる　　畳付に目跡　17C 後半	PL.42
ｹｽﾞﾘ	ｶｷﾒ？	ﾅﾃﾞ 目跡	鳶色	ﾛｰｽﾞｽﾄｰﾝ	櫛描及状文　内面底部に目跡（5 ヶ所）有 高台底部に目跡（6 ヶ所）有	PL.42
ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰黄褐 10YR6/2	褐灰 10YR6/1	煤付着　　灯明皿	-
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	油煙付着　灯明皿	PL.52
-	-	-	金箔 黒 5YR1.7/1	暗褐色 2.5YR3/6	外面全体に金箔を施す 内面は、部分的に金箔を使用する	-
糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	油煙付着　　焼き歪み	-
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/2	ほぼ全体に墨痕	PL.52
ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ	灰 5Y4/1	灰 5Y4/1	外底面の突帯部分、ﾖｺﾅﾃﾞ 口縁端部から外面にかけてﾖｺﾅﾃﾞ	PL.49
糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ 一部赤色化	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/6	油煙付着 灯明皿	PL.52
糸切り後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	底部に墨痕？	-
糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	油煙付着　灯明皿	-
糸切り	-	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	外底面に板状圧痕？	-
糸切り後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	歪有り	-
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	油煙付着　灯明皿	-
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4		-
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/2	全面に油煙が顕著　灯明皿	PL.52
糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 7.5YR7/3	内面に油煙付着 外面に煤付着	-
ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4		-

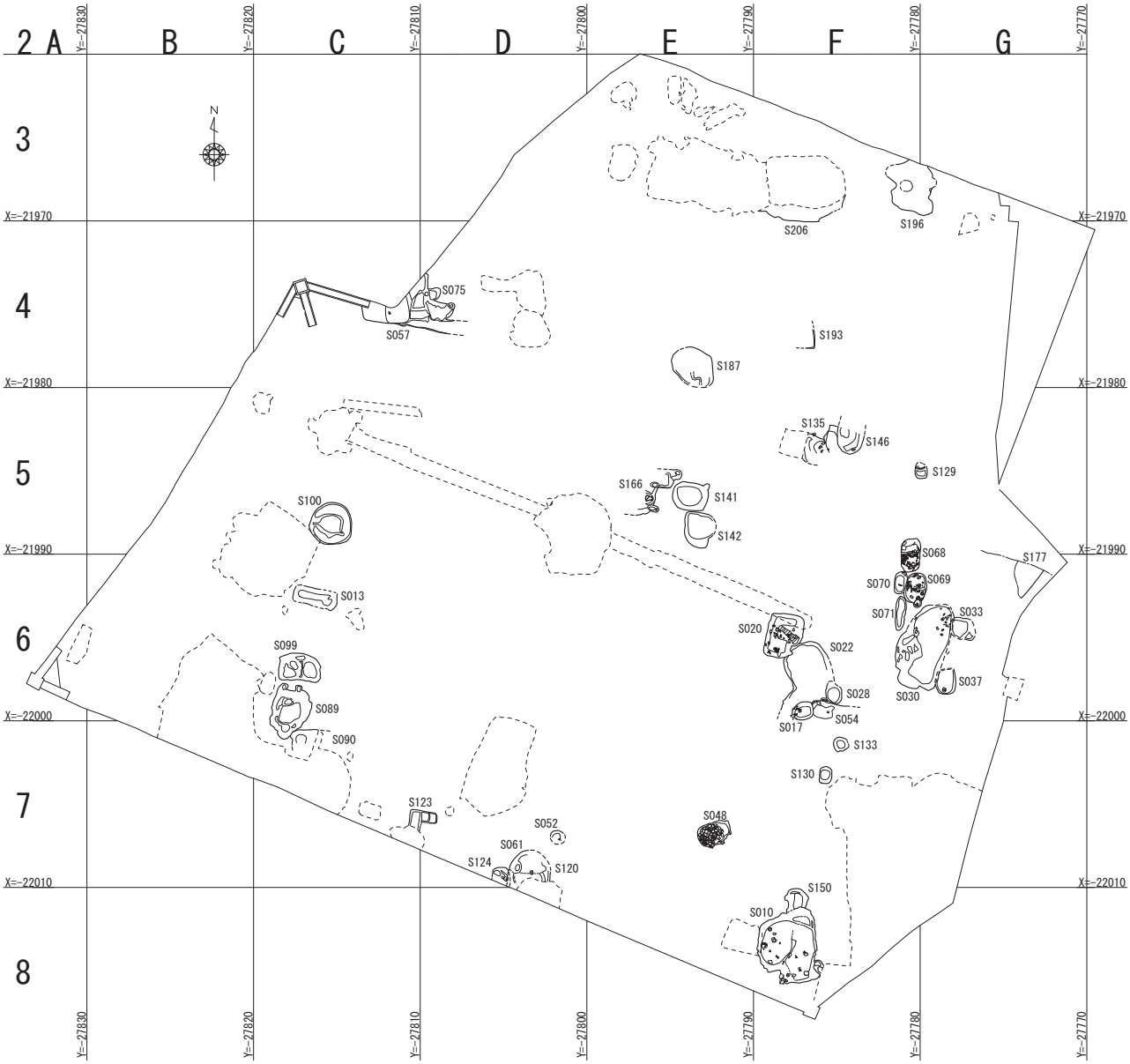
挿図番号	番号	種別	器種	出土地点		部位	法量（cm）			外器面
				遺構	グリッド		口径	器高	底部径	
82	226	土師器	皿	S 134		口縁～底部	10.8	2.5	5.6	回転ﾅﾃﾞ
82	227	土師器	小皿	S 134		口縁～底部	(10.4)	2.6	(3.8)	-
82	228	土師器	小皿	S 134		口縁～底部	(10.5)	2.5	5.8	回転ﾅﾃﾞ
82	229	土師器	小皿	S 134		口縁～底部	10.9	2.5	5.2	回転ﾅﾃﾞ
82	230	土師器	小皿	S 134		口縁～底部	11.2	3.0	6.1	回転ﾅﾃﾞ
82	231	土師器	皿	S 134		口縁～底部	(11.0)	2.5	5.2	回転ﾅﾃﾞ
82	232	土師器	皿	S 134		口縁～底部	11.7	2.8	5.7	回転ﾅﾃﾞ
82	233	土師器	皿	S 134		口縁～底部	11.5	1.9	5.7	回転ﾅﾃﾞ
82	234	土師器	皿	S 134		口縁～底部	(11.1)	2.2	5.6	回転ﾅﾃﾞ
82	235	土師器	皿	S 134		口縁～底部	12.6	2.35	6.7	回転ﾅﾃﾞ
82	236	土師器	皿	S 134		口縁～底部	13.0	2.6	6.6	回転ﾅﾃﾞ
82	237	土師器	皿	S 134		口縁～底部	11.55	2.1	5.8	回転ﾅﾃﾞ
82	238	土師器	皿	S 134		口縁～底部	13.0	2.6	6.8	回転ﾅﾃﾞ
83	269	土師器	脚付鉢	S 134		口縁～底部	(29.3)	10.15	25.2	回転ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ

調整			色調		備考	写真
外底面	内器面	内底面	外面	内面		
糸切り後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	油煙が顕著　灯明皿	PL.52
糸切り	-	-	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4		-
糸切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰白 5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	口縁端部に油煙付着 灯明皿	-
糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/6	油煙付着（芯の跡？）灯明皿	-
糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR76/6	にぶい橙 7.5YR6/4	油煙付着　　灯明皿	-
ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	油煙付着　　灯明皿	-
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR7/6 浅黄橙 10YR8/3	橙 5YR7/6	油煙顕著　　灯明皿	PL.52
糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/4	淡橙 5YR8/4	油煙付着 灯明皿	-
糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/3 橙 7.5YR7/6	油煙が顕著 灯明皿	PL.52
糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4		-
糸切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	油煙が顕著 灯明皿	PL.52
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/3	浅黄橙 7.5YR8/3	油煙付着　灯明皿	PL.52
糸切り後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	油煙が顕著 灯明皿	PL.52
回転ｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	底面中央に凹み。脚が 3 ヶ所付くと思われる。口縁部は部分的に格子ﾀﾀｷにより輪花を呈する。　　煤付着	PL.31

作業風景

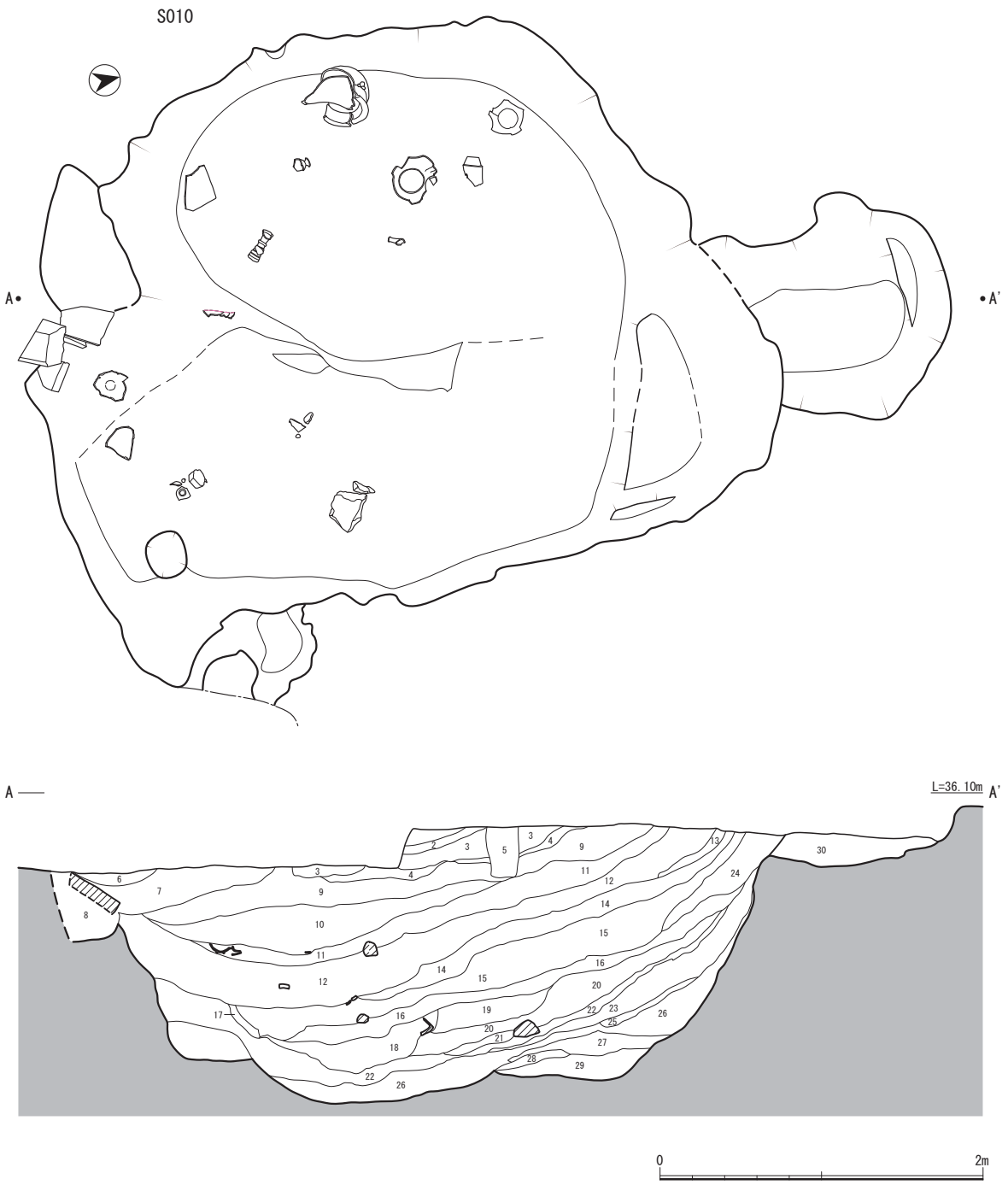
S069・S070 土層断面

第5節　細川期の遺構　(Ｖ期)



Ｖ期　S=1/400

第86図　Ｖ期遺構配置図(1/400)



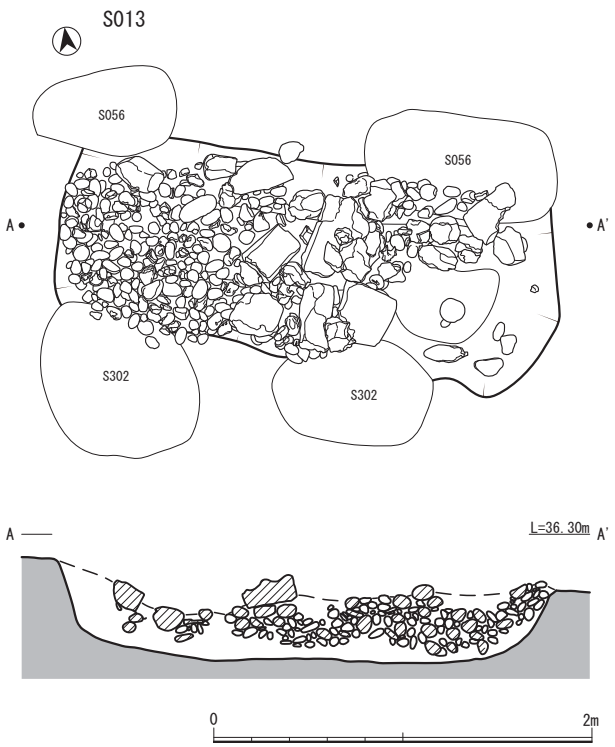
第87図　Ｓ010遺構実測図

Ｓ010(第87図)

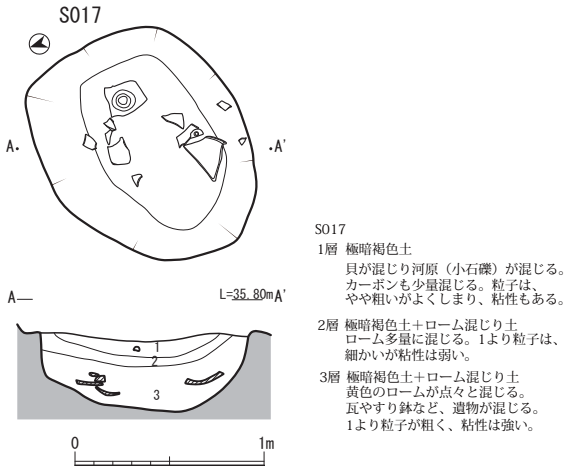
Ｆ－8区に位置する。Ｓ150を切る。南北軸460cm、東西軸360cmの大型土坑で、中央部に南から北に張り出した稜線が延び、底部を2分しているが切り合いではない。深さは水準線より1.8mで大量の遺物が出土した。柿右衛門手の鉢や茶入れ、九谷、阿蘭陀などの破片も出土する。

S010

1層	灰白色土	灰白色粘質土に砂粒や暗褐色土の粒が少し混じる。
2層	淡褐色土	目の細かな淡褐色土(暗褐色土と黄褐色土が均等に混じったもの)に 2～5cm大の灰黄褐色土のロームのブロックやカーボンの粒がまじる。
3層	淡褐色土	2層の土に灰色の砂質土が層状に重なる。
4層	淡灰褐色土	目の細かなサラサラとした土に1cm大の黄褐色、灰白色のロームの粒が混じる。
5層	暗褐色土	柱痕、ボロボロとした粘質の土。
6層	黒褐色土＋橙色土	黒褐色粘質土に橙色粘質土の5cm大のブロックが混じる。
7層	暗褐色土	暗褐色 粘質土をベースに2cm大の橙色 粘質土、灰白色 粘質土、礫が混じる。
8層	黒褐色土	砂質土と暗褐色土が混じり合い、ボロボロとやわらかい。
9層	淡灰褐色土	粘質の淡灰褐色土にロームのブロックやカーボンが著しく混じり、全体に汚れている。
10層	淡黄灰褐色土	目の粗い砂質土で、ザラザラとしている。中に2cm大の黄褐色ロームが混じる。
11層	灰褐色土	灰褐色の 粘質に1cm大の小石の粒や、5cm大のロームなどが混じり、ボロボロとしている。
12層	灰褐色土	粘質土を基本に10cm大の軽石や1cm大の小石が多く混じり、バラバラしている。
13層	黄褐色土	黄褐色 粘質土がブロックで入る。
14層	淡灰褐色土	砂質土で目が細かくザラザラしている。
15層	灰褐色土	砂質土でザラザラしている。5～10cm大の軽石を多く含む。
16層	暗褐色土＋灰褐色土	粘質の灰白色土が中心にかたまり、層をつくっている。両脇に暗褐色が入る。
17層	灰黄褐色土	純粋な灰黄褐色土のブロックが入る。
18層	灰褐色土	粘質の灰褐色土・暗褐色土と灰白色土が均等にまざったものにカーボンが大量に混じる。
19層	淡褐色土	粘質土でカーボンを含み、密でしまりがある。
20層	淡褐色土	砂質土でザラザラしている。1cm大のロームの粒やカーボンが混じる。
21層	灰色土	目の細かな砂層
22層	暗褐色土	目の細かなシルト質の砂質土で密でやわらかい。
23層	褐色土＋黄褐色土	粘質の褐色土に3cm大の黄褐色土のブロックが入る。砂粒も多くザラザラしている。
24層	暗褐色土	砂質土で1cm大の黄褐色ロームのブロックや、軽石の粒が入り、バラバラとしている。
25層	淡褐色土	目の細かな砂で混じりが少ない。やわらか。
26層	淡灰褐色土	粘質土で5mm大の黄褐色ロームの粒や軽石の粒、カーボンが 混じり、密である。
27層	橙色土	橙色 粘質土を基本に黄褐色土がブロックで混じる。
28層	暗褐色土＋黄褐色土	暗褐色土と黄褐色土がブロックで混じる。
29層	橙色土	ほぼ 純粋なローム。
30層	暗褐色土＋黄褐色土	暗褐色土 粘質土に5cm大のロームのブロックが 混じる。



第88図　Ｓ013遺構実測図



第89図　Ｓ017遺構実測図

Ｓ013(第88図)

Ｃ－6区に位置する。隈本城遺構であるＳ234，Ｓ235の柱穴を切る。南北軸100cm、東西軸260cmの方形土坑で、深さは水準線より60cm。底面5cmほど上から大量の礫が入る。

Ｓ017(第89図)

Ｆ－6区に位置する。南北軸110cm、東西軸120cmの土坑で、深さは水準線より60cm。

Ｓ020(第90図)

Ｆ－6区に位置する。南北軸270cm、東西軸220cmの土坑で、深さは水準線より140cm。南北に長軸をとる方形の土坑で、南東より地山を削りだした6段の階段があり、使用時は地下式倉庫として使用されたものであろう。最終形態は廃棄用土坑として使用されたようで、土層の中位には消臭のために炭を敷き詰めた層が観察できる。遺物も大量に出土した。

Ｓ022

Ｆ－6区に位置する大型土坑。浅く、遺物の出土は少量。

Ｓ028

Ｆ－6区に位置する。Ｓ041に切られる。南北軸110cm、東西軸90cmの土坑で、深さは水準線より35cm。

Ｓ030

Ｆ、Ｇ－6区に位置する。Ｓ032、033、34に切られ、Ｓ027、031、036を切る。南北軸540cm、東西軸290cmの土坑で、深さは水準線より100cm。

Ｓ033(第91図)

Ｇ－6区に位置する。Ｓ030を切り、Ｓ035に切られる。南北軸130cm、東西軸120cmの土坑。

Ｓ037(第91図)

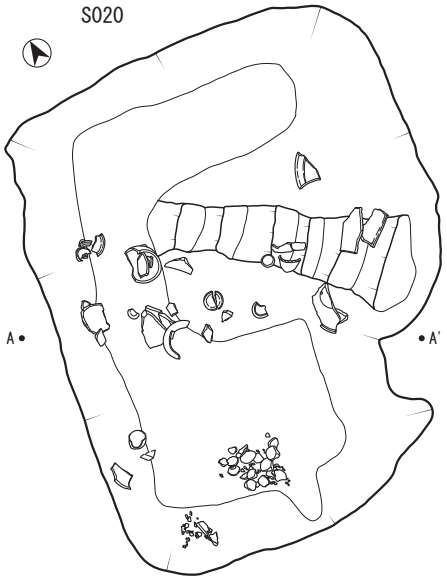
Ｇ－6区に位置する。Ｓ030、Ｓ032を切る。南北軸150cm、東西軸130cmの土坑。

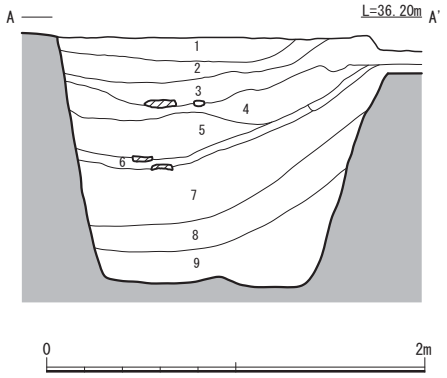
Ｓ048(第92図)

Ｅ－7区に位置する。Ｓ082、Ｓ083に切られる。南北軸120cm、東西軸200cmの土坑。深さは水準線より60cm。埋土中に2～30cmの角礫を多く埋め込んである。

Ｓ052

Ｄ－7区に位置する円形土坑。Ｓ065を切る。





S020

１層 暗褐色土	5～10cm大の砂粒を中心に固まっている。カーボンと30mm大のロームのブロックが混じる。
２層 黄褐色土＋暗褐色土	黄褐色土のブロックが多く混じり、粘性を持ってしまる。
３層 黄褐色土＋暗褐色土	2より、黄褐色土の割合が減り、やわらかい。
４層 暗褐色土	5mm大の砂粒が中心でバラバラとまとまりがない。上面に貝層がありカーボンも混じる。
5層　暗褐色土	粘性を持ち、ブロックごとに固まる。黄褐色土の10mm大のブロックとカーボンが混じる。
６層 カーボン層	土壌の混じりなく、純粋
７層 褐色土層	5～10mm大の褐色の土やFeを混じった粒が集まり、ボロボロともろい、貝を含む。
８層 暗褐色土	細かな暗褐色土で間にカーボンの集まるPａｃｋしている。やわらかく、もろい。
９層 黒褐色土	1～2mm大の細かな黒褐色土の粒で軟らかくてもろい。

第90図　Ｓ020遺構実測図

Ｓ053(PL.17)

Ｆ－6区に位置する小土坑。黒い堆積土が一面に広がる区域で、土層確認のために入れた第2トレンチの壁面より検出。Ｓ054を切る形で小さな掘り方があり、陶器の小型の甕が完形で出土した。甕には瓦の破片で蓋がされ、紐で封をしてあった。甕の内部には埋土のみで遺物はなかった。

Ｓ054(第93図)

Ｆ－6区に位置する。Ｓ053に切られ、Ｓ016を切り、Ｓ017に切られる。南北軸100cm、東西軸150cmの土坑。深さは水準線より60cm。

Ｓ057(第94図)

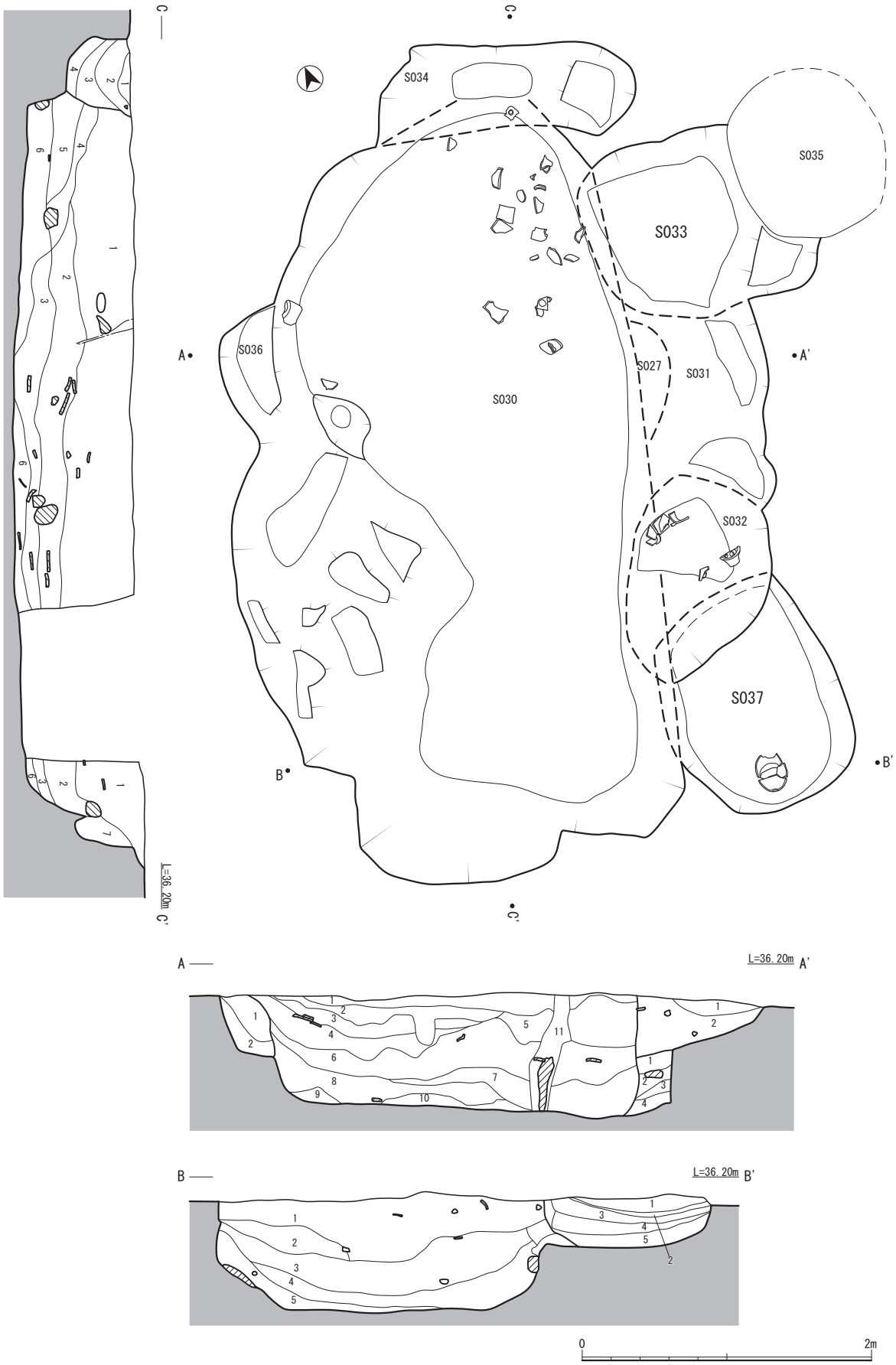
Ｃ－4区に位置する。不定形の土坑であるが、中央部は平坦な底面を持つ土坑となる。東側にテラス状の段差がある。北側は調査区外となり全容は不明であるが、東西軸は420cm。深さは水準線より130cm。

Ｓ061

Ｄ－7区に位置する。Ｓ005，006、120、140を切っているが、南側は撹乱を受けている。

Ｓ068(第95図)

Ｆ－5区に位置する。Ｓ046を切る。南北軸195cm、東西軸115cmで、深さは水準線より110cmの隅丸方形の土坑。下層に厚い炭の層があり、大量の遺物が出土。埋土の底面に瓦が集中し大量に廃棄してあった。



第91図　Ｓ033・Ｓ037遺構実測図

S027

1層	極暗褐色	ロームまじり土	極暗褐色とピンクのロームが半々まじる。粒はやや粗く、砂粒礫は微量に混じる。土は軟らかく、ややしまりがある。粘性なロームが混じっている為ある。
2層	極暗褐色	ロームまじり土	1層より濃い極暗褐色で、粒子は1層より細かい。砂粒礫は1層と同量ほど混じり、1層より軟らかい土である。拳大の軽石を包含する。粘性は1層より弱い。
3層	極暗褐色	シルト	粒子は1層より細かい。砂粒礫は微量に混じる。カーボンを微量に包含し、1層より粘性は弱い。
4層	極暗褐色	シルト	3層より極暗褐色で粒子はどれよりも粗い。砂粒礫は多く混入し、土そのものは軟らかく2層よりも粘性はある。
1層	薄暗褐色	カーボン包含層	土色は薄い暗褐色というか、灰褐色にも近似。粒度は粗い。礫は5mm大の砂粒を中心として混じる。土はやや硬いがしまらない。カーボンを多量に包含し、遺物も混じる。粘性は弱い。
2層	薄い暗褐色	小礫多量包含土	土色は薄い暗褐色。粒度は1層より粗い。礫は5mm～3cmほどの小礫が多く混じる。1層よりも軟らかい土。軽石が少し混じる。粘性は1層より強い。

S030

1層	暗褐色	シルト	土色は黒い褐色で、粒子はやや粗い。小さな礫(丸石)が微量にまじる。やや硬い土である。カーボン、ロームが点々とわずかに混じる。粘性もややある。
2層	灰褐色	シルト	土色は灰褐色が主で、暗褐色が部分的に混じる。粘性もややある。
3層	暗褐色	シルト	薄い暗褐色で、粒子は2層より粗い。角ばった小さな礫が少し混じり、1層よりも軟らかく2層より多く鉄分を包含する。粘性は2層よりも弱い。
4層	暗褐色	シルト	粒子が3層より粗く、砂粒が部分的に混入している。3層より硬い土である。カーボンと鉄分を少量包含している。粘性は3層よりも弱い。
5層	暗褐色	シルト	土色は薄い暗褐色で、粒子は6層より細かい。礫は直径3cmほどの河原石が数点と3mmほどの砂粒がまばらに混入する。6層よりしっかりした土で、6層より粘性は強い。カーボンがまばらに混じる。
6層	暗褐色	シルト	土色は1層よりもやや薄く、粒子は1層よりも粗く、小さな丸石がわずかに混じる。土は1層よりも硬く、土は3層ほどの鉄分を含み、磁器や瓦などの遺物が混じる。粘性は2層より強い。
7層	暗褐色	シルト	土色は6層と近似しており、砂粒礫が微量に混じる。土は6層より軟らかく、粒子は2層より弱い。カーボンを微量に包含し、粘性は6層より少ない。
8層	暗褐色	シルト	1層～8層の中では濃い暗褐色をしている。1層～8層の中で粒子は一番粗く、砂粒礫も包含する。土は2層の次に軟らかいという感じで、カーボンを多く包含している。粘性は6層より強い。
9層	灰白色	ローム土	土色は灰白色、黄色ローム、橙色ロームが主で、粒度は細かい。5mmほどの軽石が混入する。土は軟らかい。包含物も特にない。粘性はある。
10層	うすい桃色	シルト	ピンクのロームが多く混じり、次に黄色ロームが混じり、次に極暗褐色が混じる。粒度は9層より細かく、9層より軟らかい。包含物も特にない。粘性は9より強い。
11層	灰白色	カクラン	上部10cmほどは暗褐色でそれより下が灰白色となる。粒子は1層～10層よりも粗く、角ばった石や河原石などが混入する。土は軟らかいがしまらない土で粘性も弱い。
1層	暗褐色	シルト	陶器、小礫(河原石)、カーボンが混じる。粘性が少なく、粒子も粗い。
2層	褐色	シルト	瓦、カーボンが混じる。性質は1層と近似している為、比較できない。
3層	暗褐色(1層より濃い)	シルト	礫、カーボンが混じる。1、2層より粘性はあるが、粒子は粗い。
4層	暗褐色	ローム混じり土	カーボン及び少量のピンクロームが混じる。3層より粘性は強く、粒子も細かい。(1、2層よりも粒子が細かい)
5層	暗褐色	ローム混じり土	白色化した木片が混じる。ピンクのロームが4層よりも多く混じる。
1層	暗褐色	シルト	弱溶結凝灰岩、カーボン、礫が混じる。粘性もあり、しまる土ではあるが、粒子は粗い。
2層	暗褐色	シルト	黄色のロームが点々とわずかに混じる。カーボンも少量混じる。2層より粒子は粗いが、粘性は強い。
3層	暗褐色	粘性土	鉄分が混じる。少量のカーボンが混じる。1層より粒子が細かく粘性も強い。しまる土である。
4層	暗褐色	シルト	黄色のロームが微量に混じり、鉄分も微量に混じる。カーボンも少量混じる。2層より粒子が細かく、1層より粘性が強い。
5層	褐色	ローム混じり土	黄色とピンクのロームが多量に混じる。小礫(河原石)も混じる。4層より粒子が細かく、4層より粘性は弱く、4層よりもしまらない。
6層	暗褐色	ローム混じり土	カーボンが混じり、丸礫(河原石)、瓦が混じる。鉄分も混じる。ピンクのロームが少量混じる。粒子は3層より細かく、2層より粘性が強い。
7層	極暗褐色	弱粘質土	粒度は細かく、礫質の混入はない。土質は1、2、3層より軟らかい。包含物としては、カーボンと根が混じる。粘性は3層より弱い。

S034

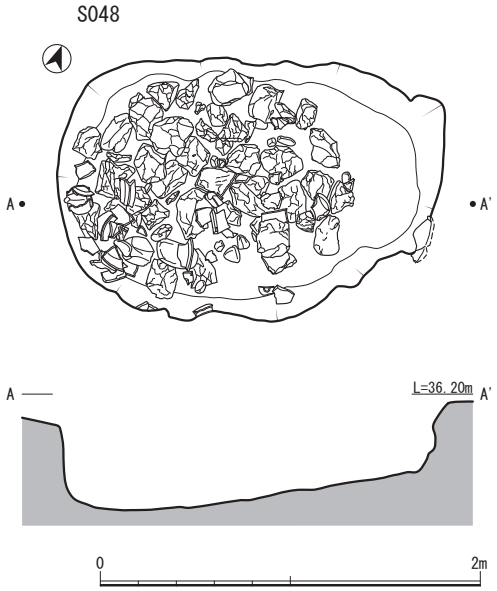
1層	暗褐色	ローム混じり土	カーボン及び黄色のロームが点々と混じる。粒子は細かく、粘性もある。
2層	暗褐色	シルト	磁器が1点混じる。小さな砂利が混じる。1層より粒子は粗く、粘性も弱い。
3層	暗褐色	シルト	カーボンがわずかに混じる。1層より粒子は細かく、2層より粘性は強い。
4層	暗褐色	シルト	ピンクのロームが点々とわずかに混じる。3層より粒子は細かく、1層より粘性も強い。

S036

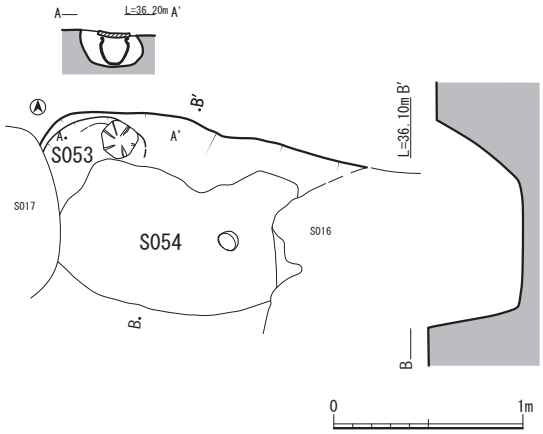
1層	暗褐色	鉄分包含土	粒子は細かく礫は混入していない。やや硬い。ピンクのロームが微量に混じり、粘性もある。
2層	極灰褐色	ローム混じり土	土色はグレーに近似している。1層より粒子は細かい。礫は混入していない。1層より軟らかく粘性もある。ピンクのロームがまばらに混じる。

S037

1層	灰褐色	灰土	灰層が固まった埋土が主で粒子が細かく粘性は弱い。所々石灰層のような白いものが混じる。
2層	暗褐色	カーボン包含土	カーボンが多量に混じる。ほとんどがカーボンの為性質については省略。
3層	暗褐色	シルト	1層の埋土が点々と混じる。1層より粒子が粗く、粘性は強い。
4層	暗褐色	カーボン包含土	2層より少ない量のカーボンが混じる。小礫が点々と混じる。粒子は3層より粗く、3層より粘性強い。
5層	暗褐色	ローム混じり土	ピンクのロームが少量混じる。1層より粘性は強く、3層より粒子は細かい。



第92図　Ｓ048遺構実測図



第93図　Ｓ054遺構実測図

Ｓ069(第96図)

Ｆ、Ｇ－6区に位置する。Ｓ046、070を切る。南北軸180cm、東西軸125cmで、深さは水準線より50cmの楕円形土坑。底部は平坦ではない。

Ｓ070(第96図)

Ｆ、Ｇ－6区に位置する。Ｓ046を切り、069に切られる。南北軸135cm、東西軸70cmで、深さは水準線より45cmの楕円形土坑。

Ｓ071(第97図)

Ｆ－6区に位置する。Ｓ046を切る。南北軸200cm、東西軸60cmで、深さは水準線より15cm。3層に分層できるが、比較的短時間に埋め戻された痕跡がある。

Ｓ075

Ｄ－4区に位置する。Ｓ057に切られる。

Ｓ089(第98図)

Ｃ－6、7区に位置する。不定形土坑で、南北軸290cm、東西軸230cmで、深さは水準線より90cm。5層に分層でき、最上層は近代の遺構であるＳ002の基礎で攪乱されている。平坦な中央部にむかって上端からゆるやかな傾斜を持つ。

Ｓ090

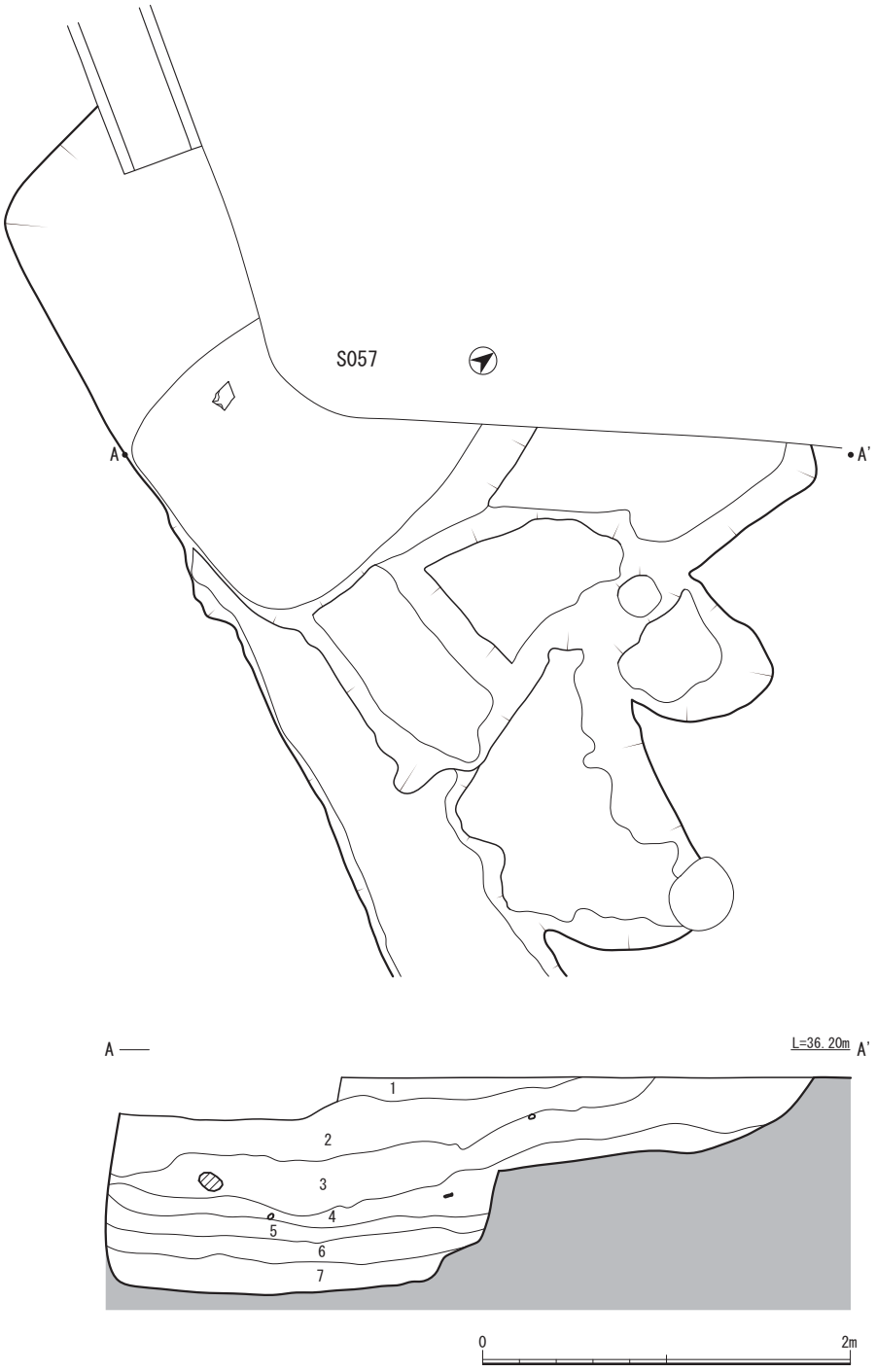
Ｃ－7区に位置する。Ｓ089に接するが切り合いは不明。

Ｓ099(第98図)

Ｃ－6区に位置する。Ｓ103を切る。不定形土坑で、南北軸165cm、東西軸140cmで、深さは水準線より65cm。5つに分層でき、最上層は近代の遺構であるＳ002の基礎で攪乱されている。底部はほぼ平坦。

Ｓ100(第99図)

Ｃ－5区に位置する。南北軸、東西軸ともに250cmの円形土坑で、底部は中央部が丸い台状になり、底部周辺部がＵ字型の溝状になる。深さは水準線より75cm。埋土は大きく分けて3層で、ブロック状の地山土がはいり、一気に埋め戻したように観察される。土坑の大きさの割には遺物は少ない。

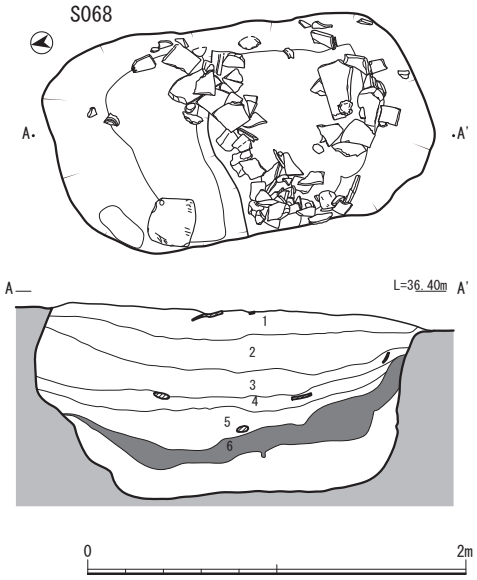


S057
1層 表土　　カクラン土
2層 暗褐色土　粘質の暗褐色土に砂粒やカーボンがまじり、かたくしまっている。
3層 黒褐色土　1cm大の暗黄褐色土が均等にまじり、粒状の暗褐色土とともにばらばらとした土。
4層 黒褐色土　3層よりもバラバラとした土。須恵器の擂鉢が出土。
5層 暗褐色土　粘質で目の細かな土でしまりがある。
6層 黒褐色土　粘質で目の細かな土でしまりがある。目が細か。しまりがある。
7層 暗褐色土　粘質で目が細かい。3mmほどの黄褐色のローム粒がまじる。

第94図　Ｓ057遺構実測図

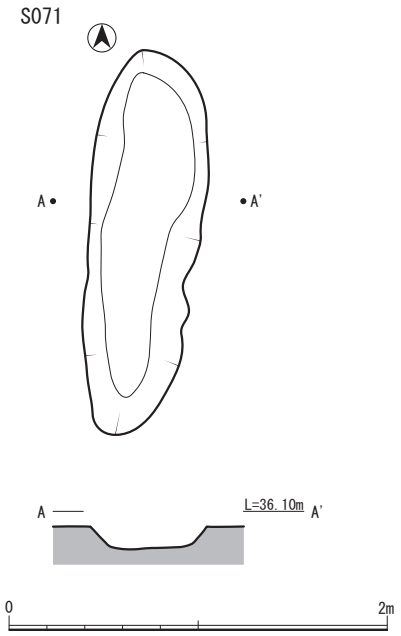
Ｓ120

Ｄ－7区に位置する。Ｓ061に切られ、南側は撹乱を受ける。

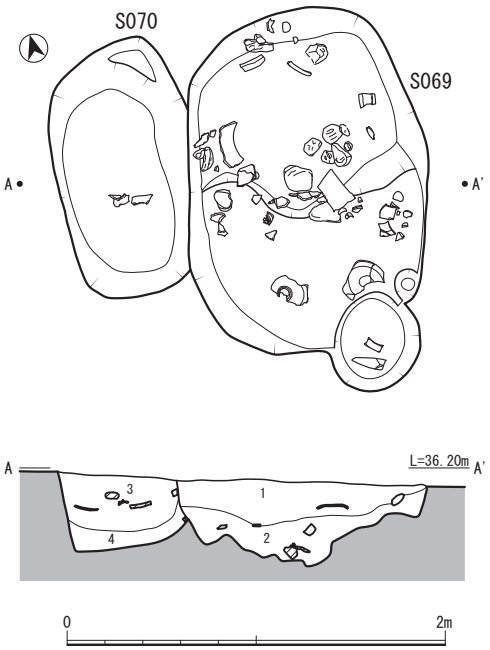


S068
1層 淡褐色土　細かな砂質の褐色土でしまりがある。カーボンやロームの粒、軽石、遺物が多くまじる。
2層 褐色土　砂性土で5cm大の灰白色粘土や褐色ローム、カーボンが夥しく入る。
3層 褐色土　やや粘性をもち、カーボンがまじる。他のもののまじりは少ない。
4層 褐色土＋黄褐色粘質土　2mmくらいの細かなローム粒がまじり、やわらかい。
5層 褐色土　10cm大の大きな礫がまじり、フカフカと粗い
6層 黒色土　純粋のカーボン層

第95図　Ｓ068遺構実測図



第97図　Ｓ071遺構実測図



S069・S070
１層褐色土　砂質でしまりがあり、カーボンや2mmほどの軽石、焼土などが入りしまっている。
２層暗褐色土　混じりが少なく、粘性でもちがやわらか
３層暗褐色土　カーボンが混じり、しまりがある。
４層暗褐色土　カーボンが多く混じり、フカフカとやわらかい。

第96図　Ｓ069・Ｓ070遺構実測図

Ｓ123

Ｃ、Ｄ－7区に位置する。方形の土坑で南側は撹乱を受ける。

Ｓ124

Ｄ－7区に位置する。Ｓ005、125を切る。隅丸方形の土坑で、南側は調査区外となっているが、検出面で南北軸110cm、東西軸110cmで、深さは水準線より120cm。埋土は締まった粘質の暗褐色土。遺物の出土は少ない。

Ｓ129

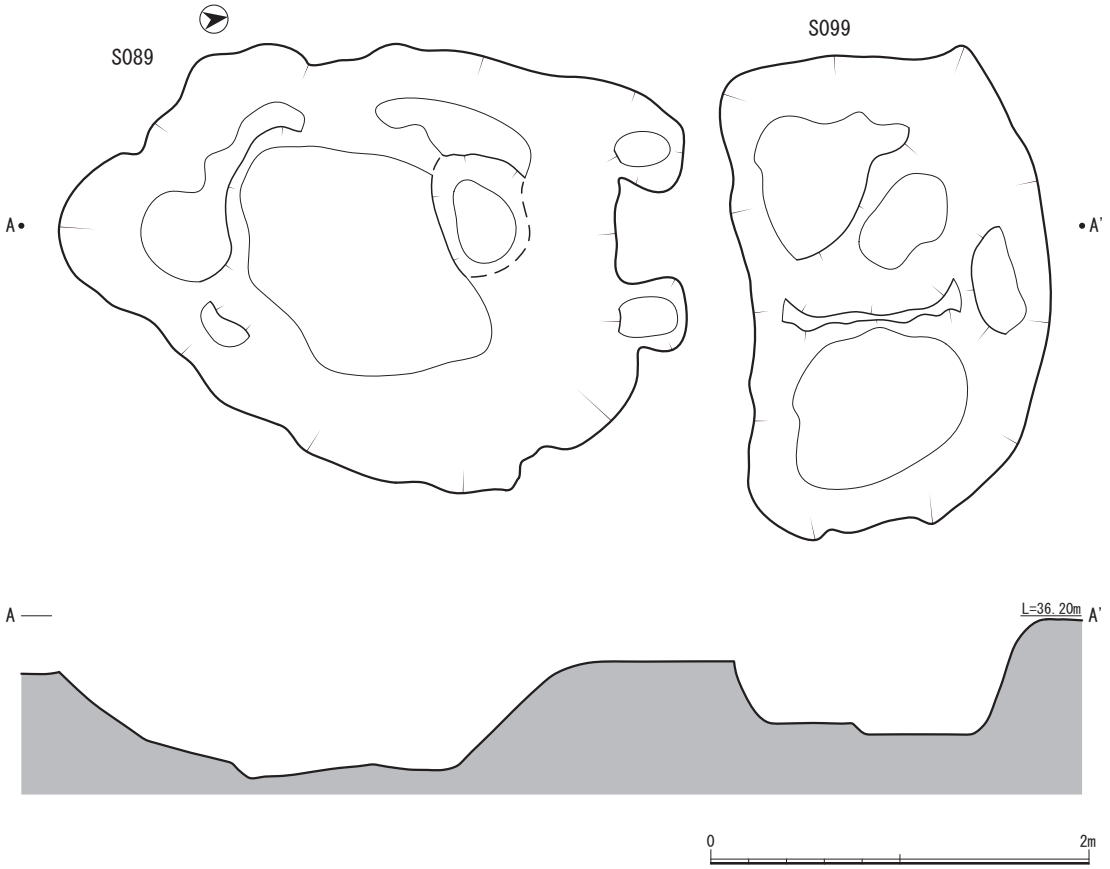
Ｆ－5区に位置する。Ｓ046を切る。

Ｓ130(第100図)

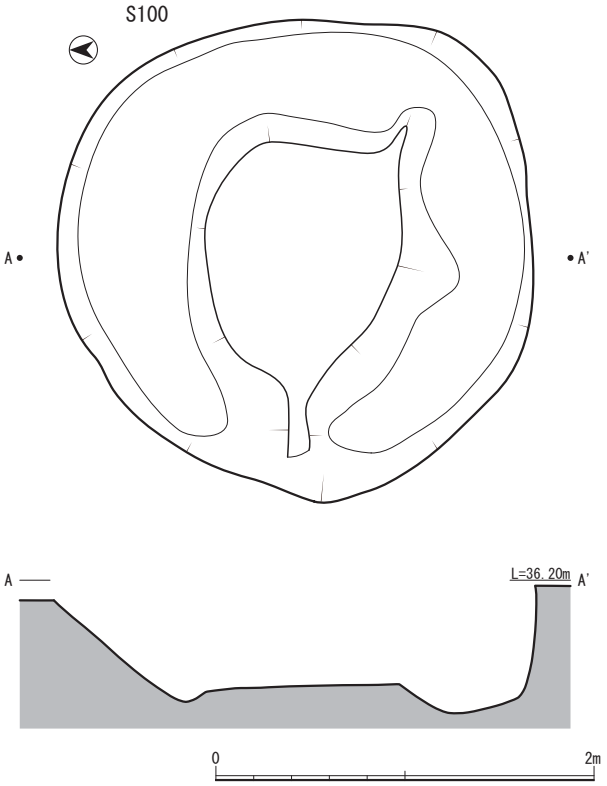
Ｆ－7区に位置する。南北軸110cm、東西軸75cmで、深さは水準線より30cm。埋土は2つに分層されるが、一気に埋めもどされた様子を観察できる。遺物の出土は多く、白磁の像や現川の破片などが出土。

Ｓ133(第100図)

Ｆ－7区に位置する。Ｓ046を切り、Ｓ091に切られる。南北軸80cm、東西軸95cmで、深さは水



第98図　Ｓ089・Ｓ099遺構実測図



第99図　Ｓ100遺構実測図

準線より60cm。埋土は暗褐色単層。

Ｓ135

Ｆ－5区に位置する。Ｓ163と接するが切り合いは不明。東側は撹乱を受ける。遺物の出土は多く、茶入れ、八代焼等が出土。

Ｓ141(第101図)

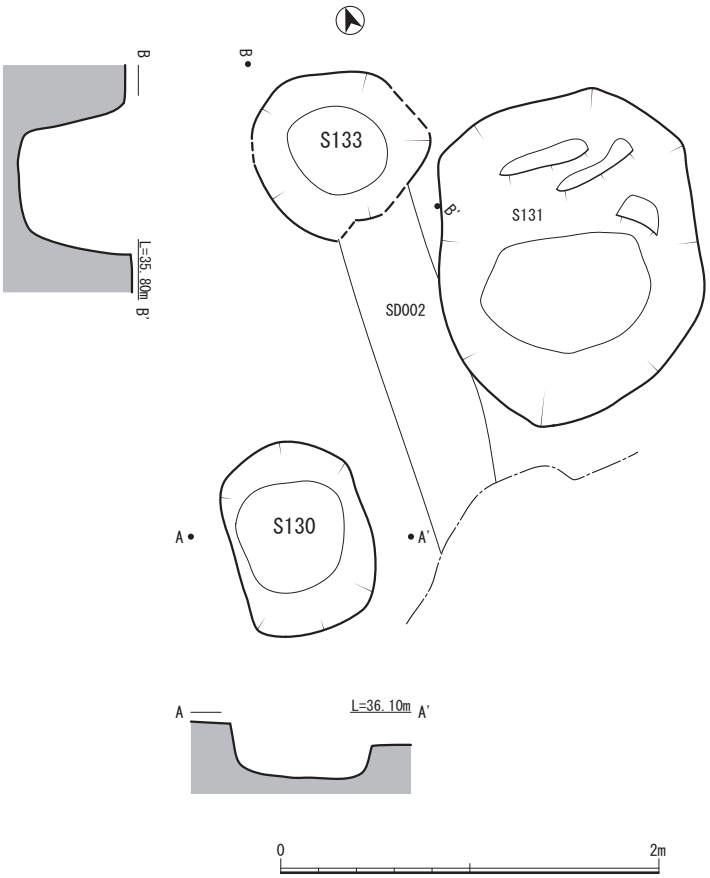
Ｅ－5区に位置する。南北軸170cm、東西軸210cmで、深さは水準線より70cm。遺物の出土は多く、八代焼の水滴、香炉等が出土。7つに分層ができる。

Ｓ177(第102図)

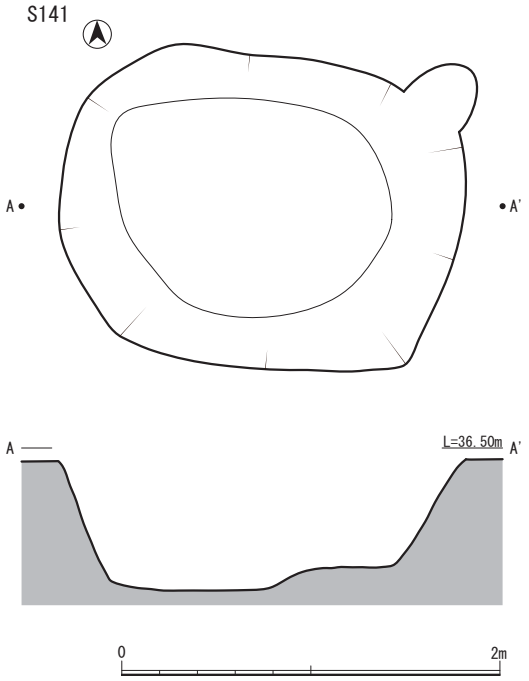
Ｇ－6区に位置する。Ｓ164を切る。溝状の遺構で東西軸190cm、深さは水準線より40cm。

Ｓ142(第103図)

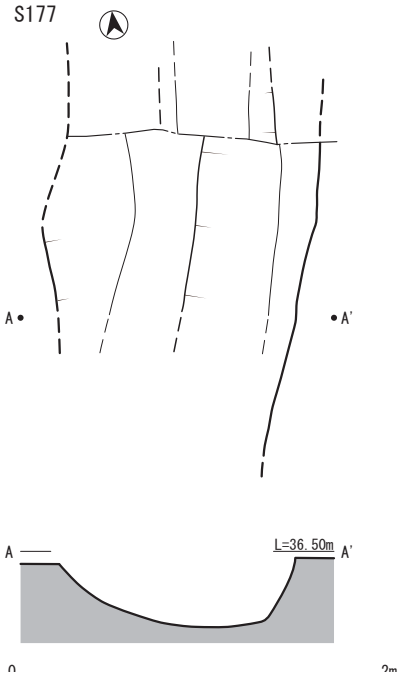
Ｆ－5区に位置する。Ｓ147を切り、Ｓ163と接するが切り合いは不明。北側はⅡ区であるが、保存のため完掘していない。検出面で南北軸190cm、東西軸160cmで、深さは水準線よ



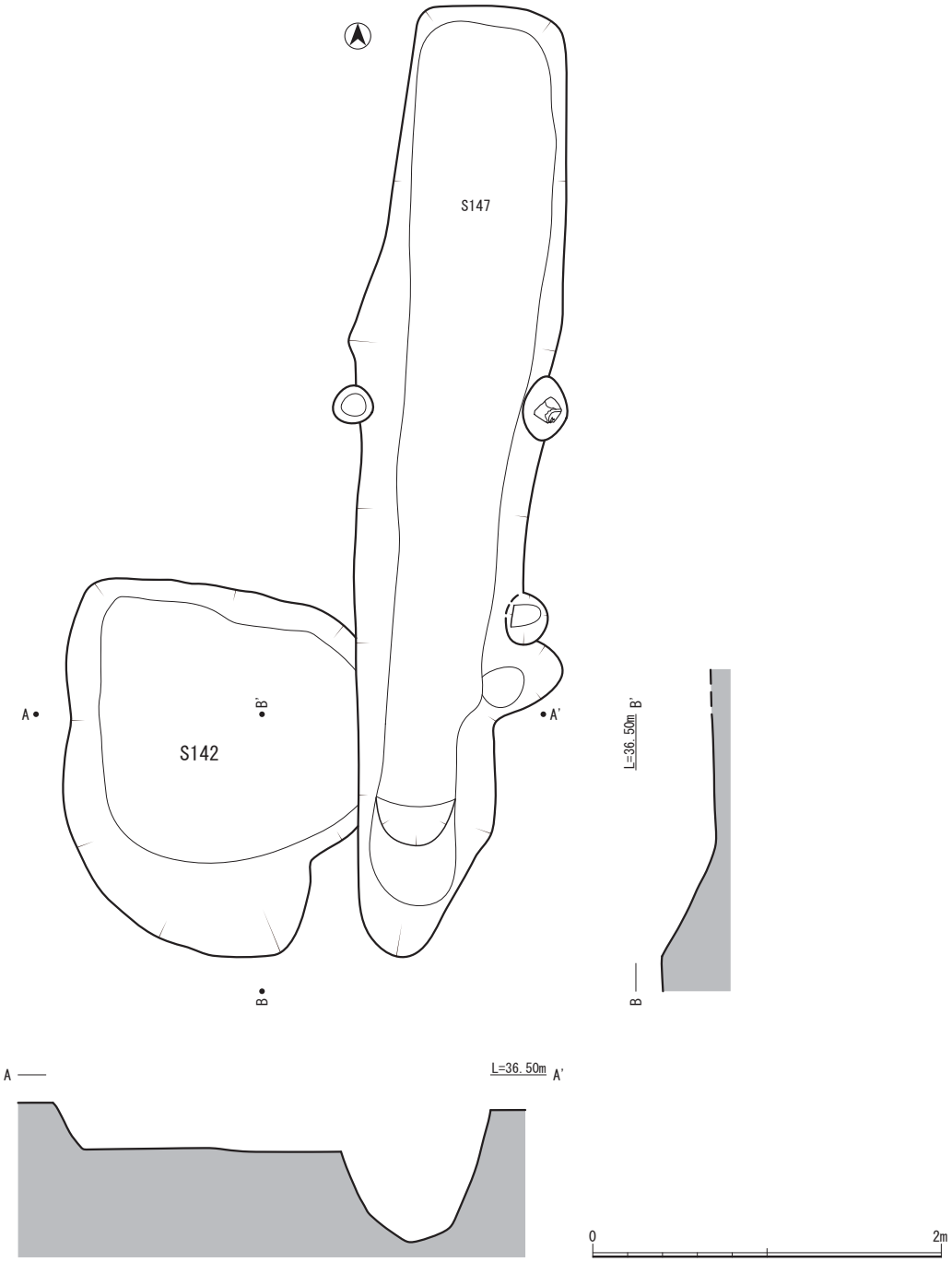
第100図　Ｓ130・Ｓ133遺構実測図



第101図　Ｓ141遺構実測図



第102図　Ｓ177遺構実測図



第103図　Ｓ142遺構実測図

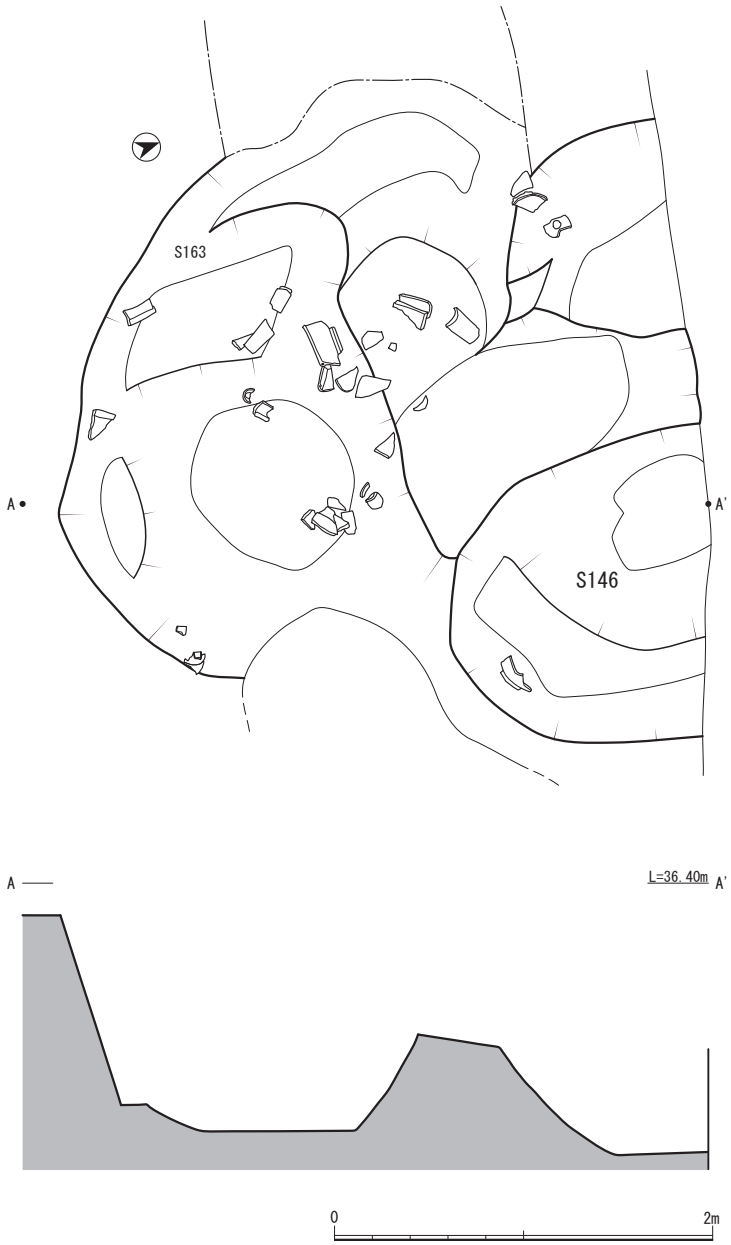
り145cm。3つに分層ができる。

Ｓ146(第104図)

Ｆ－5区に位置する。Ｓ163に切られる。検出面で南北軸140cm、東西軸165cmで、深さは水準線より145cm。3つに分層ができる。

Ｓ150

Ｆ－8区に位置する。Ｓ010に切られる。



第104図　Ｓ146遺構実測図

Ｓ166

Ｅ－5区に位置する。Ｓ134を切る。

Ｓ187

Ｅ－4区に位置する大型の土坑。調査Ⅱ区で保存のため遺構検出のみを行う。

Ｓ193

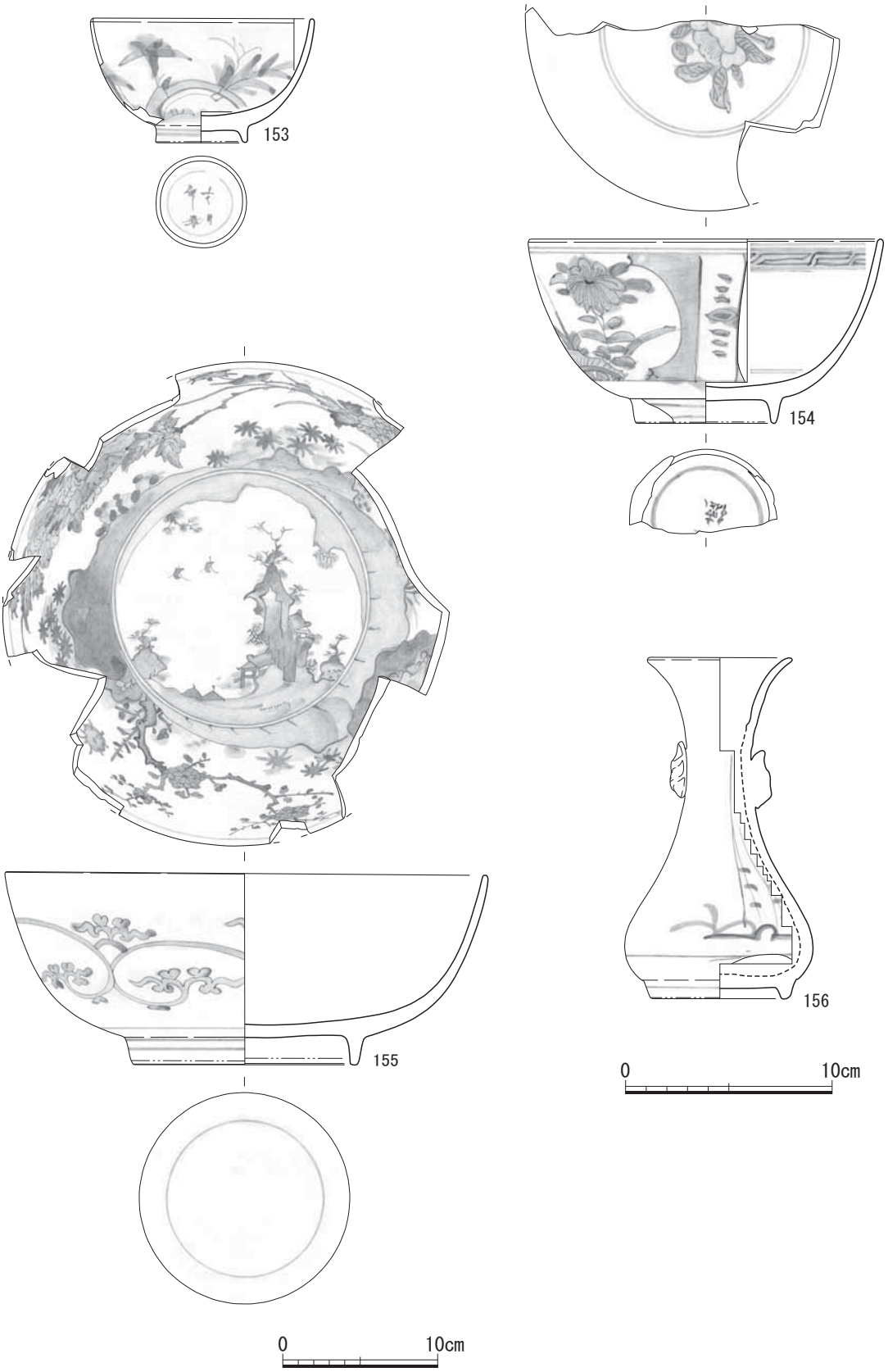
Ｆ－4区に位置する方形の土坑。調査Ⅱ区で保存のため遺構検出のみを行う。

Ｓ196

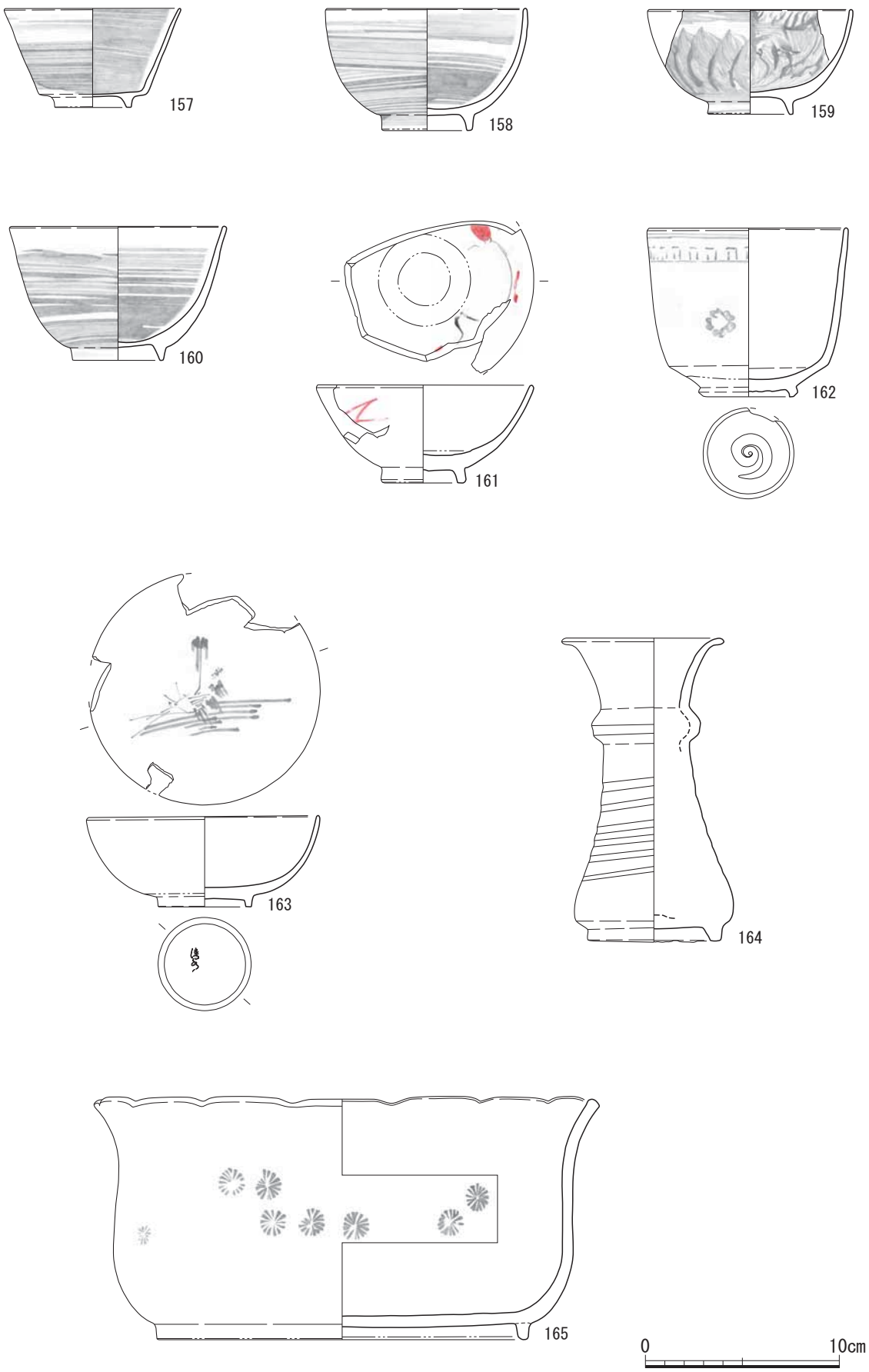
Ｆ－3区に位置する大型の土坑。Ｓ198に切られる。調査Ⅱ区で保存のため遺構検出のみを行う。

Ｓ206

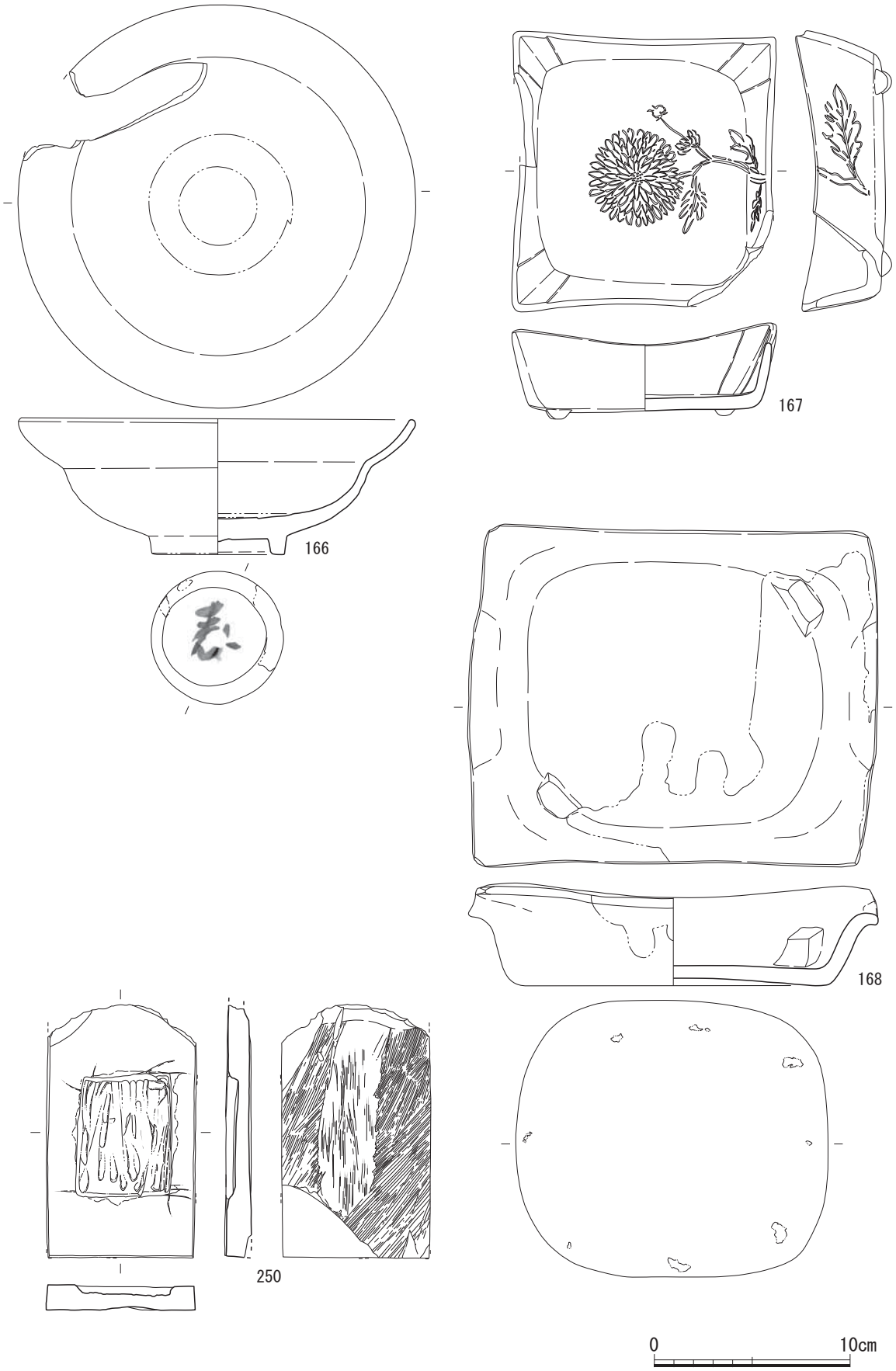
Ｅ、Ｆ－3区に位置する大型の土坑。Ｆ－3区には撹乱がある。調査Ⅱ区で保存のため遺構検出のみを行う。



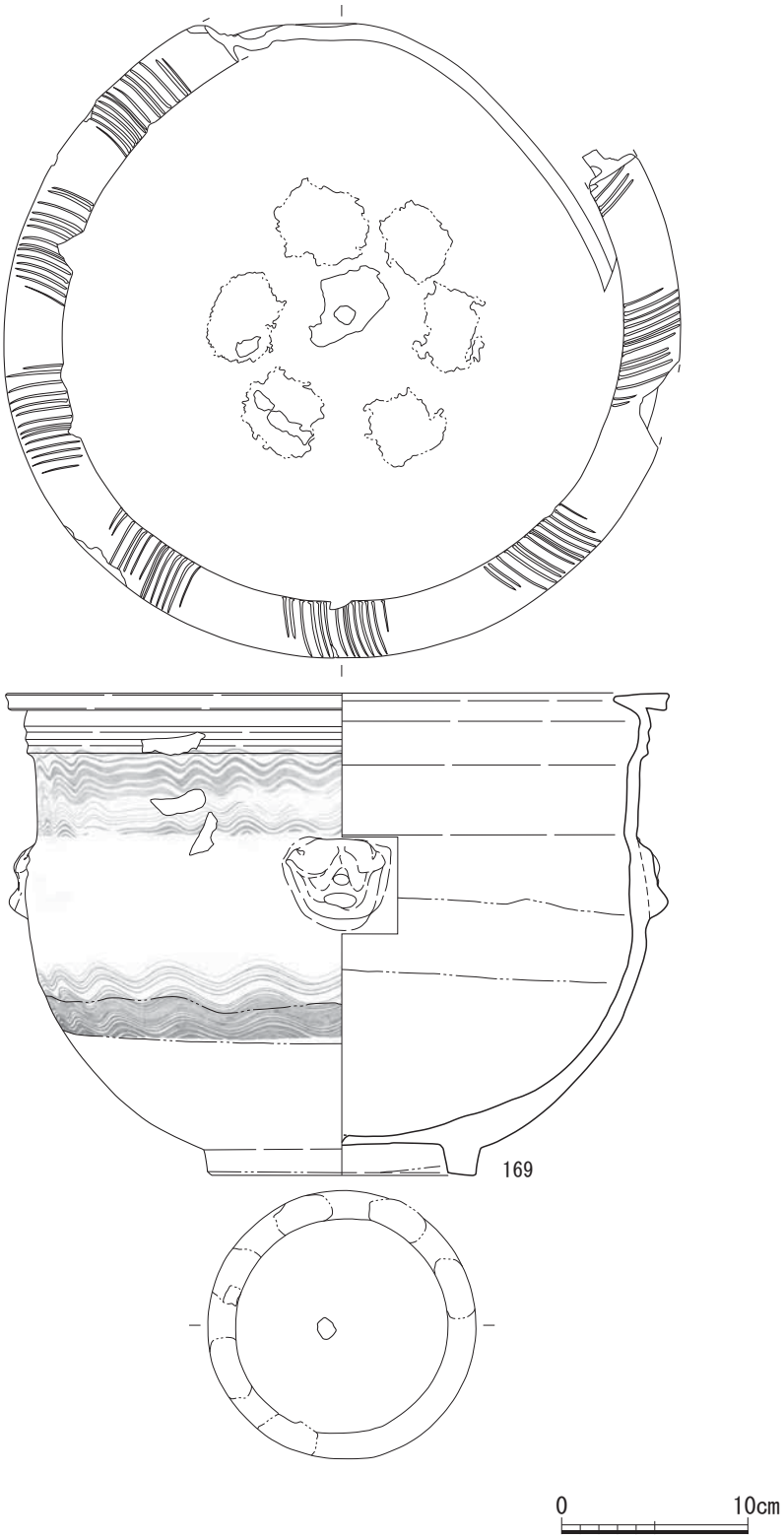
第105図　Ｓ010出土遺物実測図



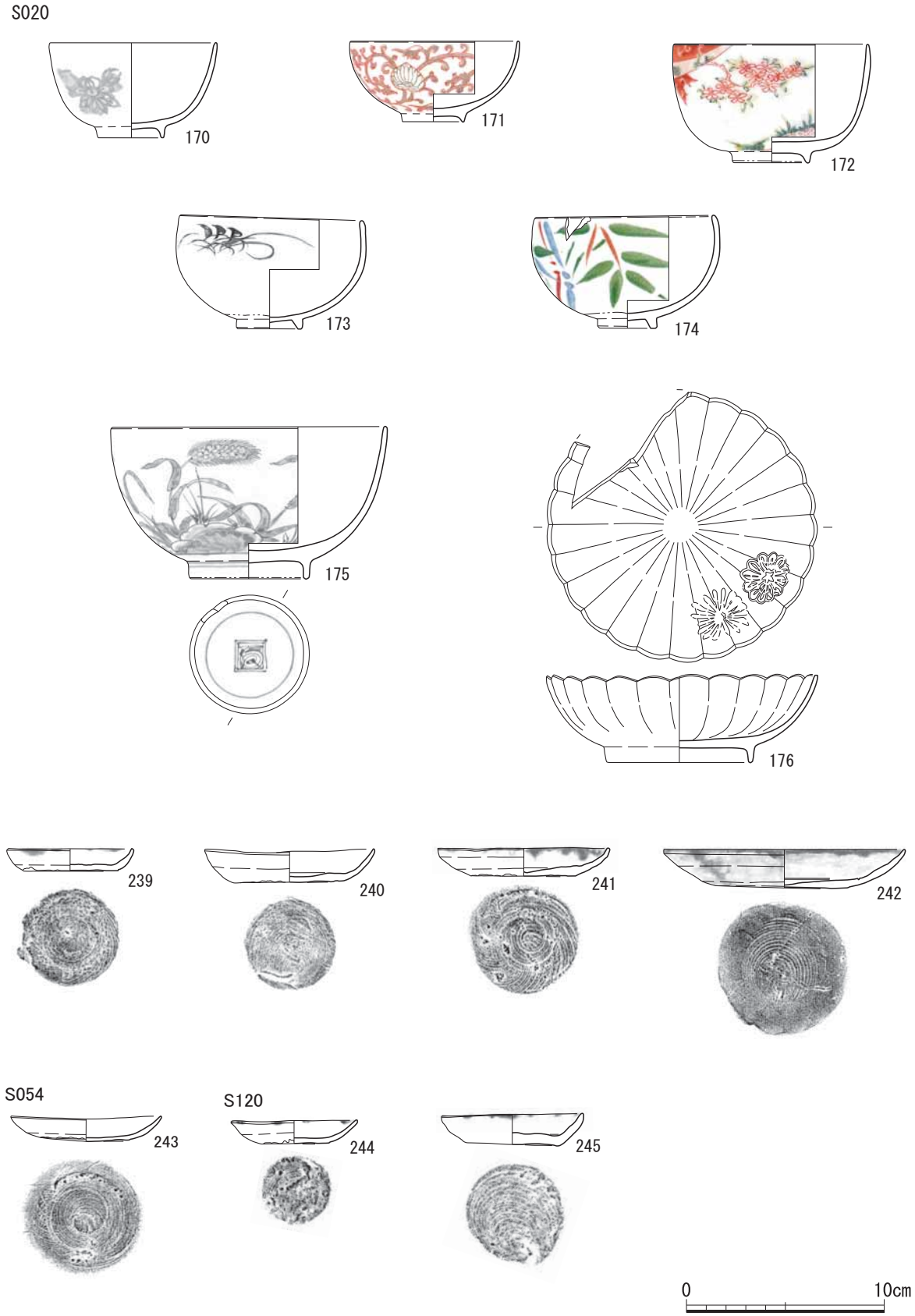
第106図　S010出土遺物実測図



第107図　Ｓ010出土遺物実測図



第108図　Ｓ010出土遺物実測図



第109図　Ｓ020・Ｓ054・Ｓ120出土遺物実測図

第 5 表　陶磁器・土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	産地	出土位置		部位	法量 (cm)				外器面
					遺構	グリッド		口径	底径	器高	高台高	
105	153	染付	碗		S 010		口縁～底部	10.85	4.45	6.05	0.8	-
105	154	染付	碗（鉢）		S 010		口縁～底部	(17.2)	(6.8)	8.9	1.2	-
105	155	染付	鉢		S 010		口縁～底部	31.2	14.5	12.45	1.8	-
105	156	染付	花入		S 010		口縁～底部	7.0	(6.7)	16.65	0.9	-
106	157	陶器	碗		S 010		口縁～底部	9.1	3.95	5.1	0.55	-
106	158	陶器	碗		S 010		口縁～底部	10.4	4.7	6.3	0.85	-
106	159	陶器	碗		S 010		口縁～底部	(10.6)	4.4	5.4	0.65	-
106	160	陶器	碗		S 010		口縁～底部	(11.2)	4.7	6.9	0.6	-
106	161	陶器	碗	肥前	S 010		口縁～底部	(11.2)	4.25	5.05	0.8	-
106	162	陶器	碗	在地	S 010		口縁～底部	10.4	4.7	8.7	0.5	-
106	163	陶器	碗	京焼風	S 010		口縁～底部	12.05	4.8	4.7	0･6	-
106	164	陶器	花入		S 010		口縁～底部	(8.35)	3.85	15.7	0.85	-
106	165	染付	鉢		S 010		口縁～底部	26.05	(19.2)	12.55	0.85	-
107	166	陶器	鉢		S 010		口縁～底部	20.3	6.8	7.0	0.95	-
107	167	陶器	向付	肥前	S 010		口縁～底部	14.4	12.4	4.9	-	-
107	168	陶器	手付鉢	在地？	S 010		完形	17.55	15.95	5.25	-	-
108	169	陶器	鉢		S 010		口縁～底部	(35.6)	14.4	25.9	1.45	-
109	170	染付	碗		S 020		口縁～底部	(8.45)	(3.35)	4.8	0.6	-
109	171	磁器	碗	肥前	S 020		口縁～底部	8.55	3.1	4.1	0.4	-
109	172	磁器	碗		S 020		口縁～底部	9.85	3.9	6.0	0.55	-
109	173	陶器	碗		S 020		口縁～底部	9.3	3.35	6.8	0.5	-
109	174	陶器	碗	関西系	S 020		口縁～底部	9.1	3.0	5.7	0.5	
109	175	染付	碗		S 020		口縁～底部	14.0	6.05	7.7	0.9	-
109	176	白磁	皿		S 020		口縁～底部	13.7	7.4	4.45	0.8	布目痕
109	239	土師器	小皿		S 020		口縁～底部	6.4	4.65	1.15	-	回転ﾅﾃﾞ
109	240	土師器	小皿		S 020		口縁～底部	8.6	5.5	1.7	-	回転ﾅﾃﾞ
109	241	土師器	小皿		S 020		口縁～底部	8.7	5.3	1.4	-	回転ﾅﾃﾞ
109	242	土師器	皿		S 020		口縁～底部	12.22	6.7	1.9	-	回転ﾅﾃﾞ
109	243	土師器	小皿		S 054		口縁～底部	7.6	4.55	1.3	-	回転ﾅﾃﾞ
109	244	土師器	小皿		S 120		口縁～底部	6.4	3.5	1.2	-	回転ﾅﾃﾞ
109	245	土師器	小皿		S 120		口縁～底部	7.2	4.7	1.6	-	回転ﾅﾃﾞ

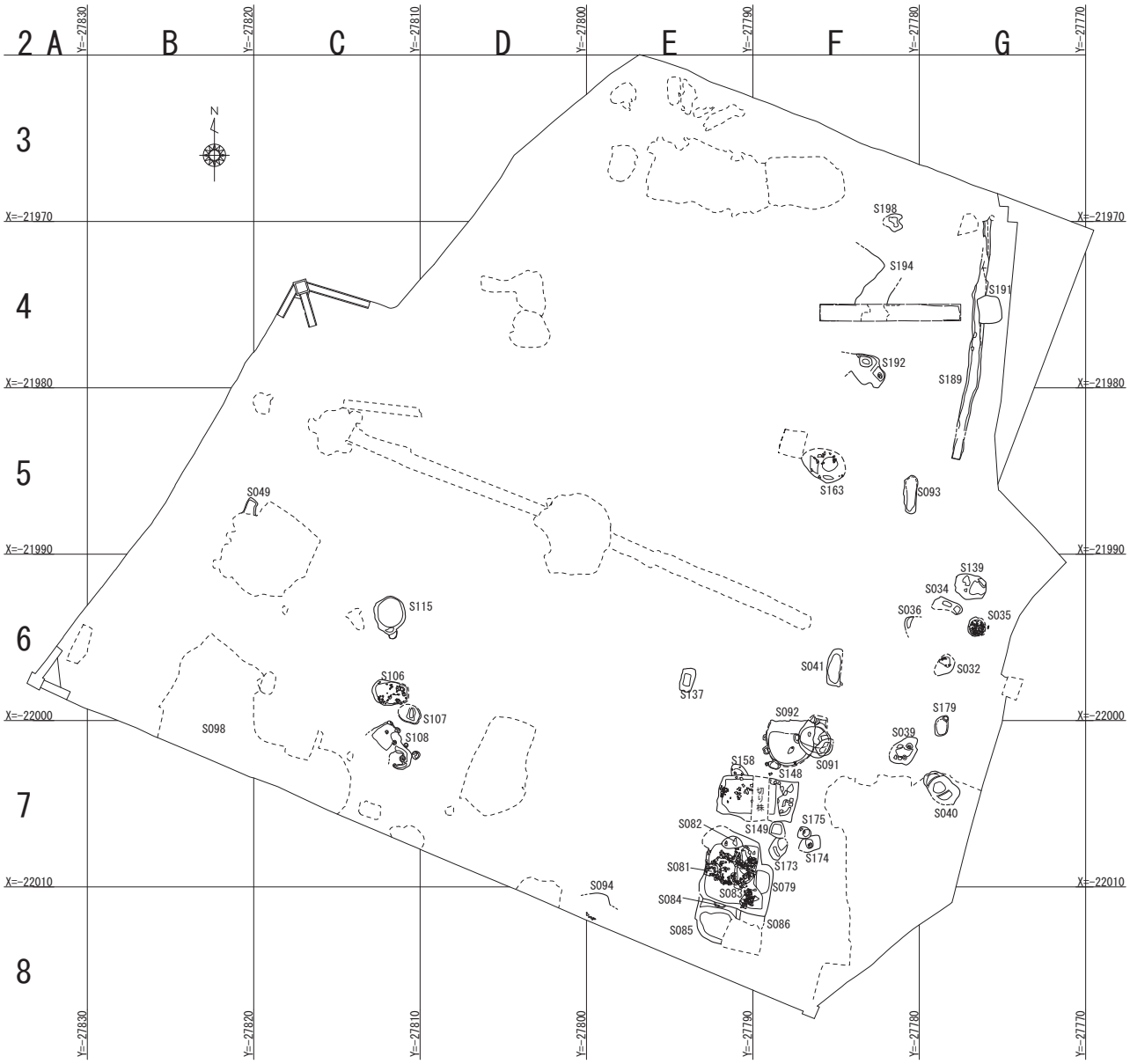
調整			色調		備考	写真図版
外底面	内器面	内底面	胎土	釉調		
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白色	高台内に「大明年製」の銘	PL.42
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白色		PL.42
釉の掻き取り ﾊﾘｻｻｴ痕	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白色		PL.43
釉の掻き取り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	-	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	ﾌﾛｽﾃｨｸﾞﾚｲ	耳 2 個有	PL.43
釉の掻き取り	-	-	ﾈｽﾞﾐ色	ｵﾘｰﾌﾞｸﾞﾘｰﾝ	化粧土 高台内外に貫入有	PL.42
釉の掻き取り	-	-	ﾍﾞｰｼﾞｭ	ﾗｯｾｯﾄｺﾞｰﾙﾄﾞ	化粧土 高台内外に貫入有	PL.43
釉の掻き取り	-	-	ﾈｽﾞﾐ色	焦茶	化粧土 高台に砂付着　貫入有	PL.43
釉の掻き取り	-	-	ﾈｽﾞﾐ色	ﾌﾞﾛﾝｽﾞ	化粧土　高台内に貫入有	PL.43
釉の掻き取り	-	蛇の目釉剥ぎ	ｸﾘｰﾑ色	ﾊﾆｰｽｨｰﾄ	色絵　　貫入有　17C 後半	PL.43
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｸﾘｰﾑｲｴﾛｰ	ﾍﾞｰｼﾞｭ	見込みに付着物有　貫入有　17C	PL.43
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｸﾘｰﾑ色	ｸﾘｰﾑｲｴﾛｰ	鉄絵？　高台内に刻印有　貫入有	PL.44
	-	-	ｵｲｽﾀｰ	墨色	高台に付着物	PL.44
ﾅﾃ" 畳付無釉	-	-	ｵｲｽﾀｰ	ｼﾙﾊﾞｰｸﾞﾚｲ	染付（印花）	PL.44
ｹｽﾞﾘ	-	蛇の目釉剥ぎ	ｸﾘｰﾑ色	ﾍﾟｰﾙﾙｰｼﾞｭ	内面に貫入有　　畳付に砂目跡 底部に墨書「表」 17C 後半	PL.44
ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	-	-	鳶色	鳶色	象嵌による花文　　見込みに付着物 外面から内面へ文様が続く　17C ？	PL.45
-	-	-	れんが色	わすれなぐさ色	対角に突起有（把手の跡） 板状圧痕？　　外底面に目跡（8 ヶ所）	PL.44
釉の掻き取り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	-	鳶色	ﾌﾞﾛﾝｽﾞ	内面 6 ヶ所砂目有　穿孔有 獣頭？の耳が 1 個残存する 外面口縁下に別個体の溶着痕がみられる	PL.45
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白色	外器面にｺﾝﾆｬｸ印判	PL.45
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白色	赤色の金彩　口縁は縁金　色絵（赤絵金襴手）	PL.45
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白色	色絵	PL.45
ｹｽﾞﾘ 高台内無釉	-	-	ｵｲｽﾀｰ	ﾐｱｳﾄｸﾞﾘｰﾝ	鉄絵　千鳥文 口縁部全体に釉が溜まり肥厚する 透明釉　　貫入有	PL.45
ｹｽﾞﾘ 高台内無釉	-	-	ｸﾘｰﾑ色	油色	口縁部全体に釉が溜まり肥厚する 貫入有　18C	PL.45
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾘﾘｰﾎﾜｲﾄ	高台内「渦福」銘有	PL.45
釉の掻き取り	型打陽刻 （花）		ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾌﾞﾙｰｳｵｯｼｭ 藍白色	型打ち成形　　口縁輪花	PL.46
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	油煙付着　　灯明皿	-
糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4 橙 7.5YR7/6	板状圧痕有り　灯明皿	-
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	油煙付着 灯明皿	-
糸切り後ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	全体に煤付着　　灯明皿	-
糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	灯明皿	-
糸切り	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	煤付着　　灯明皿	-
糸切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	油煙付着 灯明皿	PL.52

S194　遺物出土状況

作業風景

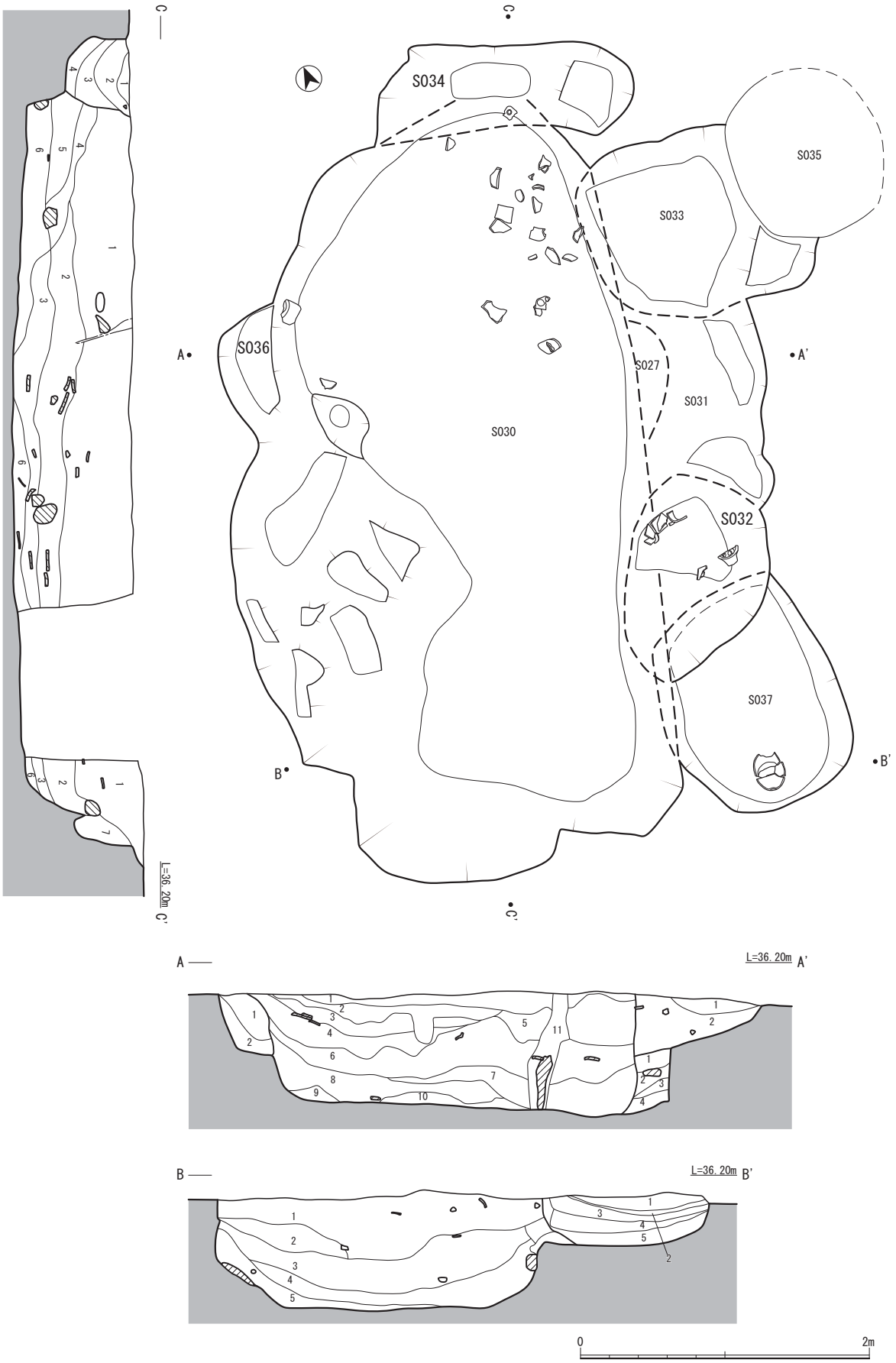
作業風景

第6節　細川期の遺構　(Ⅵ期)



Ⅵ期　S=1/400

第110図　Ⅵ期遺構配置図（1/400)



第111図　Ｓ032・Ｓ034・Ｓ036遺構実測図

S027

1層	極暗褐色	ロームまじり土	極暗褐色とピンクのロームが半々まじる。粒はやや粗く、砂粒礫は微量に混じる。土は軟らかく、ややしまりがある。粘性なロームが混じっている為ある。
2層	極暗褐色	ロームまじり土	1層より濃い極暗褐色で、粒子は1層より細かい。砂粒礫は1層と同量ほど混じり、1層より軟らかい土である。拳大の軽石を包含する。粘性は1層より弱い。
3層	極暗褐色	シルト	粒子は1層より細かい。砂粒礫は微量に混じる。カーボンを微量に包含し、1層より粘性は弱い。
4層	極暗褐色	シルト	3層より極暗褐色で粒子はどれよりも粗い。砂粒礫は多く混入し、土そのものは軟らかく2層よりも粘性はある。
1層	薄暗褐色	カーボン包含層	土色は薄い暗褐色というか、灰褐色にも近似。粒度は粗い。礫は5mm大の砂粒を中心として混じる。土はやや硬いがしまらない。カーボンを多量に包含し、遺物も混じる。粘性は弱い。
2層	薄い暗褐色	小礫多量包含土	土色は薄い暗褐色。粒度は1層より粗い。礫は5mm～3cmほどの小礫が多く混じる。1層よりも軟らかい土。軽石が少し混じる。粘性は1層より強い。

S030

1層	暗褐色	シルト	土色は黒い褐色で、粒子はやや粗い。小さな礫(丸石)が微量にまじる。やや硬い土である。カーボン、ロームが点々とわずかに混じる。粘性もややある。
2層	灰褐色	シルト	土色は灰褐色が主で、暗褐色が部分的に混じる。粘性もややある。
3層	暗褐色	シルト	薄い暗褐色で、粒子は2層より粗い。角ばった小さな礫が少し混じり、1層よりも軟らかく2層より多く鉄分を包含する。粘性は2層よりも弱い。
4層	暗褐色	シルト	粒子が3層より粗く、砂粒が部分的に混入している。3層より硬い土である。カーボンと鉄分を少量包含している。粘性は3層よりも弱い。
5層	暗褐色	シルト	土色は薄い暗褐色で、粒子は6層より細かい。礫は直径3cmほどの河原石が数点と3mmほどの砂粒がまばらに混入する。6層よりしっかりした土で、6層より粘性は強い。カーボンがまばらに混じる。
6層	暗褐色	シルト	土色は1層よりもやや薄く、粒子は1層よりも粗く、小さな丸石がわずかに混じる。土は1層よりも硬く、土は3層ほどの鉄分を含み、磁器や瓦などの遺物が混じる。粘性は2層より強い。
7層	暗褐色	シルト	土色は6層と近似しており、砂粒礫が微量に混じる。土は6層より軟らかく、粒子は2層より弱い。カーボンを微量に包含し、粘性は6層より少ない。
8層	暗褐色	シルト	1層～8層の中では濃い暗褐色をしている。1層～8層の中で粒子は一番粗く、砂粒礫も包含する。土は2層の次に軟らかいという感じで、カーボンを多く包含している。粘性は6層より強い。
9層	灰白色	ローム土	土色は灰白色、黄色ローム、橙色ロームが主で、粒度は細かい。5mmほどの軽石が混入する。土は軟らかい。包含物も特にない。粘性はある。
10層	うすい桃色	シルト	ピンクのロームが多く混じり、次に黄色ロームが混じり、次に極暗褐色が混じる。粒度は9層より細かく、9層より軟らかい。包含物も特にない。粘性は9より強い。
11層	灰白色	カクラン	上部10cmほどは暗褐色でそれより下が灰白色となる。粒子は1層～10層よりも粗く、角ばった石や河原石などが混入する。土は軟らかいがしまらない土で粘性も弱い。
1層	暗褐色	シルト	陶器、小礫(河原石)、カーボンが混じる。粘性が少なく、粒子も粗い。
2層	褐色	シルト	瓦、カーボンが混じる。性質は1層と近似している為、比較できない。
3層	暗褐色(1層より濃い)	シルト	礫、カーボンが混じる。1、2層より粘性はあるが、粒子は粗い。
4層	暗褐色	ローム混じり土	カーボン及び少量のピンクロームが混じる。3層より粘性は強く、粒子も細かい。(1、2層よりも粒子が細かい)
5層	暗褐色	ローム混じり土	白色化した木片が混じる。ピンクのロームが4層よりも多く混じる。
1層	暗褐色	シルト	弱溶結凝灰岩、カーボン、礫が混じる。粘性もあり、しまる土ではあるが、粒子は粗い。
2層	暗褐色	シルト	黄色のロームが点々とわずかに混じる。カーボンも少量混じる。2層より粒子は粗いが、粘性は強い。
3層	暗褐色	粘性土	鉄分が混じる。少量のカーボンが混じる。1層より粒子が細かく粘性も強い。しまる土である。
4層	暗褐色	シルト	黄色のロームが微量に混じり、鉄分も微量に混じる。カーボンも少量混じる。2層より粒子が細かく、1層より粘性が強い。
5層	褐色	ローム混じり土	黄色とピンクのロームが多量に混じる。小礫(河原石)も混じる。4層より粒子が細かく、4層より粘性は弱く、4層よりもしまらない。
6層	暗褐色	ローム混じり土	カーボンが混じり、丸礫(河原石)、瓦が混じる。鉄分も混じる。ピンクのロームが少量混じる。粒子は3層より細かく、2層より粘性が強い。
7層	極暗褐色	弱粘質土	粒度は細かく、礫質の混入はない。土質は1、2、3層より軟らかい。包含物としては、カーボンと根が混じる。粘性は3層より弱い。

S034

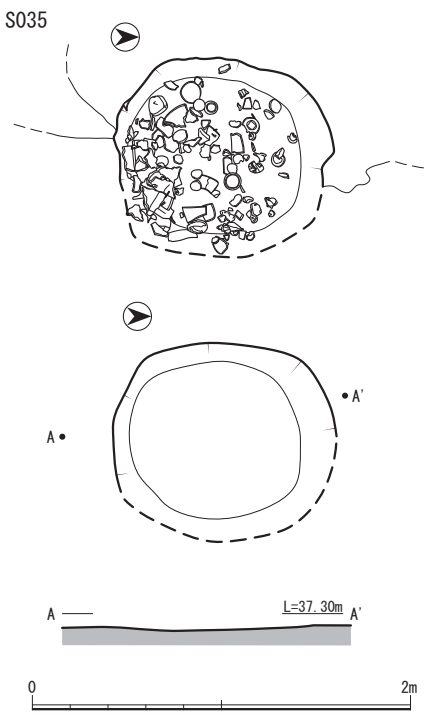
1層	暗褐色	ローム混じり土	カーボン及び黄色のロームが点々と混じる。粒子は細かく、粘性もある。
2層	暗褐色	シルト	磁器が1点混じる。小さな砂利が混じる。1層より粒子は粗く、粘性も弱い。
3層	暗褐色	シルト	カーボンがわずかに混じる。1層より粒子は細かく、2層より粘性は強い。
4層	暗褐色	シルト	ピンクのロームが点々とわずかに混じる。3層より粒子は細かく、1層より粘性も強い。

S036

1層	暗褐色	鉄分包含土	粒子は細かく礫は混入していない。やや硬い。ピンクのロームが微量に混じり、粘性もある。
2層	極灰褐色	ローム混じり土	土色はグレーに近似している。1層より粒子は細かい。礫は混入していない。1層より軟らかく粘性もある。ピンクのロームがまばらに混じる。

S037

1層	灰褐色	灰土	灰層が固まった埋土が主で粒子が細かく粘性は弱い。所々石灰層のような白いものが混じる。
2層	暗褐色	カーボン包含土	カーボンが多量に混じる。ほとんどがカーボンの為性質については省略。
3層	暗褐色	シルト	1層の埋土が点々と混じる。1層より粒子が粗く、粘性は強い。
4層	暗褐色	カーボン包含土	2層より少ない量のカーボンが混じる。小礫が点々と混じる。粒子は3層より粗く、3層より粘性強い。
5層	暗褐色	ローム混じり土	ピンクのロームが少量混じる。1層より粘性は強く、3層より粒子は細かい。



第112図　Ｓ035遺構実測図

Ｓ032(第111図)

Ｇ－6区に位置する。Ｓ030、037を切る。南北軸140cm、東西軸100cm。遺物少量。

Ｓ034(第111図)

Ｇ－6区に位置する。Ｓ030を切る。南北軸60cm、東西軸190cm。遺物の出土は多い。

Ｓ035

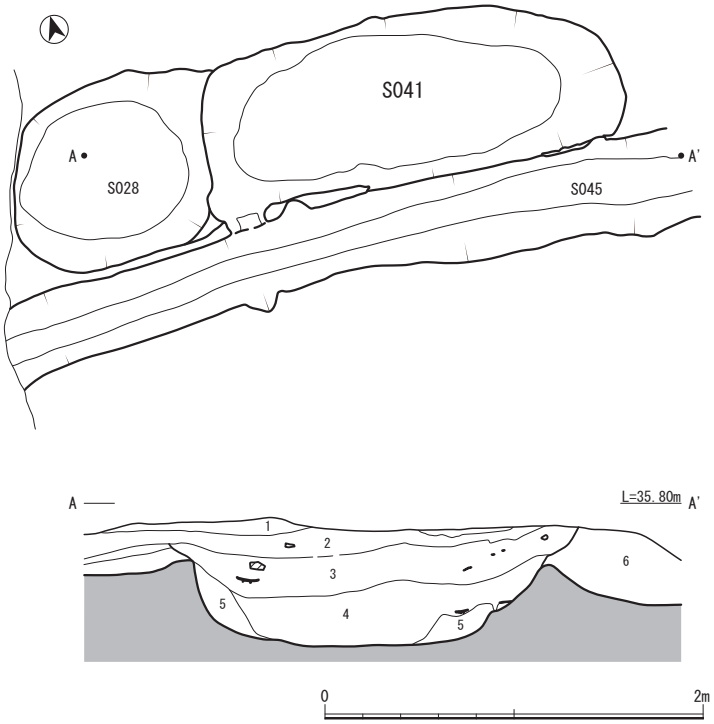
Ｇ－6区に位置する。Ｓ033を切る。南北軸120cm、東西軸100cm。礫に混じって多くの遺物が出土。九曜紋入り八代焼等。

Ｓ036

Ｆ－6区に位置する。Ｓ030を切る。南北軸100cm、東西軸80cm。

Ｓ039

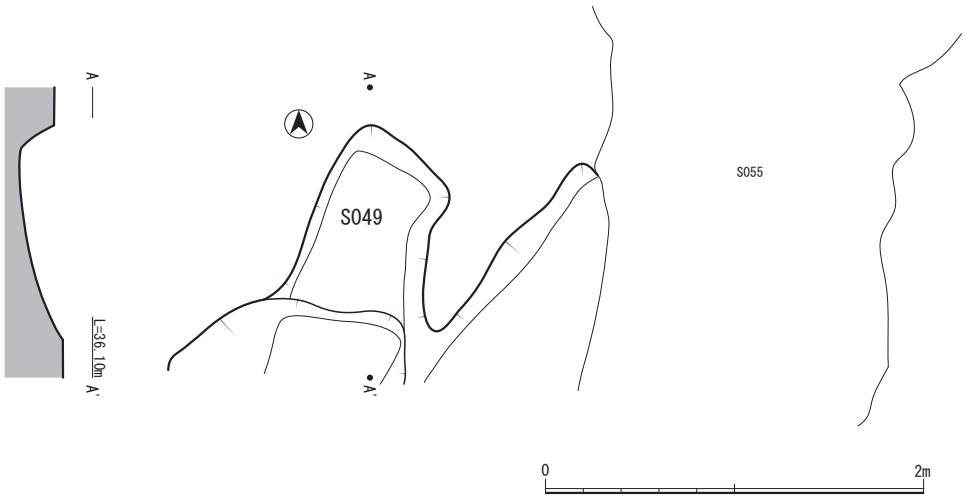
Ｆ－7区に位置する。Ｓ046、180を切る。遺物は大量に出土。



S041

１層	灰白色＋明橙色土	ロームが粘性で3～10cm大のブロックで混じる。近代の整地層
２層	暗褐色土	砂質で強く、しまりがある。カーボンや砂粒が混じる。
３層	暗褐色土	砂質土でキメが細かい。2よりもやわらかでカーボンを含む。
４層	暗褐色土	2mm大の砂を中心として砂質土に混じり合う。ボロボロともろい。
5層	暗褐色土	4に5cm大のブロックが混じる。
６層	暗褐色土	細かな砂性の粘質土で5～10mm大の橙色土（ローム）を含み、しまりがある。
７層	暗褐色土	砂質で粘性を持ち、大きなロームのブロックを含み、しまっている。

第113図　Ｓ041遺構実測図



第114図　Ｓ049遺構実測図

Ｓ040

Ｇ－7区に位置する。Ｓ046、164を切る。遺物は大量に出土。埋土は暗褐色で締りがない。上層は撹乱されている。

Ｓ041(第113図)

Ｆ－6区に位置する。Ｓ017、028、046を切る。南北軸225cm、東西軸90cm。

Ｓ049(第114図)

Ｂ、Ｃ－5、6区に位置する。Ｓ055を切り、東側を撹乱されている。

Ｓ079(第115図)

Ｆ－7、8区に位置する。Ｓ083東端の遺構で、同遺構を切る。南北軸190cm、東西軸110cmで、深さは水準線より70cm。

Ｓ081(第115図)

Ｅ－7区に位置する。Ｓ083西端の遺構で同遺構を切る。南北軸150cm、東西軸100cmで、深さは水準線より110cm。

Ｓ082

Ｅ－7区に位置する。Ｓ083北端の遺構で同遺構を切る。南北軸80cm、東西軸130cm。

Ｓ083(第115図)

Ｅ、Ｆ－7、8区に位置する。Ｓ079、081，082に切られる。南北軸430cm、東西軸350cm、深さ90cm。方形の土坑で大量の瓦が廃棄してある。遺物も大量に出土する。

Ｓ084(第115図)

Ｅ－8区に位置する。Ｓ083を切る。小土坑で東西軸0.7m。

Ｓ085(第115図)

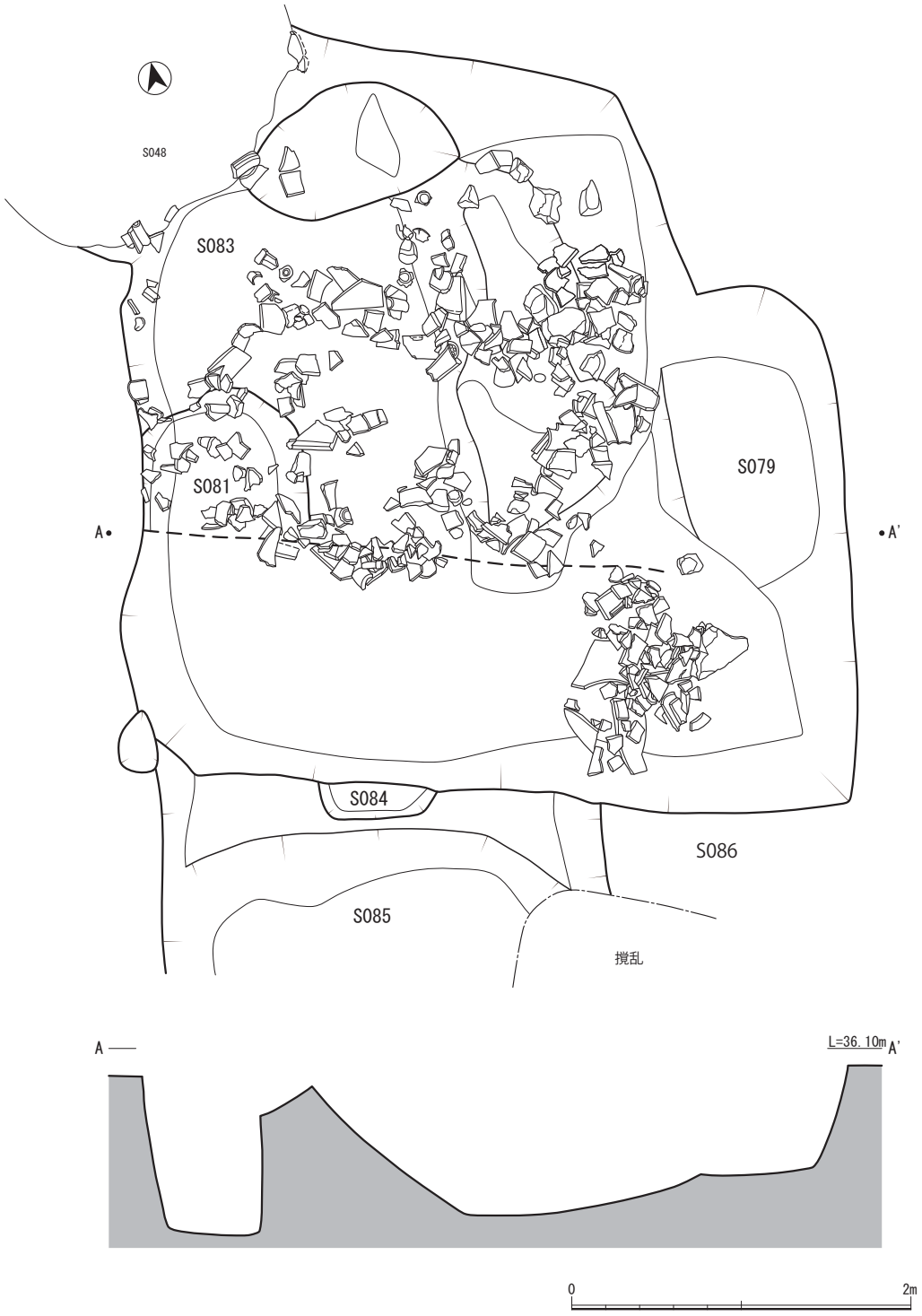
Ｅ－8区に位置する。Ｓ083と接するが、切り合いは不明。Ｓ084には切られる。東側は撹乱を受ける。

Ｓ086

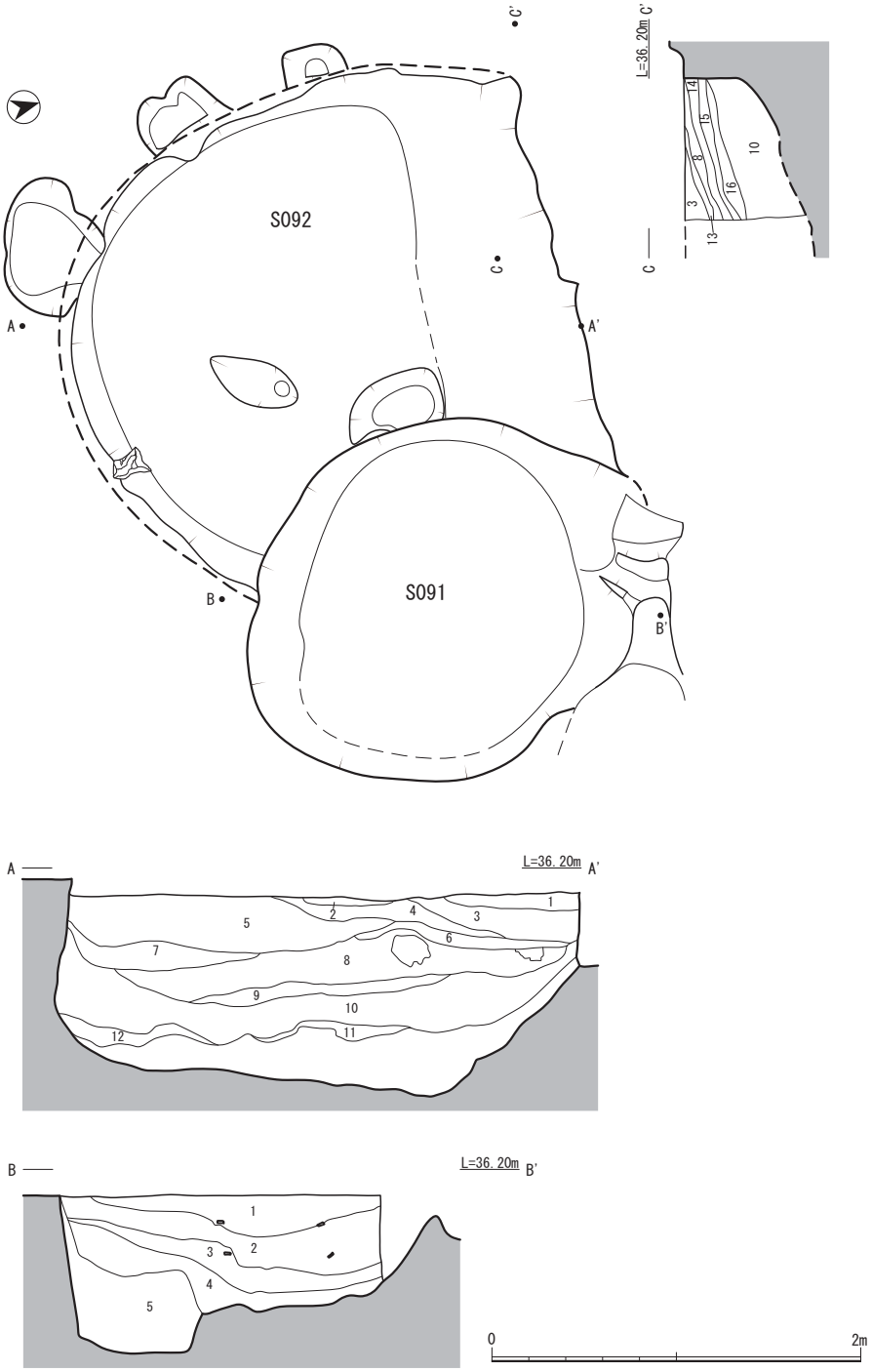
Ｅ、Ｆ－8区に位置する。Ｓ085と接するが、切り合いは不明。南側は撹乱を受ける。

Ｓ091(第116図)

Ｆ－7区に位置する。Ｓ092を切る。南北軸230cm、東西軸190cmで深さは水準線より80cm。



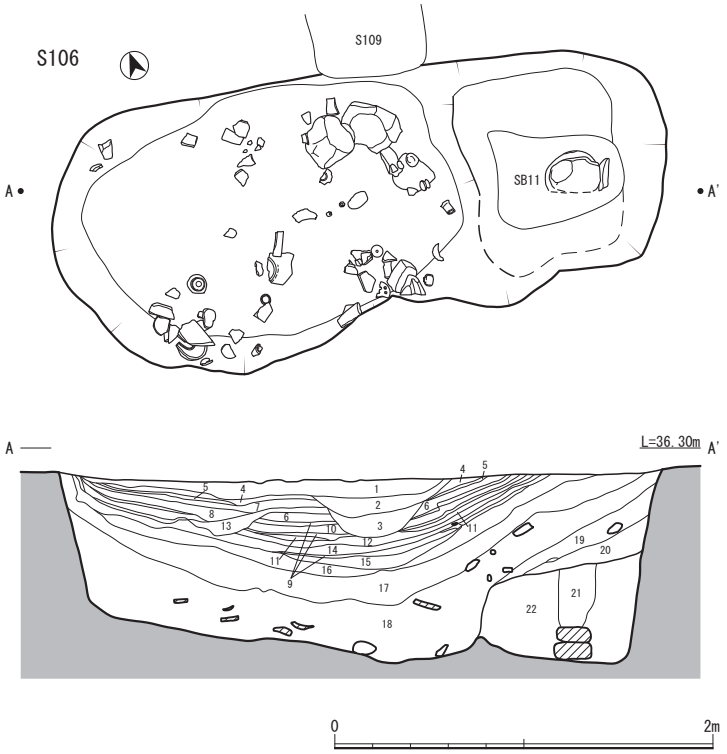
第115図　Ｓ079・Ｓ081・Ｓ083・Ｓ084・Ｓ085遺構実測図



S091・S092

１層　暗褐色土	目の細かな粘質土でしまっている。砂礫や5mm大のロームの粒が混じる。
２層　灰白色土	目の細かな灰層で黒色の炭層が互層になっている。
３層　褐色土	暗褐色土と黄褐色土が半々に混じり合いしまりがある。
４層　褐色土	8に似るが黄褐色土の割合が少ない。
5層　暗褐色土	粘質土で固くしまっいる。ローム層の混じりが少ない。
６層　灰色土	灰色の目の細かな灰層
７層　灰色土＋暗褐色土	灰色の灰層に黒色の炭層が互層となる。暗褐色土が混じる。
８層　暗褐色土	粘質の暗褐色土に5mmほどの橙色のローム粒が多く混じる。ボロボロとやわらかい。
９層　黒褐色土	粘性土で混じりが少ない。合間に黒色の炭層が入る。
１０層暗褐色土	粘性があり、目が細かい。暗褐色土が5mmほどのブロックで入る。しまりがある。
１１層灰色土	6に同質の土
１２層暗灰褐色土	粘質の暗黄褐色土とベースに暗褐色土が混じり込む。

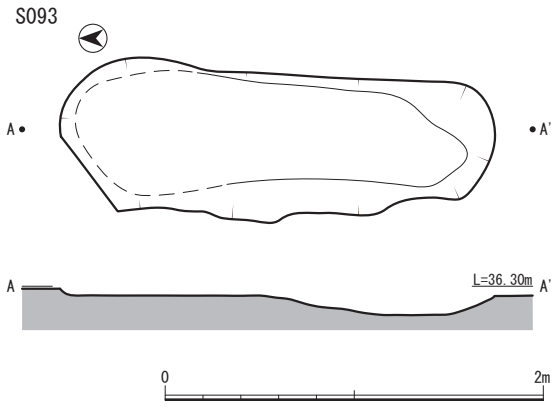
第116図　Ｓ091・Ｓ092遺構実測図



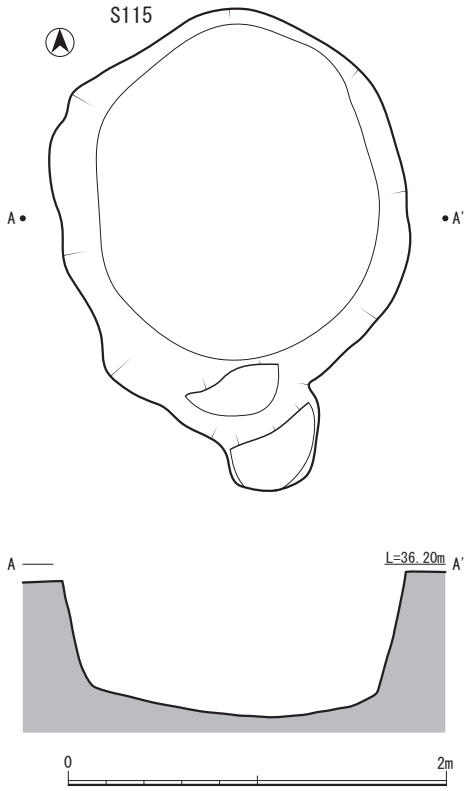
S106

１層	淡灰褐色土	細かな砂質土で、ザラザラしてしまりがある。
２層	褐色土	褐色土と黄褐色土で、砂粒が均等にまじり、ザラザラとしている。
３層	暗褐色土	暗褐色粘質土に黄褐色ローム粒、カーボンがまじる。
４層	黄褐色土	黄褐色粘質土をベースに暗褐色が少しまじる。
５層	淡灰色土	目が細かく均等な砂層
６層	灰白色土	灰白色の粘質土でやわらか。
７層	黄褐色土	４層に似るが中央でまじりあい、砂粒土がまじる。
8層	淡灰褐色土	灰褐色土に灰白色土がまじりあい、やわらかい。
９層	青灰色土	４層に似るが中央でまじりあい、砂粒土がまじる。
１０層	黄褐色土	純粋なローム（黄褐色土）
１１層	橙色土	純粋なローム（橙色土）
１２層	暗褐色土	きめ細かな粘質土でやわらか。
１３層	暗褐色砂質土	目の粗い砂質土
１４層	淡褐色土	暗褐色土と灰白色土が均等にまじりあい、やわらかい。
１５層	混土	灰白色土、黄褐色土、橙色土の５mmほどの黄褐色土のブロックがまじる。
１６層	暗褐色土＋黄褐色土	暗褐色土をベースに５ｃmほどの黄褐色土ブロックがまじる。
１７層	暗褐色土	粘性の暗褐色土で２mmほどの黄褐色土の粒がまじる。
１８層	暗灰褐色土	やや砂性どの土質の土に礫、遺物が多くまじる。湿気をおびてやわらかい。
１９層	暗褐色土＋黄褐色土	暗褐色土の土にロームの粒や５mmほどの砂粒がまじる。
２０層	暗褐色土	粘性の暗褐色土で礫などを多く含む。ロームのまじりは少ない。
２１層	淡褐色土	暗褐色土と黄褐色土が細かなブロックでまじりあい、ホクホクとやわらかい。
２２層	黄褐色土＋暗褐色土	黄褐色土をベースに暗褐色がわずかにまじり。（柱の埋土）

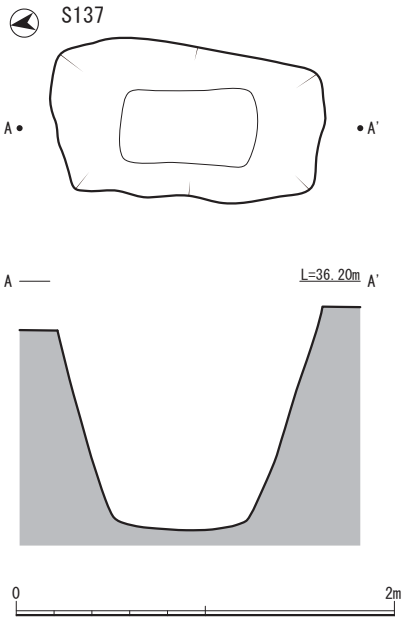
第117図　Ｓ106遺構実測図



第 118 図　Ｓ 093 遺構実測図



第119図　Ｓ115遺構実測図



第120図　Ｓ137遺構実測図

Ｓ092(第116図)

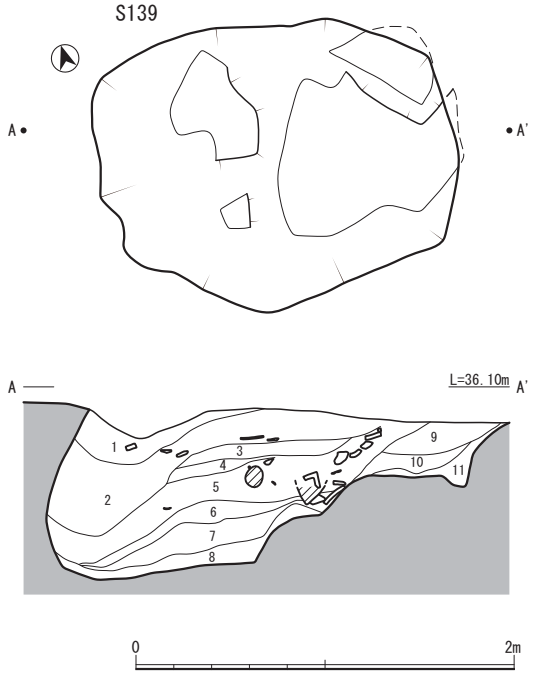
Ｆ－7区に位置する。Ｓ091に切られる。南北軸270cm、東西軸270cmで深さは水準線より120cm。

Ｓ106(第117図)

Ｃ－6区に位置する。Ｓ240の柱穴、Ｓ110を切る。南北軸145cm、東西軸220cmで深さは水準線より90cm。上層は客土となるロームが互層となり、埋め固められたものである。

Ｓ093(第118図)

Ｆ－5区に位置する。Ｓ110を切る。南北軸230cm、東西軸80cmで深さは水準線より20cm。単層で、良



S139

１層	暗褐色土＋黄褐色土	10cmほどの黄褐色ブロック土が混じり、瓦や陶磁器などの遺物が混じる。粘性が強く良くしまる。
２層	暗褐色土＋カーボン包含土	遺物5cmほどのピンク色ロームブロック土が混じり、カーボンが次層との境に多く混じる。瓦や瓦質土器などの遺物が混じる。粘性が強くよくしまるというよりべとべとしている土。粒度は粗く砂粒など混じる。
３層	淡暗褐色＋サラサラ土	淡暗褐色土で粒度は、やや粗い。礫混入は見られないが、砂粒は、混じる。カーボンが2より少なく2～3cmほどのブロックが混じる。径4cmほどの真っ白なブロックが混じる。遺物は、陶磁器片あり。粘性は、2より弱くパサパサした細かい土
４層	暗褐色土	土色は、2より薄い暗褐色で粒度は、3より精かい。3～5cmほどの河原石が混じり、遺物としては、陶磁器が混じる。3より、粘性が強くよくしまるやわらかい土。
5層	黒褐色土＋ザラザラカーボン混じり土	濃い暗褐色である。径1cmほどの礫が混入する。ザラザラした1cmほどのカーボンが一つの層を作っているように見える。瓦・貝・陶磁器など遺物の混入が見られる。粒度は、上記土層のどれよりも粗い。粘性はあるが、あまりよくしまらない。
６層	黒褐色土＋桃褐色ローム混じり土	3～10cmほどの桃褐色ロームが混じる。粒度は、2より精かく、カーボン等の混入は、見られないが、貝・瓦がわずかに混じる。粘性を含んだ砂質土のようであり土は、軟らかくあまりしまらない 土
７層	淡暗褐色＋桃褐色ローム	横の長さが20～30cmほどの桃褐色ロームのブロックが混じる。粒度は、4より粗いが6より精かい。礫等の混入は、見られず3cmほどの瓦片が混入する。また貝片が混じる。土は、硬くあまりよくしまらない。
８層	桃褐色ローム＋暗褐色	ベースは、桃白褐色のローム土でまばらに暗褐色が混じる。粒度は、上記土層より、精かく、粘性も上記土層のどれよりも強くやわらかい土である。遺物は・礫・カーボン等の包含層は見られない。
９層	淡暗褐色	粒度は、精かく、カーボンと貝片が少し混じる。粘性も強くよくしまる。
１０層	暗褐色土＋ロームまだら土	暗褐色土をベースにするが、1cmほどの桃褐色及び黄褐色が混じりまだら模様のようである。粒度は、9より、粗く9より硬くあまりしまらない土。9より小さなカーボンと貝片が混じる。
１１層	淡暗褐色＋黄褐色ローム	ベースは、淡暗褐色であるが、2～3mmのローム黄褐色ロームが混じる。粒度は、10より粘性もあり10よりよくしまるが、9ほどではない。遺物・カーボン等の包含は見られない。

第121図　Ｓ139遺構実測図

く締まった土。遺物も少ない。

Ｓ098

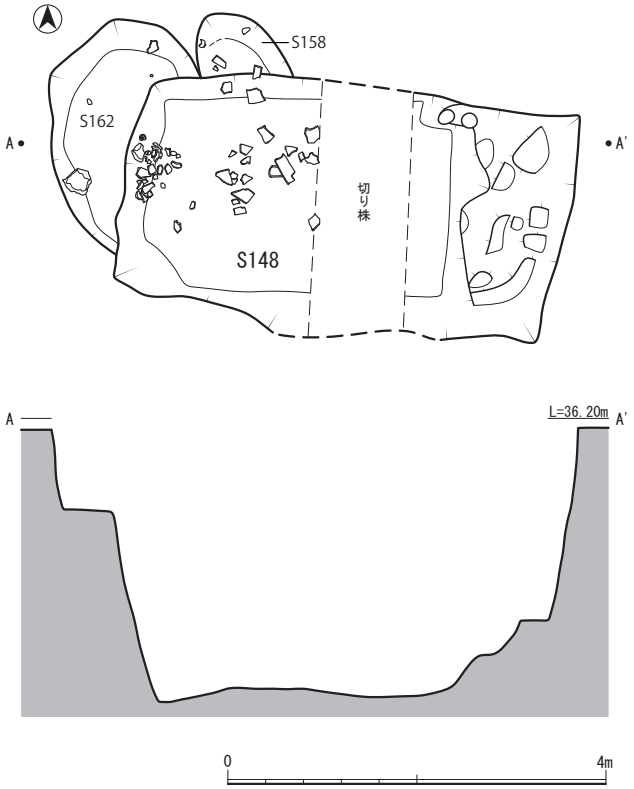
Ｃ－7区に位置する。南側法面に向けて大きく撹乱をされている。円形の土坑。

Ｓ107

Ｃ－7区に位置する。ＳＢ106に近接し、Ｓ110を切る。東西に長軸をとる楕円形の遺構。英国陶器の破片等が出土。

Ｓ108

Ｃ－7区に位置する。ＳＢ096、107に近接する。方形の遺構。



第122図　Ｓ148遺構実測図

Ｓ115(第119図)

Ｃ－6区に位置する。切り合いはない。円形の遺構で、南北軸225cm、東西軸180cmで深さは水準線より80cm。上層は客土となるロームが互層となり、埋め固められたものである。

Ｓ137(第120図)

Ｅ－6区に位置する。Ｓ009を切る。方形の遺構で、南北軸140cm、東西軸80cmで深さは水準線より130cm。深い掘り込みの割には2層にしか分層できず、底面より100cmほどは炭の混じった暗褐色の砂質土。

Ｓ139(第121図)

Ｇ－6区に位置する。Ｓ164を切る。円形の遺構で、南北軸150cm、東西軸190cmで深さは水準線より100cm。東側にテラス状の段差を持ち、西側には深い底面を持つ。遺物の出土も多く、煎茶用の風炉なども出土。

Ｓ148(第122図)

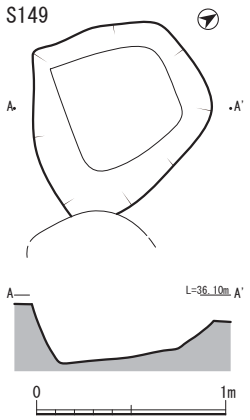
Ｅ、Ｆ－7、8区に位置する。Ｓ158、162を切る。方形の遺構で南北軸135cm、東西軸230cmで深さは水準線より150cm。最下層に大量の瓦が廃棄されており、瓦の上面には黄褐色どの客土がある。黄褐色土上面には厚い版築状の層があり、就き固められた様子が観察できる。遺物も豊富に出土した。

Ｓ149(第123図)

Ｆ－7区に位置する。Ｓ148に近接する。ほぼ円形の遺構。100cm、東西軸90cmで深さは水準線より30cm。埋土は砂質の黒褐色土で締りがない。

Ｓ158

Ｅ－7区に位置する。Ｓ148に切られる。円形土坑。



第123図　Ｓ149遺構実測図

Ｓ163

Ｆ－5区に位置する。Ｓ146を切り、Ｓ145と接するが切り合いは不明。不定形の円形土坑。4つに分層できる。

Ｓ173

Ｅ－7区に位置する。Ｓ149に切られる。円形土坑。

Ｓ174

Ｅ－7区に位置する。Ｓ175と近接するが切り合いは不明。東西に長軸をとる楕円形土坑。

Ｓ175

Ｅ－7区に位置する。Ｓ174と近接するが切り合いは不明。円形土坑。

Ｓ179

Ｇ－6区に位置する。切り合い関係はない。南北に長軸をとる楕円土坑。

Ｓ189

Ｇ－4、5区に位置する。調査Ⅱ区にあたり、保存のため検出のみ。南北に軸をとる溝状の遺構。

Ｓ191

Ｇ－4区に位置する。調査Ⅱ区にあたり、保存のため検出のみ。方形の土坑。

Ｓ192

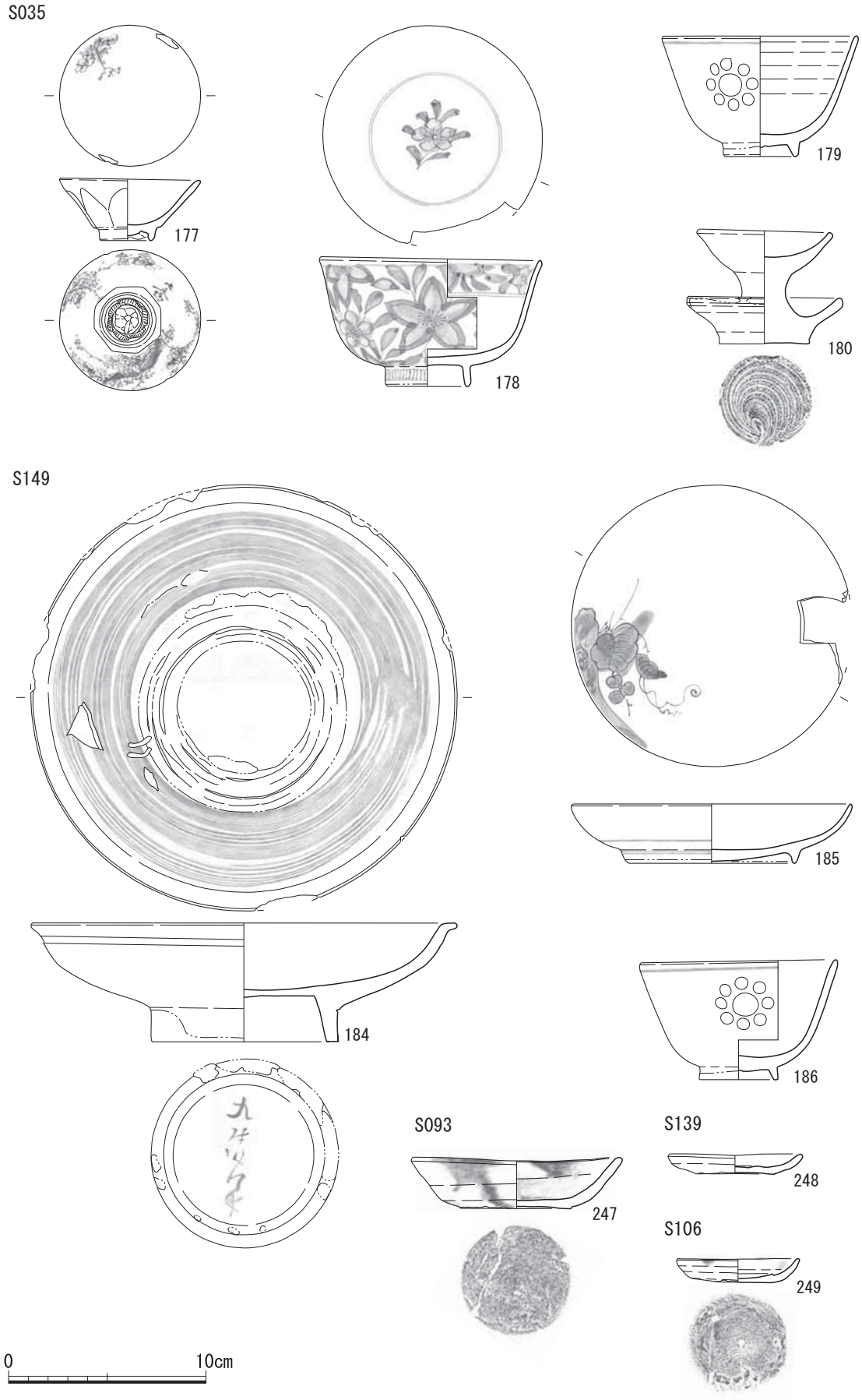
Ｆ－4区に位置する。調査Ⅱ区にあたり、保存のため検出のみ。

Ｓ194

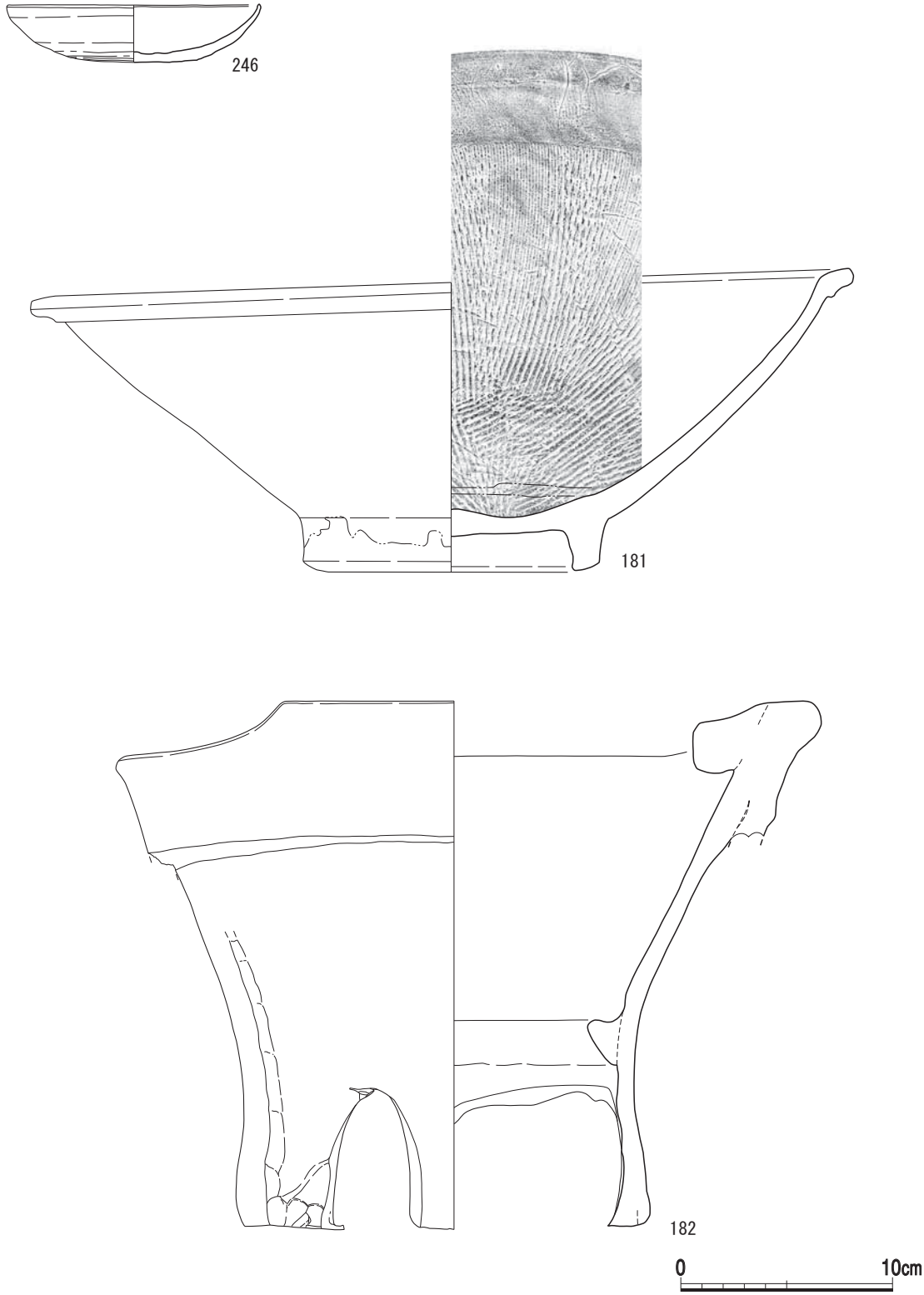
Ｆ－4区に位置する。調査Ⅱ区にあたり、トレンチ調査を行ったところのみ底面まで掘り下げる。Ｓ200、202を切る。

Ｓ198

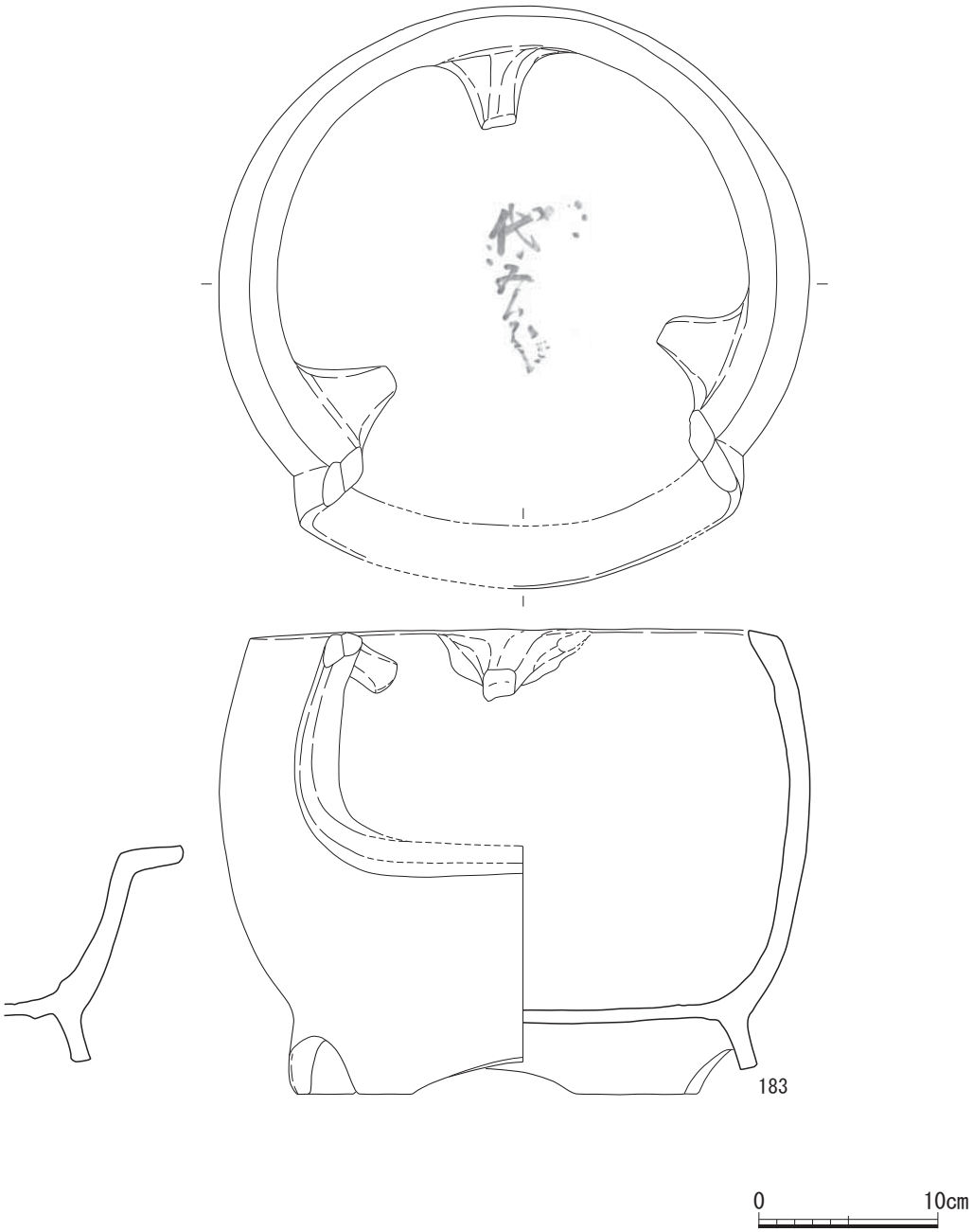
Ｆ－4区に位置する。調査Ⅱ区にあたり、トレンチ調査を行ったところのみ底面まで掘り下げる。Ｓ196、199、200を切る。



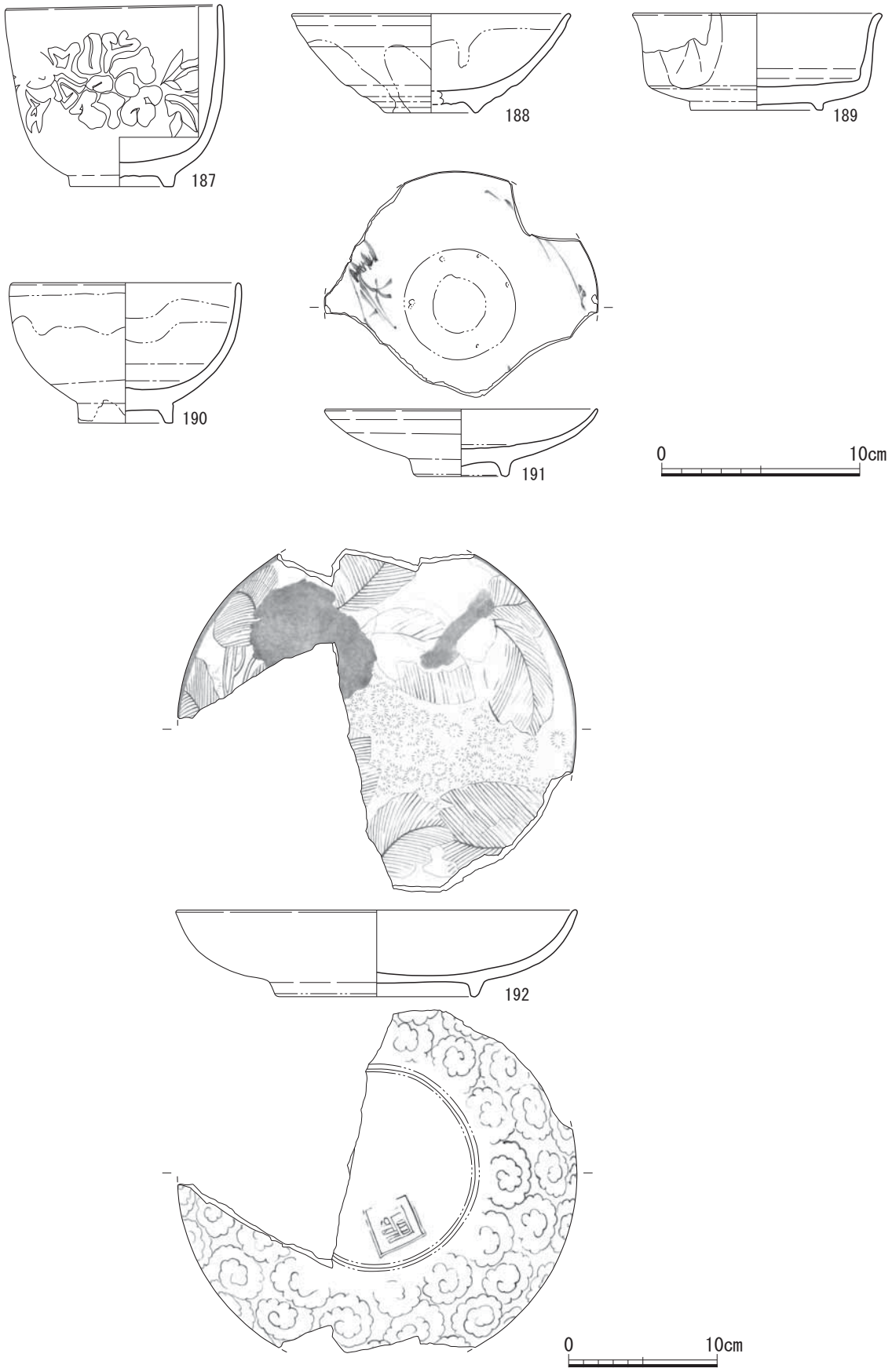
第124図　Ｓ035・Ｓ093・Ｓ139・Ｓ149出土遺物実測図



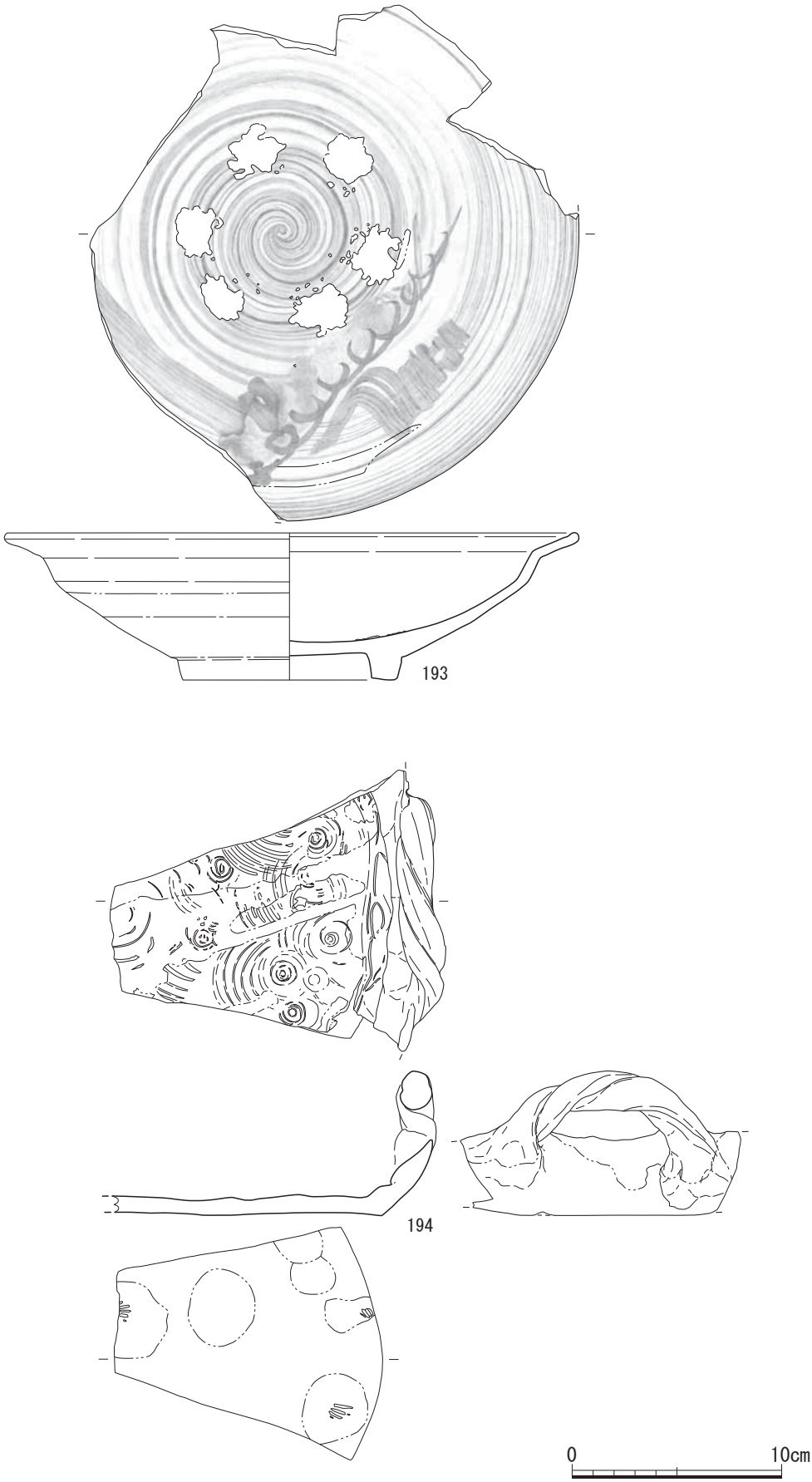
第125図　Ｓ040出土遺物実測図



第126図　Ｓ148出土遺物実測図



第127図　Ｓ195出土遺物実測図



第128図　Ｓ195出土遺物実測図

第６表　陶磁器・土器観察表

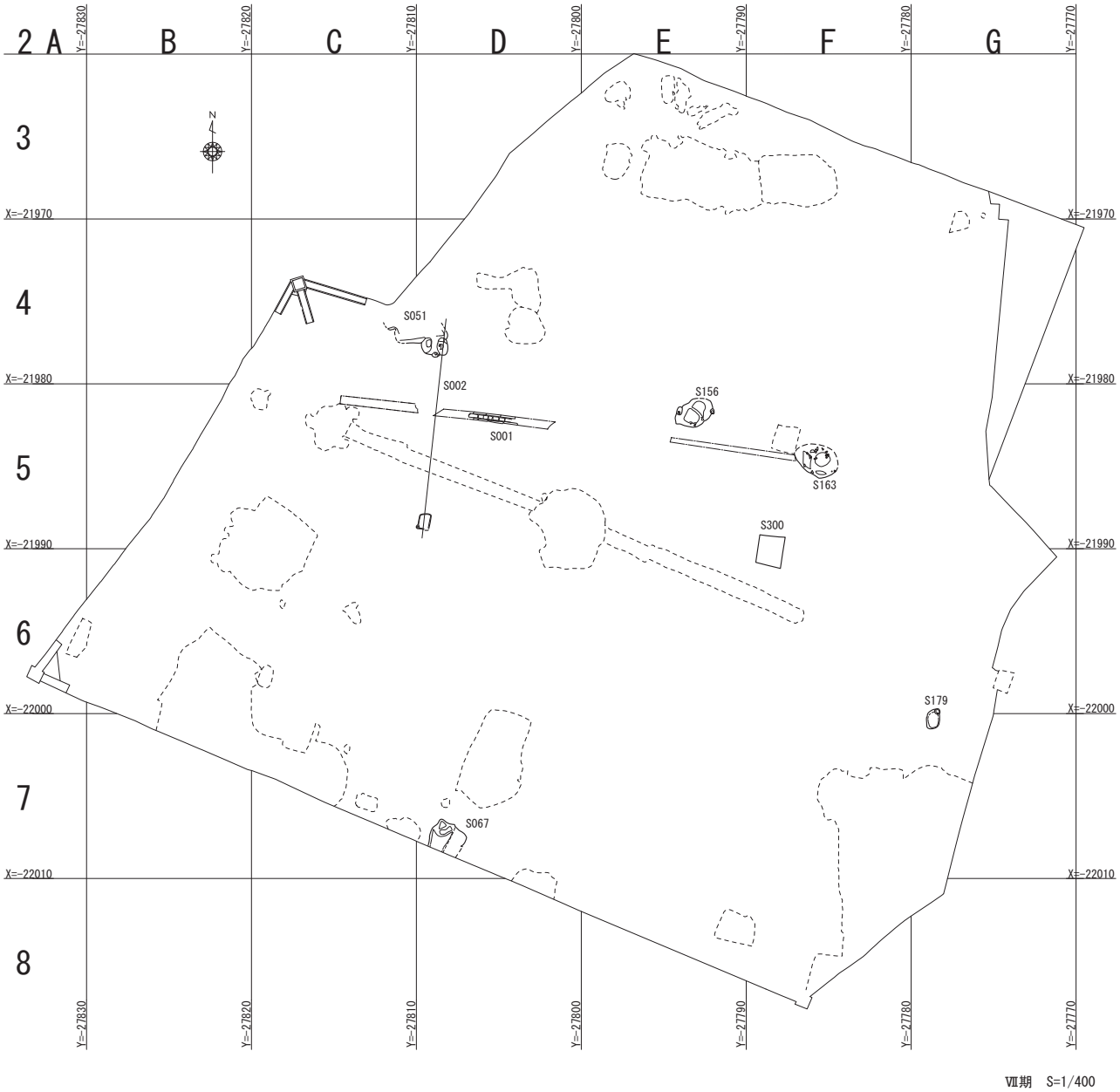
挿図番号	番号	種別	器種	産地	出土位置		部位	法量 (cm)				外器面
					遺構	グリッド		口径	底径	器高	高台高	
124	177	染付	小坏		S 035		口縁～底部	7.15	2.8	3.15	0.65	ｹｽﾞﾘ
124	178	染付	碗		S 035		口縁～底部	11.3	4.35	6.55	1.0	-
124	179	陶器	碗	在地	S 035		口縁～底部	(10.0)	3.8	6.1	0.75	-
124	180	陶器	灯明皿		S 035		完形	6.9	4.6	5.8	-	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ外器面～底部無釉
125	181	陶器	擂鉢		S 040		口縁～底部	38.85	14.0	14.35	2.55	―
125	182	陶質土器	七輪		S 040		口縁～底部	(33.35)	(19.2)	24.95	-	ﾅﾃﾞ
126	183	陶質土器	ｶﾏﾄﾞ		S 148		口縁～底部	29.5	-	26.0	-	ﾅﾃﾞ (工具痕)
124	184	陶器	皿	肥前	S 149		口縁～底部	21.6	9.5	6.0	1.6	-
124	185	染付	皿		S 149		口縁～底部	14.2	8.4	3.0	0.7	-
124	186	陶器	碗	在地	S 149		口縁～底部	10.0	4.0	6.05	0.65	-
127	187	陶器	碗	在地	S 195		口縁～底部	11.0	5.2	7.2	0.6	-
127	188	磁器	碗	在地？	S 195		口縁～底部	(14.10)	(4.70)	7.00	0.55	-
127	189	陶器	鉢		S 195		口縁～底部	(12.60)	6.70	4.90	0.35	-
127	190	磁器	碗	内野山	S 195		口縁～底部	(11.70)	4.80	7.10	1.00	-
127	191	染付	皿		S 195		口縁～底部	13.8	4.8	3.4	0.8	-
127	192	陶器	皿		S 195		口縁～底部	(27.0)	(13.6)	5.85	1.0	-
128	193	陶器	皿		S 195		口縁～底部	(27.4)	10.2	7.0	1.0	ｹｽﾞﾘ
128	194	陶器	菓子皿	在地	S 195		口縁～底部	-	-	6.9	-	工具痕 指頭圧痕
125	246	土師器	皿	-	S 040		口縁～底部	12.0	6.0	2.7	-	回転ﾅﾃﾞ
125	247	土師器	小皿	-	S 093		口縁～底部	10.7	5.65	2.6	-	回転ﾅﾃﾞ
124	248	土師器	小皿	-	S 139		口縁～底部	6.8	3.9	1.0	-	-
124	249	土師器	小皿	-	S 106		口縁～底部	6.2	4.2	1.2	-	ﾅﾃﾞ

調整			色調		備考	写真図版
外底面	内器面	内底面	胎土	釉調		
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白	外面ｹｽﾞﾘにより 8 個の花弁状の面を作り出す	PL.46
釉の掻き取り	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	藍白	端反	PL.46
ｹｽﾞﾘ後丁寧なﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ｵﾘｰﾌﾞﾄﾞﾗﾌﾞ	焦茶～ﾗｾｯﾄｺﾞｰﾙﾄﾞ	鉄釉　白土象嵌（九曜） 内外面ともに細かい貫入有　18-19C	PL.46
糸きり	-	-	ｷｬﾒﾙ	ﾗｾｯﾄｺﾞｰﾙﾄﾞ	飴釉　細かい貫入有 部分的に砂粒付着	PL.47
-	擂目	-	柿色	焦茶	畳付砂付着　　内底面砂目跡	PL.47
-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	にぶい橙	-	下部に横長方形と縦長半楕円形の風取り窓があく。　内側の支えよう突起は 2 個残存 そのうち 1 個の突起の下に円形の孔があるが外面まで達していない 外面の調整は上部や内面と比べて雑である	PL.47
高台回転ﾅﾃﾞ 表面剥離	ﾅﾃﾞ	-	にぶい橙	-	内底面に墨書 全体に薄く煤付着	PL.47
ｹｽﾞﾘ	-	蛇の目釉剥ぎ	小麦色	ｲｴﾛｰｵｰｶｰ	内面は白化粧後ﾊｹによる文様 内面底部と高台底に重ね焼きの痕跡あり 高台内底部に墨書があるが摩滅の為詳細は不明	PL.46
釉の掻き取り	-	-	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	ﾌﾛｽﾃｨｸﾞﾚｲ	高台内にﾊﾘｻｻｴ 1 個付着　　ﾊﾘ目ﾅｼ	PL.46
ｹｽﾞﾘ	-	-	利休 ねずみ	ﾎﾞﾄﾙｸﾞﾘｰﾝ	白土象嵌（九曜） 内外面ともに細かい貫入有　18-19C	PL.48
釉の掻き取り	-	-	ｵﾘｰﾌﾞﾄﾞﾗﾌﾞ	ｺｰﾋｰﾌﾞﾗｳﾝ	化粧土　花文 型摺り　17C 後半	PL.47
-	-	-	鳶色	焦茶	碁笥底高台　17-18C	PL.48
釉の掻き取り	-	-	ｲｴﾛｰｵｰｶｰ	ｺｰﾋｰﾌﾞﾗｳﾝ	17C 第四半期 -18C 前半	PL.48
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｸﾘｰﾑｲｴﾛｰ	ﾌﾞﾛﾝｽﾞ　鉄紺		PL.48
釉の掻き取り	-	蛇の目釉剥ぎ	ﾊﾟｰﾙﾎﾜｲﾄ	ﾐｽﾄｸﾞﾘｰﾝ	内外面、体部下位に貫入有 細砂粒付着	PL.48
釉の掻き取り 高台内に角印による銘があるが詳細は不明	-	-	れんが色	枯葉色	鉄絵　釉による彩式 内面は、鉄絵と金彩及び釉による彩色で葉文を描き、花文の陰刻を施す。摩耗している口縁部は口錆 外面は、鉄絵に緑釉をかけるが、摩耗の為、釉はほとんど剥げ落ちている	PL.48
ｹｽﾞﾘ	-	-	枯葉色	ｵﾘｰﾌﾞﾄﾞﾗﾌﾞ	白化粧後ﾊｹﾒによる文様　鉄絵 内面底部に目跡 6 ヶ所有 内面に貫入有	PL.48
ﾅﾃﾞ	-	-	鳶色	焦茶	外底面に貝目跡　17C	PL.48
切り離し不明後ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	灯明皿	-
ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	煤付着　　灯明皿	PL.52
切り離し不明後ﾅﾃﾞ	-	-	淡橙 2.5Y8/2	灰白 2.5YR8/2 淡黄 2.5YR8/3	磨耗激しい為調整不明 灯明皿	PL.52
糸切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	油煙付着　灯明皿	PL.52

陸軍病院門柱

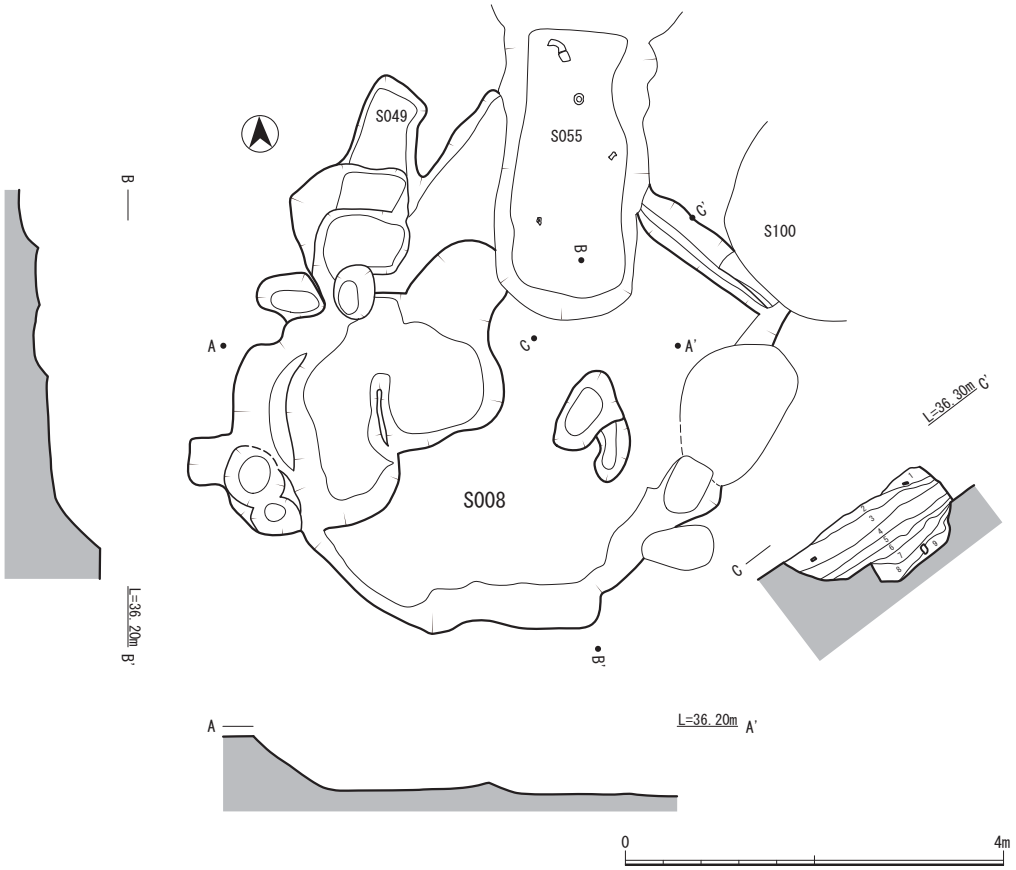
陸軍病院門柱

第7節　明治期からの遺構（Ⅶ期）



第129図　Ⅶ期遺構配置図(1/400)

明治期になると熊本城には鎮台が置かれ、調査区域は1871（明治4）年に鎮西鎮台病院として発足する。その後、衛戍病院、熊本第一陸軍病院を経て終戦を迎える。1912（大正元）年の地図では現国立病院機構熊本医療センターの場所は「衛戍病院」と記載があり、当該調査地は東西に桁行を持つ長屋状の建物があったことが判る。1989（平成元）年まで衛戍病院期の建物が残っていたが、その後駐車場に変わっている。遺構検出面の上面にには当該病院建物の基礎や、排水溝などの遺構が確認できた。



S008

1層　暗褐色土　砂性のロームのブロック礫などが混じり、よくしまる。(カクランによる)

2層　暗褐色土　ロームのブロックが混じらず、砂性でしまりがある。(カクランによる)

3層　暗褐色土　細かな砂質土でしまりがある。

4層　暗褐色土　細かな砂質土で5～10mm大の粒が多く混じる。しまりがある。

5層　暗褐色土　細かな砂質土で1mm以下のキメの細かな砂

6層　暗褐色土　5層に黄褐色粘質土が層の上、下に堆積する。

7層　暗褐色土　細かな砂粒とシルトが互層になり水性堆積の様子をみせる。

8層　暗褐色土　砂性の暗褐色土に黄褐色土の細かなブロックが混じりやわらかい。

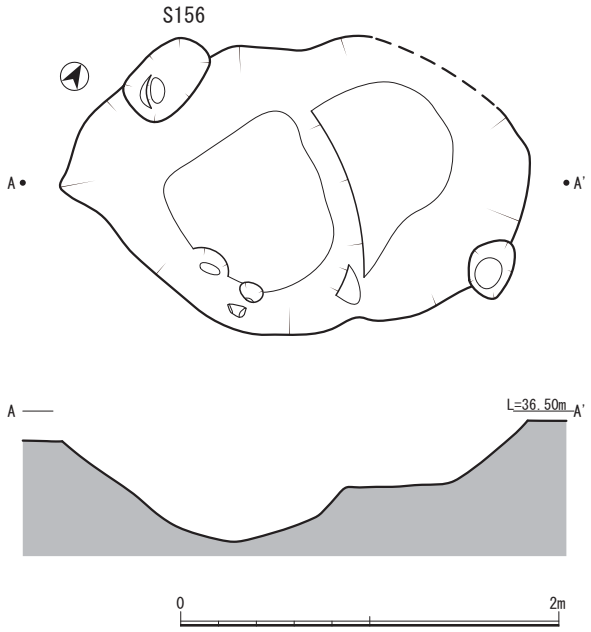
9層　暗褐色土　8層より暗褐色土の割合が多くしまる。

10層 暗褐色土　砂性だが粘性を持ち、まとまりがある。

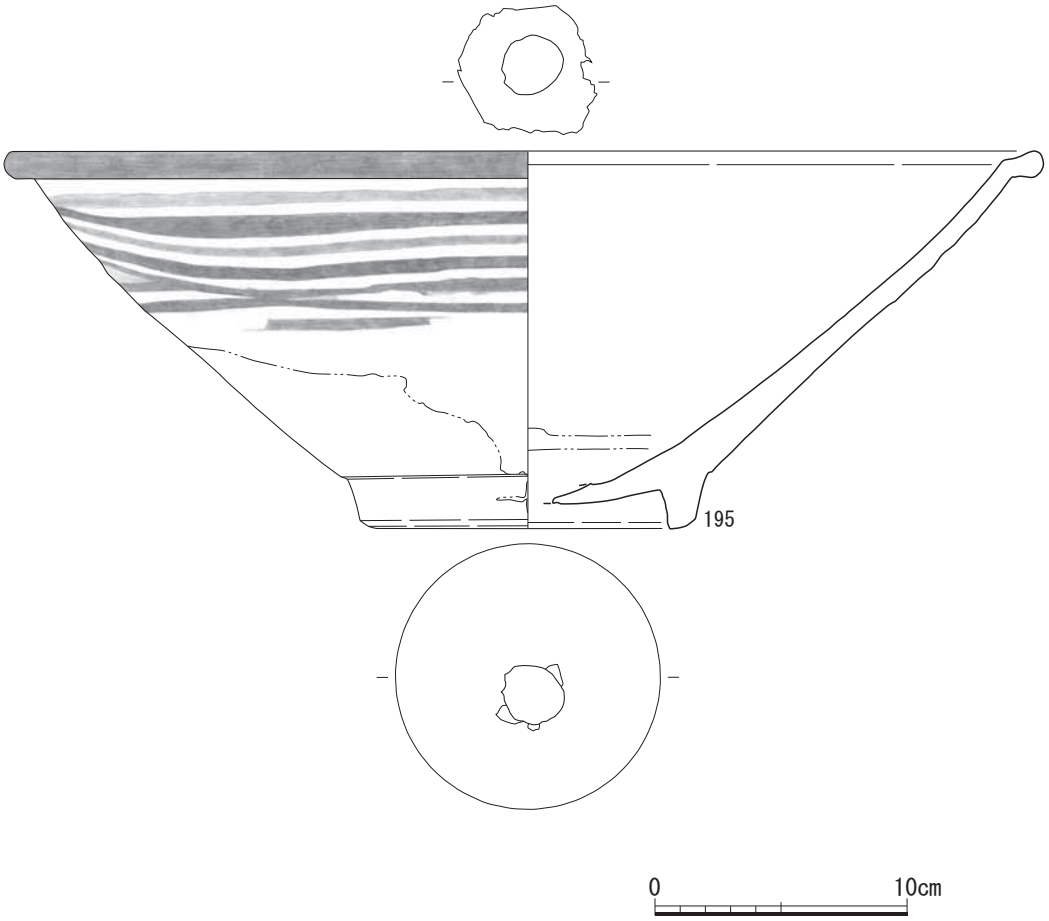
11層 褐色土　　1～10mm大の砂粒を基本に粘土が混じり、しまりがある。橙色のロームも混じる。

12層 暗褐色土　砂粒が少なく、砂質土だけでかたまりを作る。ブロックごとにかたまりボロボロとしている。

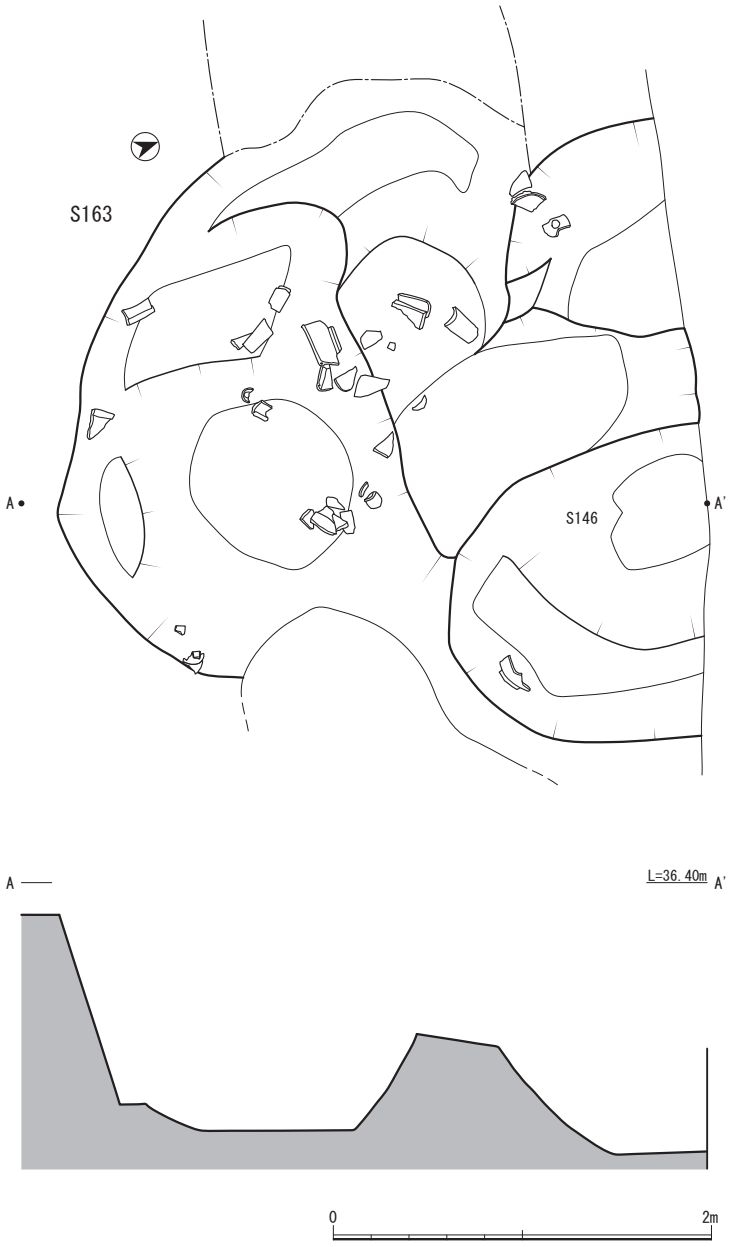
第130図　S008遺構実測図



第131図　Ｓ156遺構実測図



第132図　Ｓ002出土遺物実測図



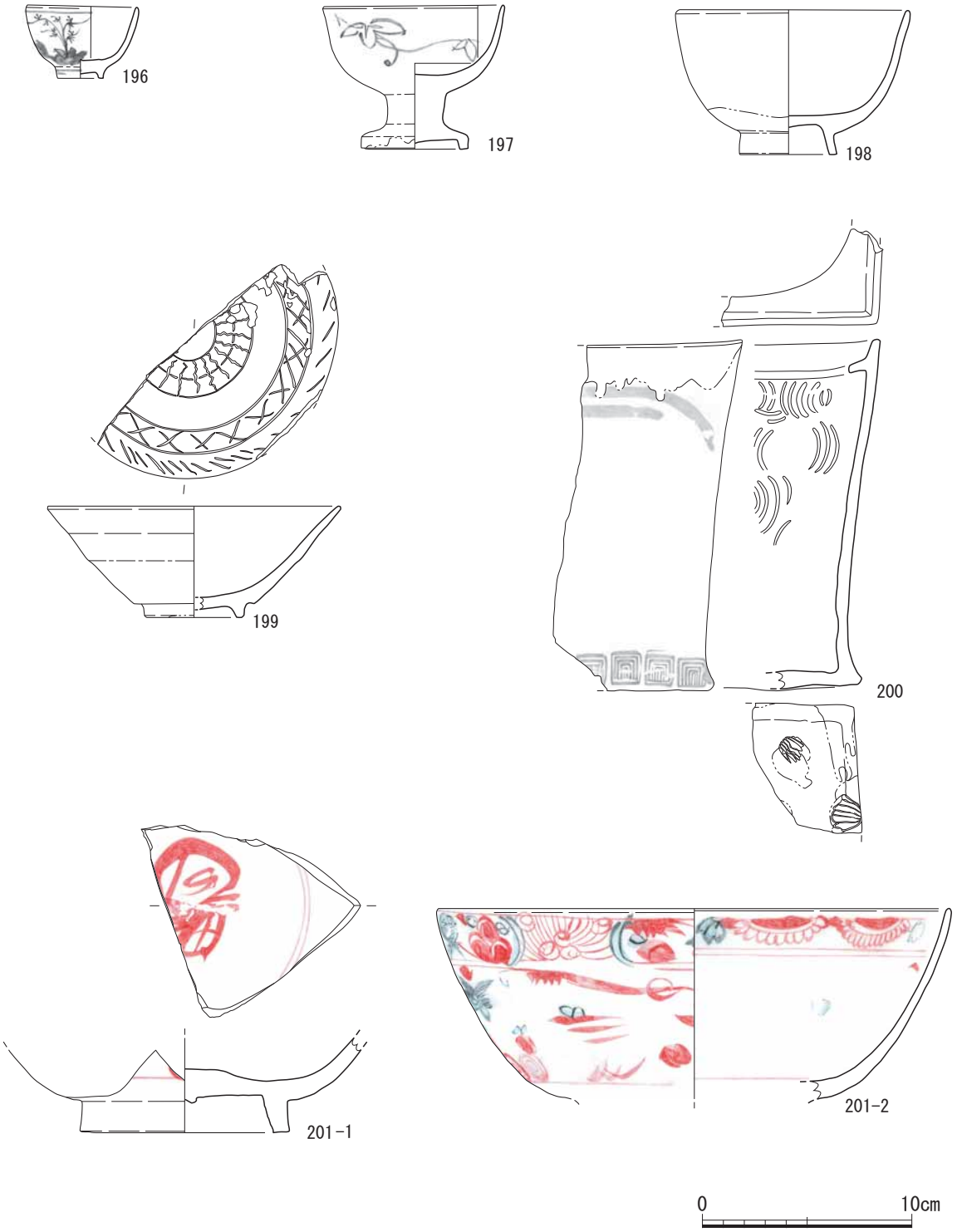
第133図　Ｓ163遺構実測図

Ｓ001

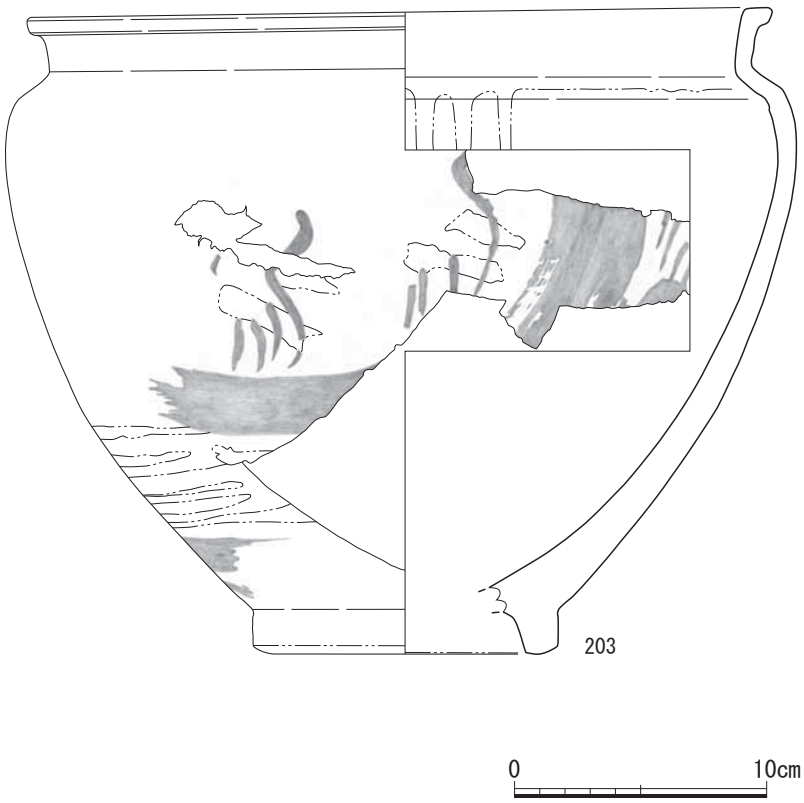
Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ－5区に位置する遺構で、凝灰岩の切り石をＵ字型に組み、上蓋をした溝で、排水路として利用されたものと思われる。側板は厚さ15cm、長さ90cmで、底には30～50cmで長さがまちまちの板が敷いてある。地表上に残る石組み井戸からも溝が伸び、西側法面に向かって排水をしたものと思われる。

Ｓ002

Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ－4、5、6区に位置する遺構で、長屋状の建物遺構。東西に桁行をとり、Ｃ、Ｄ－4、5区で北側に張り出す。建物遺構は写真でしか見ることができないが、基礎部分は幅1.5m、検出面より深さ40cm程の掘り込みを施し、円礫と黒砂で埋める。上面には劣化したコンクリートが残る部分もあった。



第134図　グリッド出土遺物実測図



第135図　グリッド出土遺物実測図

S 003

D、E、F、G－3、4、5区に位置する遺構で、長屋状の建物遺構。東西に桁行をとる。S 003より新しく、大正期以降に建てられたものと思われる。

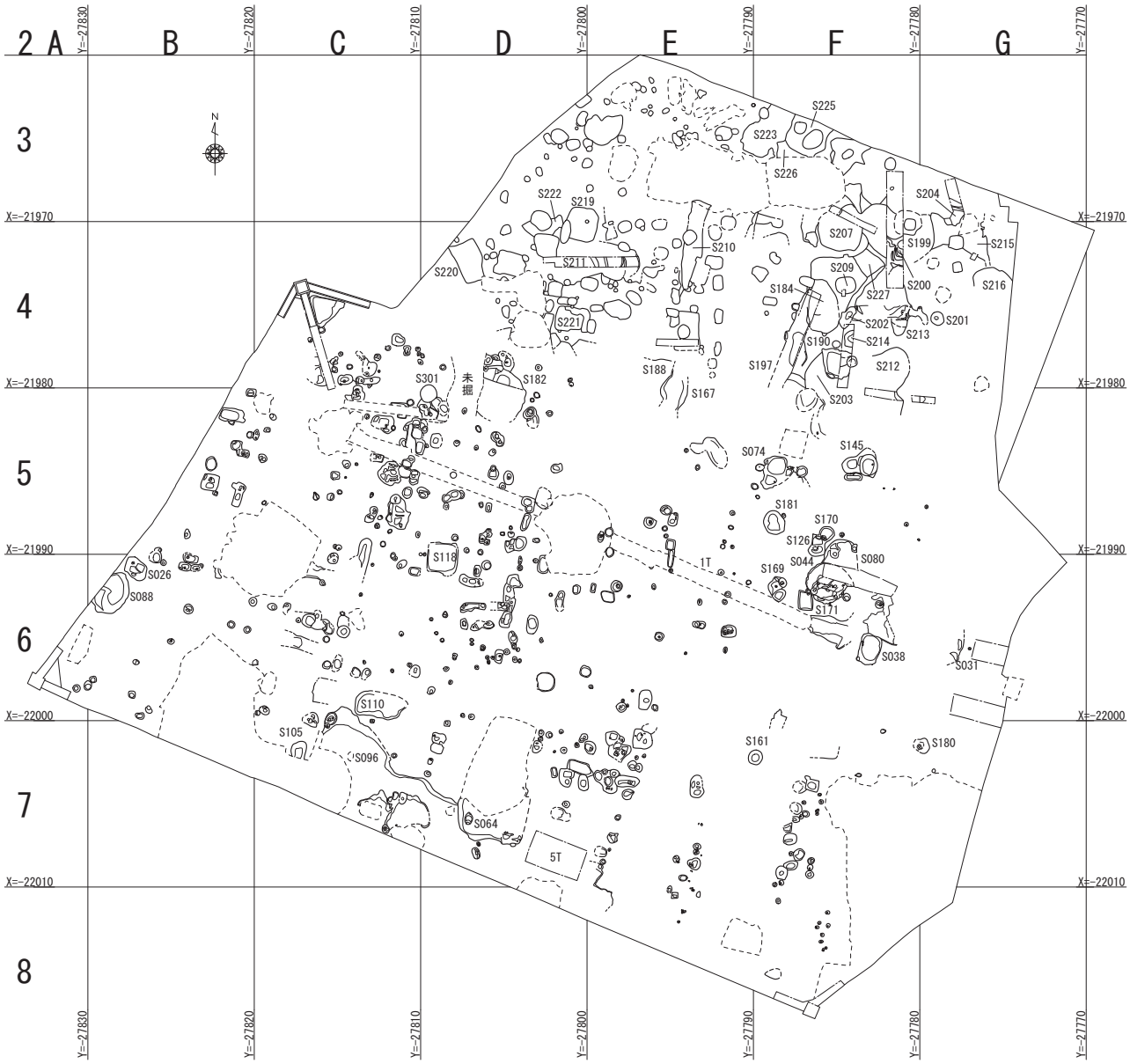
S 051

D－4区に位置する遺構。円形土坑。

S 156

E－5区に位置する遺構。大型の円形土坑。

第8節　その他の遺構



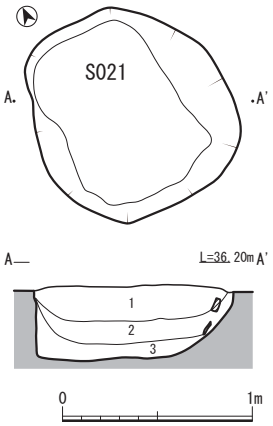
時代不明　S=1/400

第136図　時代不明期遺構配置図（1/400）

遺構は出土遺物や遺構同士の切り合い関係をもとに峻別をしてきたが、積極的に時期特定ができないものをここで紹介する。

Ｓ021(第137図)

Ｆ－6区に位置する。南北軸110cm、東西軸105cmの土坑で、深さは水準線より50cm。底面は方形でほぼ平坦になる。

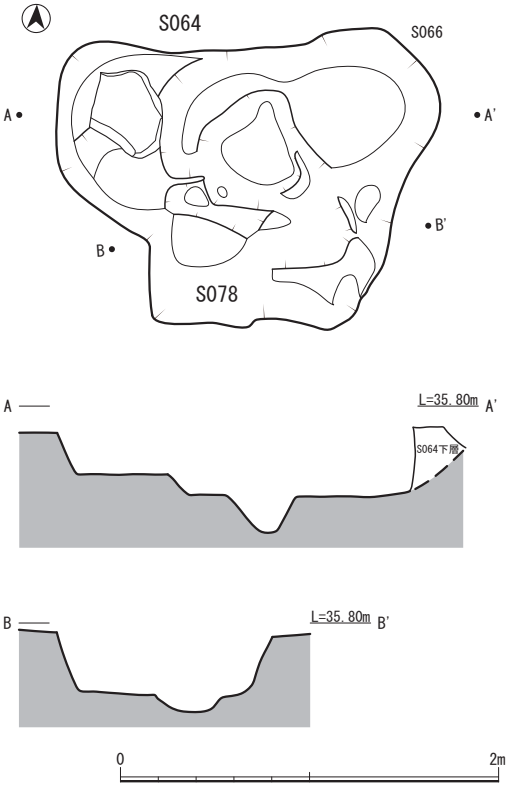


S021
1層　白色粘質土が主な埋土であるが、褐色と黒褐色のロームがどころどころ混じる。粒子は細く、質感としては、サラサラしている。

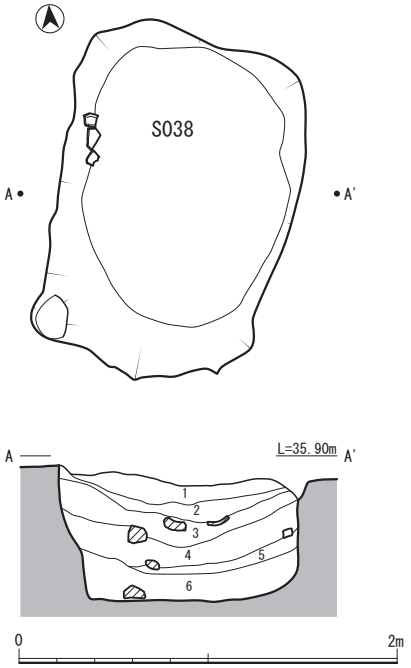
2層　粘質土と粒子が1より粗い土とで構成されている。カーボンが混じり河原石のような小礫が混じる。土色は、1よりも薄い褐色。

3層　1‐2よりも黒っぽい褐色で粘質性も高く、粒子も細かい。小礫等は、混じらないが、ピンク色のロームがまばらに混じる。

第137図　Ｓ021遺構実測図



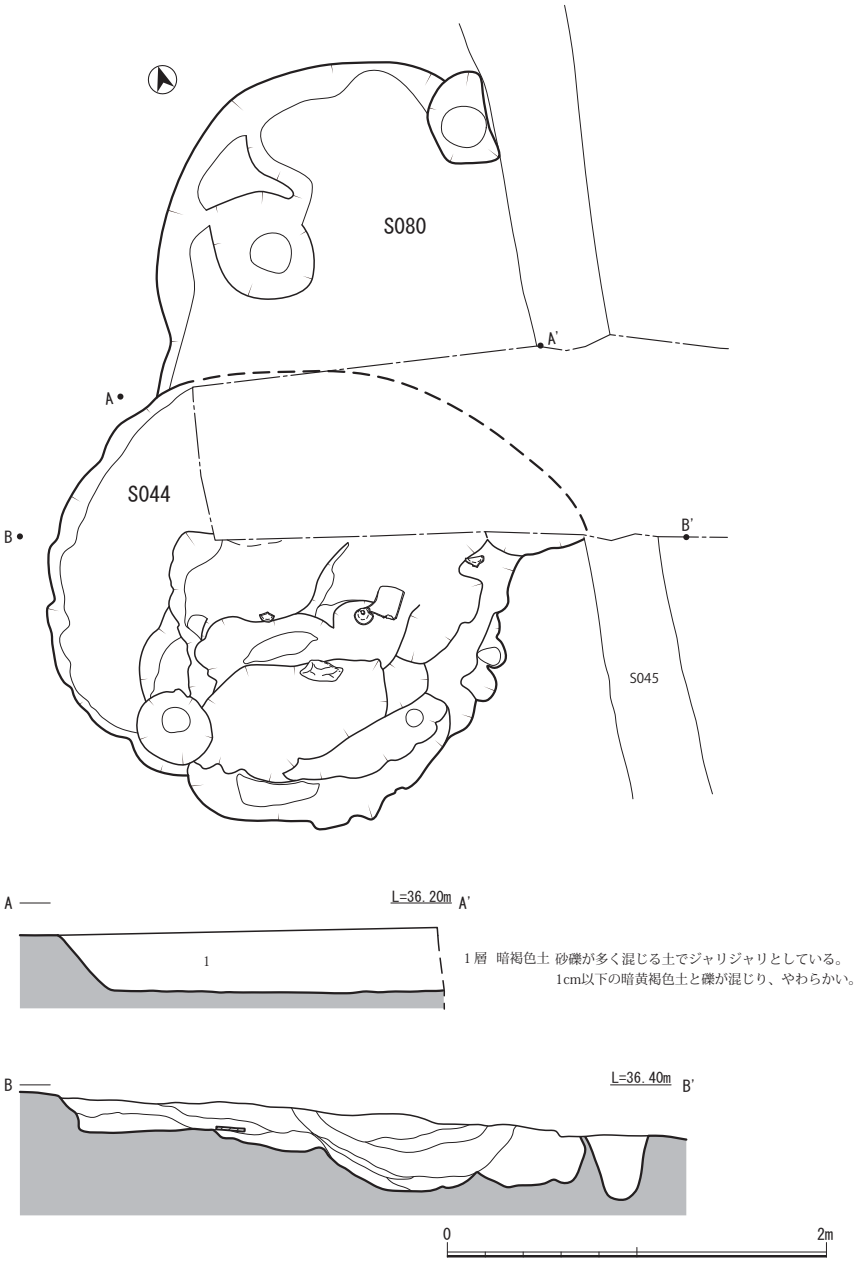
第139図　Ｓ064・Ｓ078遺構実測図



S038

１層	暗褐色土＋橙色・褐色ローム	ロームは、ブロックで混じり固くしまる。
２層	暗褐色土	カーボンの混じった砂質土でザラザラしている。
３層	暗褐色土＋橙色・褐色ローム	1より砂質でザラザラしている。
４層	暗褐色土	2mm大の砂礫が多く、ホクホクとやわらかい。
5層	暗褐色土＋褐色ローム	1よりやわらかく砂質
６層	暗褐色土	砂質土と粒となった砂質土が混じり合ってもろい。

第138図　Ｓ038遺構実測図



第140図　Ｓ044・Ｓ080遺構実測図

Ｓ038(第138図)

Ｆ－6区に位置する。南北軸185cm、東西軸125cmの方形土坑で、深さは水準線より80cm。底面はほぼ平坦になる。

Ｓ044(第140図)

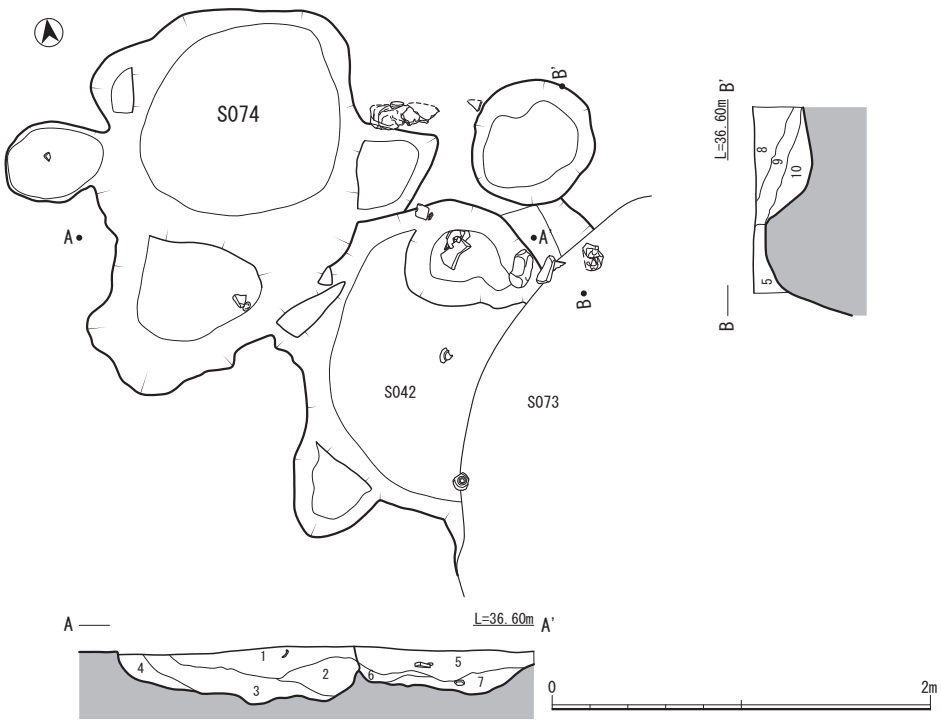
Ｆ－6区に位置する。Ｓ080を切る南北軸240cm、東西軸240cmの円形土坑で、深さは水準線より20cm。底面はほぼ平坦になる。中央部には別の土坑があることが断面で観察できる。

Ｓ074(第141図)

Ｆ－5区に位置する。Ｓ042と接するが切り合いは不明。南北軸210cm、東西軸135cmの土坑で、深さは水準線より30cm。

Ｓ088(第142図)

Ｂ－6区に位置する。南北軸24cm、検出面での東西軸180cmの土坑で、深さは水準線より95cm。



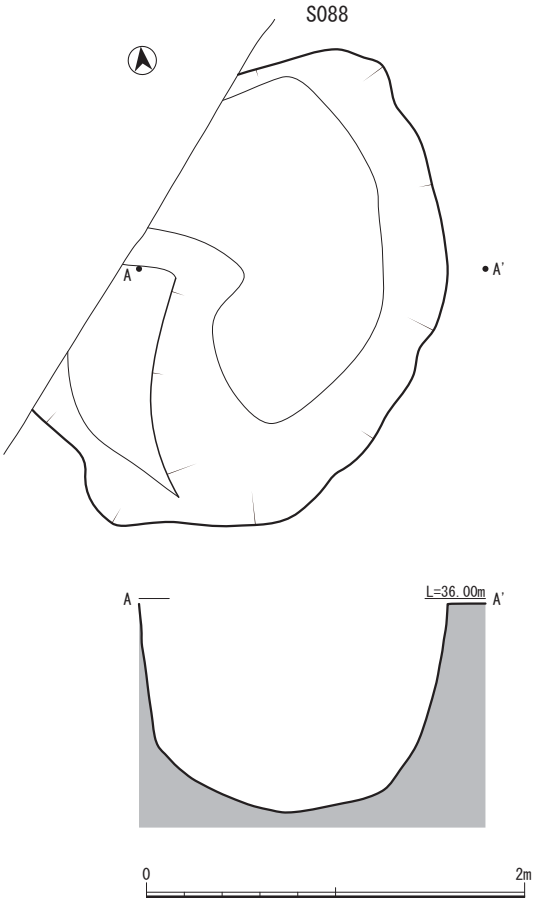
S074

1層	暗褐色土	砂質の暗褐色土に１cm大の黄褐色土のブロックがまじる。
2層	黒褐色土	砂質でザラザラしており礫が混じる。
3層	黒褐色土	2層より砂粒が大きく、ザラザラしている。
4層	黄褐色土＋褐色土	
5層	暗褐色土	砂質土でザラザラとし、やわらかい。
6層	暗褐色土＋暗黄褐色土	5層に1cmほどの暗黄褐色土のブロックが混じる。
7層	暗褐色土＋暗黄褐色土	暗黄褐色土の割合が高く、5mmほどのブロックで混じりあう。
8層	暗褐色土	粘質の暗褐色土に1cm大の黄褐色土のブロックが混じる。
9層	黄褐色土	黄褐色粘質土をベースに暗褐色土が混じる。
10層	暗褐色土	暗黄褐色土に1cmほどの暗黄褐色土ブロックが混じり、やわらかい。

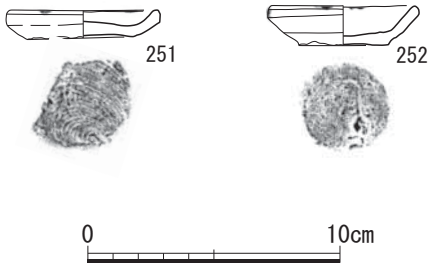
第141図　Ｓ074遺構実測図

第７表　陶磁器・土器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	産地	出土位置		部位	法量 (cm)				外器面
					遺構	グリッド		口径	底径	器高	高台高	
132	195	陶器	鉢		Ｓ 002		口縁～底部	(41.2)	13.3	14.95	2.2	ｹｽﾞﾘ
134	196	染付	小坏			G-4	口縁～底部	5.4	2.2	3.5	0.5	-
134	197	染付	脚付碗			G-4	口縁～底部	8.70	5.10	6.90	-	-
134	198	陶器	碗	肥前？		G-4	口縁～底部	(11.2)	4.65	6.9	1.0	-
134	199	陶器	碗	在地		G-4	口縁～底部	(14.0)	(4.8)	5.3	0.65	ｹｽﾞﾘ
134	200	陶器	水指	在地		G-5	口縁～底部	-	-	(16.8)	-	-
134	201-1	陶胎	鉢	漳州窯		G-4	体部～底部	-	(10.0)	(4.55)	-	-
134	201-2	陶胎	鉢	漳州窯		G-5	口径～体部	(24.6)	-	(9.1)	-	-
134	203	陶器	鉢			F-7	口縁～体部	29.55	(12.05)	25.65	1.8	-
143	251	土師器	小皿		Ｓ 044		口縁～体部	6.1	4.2	1.1	-	回転ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ
143	252	土師器	小皿		Ｓ 044		口縁～体部	6.0	3.55	1.55	-	回転ﾅﾃﾞ



第142図　Ｓ088遺構実測図

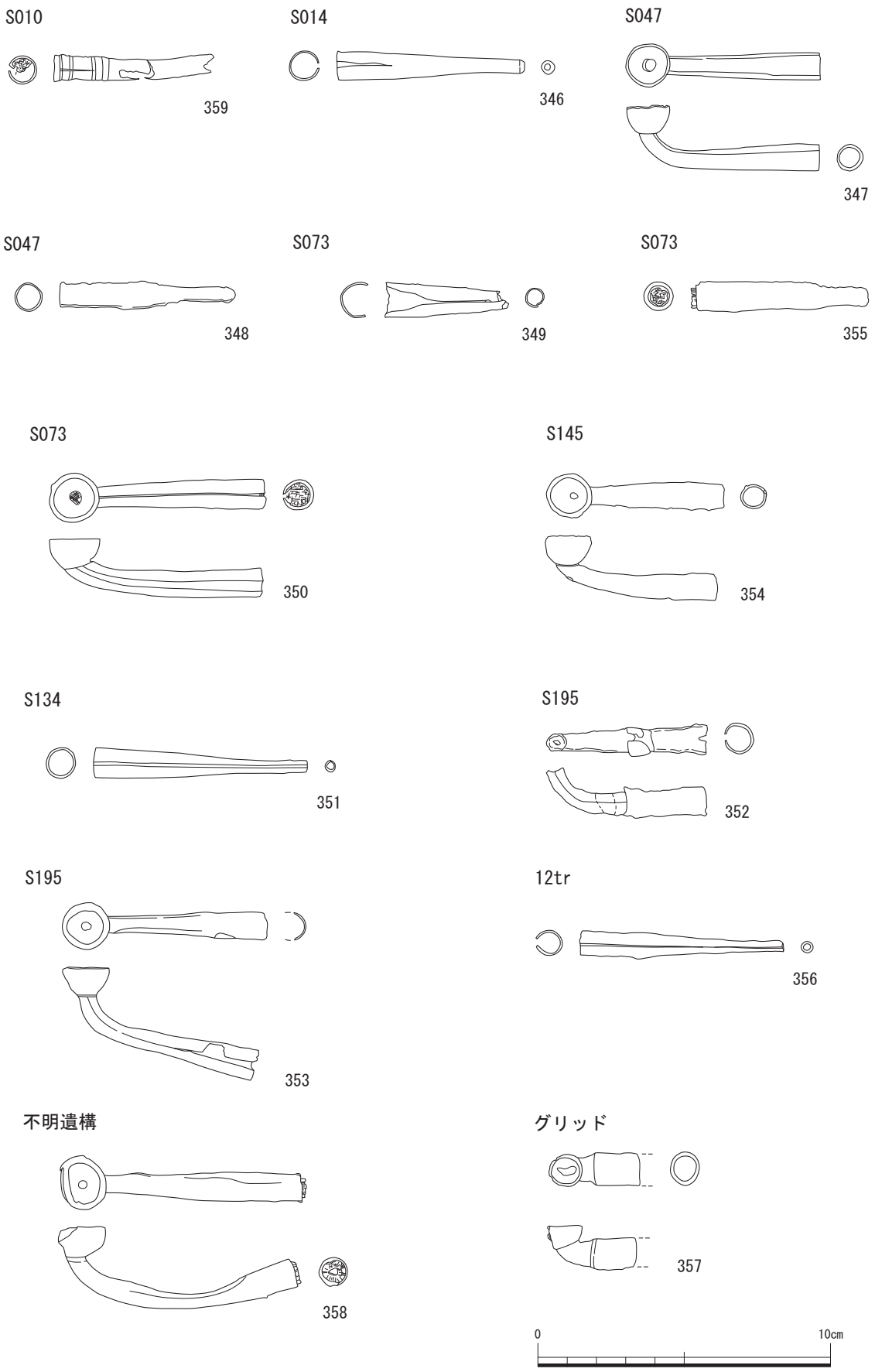


第143図　Ｓ044出土遺物実測図

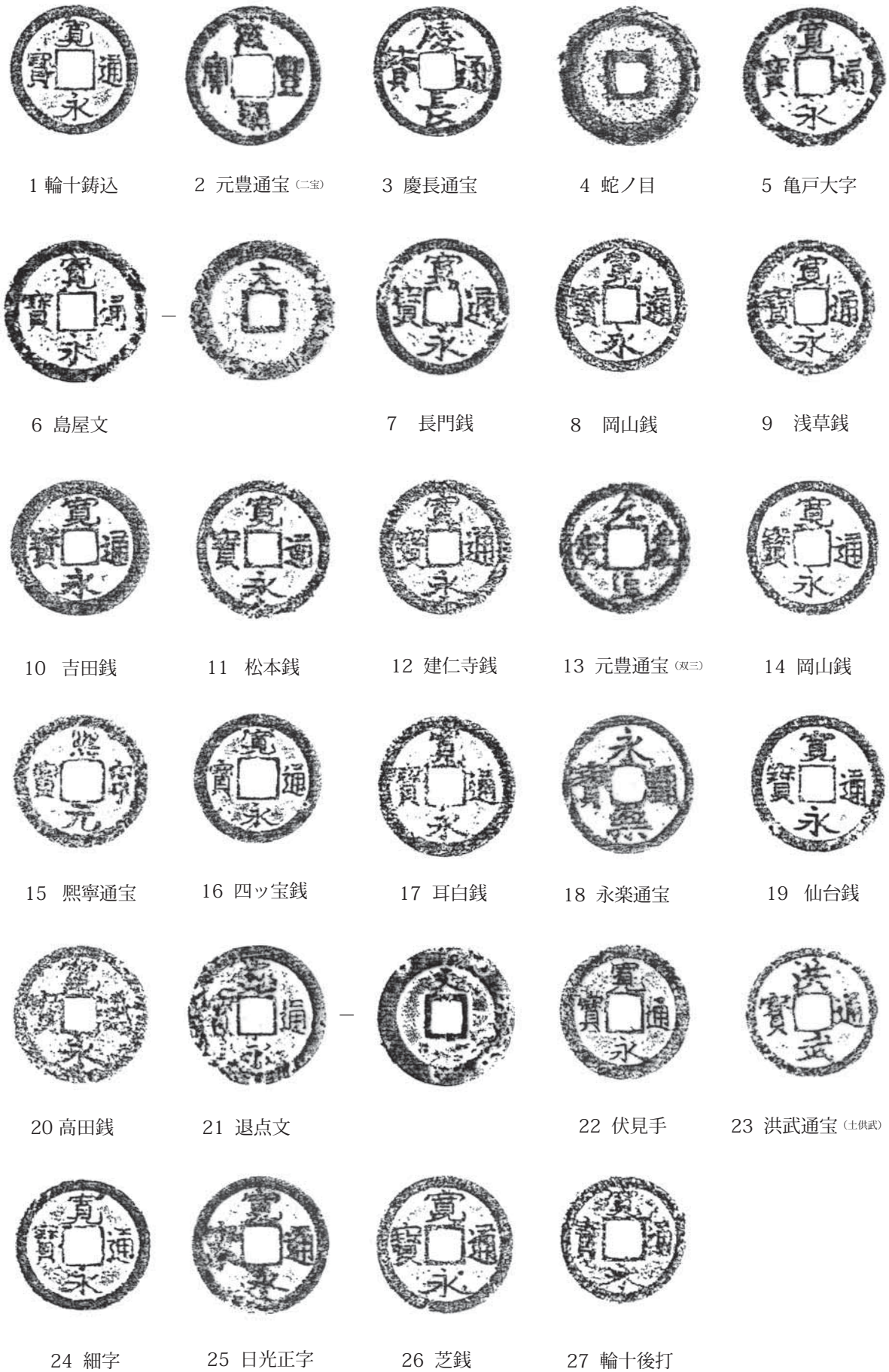
Ｓ118

Ｄ－5区に位置する。南北軸180cm、東西軸180cmの方形土坑で、深さは水準線より90cm。地表よりほぼ垂直に深く彫り込んだ遺構で、埋土も一気に埋め戻したことが観察され、締まりがないものである。

調整			色調		備考	写真図版
外底面	内器面	内底面	胎土	釉調		
ｹｽﾞﾘ	-	-	弁柄色	ｵﾘｰﾌﾞﾄﾞﾗﾌﾞ	化粧土 底部中央、外底側から穿孔有（転用？）	PL.49
-	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	ﾘﾘｰﾎﾜｲﾄ	重ね焼きの痕跡	PL.49
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｽﾉｳﾎﾜｲﾄ	白緑	内外面に貫入有	PL.49
釉の掻き取り	-	-	ｵﾘｰﾌﾞ ﾄﾞﾗﾌﾞ	ﾌﾞﾛﾝｽﾞ	17C	PL.49
畳付一部無釉 ｹｽﾞﾘ	-	-	ﾍﾞｰｼﾞｭ	ｽｶｲｸﾞﾚｲ	白土象嵌 口唇部部分的に釉が剥げる。 不完全な釉掻きとりか？　17C	PL.49
ﾅﾃﾞ	-	-	鳶色	ﾌﾞﾛﾝｽﾞ	化粧土　外底面に貝目跡　17C	PL.49
ｹｽﾞﾘ	-	-	ｷｬﾒﾙ	ｵｲｽﾀｰ	赤絵　　201-2 と同一固体　17C 前半	PL.49
-	-	-	ｷｬﾒﾙ	ｵｲｽﾀｰ	赤絵　　201-1 と同一固体　17C 前半	PL.49
釉の掻き取り	-	-	ﾃﾗｺｯﾀ	黒柿色	鉄絵	PL.49
糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4 橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	煤付着　　灯明皿	-
糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR8/6 ～7/6	橙 7.5YR8/6～ 7/6	油煙付着 灯明皿	PL.52


S010
359
S014
346
S047
347
S047
348
S073
349
S073
355
S073
350
S145
354
S134
351
S195
352
S195
353
12tr
356
不明遺構
358
グリッド
357
0
10cm

第144図　煙管実測図



1 輪十鋳込　2 元豊通宝（二宝）　3 慶長通宝　4 蛇ノ目　5 亀戸大字

6 島屋文　7 長門銭　8 岡山銭　9 浅草銭

10 吉田銭　11 松本銭　12 建仁寺銭　13 元豊通宝（双三）　14 岡山銭

15 熙寧通宝　16 四ッ宝銭　17 耳白銭　18 永楽通宝　19 仙台銭

20 高田銭　21 退点文　22 伏見手　23 洪武通宝（土供武）

24 細字　25 日光正字　26 芝銭　27 輪十後打

第145図　銭貨拓本(S=1/1)

表8　銭貨集計

No	古銭の種類	枚数	No	古銭の種類	枚数	No	古銭の種類	枚数	No	古銭の種類	枚数	No	古銭の種類	枚数
1	輪十鋳込	4	7	長門銭	5	13	元豊通宝（双三）	2	19	仙台銭	2	25	日光正字	2
2	元豊通宝（二宝）	1	8	岡山銭	1	14	岡山銭	1	20	高田銭	2	26	芝銭	4
3	慶長通宝	1	9	浅草銭	5	15	熈寧通宝	2	21	退点文	1	27	輪十後打	1
4	蛇ノ目	1	10	吉田銭	5	16	四ツ宝銭	3	22	伏見手	2		その他	18
5	亀戸大字	2	11	松本銭	1	17	耳白銭	1	23	洪武通宝（土洪武）	2			
6	島屋文	2	12	建仁寺銭	1	18	永楽通宝	2	24	細字（上中島加島）	2		合　計	76

表9　銭貨観察表

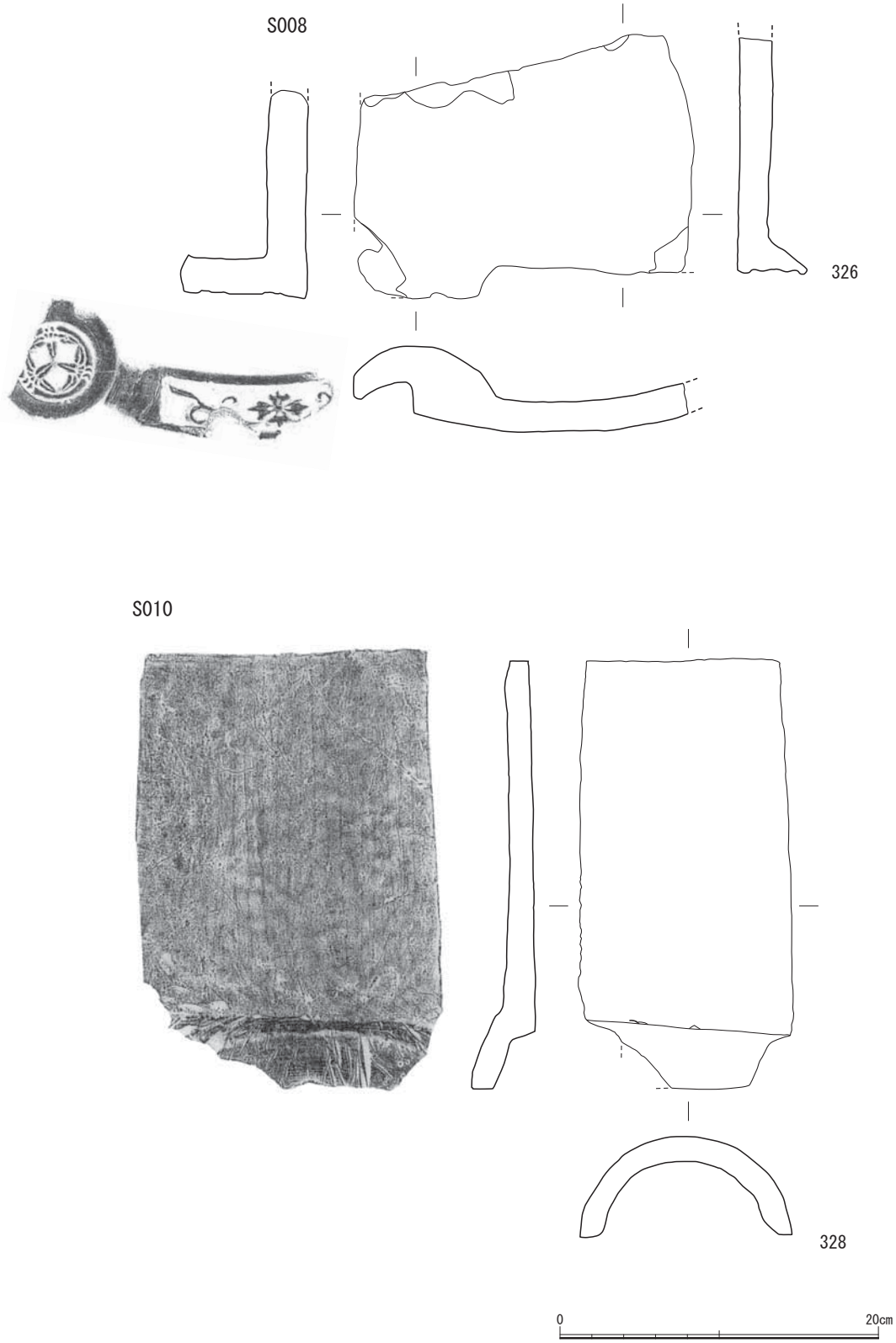
挿図番号	番号	銭貨名	材質	出土地点		法量 (cm/g)					備考	写真図版
				遺構	グリッド	外径	穿径	厚さ	幅	重量		
145	1	寛永通宝	銅	S 164	-	2.4	0.7	0.1	0.3	2.4		PL.53
145	2	元豊通宝	銅	S 164	-	2.5	0.7	0.1	0.2	2.7		PL.53
145	3	慶長通宝	銅	S 205	-	2.4	0.6	0.1	0.3	1.6		PL.53
145	4	寛永通宝	銅	S 005	-	2.6	0.5	0.4	0.4	9.0	三枚重ね	PL.53
145	5	寛永通宝	銅	S 005	-	2.6	0.6	0.3	0.2	6.1	二枚重ね	PL.53
145	6	寛永通宝	銅	S 005	-	2.6	0.6	0.2	0.2	3.4		PL.53
145	7	寛永通宝	銅	S 005	-	2.5	0.6	0.2	0.3	2.5		PL.53
145	8	寛永通宝	銅	S 014	-	2.5	0.6	0.1	0.3	2.9		PL.53
145	9	寛永通宝	銅	S 134	-	2.4	0.6	0.1	0.3	3.1		PL.53
145	10	寛永通宝	銅	S 134	-	2.5	0.6	0.1	0.3	2.6		PL.53
145	11	寛永通宝	銅	S 134	-	2.6	0.6	0.1	0.3	3.0		PL.53
145	12	寛永通宝	銅	S 134	-	2.5	0.6	0.1	0.3	3.2		PL.53
145	13	寛永通宝	銅	S 134	-	2.4	0.6	0.1	0.2	2.1		PL.53
145	14	寛永通宝	銅	S 010	-	2.4	0.6	0.1	0.2	3.2		PL.53
145	15	熈寧通宝	銅	S 010	-	2.4	0.7	0.1	0.3	3.6		PL.53
145	16	寛永通宝	銅	S 083	-	2.3	0.6	0.1	0.3	2.1		PL.53
145	17	寛永通宝	銅	S 108	-	2.5	0.6	0.2	0.3	4.2		PL.53
145	18	寛永通宝	銅	S 108	-	2.5	0.6	0.1	0.2	2.4		PL.53
145	19	寛永通宝	銅	S 195	-	2.5	0.6	0.2	0.3	4.0		PL.53
145	20	寛永通宝	銅	S 195	-	2.6	0.7	0.2	0.3	3.3		PL.53
145	21	寛永通宝	銅	-	G-4	2.5	0.6	0.2	0.3	3.8		PL.53
145	22	寛永通宝	銅	2Tr	-	2.5	0.6	0.1	0.3	3.1		PL.53
145	23	洪武通宝	銅	表土一括	-	2.3	0.6	0.1	0.3	2.2		PL.53
145	24	寛永通宝	銅	表土一括	-	2.4	0.6	0.1	0.3	3.2		PL.53
145	25	寛永通宝	銅	表土一括	-	2.5	0.6	0.1	0.3	4.0		PL.53
145	26	寛永通宝	銅	-	-	2.4	0.6	0.1	0.2	2.5		-
145	27	寛永通宝	銅	-	-	2.4	0.7	0.1	0.4	3.1		PL.53

表 10　釘集計

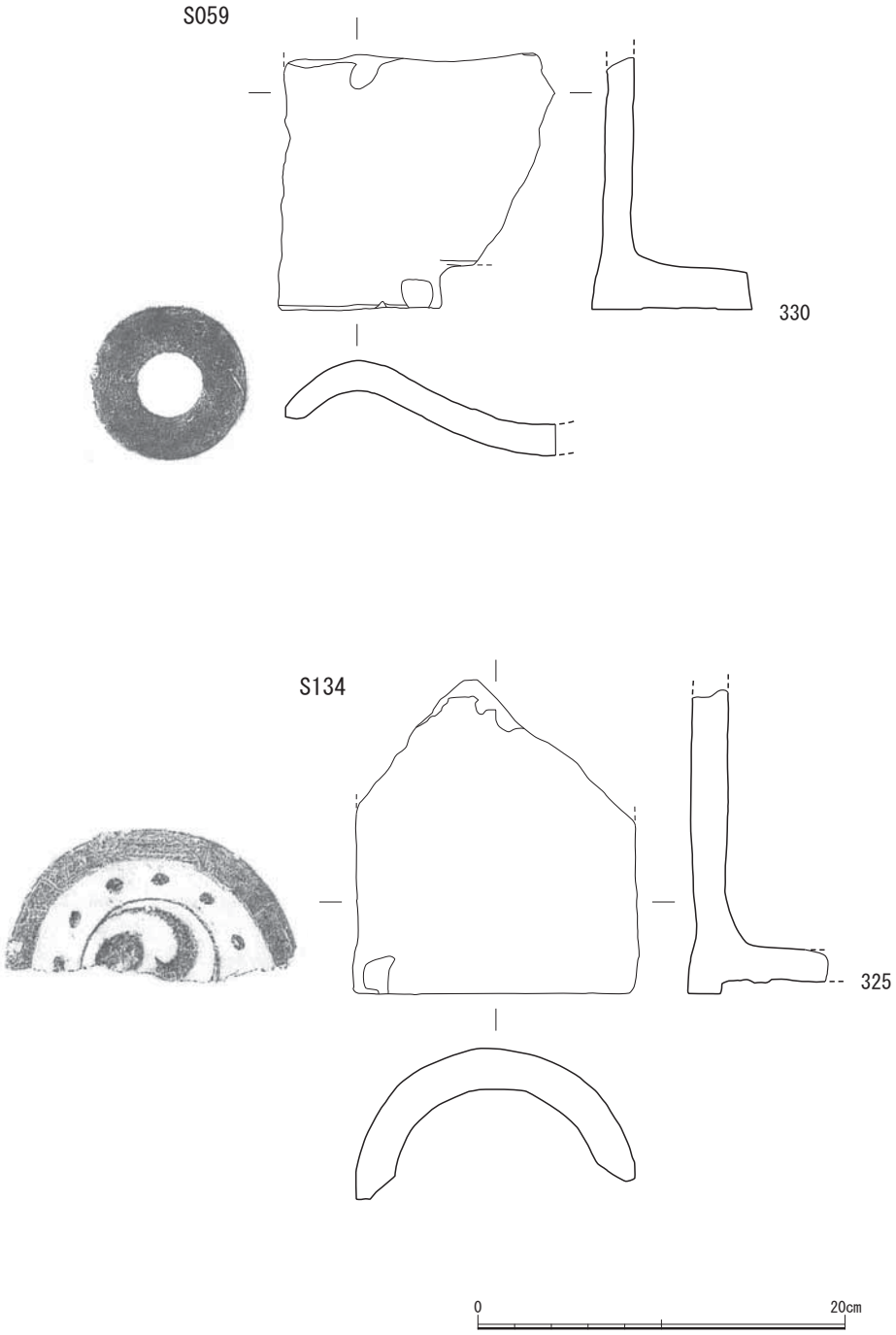
遺構名	個数	遺構名	個数	遺構名	個数	グリッド名	個数
S - 164	17	S - 013	58	S - 085	3	C-5	3
S - 055	4	S - 017	1	S - 091	2	C-6	2
S - 113	4	S - 020	133	S - 092	3	C-7	4
S - 117	1	S - 022	3	S - 106	81	D-3	5
S - 132	8	S - 028	35	S - 107	1	D-4	22
S - 301	120	S - 030	18	S - 108	3	D-5	5
S - 317	24	S - 033	1	S - 115	3	D-6	11
S - 018	234	S - 037	13	S - 137	3	E-3	12
S - 023	22	S - 043	29	S - 139	174	E-4	4
S - 046	7	S - 048	8	S - 148	237	E-5	16
S - 065	6	S - 057	6	S - 149	7	E-6	2
S - 121	2	S - 061	2	S - 189	5	E-7	62
S - 138	56	S - 068	7	S - 191	4	E-8	4
S - 144	21	S - 069	11	S - 192	2	F-3	36
S - 151	4	S - 070	3	S - 194	8	F-4	42
S - 172	1	S - 089	31	S - 195	86	F-5	67
S - 205	20	S - 099	45	S - 051	8	F-6	16
S - 005	13	S - 120	18	S - 163	10	F-7	57
S - 006	26	S - 133	14	S - 008	16	F-8	46
S - 009	10	S - 135	87	S - 060	10	G-3	1
S - 014	190	S - 141	13	S - 087	33	G-4	194
S - 016	33	S - 142	2	S - 095	1	G-5	154
S - 015・016	16	S - 146	11	S - 097	17	G-6	19
S - 027	13	S - 150	3	S - 119	15	G-7	2
S - 042	2	S - 177	2	S - 031	2	G-7・8	2
S - 047	127	S - 034	4	S - 044	13	トレンチ①	2
S - 050	45	S - 035	22	S - 058	2	トレンチ②	2
S - 062	3	S - 039	1	S - 059	1	2 トレンチ	1
S - 073	265	S - 040	71	S - 074	2	7 トレンチ	17
S - 131	10	S - 041	26	S - 145	33	8 トレンチ	1
S - 134	493	S - 049	72	S - 161	1	10 トレンチ	10
S - 136	4	S - 079	1	S - 203	22	11 トレンチ	24
S - 147	9	S - 079・082	3	S - 207	2	一括	104
S - 152	116	S - 081・082	3	S - 226	2	カードなし	34
S - 160	7	S - 081・083	1				
S - 185	11	S - 082	1				
S - 010	124	S - 083	71			合計	4,693

表 11　スラグ集計

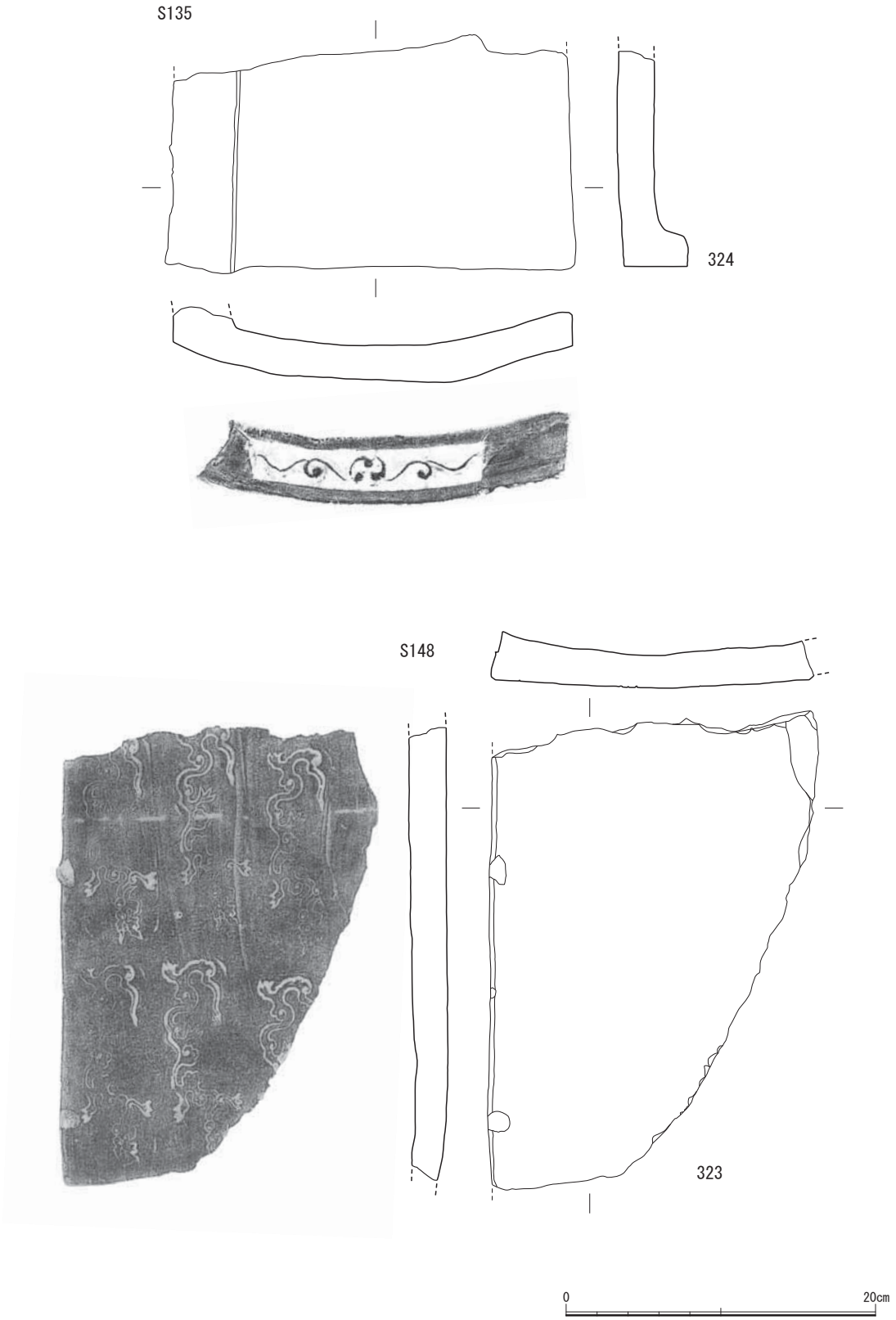
遺構名	重量（g）	遺構名	重量（g）	遺構名	重量（g）	遺構名	重量（g）	遺構名	重量（g）
S - 055	230	S - 083	40	S - 057	20	S - 195	385	F-7	230
S - 117	12,550	S - 134	565	S - 068	65	S - 060	30	F-8	210
S - 301	20	S - 147	70	S - 069	30	S - 031	45	G-3	65
S - 241	210	S - 152	60	S - 133	120	S - 044	30	G-4	190
S - 009	70	S - 157	25	S - 135	130			G-6	145
S - 014	480	S - 178	30	S - 141	100	小計	18,505	10TR	15
S - 027	30	S - 185	40	S - 040	40			11TR	200
S - 042	95	S - 186	25	S - 049	20	E-4	55		
S - 047	75	S - 010	310	S - 137	25	E-5	205	カードなし	65
S - 050	135	S - 020	240	S - 148	815	E-7	105	小計	1,575
S - 062	80	S - 028	165	S - 175	755	F-3	40		
S - 073	210	S - 048	105	S - 194	35	F-5	50	合計	20,080



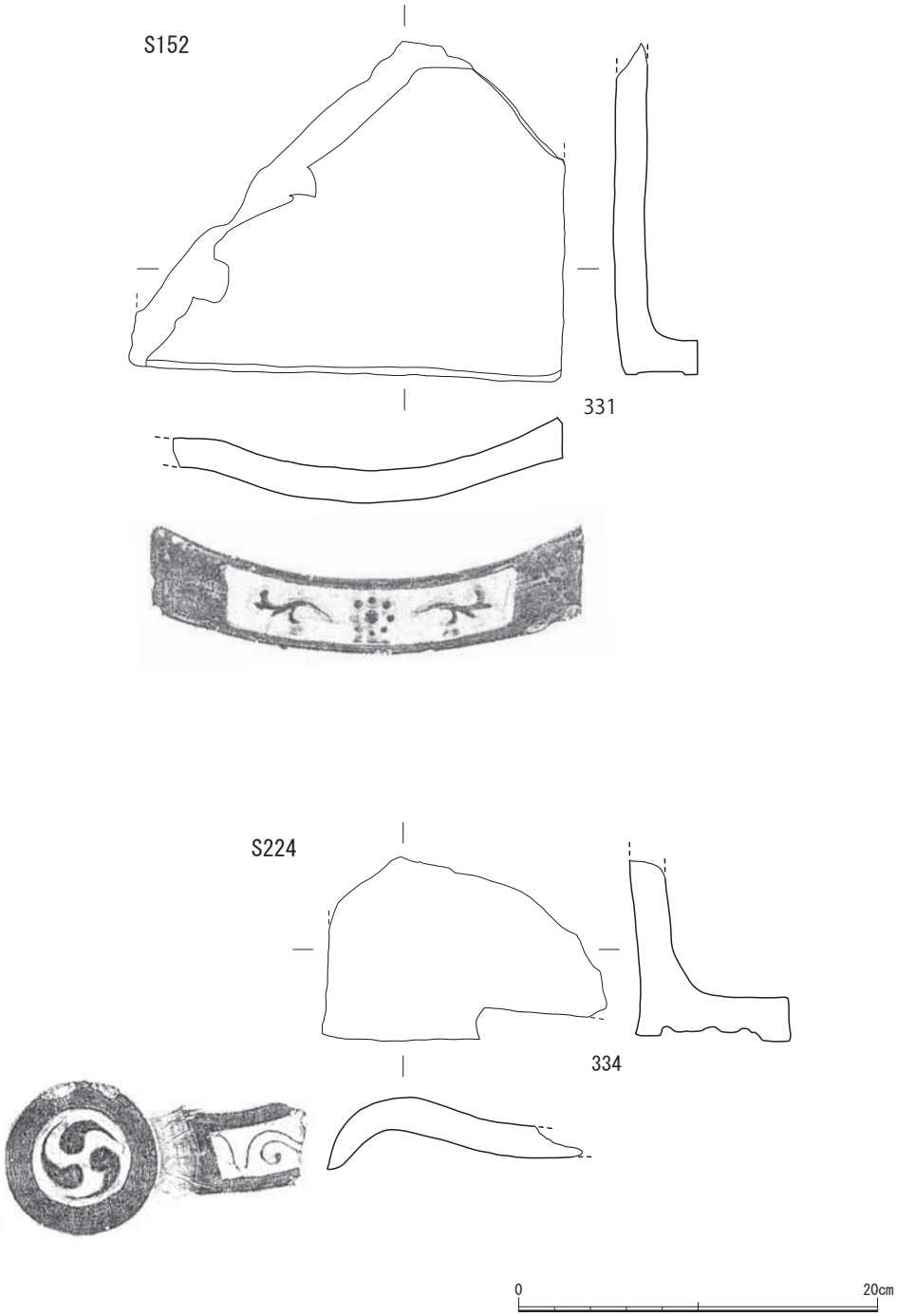
第146図　瓦実測図(1)



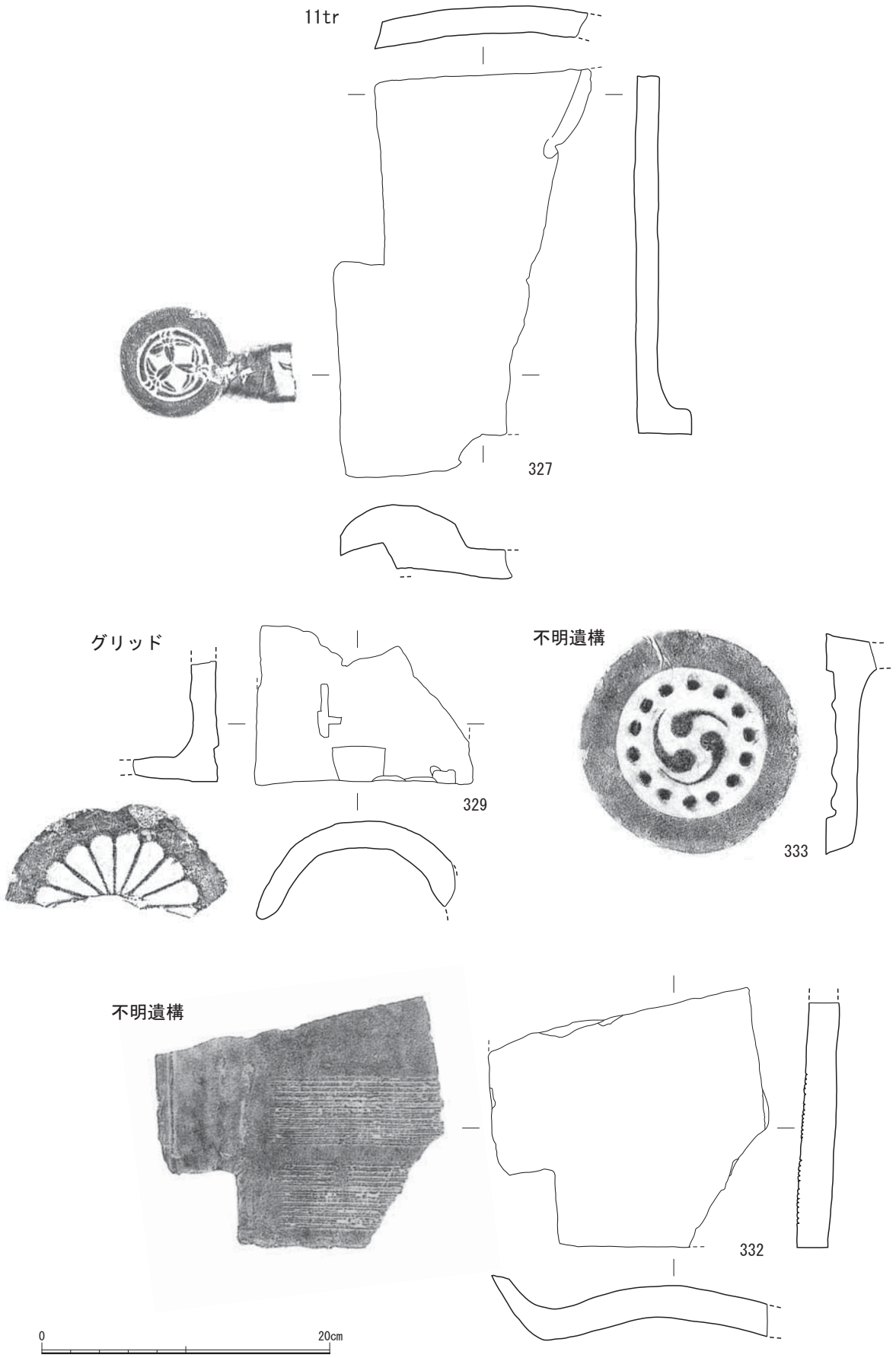
第147図　瓦実測図(2)



第148図　瓦実測図(3)



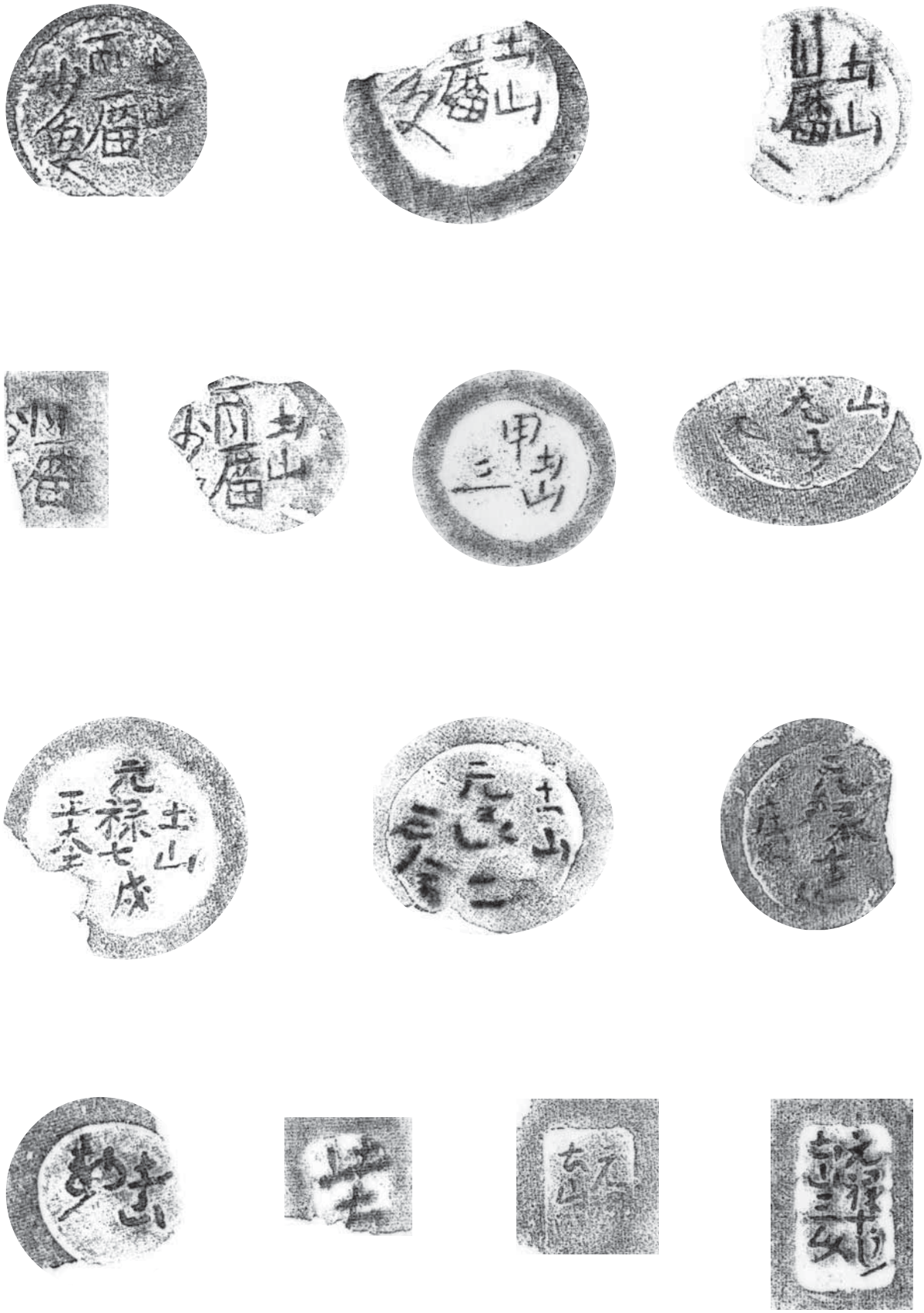
第149図　瓦実測図(4)



第150図　瓦実測図(5)

第151図　瓦の刻印(1)　S＝2/3

第152図　瓦の刻印(2)　S＝2/3



第153図　瓦の刻印(3)　S＝2/3

第154図　瓦の刻印(4)　S＝2/3

第155図　瓦の刻印(5)　S＝2/3

表12　瓦集計

瓦 遺構・他	軒平			平瓦						軒丸		丸瓦						桟瓦	その他
	軒平	刻印	その他	平瓦	刻印			模様	釘穴	軒丸	刻印	丸瓦	刻印			釘穴	紐後		
					丸	角	記号						丸	角	記号				
S 132				3								5							
S 235				14						3									
S 018				31								18				1			
S 045				30			1					1							
S 138				43								4							鬼瓦 (3) 飾り瓦 (3)
S 144												1	1						
S 151				26								11							
S 005				32								8							
S 014				236 厚 2	5	1	1					56	3			2			
S 027	1			242	2	7		平行 2	1			59			2	1	1		夕付 (1)
S 050	4	丸 (3)		635 煤 1	6	5				1		13							
S 073				207								18							
S 131				62	1	2			1			18							
S 134	7			795 厚 2 煤 3	7	2	4	平行 1 縄器 1	2	7	丸 (1)	189	2		1	4	4		規格外 (1) 鬼瓦？ (1)
S 147				8 厚 1						1		4							
S 152	1			117		2				2		20							
S 153				60								17							
S 157				17	1							4							
S 186				3															
S 010	1			141	2	1		平行 4				45							規格外 (1)
S 013				59								2							
S 017				210				9											
S 020				95	2	1						16 煤 1							規格外 (2)
S 022				22	1							5	1						
S 028				43								20							
S 030	1			36								8							
S 043				17				平行 1 格子 1	1	1		5							
S 068				197	3	1				1		9							
S 089				20								2							
S 120				9								4		1					
S 123	1			42						1		1						2	
S 135	2			56	1	1						8				1	2		
S 141				9								2							
S 142				28	1		1					7	1				1		規格外 (1)
S 146	1			80			2	夕付 1				13				1			
S 177				64	1			平行 3				7							
S 196				104		3	1	平行 1				15	1		1		4		
S 206				58	1							5					8		不明 (1)
S 035				1															
S 049				13				平行 4		1		4							
S 079	1			54		1	1		1			7				1			
S 079 S 082				42				平行 1				2							
S 082	58		2	2	1							4						10	
S 083	2			532 厚 1	5	3	2		1			12						3	
S 084 S 085				70								4							規格外 (3)
S 085				59	1							1							
S 098				19		3		平行 19				4							
S 106	2			103	1							17					1		規格外 1
S 137				71			1					11							
S 139	1			32								1							規格外 2
S 148	4			749 煤 12	3	4	3	6 平行 1	1			28	1			2	1	12	規格外 3

	軒平			平瓦						軒丸		丸瓦						桟瓦	その他
	軒平	刻印	その他	平瓦	刻印			模様	釘穴	軒丸	刻印	丸瓦	刻印			釘穴	紐後		
					丸	角	記号						丸	角	記号				
S 158				8															
S 174				8								2	1			1		2	
S 189				19								2							
S 194				133 煤 1		1						10						22	
S 195	1			97	1		1					29						3	
S 198	4	丸 1 角 1		120	1	3						2							
S 001				28			1					7							
S 002	1			70		1		平行 2	1			1							規格外 4
S 051	1			43		1						3							
S 163				17								4				1			規格外 1
S 008	5			195 厚 1				平行 2				4							
S 059	2			142	1	5		平行 13	1			12							
S 097				50				平行 5				3						1	
S 119				14				平行 3				4							
S 128				11								5				1		5	
S 224				29								2		1					
S 026	1			294 煤 3	3	1			2			21	1	1					
S 038				10								8							
S 058				8								8							
S 145	1			64		1				1		4						7	
S 161				54														2	
S 190				3			2					3							
S 199				34	1							4							
S 203				26															
S 204				39								9				1	3		
S 223				7					1			2							
S 301				25								7							
小計	120	5		7379	58	53	18	80	16	20	1	923	13	3	4	15	13	87	
C-6				57 煤 6		1		平行 3				3							
C-7	4			28		7		平行 13				1							
D-4				1															
D-7	1			8			1	平行 5				2							
E-3				14				平行 3				3							
E-4				29				平行 1				6							
E-5				31								3							
E-7	6			349 厚 2	5	4		龍 2 平行 18	4	2		21							
E-8	10			612 煤 1 厚 1	5	4	7	節目 5 平行 22				24						21	隅瓦 1
E8-F8				24															
F-3				14								2							
F-4	4			115	3	1			1	1		8						1	規格外 3
F-5				233		3	1	平行 21 ﾀﾃｷ 1		1		23							
F-6				3															
F-7				298 厚 1	2	3	1	平行 1		1		50		1					規格外 3
F-8				119		1		平行 12				11							規格外 2
G-4	2 厚 1			76	2							36							
G-5				18 薄 1								5					1		規格外 2
G-5・6				23				平行 2											
G-7	1			113		4	1	平行 10	1			7					1		
4T				28		1		平行 1											
10Tr	2			30	1							14							
11Tr				23			1					7					1		
一括				42		1						3						10	
ｶｰﾄﾞﾅｼ	3			663 煤 2 厚 1	5	5		平行 7	2	3		90 完形		2					規格外 19
小計	33			2951	23	35	12	127	8	8		319		3			4	31	
合計	153	5		10330	81	88	30	207	24	28	1	1242	13	6	4	15	17	118	

二の丸
調査地
国立病院機構
熊本医療センター
同窓会館
坪井川
熊本県立
第一高等学校

第Ⅳ章　まとめ

第1節　遺構の変遷

調査地である国立病院機構熊本医療センターは、茶臼山の南側に延びた丘陵上にあり、二の丸駐車場と県立第一高校に挟まれた台地上にある。両者と調査地との間はそれぞれ掘り切られた道路によって区画が分けられており、特に県立第一高校との境は深い谷によって隔てられている。病院内は概ね平坦な敷地であり、西側の第2駐車場として利用されている丘陵が調査地であるが、熊本城の古地図によると加藤氏の時代に同地形の区画が存在し、細川氏の時代に松井氏の下屋敷であったことがわかっている。近代になり陸軍病院が置かれ、当該地にも建物があったことがわかる。調査の結果、後世の削平を多く受けているが土坑などの掘削の深い遺構は良好な状態で残っており、上限は中世前期にまで遡る遺構が残っていることが判明した。ここでは時期を6期に分類して、各時期に比定できる遺構を紹介し、当時展開をした遺跡の景観を復元してみたい。時期区分を再掲すると以下のとおりである。

Ⅰ期　13世紀～
Ⅱ期　16世紀前葉～後葉（鹿子木氏、城氏統治期）
Ⅲ期　16世後葉～ 17世紀前葉（加藤氏統治期）
Ⅳ期　17世紀前葉～後葉（細川氏統治期）
Ⅴ期　18世紀前葉～後葉（細川氏統治期）
Ⅵ期　19世紀前葉～中葉（細川氏統治期）
Ⅶ期　19世紀中葉～ 20世紀中葉（鎮台・陸軍管理期）

Ⅰ期

中世前期の当該地の様子を記録する史料は少ない。築城前の茶臼山に寺院があったことは石造物などの資料より明らかにされている、縁起や寺院名等は不明である。『新熊本市史　別編　第1巻絵図・地図上中世・近世』に紹介された「茶臼山卜隈本之絵図」によると「クワンノン堂」の書き込みがあり、同書ではそこへ至る雁木道について現在の棒安坂に比定している。調査地からは、東端に南北に延びる道路遺構が確認された。調査地が小丘陵を成しているため、丘陵の東側に沿う形で作られた道路であろう。西側の駐車場部分は築城に伴い削平されているため、切通状の道路であった可能性もある。強い硬化面が2面あり、1面と2面の間には龍泉窯青磁碗Ⅱ－ｂ類と土師皿が出土したため13世紀半ばより存在するものと考えられる。2面にも強い硬化面が見られ、使用期間は長かったものと思われる。その上層は16世紀代の遺物も混じり、隈本城の築城までは窪地状に残ったものと思われる。Ⅱ、Ⅲ期の土坑まで龍泉窯青磁碗Ⅰ、Ⅱ類や白磁碗Ⅳ、Ⅴ類の破片が混じり、近在に中世寺院等の遺構があったものと推測される。

Ⅱ期

現在古城と呼ばれる茶臼山南尾根に隈本城を構えたのは、鹿子木親員（寂心）と言われ、1521年から1532年ころには在城したものと思われる。所在地については近世以来「古城」と呼びならわされる一帯とされ、本丸の位置は県立第一高校運動場西側のセミナーハウスのある丘陵が比定されている。1982（昭和57）年の丘陵東面防災工事では、丘陵縁に凝灰岩を掘りくぼめた溝が確認され、散兵線と解釈されている。1990（平成2）年のセミナーハウス建設に伴う埋蔵文化財調査では3×18間の総柱建物が確認されているが、17世紀後半から18世紀前半の建物と解釈されている。1992（平成4）年の校長官舎、2003（平成15）年の体育倉庫建設に伴う確認調査は校庭部分の調査であり、熊本城築城期の版築を行った整地層が確認されて

第156図　全体遺構配置図

いる。このように古城地区の本調査、確認調査では隈本城期の明確な建物遺構を確認することができず、未だ本丸の所在については確証がえられていない。今回の調査地は第一高校と病院を区画する堀切で区切られており、隈本城の比定地とは分断されている。

確認された遺構は調査区西側、南側より検出されている。北側、西側については近世の遺構や撹乱が多く、遺構が破壊されている可能性がある。検出した遺構は、掘立柱建物7棟、柱列3列、堀が1基、土坑は全部で10基。中でも特徴的なのは、西側に面した掘、柵、櫓の防御施設群である。南北に設けられた掘は西側斜面に面しており、その内側に柵が並行して設けてある。Ｓ076、117は斜面に向かった竪堀の可能性がある。Ｓ234、235の櫓は2×2間の同規格で建て替えが成されており、古い建物であるＳ235の南北の柱間が不均等なのに対し、Ｓ234では柱間を同一にし、若干規模も大きくなっている。櫓から西側へは柵が続き、鍵曲がり状になっている。柵の東側では5棟の掘立柱建物が検出されている。少なくとも2つの時期の建物が検出され、特徴的であるのはＳ240、238の長屋状の建物である。切り合い関係からみればＳ240が古く、Ｓ238が新しい。すなわち、Ｓ235とＳ240、Ｓ234とＳ238がそれぞれセット関係になるのであるが、いずれも櫓の後背に位置し、櫓を通った敵を塞ぐ位置にあるため、櫓を守備する兵舎と推測される。Ｓ240は東西に桁行きをとる7×2間の建物で、Ｓ238は南北の桁行きをとる5×2間の建物であり、Ｓ237、239ととも

に新しい建物群は南北に軸をとる建物に変わったようである。Ｃ、Ｄ－4、5区にはユニットと成り得る柱穴があり、建物群の広がりが想像できる。

一連の遺構は、出土遺物より16世紀前葉から位置づけられる。『肥後国誌』には大永・享禄年間（1521～1532年）に鹿子木親員（寂心）が菊池氏幕下として隈本城に在城したとの記述があるので、遺構群も当時のものとして問題はないであろう。遺構の性格は、県立第一高校の敷地を主体と考えるならば北の出丸的な役割を果たしたものと思われる。現在は県立第一高校との間に切り通しがあり、隔てられているが、往時は地続きか橋梁による連絡が考えられる。いずれにしても隈本城の範囲を考える上では問題を提起する遺構群である。

Ⅲ期

九州征討以後の1587（天正15）年、秀吉は佐々成政に命じて肥後半国を統治させるが、国人一揆が起きて成政は失脚する。翌1588（天正16）年、加藤清正が佐々の領地を受け継ぎ、隈本城に入城をする。熊本城の建設には諸説あるが1590（天正18）年に着工し、大まかな工事の終了が1600（慶長5）年、内装・障壁画等の完成が1607（慶長12）年との説が有力である。すなわち、清正は隈本城入城後間もなく、北側の茶臼山に近世城郭の建設に着手したのであろう。

この清正が熊本城を築城する時期の遺構と考えられるものをこの時期に区分した。特徴的なのは遺跡東側を南北に通る道路で、古代の官道遺構でも見られる波板状の窪みを入れるものである。中世城にも報告例があり、Ⅱ期より存在する可能性もあるが、西側の並行する溝より出土する遺物からこの時期に位置付けた。南側から緩やかな傾斜で北側に登っており、熊本城建設の際に石材や木材を運ぶために作られた修羅道の可能性を指摘したい。土坑は全部で16基であり、建物遺構は確認できなかった。『新熊本市史別編　第1巻絵図・地図上中世・近世』で加藤期の絵図として紹介された「8.熊本屋敷割下絵図」では、調査地は小丘陵として認めることができるが、屋敷の記載はない。「9.加藤氏代熊本ノ図」では佐野九郎兵衛の記載がある。

Ⅳ期

1632（寛永9年）、加藤氏の廃絶とともに細川忠利が新城主として熊本城に入城した。以後、明治の世になるまで細川氏の支配が続くのであるが、調査地は家老松井氏の下屋敷があり、幕末まで続いたようである。『新熊本市史　別編　第1巻絵図・地図上中世・近世』によると、明暦年間と推測されている「21　二ノ丸之絵図」で、当該地は「長岡帯刀下屋敷」との記載がある。長岡帯刀は筆頭家老松井氏のことであるが、宝暦、天明と時代が下るにつれて3区画、5区画と下屋敷の規模を拡大している。

ここで特徴的であるのはＳ009で、南から北へ延び、Ｅ－6区で東へ直角に折れ曲がる道路遺構である。屈曲部の東側には石垣が残り、中央部には強い硬化面が残るしっかりとした道路遺構で、建物等の区画をするための道路であろう。道路南側には瓦溜りがあり、道路の廃棄時に埋められて造成が成されたものと思われるが、瓦の検討ができていないために埋設の年代を指摘することができない。前述の様に、屋敷地の拡大に伴い埋められたものと思われる。

また、大型の土坑が多いことも特徴である。Ｓ014、016、047、072、073、134などは大きさも深さもあり、地下式倉庫と使用されたものではないだろうか。最終形態は廃棄用土坑として利用されたもので、陶磁器の破片とともに、貝殻や魚骨、獣骨使用済み食材も廃棄されたようである。数枚、厚い炭の層があるのは消臭のためであろう。特に大型のＳ134から出土した遺物は特徴的で、抹茶碗や菓子盆、合子、花瓶等、茶の湯の道具の破片が大量に廃棄してあった。本来伝世するはずのものが一括して廃棄してあることは異常で、例えば地震等の天災や家の事情など、茶器を一括して廃棄しなければならない事柄が発生したことが想像され

る。

下屋敷建物の遺構は確認できなかったが、調査地中央より西側にかけて空白地があり、そこに建物があったことが推測される。

Ⅴ期

小規模な土坑が東側と西側に縦に並ぶ。多くは陶磁器の破片や使用済み食材が出土する廃棄用土坑である。Ｓ020は大型の土坑で、東方向より地山を削りだした階段が設けてあり、地下貯蔵庫として利用されたものであろう近くに厨房などの奥向きの建物の存在が想像できる。

下屋敷建物の遺構はやはり確認できなかったが、調査地中央より北側にかけて空白地があり、そこに建物があったことが推測される。

Ⅵ期

江戸時代後期の文化、安政の絵図で、当該地は「一日亭」との記載がある。他は屋敷主の姓が記載してあるのに対し、このように屋敷についた名称を絵図に記してあるところは他にはなく、趣向をこらした屋敷に建て替えた可能性がある。「一日亭」については松井文庫に「一日亭春秋真景屏風」が残されており当時の姿を窺うことができる。

Ⅵ期もⅤ期と同様に小規模な土坑が東側と西側に縦に並ぶが、東側も西側も縦に並んだ土坑列が若干東側へ移動する。また、南側に大型の土坑があり、これは瓦の廃棄用として掘られたもので、大量の瓦が出土した（Ｓ083、148）。

調査地中央より北側にかけて空白地があり、そこに「一日亭」の建物があったことが推測される。

Ⅶ期

明治期になると熊本城には鎮台が置かれ、調査区域は1871（明治4）年に鎮西鎮台病院として発足する。その後、衛戍病院、熊本第一陸軍病院を経て終戦を迎える。1912（大正元）年の地図では現国立病院機構熊本医療センターの場所は「衛戍病院」と記載があり、当該調査地は東西に桁行を持つ長屋状の建物があったことが判る。「衛戍病院」とは陸軍病院の旧称で、全国の陸軍駐屯地（衛戍地）に置かれたものである。戦後、1945（昭和20）年12月には機関が厚生省に移管し、国立熊本病院として発足する。2004（平成16）年には国立病院機構熊本医療センターと名を改め、現在に至っている。

1912（大正元）年の見取り図を参考にすると、調査地部分には東西に桁行をとった長屋状の建物があったことがわかる。昭和に入り、北側に旧棟と対になる形で東西に桁行を持つ建物が建てられている。熊本国立病院となり、病棟を経て最終的にはカルテ庫、訪問学級として利用されている。1989（平成元）年には2棟とも取り壊され、駐車場に姿を変えている。

第2節　陶磁器及び茶器の考察

（本節では、茶器とその周辺の陶磁器を扱ううえで、主に美術史の名称を使う事とした。Ex:肥前系染付草創期→初期伊万里）

本遺跡では輸入陶磁器、古唐津・絵唐津と呼ばれる肥前系陶器、初期伊万里・古九谷様式青手と呼ばれる肥前系染付などを含む陶磁器が出土している。茶道具の出土も多く、中でも産地が特定できないが様々な技法を使った興味深い遺物群があり、これを便宜上X類とした。

これらの一郡は、本報告書での時期区分のⅢ・Ⅳ期の遺物と多く出土しており、17世紀中頃の遺物ではないかと推定し、その作風は御用窯のような趣味性の高い性格を持っていると考える。

発掘調査時点では、上野焼でこのような類例がないかと考えたが、現段階ではこの遺跡とも縁がある八代、奈良木窯・平山窯など17世紀代の八代焼が含まれているのではないかと考えたい。しかしながら奈良木窯・平山窯初期の遺物であると比較検討する資料は少なく、あくまで推測の域を出ないが、今回の報告によって今後の活用を期待するものである。

X類の特徴

器種：碗、香合、水指、手付き鉢、壷など

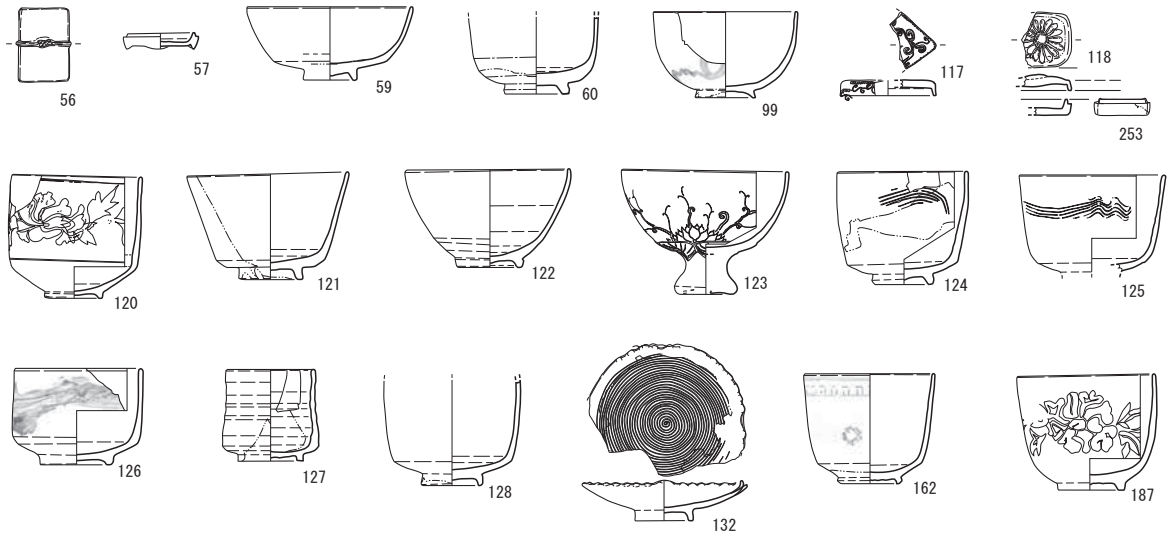
装飾技法：型成形した模様の貼付、線刻、白化粧土、象嵌（白化粧土の型刷か象嵌か判断がつかない例もある）、絵付、釉薬の掛分、貝目、にな尻など

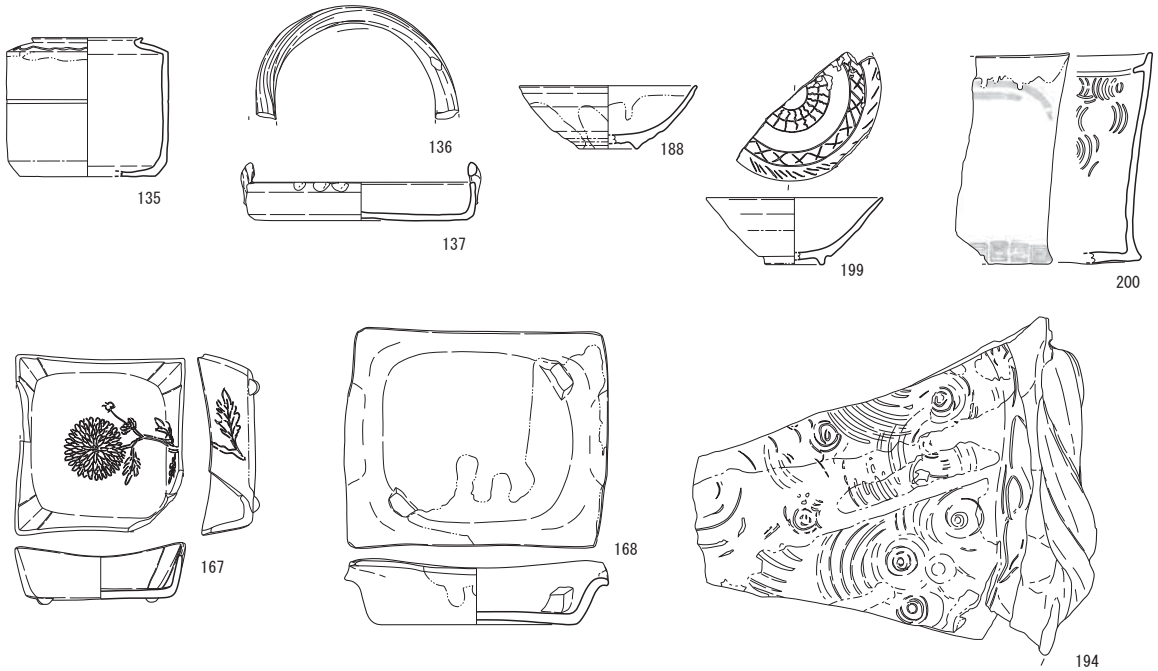
推測年代：主に17c前～中頃の遺物と多く出土しており、17世紀中頃と推定する。（Ⅲ期・Ⅳ期）

茶碗類は形も筒型、沓茶碗、高杯状（123）のなど数種あるが、高台の作りなどから茶陶として作られていると思われる。その殆どの高台端部（畳付）に二枚貝の貝目を施す（貝高台）。

（99）は、絵唐津と呼ばれる肥前系陶器の碗ではなく、胎土や作風からそれを写して造ったものと考える。貝高台。

手付き鉢（137）、壷（135）、水指（200）などの底部にも二枚貝の貝目がよく使用されている。また、（200）の水指は、釉薬のかかった円状の縁があり、塗りの蓋が使用されたと推測する。



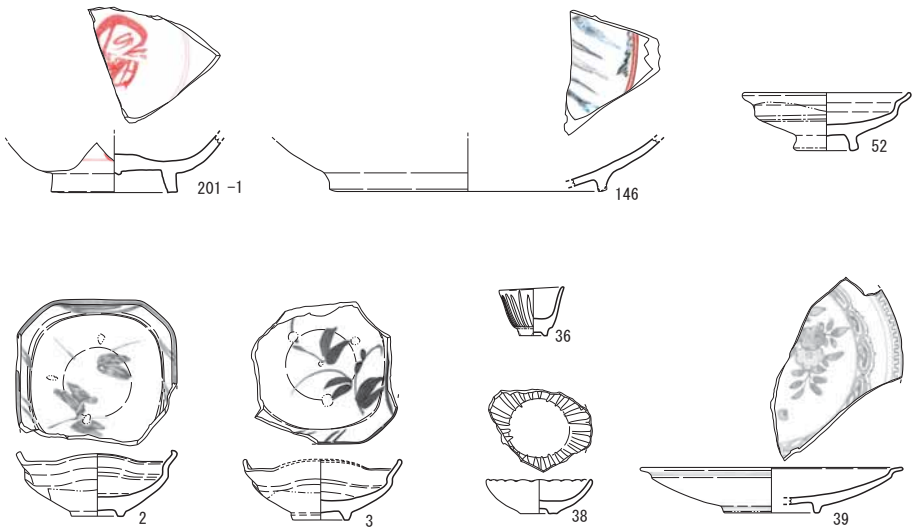


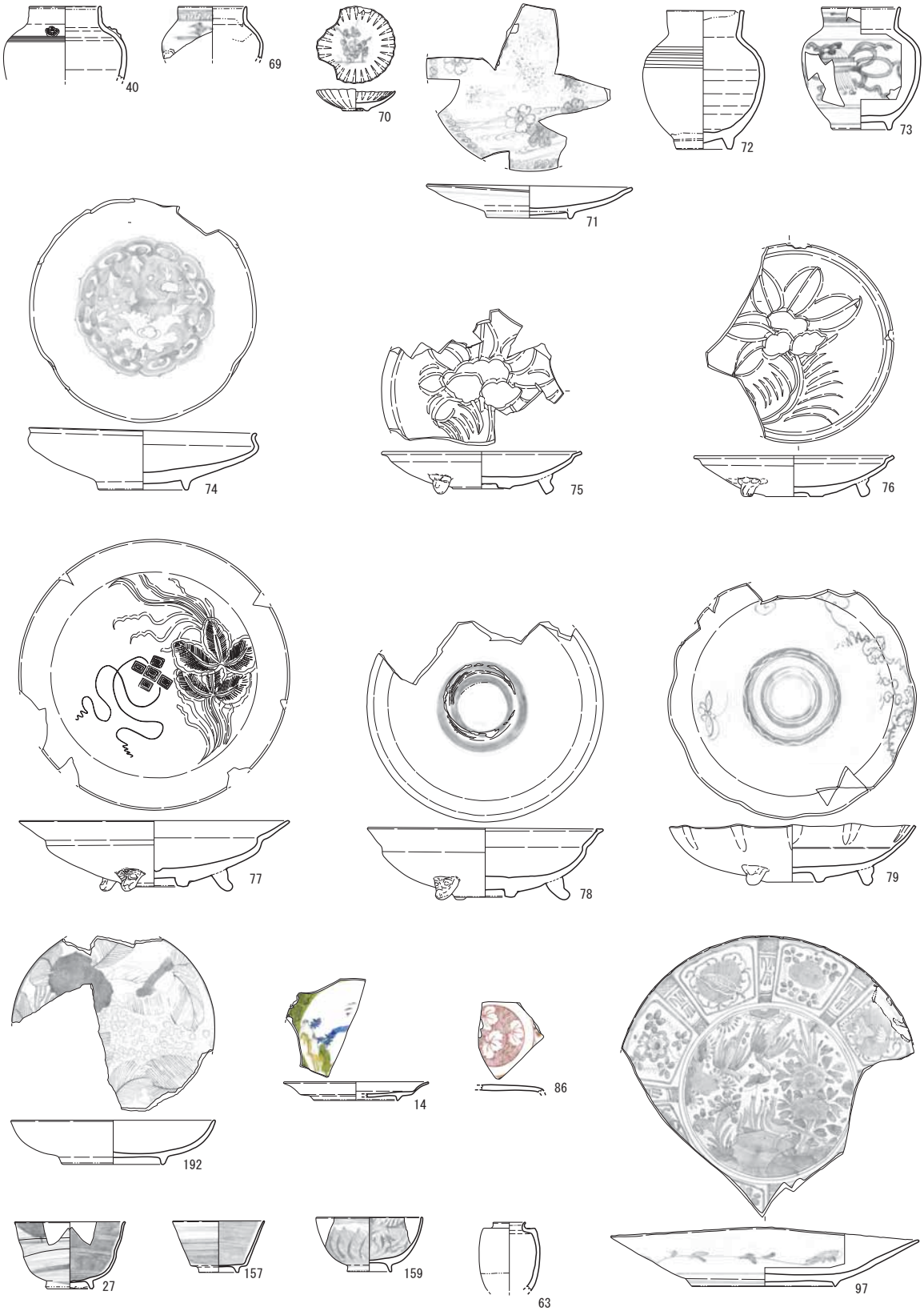
その他の特徴的な遺物や茶陶

輸入陶磁器：呉須赤絵鉢（201）※見込に「魁」の銘・大皿（146）・漳州窯系白磁線刻大皿（ＰＬ.50・a)、河南三彩（ＰＬ.51・b）※色調は法花に似る。阿蘭陀(ＰＬ.51・c)

国内陶磁器：志野焼（ＰＬ.51・d、e)、瀬戸（ＰＬ.51・f）古唐津・絵唐津（52、2、3）※52は藁灰釉薬で高台などから上野の可能性もある、初期伊万里の皿・鉢・壷など（36、38、39、40、69、70、71、72、73、74)、肥前系青磁（75、76、77、78、79)、古九谷様式青手の皿（192)、肥前系色（14、86)、芙蓉手大皿（97)、現川焼の可能性のある遺物（27、157，159）※精緻な胎土や作りから、武雄系の刷毛目ではなく現川の可能性があると考える。茶入（63）

本遺跡からは、様々な時代の遺物が出土しているが、主にⅢ期の遺物は、残存率も高く優品が多く、熊本城内の遺跡から出土した遺物として、充分に展示に耐えうる内容であり、これからの活用が期待される。また、残存率などから報告書掲載されなかった遺物も多く、これらも興味深い資料である。




40
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
192
14
86
27
157
159
63
97

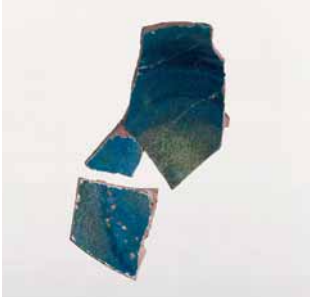
ＰＬ.50　白磁線刻大皿（a）

ＰＬ.51　阿蘭陀（c）

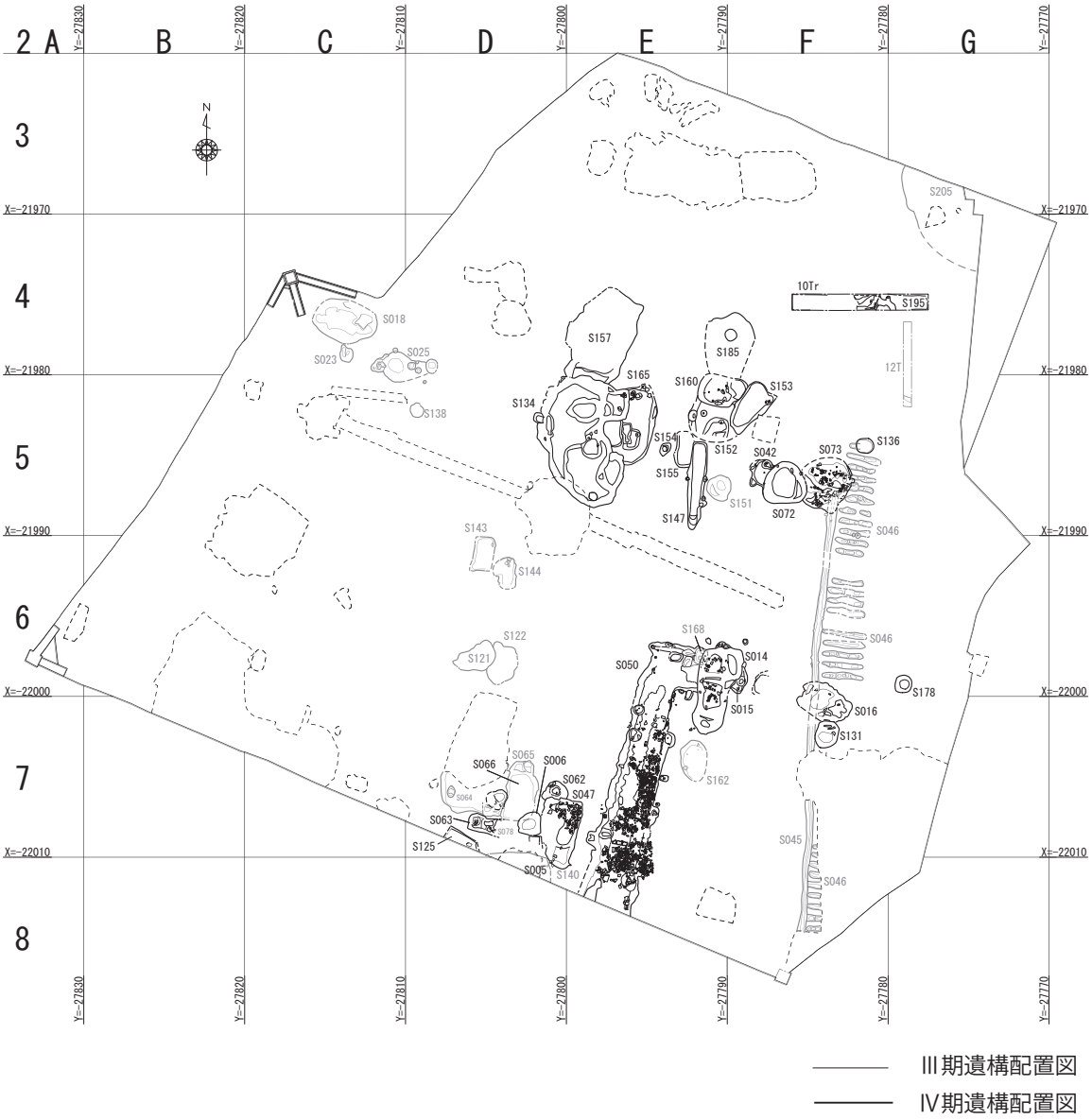
ＰＬ.51　志野（d）

ＰＬ.51　鼠志野（e）

ＰＬ.51　織部（f）



ＰＬ.51　河南三彩（b）



Ⅲ期遺構配置図

Ⅳ期遺構配置図

第157図　Ⅲ・Ⅳ期遺構配置図

第３節　八代松井氏下屋敷「一日亭」について

1　はじめに

平成 14 年に九州厚生局の委託を受けて、熊本県教育委員会は国立熊本病院改築に伴う熊本城二の丸跡での文化財の発掘調査を実施した。当該地は江戸期には熊本城二の丸重臣屋敷地で、明治４年７月以降は鎮西鎮台用地として国有地となり、熊本衛戍病院の設置により病院用地となり、その後身の国立熊本病院の用地の一部となり、厚生労働省所管の国有地となっている。

本稿では熊本城二の丸重臣屋敷地で八代松井氏の下屋敷「一日亭」と呼ばれた発掘調査地について、近世期の具体用途を絵図、文書、写真、絵画史料に基づき、可能な限り明らかにし、検出された遺構と関連づけて考察し、遺構の意味づけを行いたい。

そのために、先ず絵図史料で屋敷地の用途の変遷を確認し、次に居住者である八代松井氏を概観することで下屋敷「一日亭」を拝領できた理由を考察し、その上で「一日亭」の機能と具体像を明らかにしていきたい。

2　屋敷地の用途について

当該屋敷地については寛永９年（1632）12 月の加藤忠広から細川忠利に熊本城が引き継がれた際に使用された寛永６‐８年頃作成と見られる「熊本屋舗割下絵図」（図Ａ）(注1) では居住者名はないものの、「どて」に囲まれた屋敷地が確認される。

この屋敷地は、南に開口する高地で、二の丸南堀で二の丸と区分された二の丸重臣屋敷地（国立熊本病院地域）のうち最高所を占める。周囲は切り落としの土手で、独立丘となり、一区画の屋敷地となっている。この地割りは基本的に調査前まで変化していない。地形は西に帯曲輪状に３段に下がっていくが、加藤忠広期までは開発されていない。

阿蘇品保夫氏は『隈本古城史』(注2) 及び『新熊本市史中世編』(注3) で当該地を南隣する古城地区に存在した中世隈本城の城域に含む説を提示しているが、今回の発掘調査での加藤期熊本城遺構に先行する 16 世紀の遺構が検出されたことにより考古学的に初めて裏付けられた。但し、城久基期及び加藤清正入封期の中世隈本城の本郭は古城地区最高所を占める第一高校寄宿舎部分（旧藪図書助屋敷）と考えられており、当該屋敷地は中世隈本城の一部を構成する以外は詳細な用途については明らかにしえない。

今回の発掘調査で検出された加藤期熊本城の遺構（Ｓ 046）の道路状遺構は加藤忠広期の「熊本屋舗割下絵図」での屋敷地の東を区画する「どて」に位置的に該当するものと考えられる。

嘉永４年６月の矢野清方による写し（「先公加藤氏屋舗割之図」）の二次写しではあるが「熊本屋舗割下絵図」と同時期に原本が作成されたと考えられる「加藤氏代熊本ノ図」（図Ｂ）(注4) では当該屋敷地の居住者は「上本次左衛門」とされている。

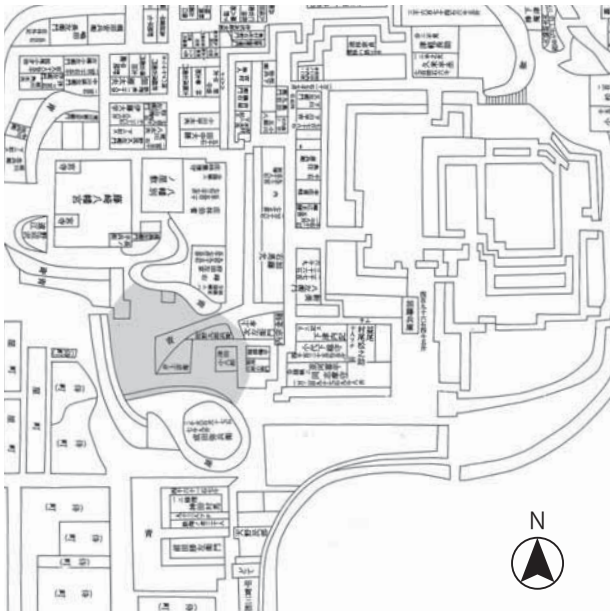
加藤忠広期には屋敷地として確実に利用され、寛文 12（1672）‐延宝３年（1675）作成と推定される「平山城肥後国熊本城廻絵図」(注5)、同時期作成と推定される「肥後国熊本城廻之絵

図Ａ「熊本屋舗割下絵図」

図」(注6) では「侍屋敷」と記されており、屋敷地としての利用は細川期に継承される。

その後、廃藩置県後に置かれた熊本衛戍病院、熊本陸軍病院、国立熊本病院の敷地の一部として取り込まれながらも、地形の改変はなく、調査前まで入り口道路を含めて基本的には加藤期の地割りのまま一区画として存続していく。

当該屋敷地の細川期での居住者は、明暦３年（1653）以降に熊本藩で作成されたと考えられる「二の丸之絵図」（図Ｄ）(注7) では「長岡帯刀下屋敷」と記されている。さらに西に帯曲輪状に３段に下がっていく上段には「半井仲庵」、中段には「坂崎清左衛門尉下屋敷」、下段には「山川平兵衛」「須崎太左衛門尉」と記されており、細川期に丘陵が屋敷地に開発され、屋敷地域が広がったことが見受けられる。



図Ｂ「加藤氏代熊本ノ図」

これらの屋敷地は地割りに変更はないが元禄前後(1690 - 1700)に作成されたと見られる「二ノ丸之絵図」（図Ｅ）(注8) では、居住者は全て「長岡帯刀下屋敷」になっており、宝暦９年（1759）頃の「二ノ丸之絵図」(注9) でも同様で下段が一区画に併合する変化が見られる。

図Ｃ「熊本之図」

天明７年（1781）頃の「二ノ丸之絵図」（図Ｆ）(注10) では地割りに変更はないが、居住者が「長岡主水下屋敷」になっており、安政４年（1857）以降に作成されたと考えられる「熊本所分絵図」(注11) では「長岡帯刀下屋敷」になっている。

このうち居住者の「長岡帯刀」「長岡主水」については、長岡姓で「帯刀」を名乗る八代松井氏４代の松井直之（1638 - 1692）、５代の寿之（1668 - 1745）、６代の豊之（1702 - 1771）と「主水」を名乗る７代の営之（1737 - 1808）が該当する。また安政４年以降の「長岡帯刀」は 11 代の盈之が該当する。

このことから、当該屋敷地は細川期では一貫して八代松井氏の下屋敷として使われており、文化２年（1805）以前に原本が作成されたと考えられる「熊本之図」（図Ｃ）(注12)「熊本之図」及び「熊本所分絵図」と同時期の安政４年（1857）以降に熊本藩で作成されたと考えられる「熊本府の絵図」(注13) では「一日亭」と記されている。

そして下屋敷は 17 世紀後半に当該屋敷地から西に帯曲輪状に続く屋敷地を含めた範囲に包括して広がったと考えられる。

３　八代松井氏について

正保３年 – 明治２年まで八代城守衛であった八代松井氏は城付領である八代城領３万石 (注 14) を領し、独自の家臣団を擁し、熊本藩筆頭家老を兼ね、熊本藩から八代城に派遣された細川家臣の八代城付衆の指揮権を有し、松井康之が徳川家康から山城国神童寺村 160 石他が与えられて以来、歴代将軍から安堵を受け、将軍の代替わり毎と松井氏当主の代替わり毎に参勤交代を行う、熊本藩主細川家の家臣でありながら徳川将軍家直臣を兼ねる、小大名のような特殊な位置づけであった。

松井氏は系図上、清和源氏頼信系を祖とし、備中国松井庄の松井冠者維義以降に松井姓を名乗り、松井八郎義宗以降足利氏に属したとあり、宗次には足利尊氏が地頭職宛行状を、助宗には軍忠状を発給されたとされる。「松井系図」にその全文が掲載されているが、松井家文書には現存していない上、文書様式の表現に疑問がある文書である。室町期までに遠江松井氏を輩出しながら、八代松井氏（近世松井氏）に繋がる系譜は足利将軍家に仕える奉公衆であった。足利義輝が永禄８年（1565）に松永久秀に殺害されると、近世松井氏初代となる松井康之は細川藤孝と共に、足利義昭の将軍擁立を目指す。のちに藤孝と相婿となり、藤孝の客将となる。細川藤孝が丹後国の領主となった際に、康之に丹後国松倉城を任せ家臣とした (注 15)。

豊臣秀吉は康之に石見半国 18 万石を与え、豊臣大名にすることを申し出たが、康之は細川家に仕えることを希望して辞退し、秀吉は康之が信長から拝領していた山城国相楽郡神童寺村及び愛宕郡八瀬村の知行安堵の朱印状に「深山」(注 16) という茶壺を添えて贈り、形式上だが豊臣直臣としている。これが家康にも引き継がれて形式上、徳川将軍家直臣を兼ねる原型になった。

慶長５年（1600）の関ヶ原合戦では、細川忠興の指示で豊後国木付城受取の任に就いていた康之は石垣原合戦に遭遇し、黒田孝高の中津勢と共に大友吉統の旧大友勢を破り、杵築領の防衛に成功している (注 17)。一方、興長は忠興に従って出陣している。細川忠興の豊前国中津 39 万石の転封に伴い、康之には豊後国木付城と２万５千石が預けられた。慶長 16 年（1611）康之が隠居し、家督を相続した近世松井氏２代（八代松井氏初代）の興長は右一番備頭と家老職、木付城番を兼ねた。寛永９年（1632）12 月９日の細川忠利の熊本 54 万石移封に伴い、玉名・合志郡に３万石が与えられた。

興長は寛永 13 年（1636）に江戸城普請で細川藩の惣奉行を務め、徳川家光から陣羽織を拝領している (注 18)。寛永 14 年（1637）に島原の乱では出府中の忠利の指示で熊本での指揮を執り、原城では細川勢を率いて、本丸を攻撃し、落城まで細川勢の前線指揮を執っている (注 19)。正保２年（1645 年）に八代城主だった忠興が亡くなると、細川光尚は正保３年（1646）に興長を八代城守衛に任じ、八代城領３万石に移封し、八代城付衆の指揮権を与えた。八代城は一国一城令の例外とされて存続し、米田氏・有吉氏と共に世襲家老家であった松井氏が八代城守衛を務めた。ここに八代松井氏が成立する (注 20)。

一方、興長は、忠興の娘古保を妻とし、忠興の六男の寄之を養嗣子に迎え、細川別姓である長岡姓を賜り、長岡佐渡守と称した。光尚没後には綱利への相続を成功させ、浪費を続ける綱利に諫状を送り、忠興、忠利、光尚、綱利の４代の細川家当主に仕えた。

３代の寄之は島原の乱では興長と共に出陣し、原城では細川勢先鋒隊の指揮をとり、城乗り一番乗りに貢献し、細川忠利の馬印の猴々緋鍬形の差物 (注 21) が与えられている。寄之は寛永 11 年（1634）より家老を務め、同 17 年（1640）に若年寄となり、藩政に従事した。寛文元年（1661）に興長が亡くなると、家督を相続したが、寛文６年（1666）に 51 歳で亡くなっている。この３代寄之以降、松井家は細川家の一門として扱われることになる。

４代の直之は寄之の嫡子で、興長の死没に伴い家老職に就任し、寄之の死没に伴い家督を相続した。綱利を支え、筆頭家老の直之は、藩の財政再建に着手し、天和３年（1683）に知行割替を行うなど、財政の立

て直しに努めた。元禄元年（1688）に母崇芳院のために松浜軒（浜之茶屋）を建てたが、元禄５年（1692）に直之は 55 歳で亡くなっている。

５代の寿之は直之の嫡子で、直之の死没に伴い、家督を相続する一方で、弟の祐之には元禄 13 年（1700）に新知二千石が与えられ、古城松井氏が分家される。祐之は元禄 15 年（1702）家老職に就任し、更に二千石が加増される。寿之は正徳４年（1714）に病気を理由に隠居料千石を拝領して、家督を豊之に譲り、雅号を眺山のちに冬山と号し延享２年（1745）に 78 歳で亡くなっている。隠居料を拝領し、家督を息子に譲るという家督相続の形式は、以後松井家で代々引き継がれることとなった。寿之は和歌や茶の湯を嗜む文化人でもあった。

６代の豊之は兄の克之が早世したため、寿之の二男で 11 歳で家督を相続し、細川宣紀・宗孝・重賢の三代の藩主に仕えた。明和３年（1766）隠居を許され、隠居料千石を賜り、家督を営之に譲り、雅号を大山と号し明和８年（1771）に 68 歳で亡くなっている。

７代の営之は豊之の嫡子で、宝暦３年（1753）に細川重賢の命により政事見習となり、豊之の隠居に伴い家督を相続した。文化元年（1804）隠居を許され、家督を徴之に譲り、雅号を観水と号し文化５年（1808）に 72 歳で亡くなっている。

８代の徴之は営之の嫡子で、天明３年（1783）に政事見習となり、同８年（1788）に家老職に就任している。営之の隠居に伴い家督を相続したが、徴之の嫡子の存之が文化４年（1807）に国政見習となったものの、文化７年（1810）に江戸参府の途中で 19 歳で病没したため、文化９年（1812）に古城松井氏４代の賀之の二男の督之を養嗣子に迎えている。文化 13 年（1816）隠居が許され、家督を督之に譲り、文政９年（1826）に 61 歳で亡くなっている。

９代の督之は徴之の養嗣子で、徴之の隠居と共に徴之の娘の八代と結婚し、家督を相続し、天保 11 年（1840）に家督のまま 45 歳で亡くなっている。

10 代の章之は徴之の三男で、督之が徴之の養嗣子となった翌年の文化 10 年（1813）に生まれている。文政 10 年（1827）国政見習となり、天保３年（1832）家老職に就任している。督之の死没に伴い、天保 12 年（1841）家督を相続している。章之は黒船の来航、開国、尊王攘夷運動などの幕末の動乱期に対応して火器砲術の研究に励み、嘉永６年（1853）には池辺啓太を招いて高島流砲術の伝授を受けている。文久３年（1863）に隠居し、家督を盈之に譲り、明治３年（1870）に松浜軒に移り住み、明治６年（1873）には植柳御茶屋（栽柳園・現在の植柳小学校）に移り、明治 20 年（1887）に 75 歳で亡くなっている。

11 代の盈之は八代松井氏最後の当主で、明治３年（1870）に松井家が八代城守衛の任を解かれる時の当主である。章之の嫡男で、文久２年（1862）に国政見習となり、家老職に就任し、章之の隠居に伴い家督を相続している。明治２年（1869）の版籍奉還で熊本藩大参事に任命され、明治３年（1870）に辞し、八代城守衛を解かれた。ここに細川藩家老としての八代松井氏は幕を閉じ、男爵となり、松井神社宮司として血脈は続いている。

以上の通り、八代松井氏は細川藩家老でありながらも、将軍家直臣の立場を持つ、大名の中の小大名ということができ、細川家臣の中でも唯一の立場にあったと言える。その点では同じ世襲家老家であった有吉、米田氏とは別格であり、細川藩主家に一門家より近い立場であったと言える。

４　下屋敷「一日亭」について

寛永９年 12 月の細川忠利の肥後入国に伴い、松井興長は５千石が加増され、知行高は３万石とされ、忠利及び忠興を除いては細川家中最大の禄高を有した。興長には入国当初は肥後国の北方の入り口に当たり、国境の要衝である豊前街道の南関を守備する目的で、その知行地の過半を玉名郡に与えられ、一円領に近い

知行形態を有した。さらに在蔵屋敷を有明海と河川交通の結節港である玉名郡高瀬町と飽田郡高橋町にそれぞれ与えられ、独自に軍船も有していた。さらに熊本城内の屋敷は、本邸に加藤忠広家中での筆頭家老であった加藤右馬允正方の旧邸が与えられ、下屋敷に「立田口の南古堺・千反畑・白川端を一円」に与えられ、「不足分を高麗門内ニて被下置候」とされた。その上で家中での格式は「居城の格」とされ、石場に「嶋崎山・井芹山」を、鷹場に「詫摩・益城両郡の内」を与えられ、細川家中で唯一の小大名級の格式が与えられていた (注22)。

図Ｄ「二の丸之絵図」

「一日亭」は本邸の南に二の丸南堀（法華坂）を挟んで位置し、本邸の隣接地である。設置時期は不明であるが、明暦３年（1653）以降の「二の丸之絵図」では「長岡帯刀（松井直之）下屋敷」とあり、直之の家臣の豊田専右衛門高達の記事で貞享３年（1686）11月以降の「其後直之公一日の御茶屋ニて段々御懇の以御意、御自作の花生被為拝領」とあるので、1653 – 86年頃には直之の下屋敷＝御茶屋として確実に存在していたと見られる。

八代松井氏には二の丸本邸以外に興長が創建したとされる「宮地谷の御茶屋」（八代市古麓町春光寺）、「古堺御茶屋」（熊本市子飼本町旧細川刑部邸跡）、寄之が創建したとされる「豊福御茶屋」（宇城市松橋町豊福）、「植柳御茶屋」（八代市植柳上町裁柳園）、直之が創建したとされる「森国の御茶屋」（八代市日奈久）、「麓の御茶屋」（八代市古麓町円光院跡）、「浜の御茶屋」（八代市松江城町松浜軒）、「水嶋の御茶屋」（八代市植柳下町水島）、「井寺御茶屋」（上益城郡嘉島町井寺）と「熊本一日亭」の「御茶屋」がある (注23)。

これら「御茶屋」と呼ばれる別邸はそれぞれに機能があり、「宮地谷・植柳・水嶋」は八代松井氏の別荘として菩提寺や鷹場や景勝地に設けられ、「浜」は直之母の隠居所。「古堺」は熊本城下の松井氏別邸でのちに細川刑部下屋敷となっている。「豊福」は熊本八代間を結ぶ際の休憩所、「森国、麓、井寺」は細川綱利をもてなす場として使われている。「熊本一日亭」は時期的に御茶屋群を最も整備した直之によって整備された公算が高い。

次に「熊本一日亭」の機能を明らかにするため、下記の史料を挙げる。

史料１ – ①大鳥弥三太夫 (注24)

「天明元年（1781）三月熊本一日亭え被遊御光駕候付、私儀従八代被召寄御用相勤め、御旧例の通、御物頭一列太守様え御目見仕候、尤御首尾克被為済候上、殿様御前え御役人中一同ニ被召出、御意の趣有之於御次御酒被為頂戴候」

「同年三月式部様御前髪被為執候付、御用請込被仰付候、同四月右御用請込被仰付候処、無御滞被為済候付被成御祝、金子百疋被為拝領候、且又先般一日亭被遊御光駕候付ても何角御用相勤、無御支被為済被遊御満悦旨ニて、於鶴の御間御酒並御料理をも被為頂戴候」

史料１ – ②魚住吉之允 (注25)

「天明元年四月、先般一日亭え被為成候節の御用取計筋宜、且又式部様御目見ニ付ての御用受込被仰付置候処、御首尾能被為済被遊御満悦候、依之御紋付御上下壱具被為拝領旨被仰付候」

史料１ – ③宇野八左衛門 (注26)

「天明元年四月七日先般一日亭ニ太守様被為成候節の御用取計宜諸事無御滞被為済、且又式部様御目見ニ付ての御用、被為執御前髪候節御用請込被仰附候処、御首尾克被為済候附被賞、御紋付麻上下一具被為拝領候事」

史料１ － ④宇野文右衛門 (注27)

「天明元年四月七日先般一日亭え為成候節の御用取計筋宜諸事無御滞相済、且又式部様御目見ニ付ての御用請込被仰付置候処、御首尾好被遊御満悦候、依之御紋付御上下一具被為拝領旨御達御座候」

史料１ － ⑤木附左角 (注28)

「同（安永）十年（1781）丑二月十五日太守重賢公一日御茶屋え被遊御光駕候節、御目見被仰付置候、同年四月七日右御光駕一件の諸御用向取計筋宜敷無御支被為済、且又式部様御目見ニ付ての御用をも相勤候様被仰付置候処、御首尾能被為済候付、御紋附御上下被為拝領旨仰渡候」

これらの史料は天明元年２月 15 日 － ４月７日の記事で全て同一の事柄について、５人の松井家臣が述べている記事である。⑤によると２月 15 日に細川重賢が一日亭に「御光駕」し、木附左角が「御目見」し、①によると３月にも重賢が「御光駕」し、八代松井氏家臣の「御物頭」が「御旧例の通」りに、「御目見」している。そして３月の「御光駕」は「式部様」＝徵之の「御前髪」の儀式に伴うもので、徵之が重賢に「御目見」する重要な儀式であったことが判明する。そのために営之は家臣を「八代被召寄」れ、十分な準備と供応を行っている。こののち徵之は天明３年（1783）に政事見習となり、営之の下で八代松井氏の家職である家老職の見習いをしている。

このことから、一日亭は八代松井氏が細川藩主家をもてなす迎賓館としての機能があったことが分かる。

また次の史料を挙げる。

史料２　天明５年（1785）３月３日 (注29)

「若殿様熊本二之丸一日亭え被為成筈ニ付御家中之面々火用心弥以入念諸事相慎二三日ハ遠方え出浮不申候様御達有之、手付えも申聞候事」

この史料では「若殿様」とあるので徵之であることは明らかで、徵之が一日亭に入ることになっていたことが分かる。このことから本邸は八代松井氏当主で家老職の営之の居所で、一日亭は次期当主で公職の政事見習に就いた徵之の居所に充てられていた事が分かる。

また、文化５年（1808）正月 21 日条 (注30) には「昨日仁保忠太夫殿原藤助方一日亭え相見中候」とあり、樟脳の原料となる楠株について、担当部署とその処分方法の担当者間協議が行われている。

このように一日亭は八代松井氏の本邸に準じる下屋敷で、八代松井氏から松井家臣への表彰の場として、細川藩主家へのもてなしの場として、細川藩主家と陪臣である松井家臣の謁見の場として、次期当主の居所として利用された「御茶屋」であることが明らかとなった。このような使用方法は江戸での大名の拝領屋敷である「下屋敷」と全く同じであり、徵川将軍家 － 大名家の関係が、そのまま大名領で藩主家 － 家臣家の関係に置き直されて在国で再構築されていたことが分かる (注31)。そして「一日亭」は元禄前後（1690 － 1700）に「半井仲庵」、「坂崎清左衛門尉下屋敷」、「山川平兵衛」

図Ｅ「二ノ丸之絵図」

「須崎太左衛門尉」を拝領し、その敷地を拡大したものと考えられる。

5 「一日亭」の構造について

安永２年（1773）５月 16 日条に「一日亭御茶屋裏手法華坂通、此方御囲内の崖崩候て、竹木共ニ御堀内ニ落込申候」(注32)、「安永六年酉七月大風以来の風ニて御座候・・・上下御屋敷・一日亭塀垣、其外とも過半損申候・・・一、御茶屋御門半倒、左右葭垣倒、一、右同所屋根損」(注33) とあることから、二の丸重臣屋敷地（国立熊本病院地域）のうち最高所を占める立地から風害の影響を受けやすく、特に二の丸南堀（法華坂）側の崖面が崩落していたことが窺える。またこの史料により「一日亭」には「御門」があり、その両脇は葭垣が施され、裏手の二の丸南堀側には竹木が茂っていたことが分かる。この様子は冨重写真所が明治４年に撮影した大天守最上階から奉行丸南部～有吉邸（国立熊本病院）を撮影した花岡山方向の写真（図 G）に写っている (注34)。邸内の具体的な姿は木々の茂りで見えないが、一日亭裏手に竹木が繁茂していることが分かる。これが「一日亭御茶屋裏手法華坂通、此方御囲内」に茂る「竹木」であったと考えられる。

図 F「二ノ丸之絵図」

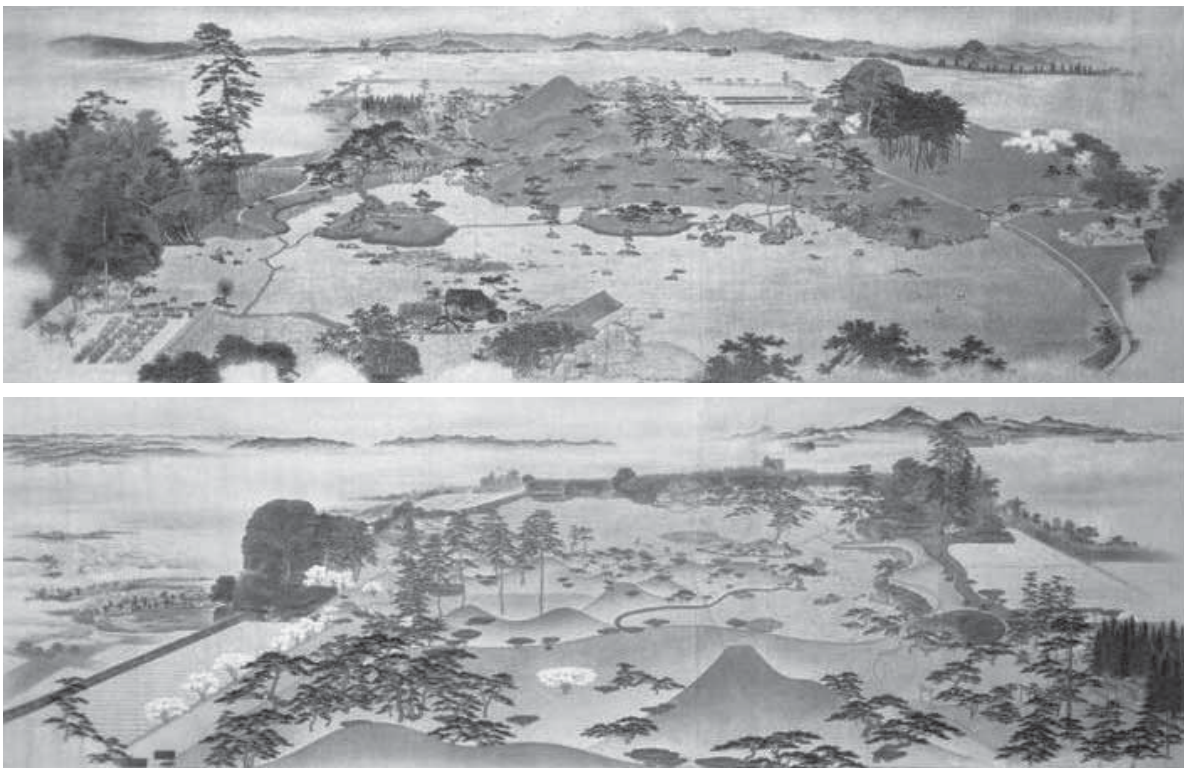
図 G 大天守最上階から奉行丸南部～有吉邸

さらに一日亭の具体的な姿を唯一示すのが、「一日亭春秋真景図屏風」（口絵カラ ‐ 写真、松井文庫）である。作者については落款がないが細川藩御用絵師杉谷雪樵（1827 ‐ 95）とされている (注35)。この屏風図は「一日亭」の庭園を左隻では邸内から西を臨んで描き、右隻では逆に西の庭園側から邸内を臨むアングルで描いており、左隻は春、右隻は秋の風景で描き分けている。さらに遠近法を採用している。この同一画題を表裏に描いて春秋の景色に書き分け、遠近法を使う手法は細川家出水御茶屋の水前寺成趣園を描いた「水前寺庭中之図」（図 H）　図 G 大天守最上階から奉行丸南部～有吉邸でも採用されている。

この作者は収められている箱蓋に内尾太松（? ‐ 1864）と杉谷行直（1790 ‐ 1845）が墨書されており、この両名の合作と考えられている。この二葉の前図と後図を比較すると、画風が異なり、同じ箱に収められた「二の丸庭中之図」と近い前図が内尾太松の作、後図が杉谷行直の作と考えられている (注36)。

「一日亭春秋真景図屏風」の画風は「水前寺庭中之図」の後図に近似しており、杉谷行直またはその子の雪樵が描いたと考えられる。このことから屏風図は 19 世紀の一日亭を描写した図と言え、正確な写実画であることから史料としても見ることができる。

この屏風図に基づくと、一日亭は邸内敷地の西側に金峰山・石神山等の金峰山系を借景とした築山による



図Ｈ「水前寺庭中之図」

庭園を配し、西北隅に三重石灯籠を置き、桜を植えていたことが分かる。更に借景を阻害しないように築山には植樹がなく、西側に眺望が開けている。さらに築山間に一筋の道を設け、旧「半井仲庵」屋敷を取り込んだ「下屋敷」下段へ続くように設計され、下段は松が植樹された庭園に設えていたことが分かる。

邸内敷地の南面には築山から続く葭垣が設けられ、その中程に冠木門を設け葭垣が東側まで囲繞していたと考えられる。これが「一日亭塀垣」と表現され、大風で倒壊した「御茶屋御門」と「左右葭垣」と考えられる。図Ｈ「水前寺庭中之図」

邸内敷地の南側は若干の高低木の植樹がなされ、建物から門まで広く空間が取られている。母屋建物１階の大広間南面に沓脱石が置かれていることから、門を経て南から建物に入る構造であったことがわかる。

邸内敷地の東面の葭垣を越えて邸外に、樹間から僅かに見える屋根は、有吉邸の屋根と思われ、冨重写真所史料（図Ｇ）と一致している。北側の屋敷裏側に当たる法華坂側には檜等の高木が茂っており、これも冨重写真所史料での景観と一致している。

さて、邸内建物は屏風図には二棟描かれ、邸内敷地の北東に置かれている。南に木造寄棟瓦葺二階の母屋建物を配し、その裏側の北に木造切妻の土蔵様の建物が配されている。母屋建物が「一日亭」本体と考えられ、一・二階共に西・南側に開く開放感のある座敷が設けられている。一階は北壁に床と書院が付く吹き抜けの南向きの書院造りの大広間に畳敷きの広縁が西側と南側に回っている。二階は東壁に床が付く西向きの広間を中央に置いて両隣に別間を設ける、三間の広間が設けられている。建物は寄棟瓦葺きの屋根から四方に大きく一・二階共に下屋が張り出し建物面積を広げている。八代松浜軒（「浜の茶屋」）と同じ仕様になっている。

この邸内構造と遺構を照合すると、Ⅳ期遺構が希薄な調査区西側は一日亭の庭園部分に当たり、Ｓ 050 は門から母屋建物に向かう通路付近で、Ｓ 006･062･063･066･016･131･178 は邸内南側の空間の植樹跡の可能性がある。また、Ｓ 134 は母屋建物南西隅の外側付近に当たり、地下式倉庫＝「穴蔵」と考えられる。

穴蔵については『守貞漫稿』に「俗に穴蔵と云ふ・・・明暦二年江戸本町二丁目の和泉屋九左衛門と云う

呉服売の宅に始て造之、・・今世京阪には富民金銀を蓄納む為に設之、故に巨戸に非れば不造之、克舗は中小戸造之。江戸も巨戸専ら造之、或は宅裡に造之、或は土蔵裡に造之、専ら金銀を納むの料也、又中以下金銭為に造らず、土蔵を造らざる者を窖造り、火災の時諸物を是に納む。是土蔵は其費容易ならず。窖は易きを以て也」とあって、財物保管のうち防火を目的にした地下室型の貯蔵庫で 17 世紀の江戸を発祥として京阪にも広がっている説が記されている。しかし、甘露寺親長の日記である『親長卿記』（1466 – 98）に火事の際に具足を「穴蔵」に入れた記事が見え、『日葡辞書』（1603）でも「Anagura：地下または洞窟の中に作ってある穀物や食料を収める倉庫」との記述があるので、15 世紀後半以降に一般的に都市で財物や食料を保管するために地下に掘られた地下室型の貯蔵庫で防火に効果があったと考えられる (注 37)。このような穴蔵は 18 – 19 世紀の江戸城下遺跡群を始め 16 – 17 世紀の堺環濠都市遺跡等の都市遺跡で検出している (注 38)。

Ｓ 134 は 19 世紀前半の肥前系磁器や陶器の様々な日用的に使う器形が茶器を含めて投げ込まれた、最終段階の廃棄時で検出しているため、本来の用途を明らかにすることはできないが、母屋建物 1 階の大広間の南西隅付近に位置するので、湿度に影響されない生活什器の保管に用いられた穴蔵ではなかったかと想像する。なお、遺物に 19 世紀中盤以降の陶磁器が含まれていないので、明治 4 年 7 月の廃藩置県及び鎮西鎮台設置に伴う八代松井氏の熊本城内屋敷からの退去下城と「一日亭」の解体時の不要品の廃棄土坑に転用されて廃棄されたものと考えられる。

Ｓ 073･195 も遺物年代がＳ 134 と同時期であることから、Ｓ 134 廃棄時に不要品の廃棄土坑として掘られたものと考えられる。

6　おわりに

熊本城二の丸跡では昭和 47 年の県立美術館新築に伴う文化財の発掘調査で「住江甚左衛門」「田中兵庫」の屋敷の一部で実施されたのみで (注 39)、熊本城二の丸重臣屋敷地でありながら、屋敷地の実態はあまり明らかとされてこなかった。熊本城跡全域で見ても、古城地区の熊本県立第一高等学校地内の「藪図書助」「溝口蔵人」の屋敷の一部、「細川刑部少輔下屋敷」等のトレンチ調査が行われたのみで武家屋敷地の具体像を明らかにした文化財の発掘調査の事例はない。

今回の松井氏下屋敷「一日亭」跡での発掘調査は、熊本城二の丸重臣屋敷地で行われた数少ない面的な調査で、全域ではないものの敷地の 6 割程を対象にして考古学的に実証し得た貴重な記録である。

発掘調査では建物跡の検出には至らなかったが、敷地から検出される遺構が絵画資料や写真と一致していることが明らかとなり、その史料精度が高いことを立証することができた。さらに八代松井氏の藩内での特別性ゆえの下屋敷拝領と、「御茶屋」の中でも藩主対応の迎賓館的機能を有する八代松井氏の特別な「御茶屋」であったことを明らかにした。遺物は肥前系陶磁や八代焼等の多産地の陶磁器で、茶器や植木鉢など嗜好品が多く、広い流通網の中で収集し、茶などの趣味を楽しむ「御茶屋」であったことを示している。

このように考古学資料と絵図・文書・写真・絵画史料の多面的史料に恵まれた武家屋敷は細川藩主屋敷の「花畑屋敷」以外に熊本藩内にはなく、武家屋敷では唯一例である。

またこのような熊本藩の武家屋敷を対象にした具体的検討も初めてで、貴重な検討の機会となった。今後も事例を重ねて熊本城の機能と具体像を明らかにしていくことで、熊本藩政期の実態がより明らかとなり、永青文庫等の細川家史料と併せることで日本有数の藩政研究に進展していくことを期待したい。

【注釈】

注 1：「熊本屋舗割下絵図」（熊本県立図書館 18 － 369、旧熊本藩文書、新熊本市史絵図地図上 － 8）

注 2：阿蘇品保夫「隈本古城」『隈本古城史』熊本県立第一高等学校 1981

注 3：阿蘇品保夫「室町・戦国期の熊本」『新熊本市史中世編』熊本市 1998

注 4：「加藤氏代熊本ノ図」（新熊本市史絵図地図上 － 9）

注 5：「平山城肥後国熊本城廻絵図」（熊本県立図書館 3 － 016、旧熊本藩文書、新熊本市史絵図地図上 － 10）

注 6：「肥後国熊本城廻之絵図」（熊本県立図書館 3 － 018、旧熊本藩文書、新熊本市史絵図地図上 － 11）

注 7：「二の丸之絵図」（熊本県立図書館 4 － 051、旧熊本藩文書、新熊本市史絵図地図上 － 21）

注 8：「二ノ丸之絵図」（熊本県立図書館 4 － 052、旧熊本藩文書、新熊本市史絵図地図上 － 22）

注 9：「二ノ丸之絵図」（熊本県立図書館 4 － 055、旧熊本藩文書、新熊本市史絵図地図上 － 23）

注 10：「二ノ丸之絵図」（熊本県立図書館 4 － 057、旧熊本藩文書、新熊本市史絵図地図上 － 24）

注 11：「熊本所分絵図」（永青文庫、細川家文書、新熊本市史絵図地図上 － 68 － 1）

注 12：「熊本之図」（新熊本市史絵図地図上 － 12）

注 13：「熊本府の絵図」（熊本県立図書館 3 － 022、旧熊本藩文書、新熊本市史絵図地図上 － 15）

注 14：天和 3 年 12 月 27 日付細川綱利知行宛行状（松井家文書）

注 15：福原透「松井家三代」『松井家三代』八代市立博物館 1995

注 16：茶壺「深山」（松井文庫）

注 17：林千寿「総説」『関ヶ原合戦と九州の武将達』八代市立博物館 1998

注 18：緋黒羅紗段替陣羽織（松井文庫）

注 19：林千寿「天草・島原の乱」『天草・島原の乱』八代市立博物館 2002

注 20：松下宏則「宇土支藩の成立」『新宇土市史通史編中世・近世』宇土市 2007

注 21：鍬形大馬験（松井文庫）

注 22：「松井家先祖由来付」『八代市史近世史料編Ⅷ』p386 八代市教育委員会 1999

注 23：「先例略記」『八代市史近世史料編Ⅶ』p174 － 178 八代市教育委員会 1998

注 24：「御給人先祖附」『八代市史近世史料編Ⅳ』p60 八代市教育委員会 1996

注 25：「御給人先祖附」『八代市史近世史料編Ⅳ』p173 八代市教育委員会 1996

注 26：「御給人先祖附」『八代市史近世史料編Ⅳ』p193 八代市教育委員会 1996

注 27：「御給人先祖附」『八代市史近世史料編Ⅳ』p198 八代市教育委員会 1996

注 28：「御給人先祖附」『八代市史近世史料編Ⅳ』p335 八代市教育委員会 1996

注 29：「御町会所古記之内」『八代市史近世史料編Ⅲ』p97 八代市教育委員会 1995

注 30：「先例略記」『八代市史近世史料編Ⅶ』p232 八代市教育委員会 1998

注 31：山本博文「萩藩の江戸屋敷」『江戸お留守居役の日記』p92 読売新聞社 1991

注 32：「先例略記」『八代市史近世史料編Ⅶ』p189 八代市教育委員会 1998

注 33：「大風・出火・洪水」『八代市史近世史料編Ⅸ』p58 八代市教育委員会 2000

注 34：富田紘一「写真 43 大天守から見た城下（3）」『古写真に探る熊本城と城下町』p80 肥後上代文化研究会 1993

注 35：大倉隆二「一日亭春秋真景図屏風」『松井文庫の絵画と書蹟』p146 熊本県立美術館 1987

注 36：井形栄子「水前寺庭中之図」『細川家の至宝』p339NHK2010

注 37：玉井哲夫「穴蔵と土蔵」『江戸』p130 平凡社 1986

注 38：成瀬晃司「江戸藩邸の地下空間」『武家屋敷』p103 山川出版社 1994

注 39：『熊本城二の丸跡史跡調査報告書』熊本県美術館建設準備室 1972

【参考文献】

大橋康二　1989 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社
大橋康二　2004 『世界をリードした磁器窯・肥前窯』 新泉社
『松井文庫の精華 － その歴史と美術 － 』 八代市立博物館未来の森ミュージアム　1991
平成 12 年度秋季特別展覧会『八代焼　伝統の技と美』 八代市立博物館未来の森ミュージアム　2000
『松井文庫名品展（Ⅱ）松井文庫の陶磁器』 熊本県立美術館　1989
『増補 やきもの辞典』 平凡社　2000
『世界陶磁全集　7 江戸（二)』 小学館　1980
『世界陶磁全集　１４　明』 小学館 1976
『肥前陶磁の系譜』 名著出版　1974
『野趣の美　古唐津の流れ　桃山から江戸』 読売新聞社　1993
『田中丸コレクション　九州古陶磁名品展』表千家北山会館　2006
『和様の意匠　古伊万里展』 朝日新聞社　1992
『白磁の美 － 中国・朝鮮・日本・現代 － 』 佐賀県立九州陶磁文化館　1986
『日本の青磁 － 近世から現代まで － 』 佐賀県立九州陶磁文化館　1989
『肥前陶磁の名品 － 樹木草花の文様を見る － 』 佐賀県立九州陶磁文化館　1987
『世界の染付展』 佐賀県立九州陶磁文化館　1993
『よみがえる江戸の華 － くらしのなかのやきもの － 』 佐賀県立九州陶磁文化館　1994
『新熊本市史　別編　第１巻　絵図・地図』 熊本市　1993
『新熊本市史　通史編　第３巻　近世Ⅰ』 熊本市　1996
『新熊本市史　通史編　第４巻　近世Ⅱ』 熊本市　1996
『新熊本市史　通史編　第２巻　中世』 熊本市　1998
阿蘇品保夫 「隈本古城」『隈本古城史』 熊本県立第一高等学校　1981
『松井家三代』 八代市立博物館未来の森ミュージアム　1991
『関ヶ原合戦と九州の武将達』 八代市立博物館未来の森ミュージアム　1998
『天草・島原の乱』 八代市立博物館未来の森ミュージアム　2002
『新宇土市史　通史　中世・近世』 宇土市　2007
『古写真に探る熊本城と城下町』 肥後上代文化研究会　1993
『松井文庫の絵画と書蹟』 熊本県立美術館　1987
『細川家の至宝』 NHK　2010
玉井哲夫 「穴蔵と土蔵」『江戸』 平凡社　1986
成瀬晃司 「江戸藩邸の地下空間」『武家屋敷』 山川出版社　1994
『熊本城二の丸跡史跡調査報告』 熊本県立美術館建設準備室　1972
『八代市史近世史料編Ⅳ』 八代市教育委員会　1996
『八代市史近世史料編Ⅲ』 八代市教育委員会　1995
『八代市史近世史料編Ⅶ』 八代市教育委員会　1998
『八代市史近世史料編Ⅷ』 八代市教育委員会　1999
『八代市史近世史料編Ⅸ』 八代市教育委員会　2000

遺　物　観　察　表

第13表　焼塩壺

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点		法量（cm）			外器面
				遺構	グリッド	口径	器高	底部径	
64	261	土器	焼塩壺	S 073		7.2	12.05	5.85	ﾖｺﾅﾃﾞ
64	262	土器	焼塩壺	S 073		6.85	11.6	4.8	ﾖｺﾅﾃﾞ
83	263	土器	焼塩壺（蓋）	S 134		上面径 5.65	1.6	6.3	ﾖｺﾅﾃﾞ
83	264	土器	焼塩壺（蓋）	S 134		上面径 5.7	1.65	6.6	ﾅﾃﾞ
83	265	土器	焼塩壺（蓋）	S 134		上面径 6.05	1.8	7.0	ﾖｺﾅﾃﾞ
83	266	土器	焼塩壺（蓋）	S 134		上面径 6.95	1.65	5.75	ﾖｺﾅﾃﾞ
83	267	土器	焼塩壺	S 134		5.45	8.2	5.25	ﾅﾃﾞ 工具痕
83	268	土器	焼塩壺	S 134		5.7	7.95	4.3	ﾅﾃﾞ ﾖｺﾅﾃﾞ
-	270	土器	焼塩壺	S 134		5.5	7.5	4.5	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	271	土器	焼塩壺	S 134		5.6	7.9	4.3	一部ﾅﾃﾞ
-	272	土器	焼塩壺	S 148		5.5	8.0	3.8	不明
-	273	土器	焼塩壺	S 153		5.4	7.9	4.4	不明
-	274	土器	焼塩壺	S 155		5.9	9.2	4.6	一部ﾖｺﾅﾃﾞ
-	275	土器	焼塩壺	S 195		6.1	8.6	4.6	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	276	土器	焼塩壺	S 195		5.8	7.8	4.2	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	277	土器	焼塩壺		G-4 10tr	5.8	7.2	5.2	一部布目痕ﾅﾃﾞ
-	278	土器	焼塩壺（蓋）	S 005		7.7	2.0	5.8	不明
-	279	土器	焼塩壺	S 073		5.8	9.9	4.4	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	280	土器	焼塩壺	S 073		5.8	9.3	4.0	ﾅﾃﾞ
-	281	土器	焼塩壺	S 073		6.1	9.2	4.7	一部ﾅﾃﾞ
-	282	土器	焼塩壺	S 073		5.5	9.5	4.4	一部ﾅﾃﾞ
-	283	土器	焼塩壺	S 073		5.7	4.55	9.6	不明
-	284	土器	焼塩壺	S 073		5.7	4.75	9.6	不明
-	285	土器	焼塩壺	S 073		5.7	9.2	4.7	一部ﾅﾃﾞ
-	286	土器	焼塩壺	S 073		-	10.0	4.5	一部ﾖｺﾅﾃﾞ
-	287	土器	焼塩壺	S 134		5.6	9.7	4.95	一部ﾅﾃﾞ
-	288	土器	焼塩壺	S 134		5.7	9.95	4.9	一部ﾅﾃﾞ
-	289	土器	焼塩壺	S 134		-	8.75	4.7	不明
-	290	土器	焼塩壺	S 134		5.65	8.1	4.35	一部ﾖｺﾅﾃﾞ
-	291	土器	焼塩壺	S 134		5.4	8.2	4.4	一部ﾅﾃﾞ
-	292	土器	焼塩壺	S 134		5.4	8.0	4.2	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	293	土器	焼塩壺	S 134		5.3	7.7	3.8	ﾅﾃﾞ
-	294	土器	焼塩壺	S 134		5.9	9.2	4.1	ﾖｺﾅﾃﾞ

番号	調整			色調		備考	写真
	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
261	ﾅﾃﾞ	布目痕 ｹｽﾞﾘ	布目痕	橙 7.5YR7/6 浅黄橙 10YR8/3	橙 2.5YR7/6 淡橙 5YR8/3	角刻印有り「天下一堺ﾐな□□□□□」	巻頭
262	ﾅﾃﾞ	布目痕 ｹｽﾞﾘ	布目痕	浅黄橙 10YR8/3	淡赤橙 2.5YR7/4	角刻印有り「天下一堺□□□□□□」	巻頭
263	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	内底面に一部布目痕有	巻頭
264	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	淡橙 5YR8/3	淡橙 2.5YR7/4		巻頭
265	ﾅﾃﾞ 工具痕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR7/6	0.5 ～ 1mm の砂粒を含み、5mm 以上の小石も数粒含む	巻頭
266	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ後 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 5YR7/4	内外面共紐痕有	巻頭
267	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ﾖｺﾅﾃﾞ 指頭圧痕	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/3 淡橙 5YR8/4	灰白 10YR8/2 淡赤橙 2.5YR7/4		巻頭
268	布目痕	布目痕 ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/3 橙 5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/3 橙 5YR7/6	0.5 ～ 1mm の砂粒を含む	巻頭
270	ﾖｺﾅﾃﾞ	一部布目痕	工具痕	淡橙 5YR8/4	橙 2.5YR7/6		巻頭
271	一部ﾅﾃﾞ	一部ﾖｺﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	淡橙 5YR8/4	淡赤橙 2.5YR7/4		巻頭
272	不明	不明	工具痕	橙 5YR7/6	橙 2.5YR7/6		巻頭
273	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 2.5YR7/8	橙 2.5YR7/8		巻頭
274	ﾅﾃﾞ	一部ﾖｺﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 2.5YR7/8	橙 2.5YR7/8		巻頭
275	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 5YR7/6	橙 5YR7/8		巻頭
276	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 2.5YR7/4		巻頭
277	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 5YR7/6	橙 2.5YR7/6		巻頭
278	不明	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	淡橙 5YR8/4	橙 2.5YR7/6		-
279	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ しぼりめ工具痕	工具痕	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/6		-
280	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 5YR7/6	橙 2.5YR7/6		-
281	ﾅﾃﾞ	絞りめ	工具痕	橙 2.5YR7/8	淡赤橙 2.5YR7/4		-
282	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 2.5YR7/6	淡赤橙 2.5YR7/4		-
283	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ 工具痕	工具痕	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6		-
284	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	工具痕	橙 5YR7/8	橙 2.5YR7/6		-
285	ﾅﾃﾞ	一部ﾖｺﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR7/8	口縁から体部にかけて 1/2 欠ける	-
286	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 布目痕	工具痕	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 2.5YR7/6	口縁から体部にかけて 3/4 欠ける	-
287	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 5YR7/8	浅黄橙 7.5YR8/4	黒い煤のようなものが少しある	-
288	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 5YR7/6	橙 2.5YR7/6		-
289	不明	ﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 5YR7/6	橙 2.5YR7/6		-
290	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 絞りめ布目痕	工具痕	淡橙 5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4		-
291	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 絞りめ布目痕	工具痕	橙 2.5YR7/6	淡赤橙 2.5YR7/4	口縁部に圧痕有	-
292	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 5YR7/6	橙 2.5YR7/6	口縁が少し欠ける	-
293	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	黄橙 7.5YR8/8	橙 5YR7/8		-
294	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ 絞りめ工具痕	工具痕	黄橙 7.5YR7/8	灰白 5YR8/2	内器面に工具痕有	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点		法量（cm）			外器面
				遺構	グリッド	口径	器高	底部径	
-	295	土器	焼塩壺	S 134		5.8	8.3	4.1	一部ﾖｺﾅﾃﾞ
-	296	土器	焼塩壺	S 134		5.3	8.3	4.2	一部ﾅﾃﾞ
-	297	土器	焼塩壺	S 134		-	9.0	-	不明
-	298	土器	焼塩壺	S 134		5.1	-	3.9	不明
-	299	土器	焼塩壺	S 134		5.3	-	4.1	不明
-	300	土器	焼塩壺	S 134		5.3	-	4.1	不明
-	301	土器	焼塩壺	S 134		5.1	-	4.8	不明
-	302	土器	焼塩壺	S 134		-	8.6	4.3	不明
-	303	土器	焼塩壺	S 134		5.3	7.9	3.6	不明
-	304	土器	焼塩壺	S 134		5.5	9.5	4.0	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	305	土器	焼塩壺	S 134		6.2	8.7	4.8	一部ﾖｺﾅﾃﾞ
-	306	土器	焼塩壺	S 134		5.9	9.0	4.7	ﾅﾃﾞ
-	307	土器	焼塩壺	S 134		6.0	9.45	4.7	ﾅﾃﾞ
-	308	土器	焼塩壺	S 134		5.6	8.1	4.8	不明
-	309	土器	焼塩壺	S 134		5.1	7.5	3.4	不明
-	310	土器	焼塩壺	S 134		5.9	8.6	4.7	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	311	土器	焼塩壺	S 134		5.7	9.2	4.9	不明
-	312	土器	焼塩壺	S 134		-	9.0	4.7	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	313	土器	焼塩壺（蓋）	S 147		6.7	1.5	5.2	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	314	土器	焼塩壺（蓋）	S 162		-	1.5	-	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	315	土器	焼塩壺	S 195		5.75	7.7	4.3	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	316	土器	焼塩壺	S 195		5.7	8.2	3.6	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	317	土器	焼塩壺（蓋）	S 014		6.7	1.7	4.4	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	318	土器	焼塩壺（蓋）		G-5 12Tr	6.8	1.5	5.2	ﾖｺﾅﾃﾞ
-	319	土器	焼塩壺		F-4・G-4	5.8	8.5	3.5	ﾖｺﾅﾃﾞ

番号	調整			色調		備考	写真
	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
295	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 布目痕	工具痕	橙 5YR7/6	淡赤橙 2.5YR7/4		-
296	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	不明	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR7/8		-
297	-	不明絞りめ	-	橙 5YR7/6	橙 2.5YR7/6	6 つのかけらを接合	-
298	不明	不明	工具痕	淡黄橙 7.5YR8/4	淡橙 5YR8/4		-
299	不明	布目痕ﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 5YR7/6	赤橙 10R6/8	口縁が欠ける	-
300	不明	不明絞りめ	工具痕	浅黄橙 7.5YR8/6	にぶい赤橙 10R6/4	全体的に少しずつ欠けがある	-
301	不明	不明絞りめ	工具痕	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁が歪んでいる	-
302	不明	一部ﾖｺﾅﾃﾞ	工具痕	橙 5YR7/8	橙 2.5YR7/6	口縁から体部 1/2 が欠けている	-
303	不明	不明絞りめ	工具痕	浅黄橙 7.5YR8/4	橙 2.5YR7/6		-
304	不明	一部ﾖｺﾅﾃﾞ	工具痕	橙 2.5YR7/8	橙 2.5YR7/6		-
305	ﾅﾃﾞ	一部ﾖｺﾅﾃﾞ 布目痕	工具痕	橙 5YR7/6	橙 2.5YR7/6		-
306	不明	ﾅﾃﾞ 絞りめ	布目痕	橙 5YR7/8	淡赤橙 2.5YR7/4		-
307	ﾅﾃﾞ	布目痕	布目痕	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR7/6		-
308	不明	しぼりめ 布目痕	工具痕	橙 2.5YR7/8	淡赤橙 2.5YR7/4		-
309	不明	不明	不明	淡橙 5YR8/4	灰白 10YR8/2	口縁から底部にかけて 1/2 欠ける	-
310	不明	布目痕	工具痕	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR7/6		-
311	不明	一部ﾖｺﾅﾃﾞ 布目痕	工具痕	橙 5YR7/6	橙 2.5YR7/6	口縁が欠けている	-
312	ﾅﾃﾞ	布目痕	工具痕	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR7/6		-
313	不明	ﾖｺﾅﾃﾞ	布目痕	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR7/8		-
314	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/6	淡赤橙 2.5YR7/3		-
315	ﾅﾃﾞ	一部ﾖｺﾅﾃﾞ 絞りめ	工具痕	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR7/6		-
316	ﾅﾃﾞ	一部ﾖｺﾅﾃﾞ 布目痕	工具痕	橙 2.5YR7/6	淡橙 5YR8/3		-
317	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6		-
318	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 2.5YR7/6		-
319	不明	一部ﾖｺﾅﾃﾞ 布目痕	工具痕	橙 2.5YR7/6	淡赤橙 2.5YR7/4		-

第14表　土製品

挿図番号	番号	種別	器種	出土位置		残存状況
				遺構	グリッド	
60	259	土製品	土鈴	S 047		完形
-	360	土製品	不明	S 035		-
-	361	土製品	芥子面	S 040		完形
-	362	土製品	芥子面	S 040		ほぼ完形
-	363	土製品	芥子面	S 106		ほぼ完形
-	364	土製品	芥子面	S 106		4/5
-	365	土製品	芥子面	S 106		ほぼ完形
-	366	土製品	芥子面	S 106		完形
-	367	土製品	芥子面	S 106		ほぼ完形
-	368	土製品	芥子面	S 106		完形
-	369	土製品	芥子面	S 145		完形
-	370	土製品	芥子面	S 148		ほぼ完形
-	371	土製品	芥子面	S 148		1/2
-	372	土製品	芥子面	S 148		完形
-	373	土製品	芥子面	S 149		完形
-	374	土製品	芥子面		E-8	ほぼ完形
-	375	土製品	芥子面		F-5	ほぼ完形
-	376	土製品	芥子面		F-7	2/3
-	377	土製品	芥子面			ほぼ完形
-	378	土製品	土人形	S 028		2/3
-	379	土製品	土人形	S 040		頭部
-	380	土製品	土人形	S 050		1/2
-	381	土製品	土人形	S 106		完形
-	382	土製品	土人形	S 106		2/3
-	383	土製品	土人形	S 106		2/3
-	384	土製品	土人形	S 139		2/3
-	385	土製品	土人形	S 148		1/3
-	386	土製品	土人形	S 158		2/3
-	387	土製品	土人形	S 158		1/3
-	388	土製品	土人形	S 171		完形
-	389	土製品	土人形		E-3	完形
-	390	土製品	土人形		F-5	3/4
-	391	土製品	土人形		F-5	ほぼ完形
-	392	土製品	土人形	-	-	3/4

番号	形式	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	色調	備考	写真
259	玉葱型	3.3	2.8	2.9	浅黄橙 10YR8/3	穿孔二つ有 中に玉有 手づくね	PL.54
360	-	4.6	3.6	0.35	にぶい橙 7.5YR7/4		PL.54
361	面	2.4	2.5	0.85	にぶい橙 7.5YR6/4	型押し	PL.54
362	?	1.7	1.4	0.5	橙 7.5YR6/6	型押し	PL.54
363	面 (翁 ?)	4.4	2.7	0.9	橙 7.5YR6/8	型押し	PL.54
364	面	3,7	2.8	0.9	橙 7.5YR6/8	型押し	PL.54
365	面	2.2	1.7	1.8	にぶい橙 7.5YR 6/4	型押し	PL.54
366	翁	1.9	1.9	0.8	にぶい橙 7.5YR6/4	型押し	PL.54
367	面	2.0	1.7	0.7	橙 5YR6/6	型押し	PL.54
368	花 ?	3.1	3.1	1.2	にぶい橙 7.5YR7/4	型押し	PL.54
369	花 ?	3.2	3.2	1.3	にぶい橙 7.5YR6/4	型押し	PL.54
370	面	3.3	2.0	0.8	橙 7.5YR7/6	型押し	PL.54
371	面	1.7	2.5	0.5	橙 7.5YR7/6	型押し	PL.54
372	?	2.1	2.0	0.7	橙 7/6 7.5YR	型押し	PL.54
373	面	3.1	2.1	1.0	浅黄橙 8/3 7.5YR	型押し	PL.54
374	面 (鬼 ?)	2.6	2.0	1.2	浅黄橙 8/6 7.5YR	型押し	PL.54
375	花 ?	3.0	3.0	1.3	浅黄橙 8/4 7.5YR	型押し	PL.54
376	翁	2.9	2.2	0.9	橙 7.5YR7/6	型押し	PL.54
377	?	2.2	2.2	0.3	橙 7.5YR6/8	型押し	PL.54
378	土馬	9.6	3.0	2.6	橙 2.5YR6/6		PL.55
379	狛犬	3.2	4.2	0.9	浅黄橙 7.5YR8/4	中空 外面にわずかに白土残る	PL.54
380	猿	6.9	5.0	2.0	橙 2.5YR6/8	木葉猿窯か ?	PL.55
381	鳩笛	5.3	3.9	2.0	灰白 2.5YR8/2		PL.54
382	猿	9.55	3.8	0.45	にぶい赤褐 5YR5/4	中空 胴部に白土残る 木葉猿窯 ?	PL.55
383	猿	14.1	5.5	0.8	橙 5YR7/6	中空 顔面部に白土残る 木葉猿窯 ?	PL.55
384	人 ?	-	-	-	浅黄 10YR8/4	中空 胴部に白土残る	PL.55
385	?	7.7	2.1	0.3	にぶい橙 7.5YR7/3	中空 左胴部残存	PL.54
386	座猫	3.9	1.6	3.7	にぶい橙 7/4 7.5YR	胴部は中空	PL.54
387	人	2.8	1.6	0.6	橙 5YR 6/6	胴部のみ	PL.54
388	猿	4.6	2.4	2.3	橙 7.5YR7/6	中央に径 4mm の穿孔有	PL.54
389	猿	4.0	4.3	1.4	灰白 7.5YR8/2	中空 中央に径 6 ～ 7mm の穿孔有 外面にわずかに白土残る	PL.54
390	西行	3.7	2.3	1.7	浅黄橙 7.5YR8/4		PL.54
391	獅子	4.05	3.35	0.6	浅黄橙 7.5YR8/3	中空 中央に径 6 ～ 7mm の穿孔有 外面にわずかに白土残る	PL.54
392	赤ん坊	4.7	3.5	0.5	灰白 7.5YR8/2	胴部のみ	PL.54

石製品

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点		法量（cm/g）						石質	備考	写真図版
				遺構	グリッド	長さ	最大径	幅	高さ	穿孔径	重さ			
107	250	石製品	硯	S 010		12.9	厚さ 1.3	7.65	-	-	243.8	粘板岩		PL.56
25	321	石製品	火輪	S 240		31.5	深さ 11.3	31.6	19.8	7.4 × 8.1	-	凝灰岩製	稜の潰れが著しい	PL.56
32	322	石製品	水輪	S 168		27.0	-	-	16.8	-	-	凝灰岩製		PL.56
-	340	石製品	碁石	S 047		2.3	厚み 0.5	-	-	-	3.8			PL.56
-	341	石製品	碁石	S 073		2.3	厚み 0.5	-	-	-	4.1			PL.56
-	342	石製品	碁石	S 160		1.9	厚み 0.8	-	-	-	3.7			PL.56
-	343	石製品	碁石		F-8	2.1	厚み 0.7	-	-	-	3.0			PL.56
-	344	ガラス製品	ガラス玉	S 043		0.9	0.9	-	-	0.2	1.2		欠損あり	PL.56
-	345	金銅製	不明	S 127		-	1.4	-	0.7	0.5	5.3		上下・側面二方向に穿孔有	PL.56

瓦

挿図番号	番号	器種	出土地点		法量（cm/g）			瓦当表 凸面	瓦当裏 凹面	備考	写真図版
			遺構	グリッド	全長	全幅	厚さ				
146	326	軒桟瓦	S 008		(15.1)	(21.1)	1.8	ﾍﾗﾅﾃﾞ ﾖｺﾅﾃﾞ	布目痕 ﾅﾃﾞ	丸部に三笹紋	PL.57
146	328	丸瓦	S 010		27.0	13.3	1.6	長軸方向にﾍﾗﾅﾃﾞ 摩耗	ｹｽﾞﾘ 一部布目痕		-
147	330	軒桟瓦	S 059		(14.7)	(14.0)	1.7	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	丸部に蛇の目紋	PL.57
147	325	軒丸瓦	S 134		(16.1)	15.3	1.9	長軸方向にﾍﾗﾅﾃﾞ 摩耗	布目痕 面取り	左巻き三巴紋	PL.57
148	324	軒桟瓦	S 135		(25.8)	(14.0)	2.3	ﾍﾗﾅﾃﾞ ﾖｺﾅﾃﾞ 布目痕	ﾖｺﾅﾃﾞ 布目痕 摩耗	平部に左巻き三巴紋	-
148	323	塼	S 148		(29.7)	(20.9)	2.3	ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	竜紋６つ	-
149	331	軒平瓦	S 152		18.7	(21.8)	1.7	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	中心飾りに九曜紋 両脇に唐草紋	PL.58
149	334	軒桟瓦	S 224		(10.3)	(14.25)	1.9	ﾍﾗﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	丸部に右巻き巴紋 平部が脇に唐草紋	PL.57
150	327	軒桟瓦	S 196・198	11tr	25.0	(11.8)	2.0	ﾅﾃﾞ 布目痕 摩耗	ﾅﾃﾞ 布目痕	丸部に三笹紋	PL.57
150	329	丸瓦		E-7	(8.5)	13.9	1.8	長軸方向にﾅﾃﾞ 摩耗	ﾖｺﾅﾃﾞ	菊花紋	PL.57
150	332	桟瓦	-		(17.0)	(19.2)	2.3	ﾅﾃﾞ 布目痕	ﾅﾃﾞ 櫛目有	櫛目有	PL.58
150	333	軒丸瓦	-		-	-	1.8	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	右巻き三巴紋	PL.57

青銅品

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点		法量（cm/g）				備考	写真図版
				遺構	グリッド	長さ	幅	厚さ	重さ		
84	254	青銅品	小柄？	S 134		9.5	1.3	0.35	17.9		PL.53
84	255	青銅品	小柄？	S 134		9.8	1.5	0.9	22.1		PL.53
84	256	青銅品	杓子の取手	S 134		32.1	1.9	0.3	86.7		PL.53
84	257	青銅品	杓子	S 134		9.05	8.6	0.1	30.6		PL.53
25	258	青銅品	留具	S 055		2.0	0.6	0.1	0.8	穿孔二つ有	PL.53

煙管

挿図番号	番号	器種・器形	分類	材質	遺構	法量 (cm/g)						備考	写真図版
						最大長	羅宇径	吸口径	最大高	火皿径	重量		
144	346	煙管・吸口	Ⅳ	銅合金	S 014	(6.4)	(1.0)	0.3	-	-	4.5	小口破損	PL.53
144	347	煙管・雁首	Ⅲ	銅合金	S 047	(6.6)	0.9	-	2.1	1.5	8.8	小口破損	PL.53
144	348	煙管・吸口	Ⅲ	銅合金	S 047	(6.0)	(1.0)	-	-	-	4.5	吸口がふさがっている	PL.53
144	349	煙管・吸口	-	銅合金	S 073	(4.3)	(1.2)	0.6	-	-	2.7	小口破損 口付欠損	PL.53
144	350	煙管・雁首	Ⅴ	銅合金	S 073	(7.3)	(1.0)	-	1.9	1.7	12.7	小口破損 羅宇一部残存	PL.53
144	351	煙管・吸口	-	銅合金	S 134	(7.3)	(1.0)	0.3	-	-	5.0		PL.53
144	352	煙管・雁首	Ⅱ	銅合金	S 195	(5.5)	(1.0)	-	-	1.9	8.4	火皿と首部が分裂 小口破損あり	PL.53
144	353	煙管・雁首	Ⅲ	銅合金	S 195	(7.0)	(1.0)	-	3.9	1.6	6.2	小口破損　羅宇一部残存	PL.53
144	354	煙管・雁首	Ⅴ	銅合金	S 145	(5.9)	0.9	-	2.1	1.6	7.3	首部破損 穿孔あり	PL.53
144	355	煙管・吸口	Ⅴ	銅合金	7tr	(6.1)	(0.9)	0.6	-	-	9.9	羅宇一部残存	PL.53
144	356	煙管・吸口	Ⅳ	銅合金	12tr	(6.9)	0.8	0.4	-	-	2.5	二つに折れて小口他破損	PL.53
144	357	煙管・雁首	Ⅵ？	銅合金	E-8	(3.1)	(1.0)	-	1.5	1.2	1.9	火皿一部欠損　羅宇欠損	PL.53
144	358	煙管・雁首	Ⅳ	銅合金	-	(8.3)	(1.0)	-	2.8	(1.5)	10.2	羅宇一部残存 首部四角 火皿変形	PL.53
144	359	煙管・雁首	-	銅合金	G-3	(5.6)	(0.9)	-	-	-	3.5	小口破損　羅宇欠損 胴部に模様あり 火皿なし	PL.53

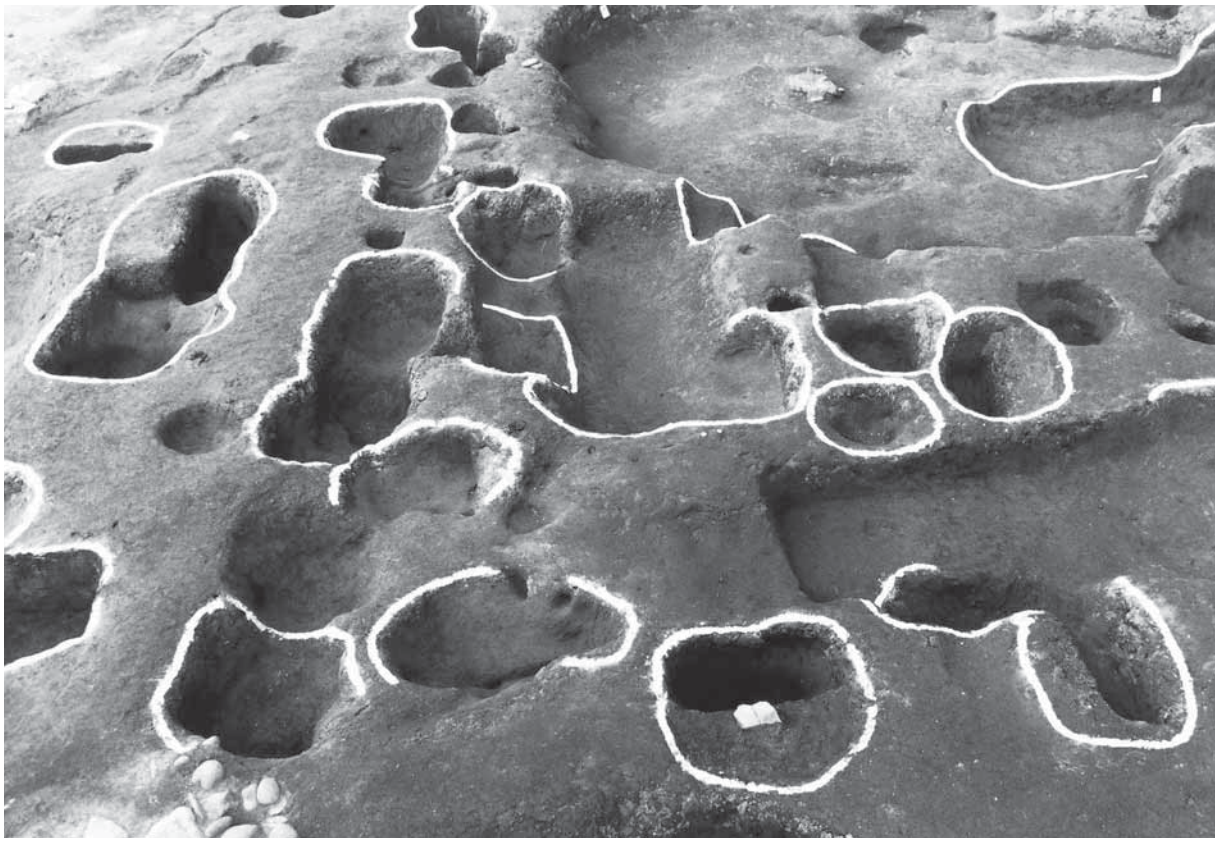
写　真　図　版

S 164　土層断面　南西より

S 164　SF硬化面　北より

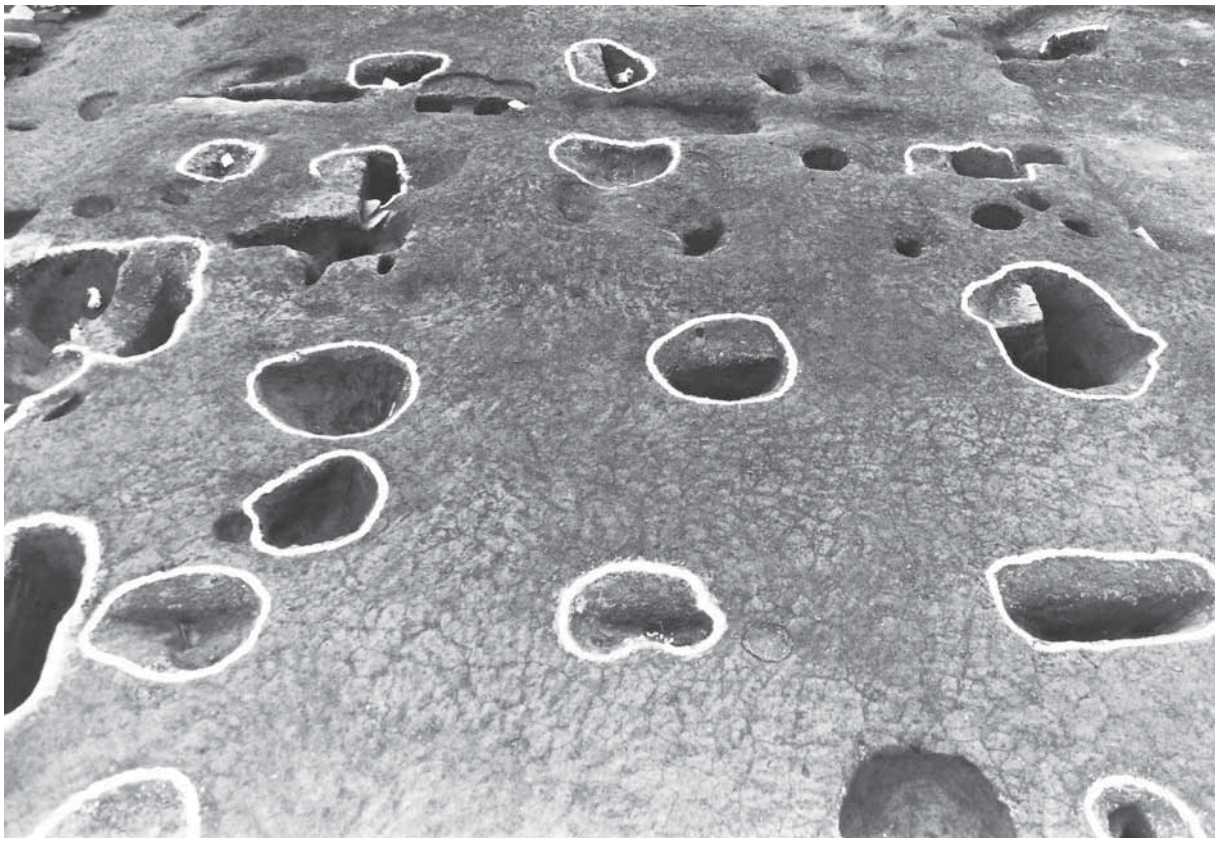
S 232　遺構検出状況　南より

S 232　遺構検出状況　南より

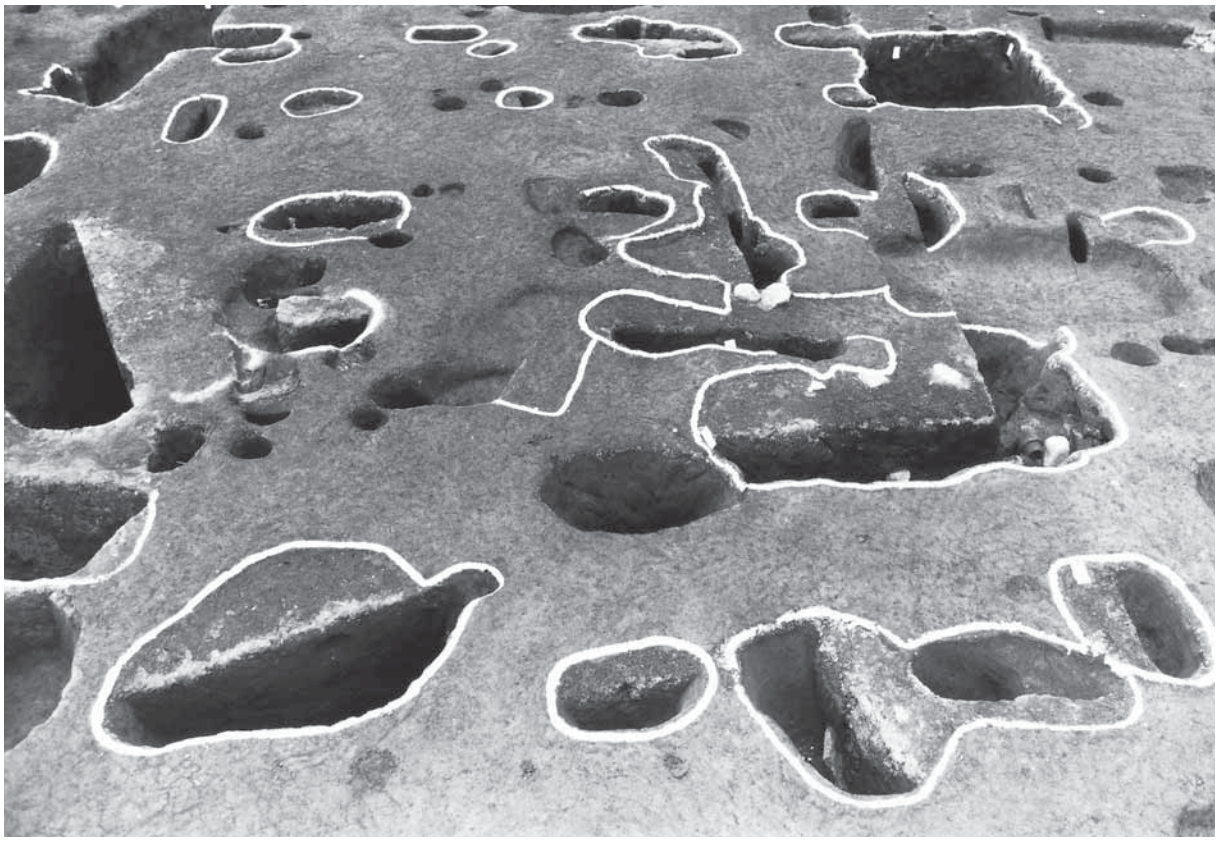


S 231　遺構検出状況　東より

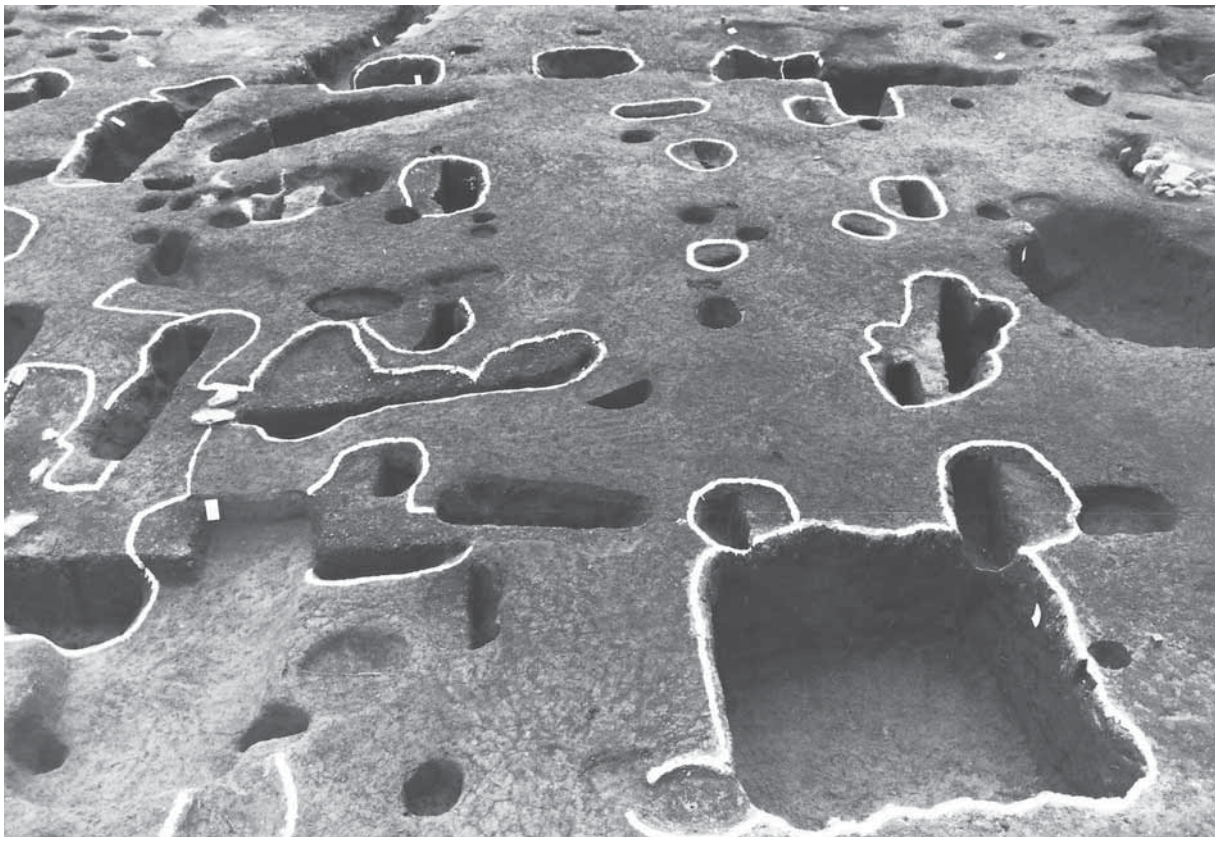
S 234　遺構検出状況　南より



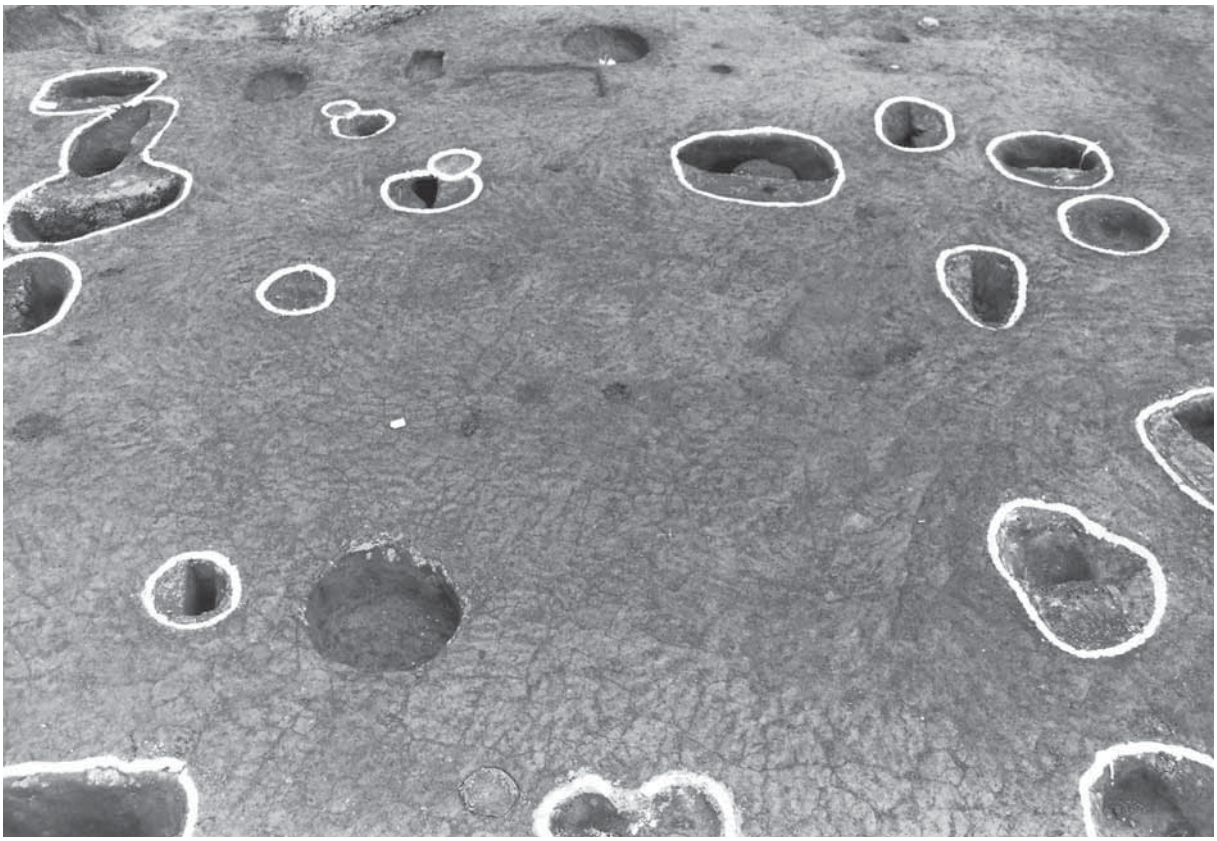
S 237　遺構検出状況　北より



S 236　遺構検出状況　東より



S 238　遺構検出状況　北より



S 239　遺構検出状況　南より

S 046　道路遺構検出状況　北より

S055　土層断面　西より

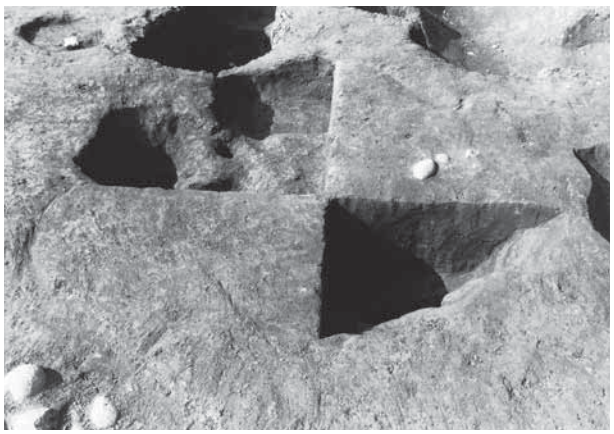
S055　遺構検出状況　南より

S055　遺構検出状況　東より

S076　土層断面　東より

S076　完掘状況　南より

S101　土層断面　東より



S114　遺構検出状況　東より

S114　完掘状況　西より

S023　発掘状況　南より

S023　土層断面　北西より

S023　完掘状況　北より

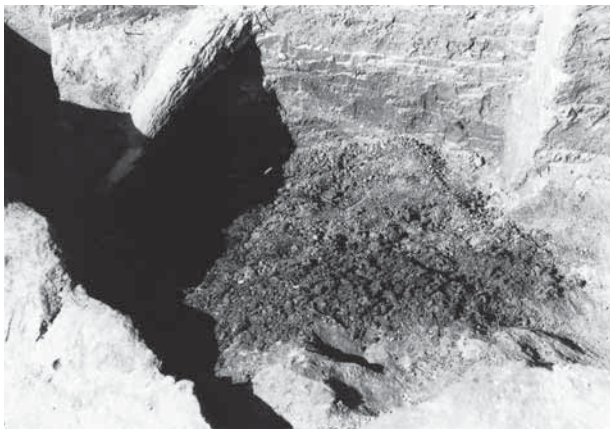
S025　土層断面　西より

S025　完掘状況　西より

S046　土層断面　北より

S065　土層断面　東より

S114　完掘状況　南より

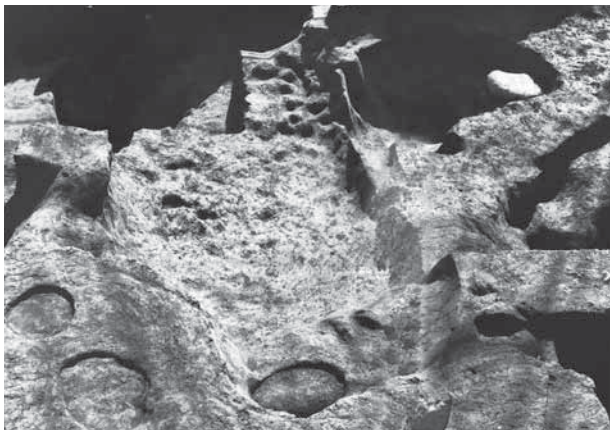


S117　カーボン層出土状況　東より

S132　遺構検出状況　南より

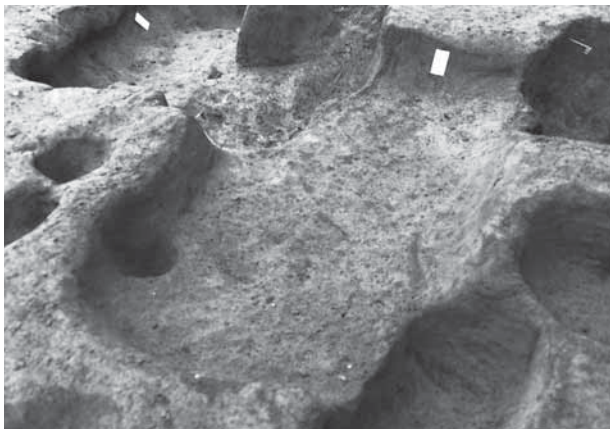
S018　自然木出土状況　北より

S018　土層断面　西より



S065　完掘状況　北より

S143　土層断面　西より

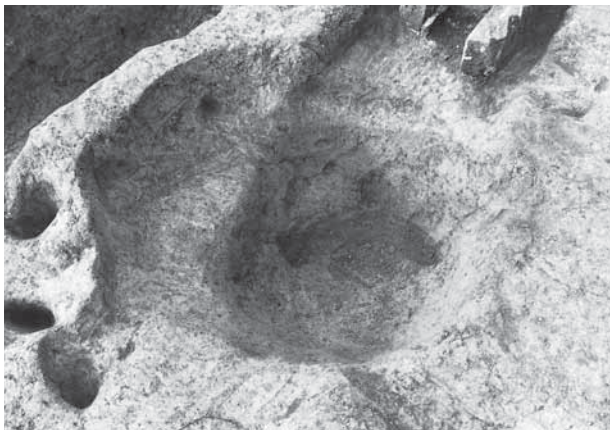


S143　完掘状況　西より

S144　土層断面　西より

S144　完掘状況　西より

S151　出土遺物状況　東より



S151　完掘状況　東より

S006　土層断面　東より

S009　遺構検出状況　北より

S014　出土遺物状況　北より

S014　完掘状況　北より

S016　土層断面　南より

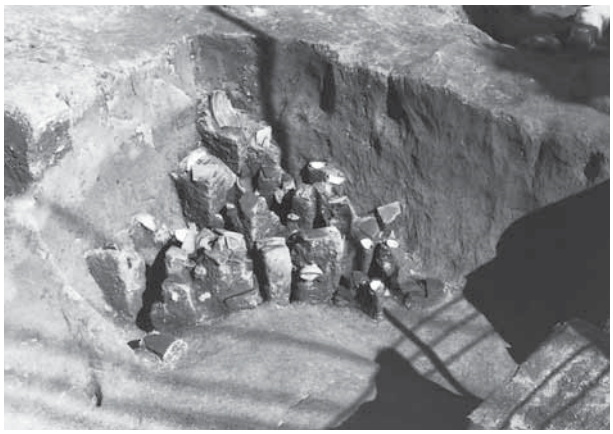
S016　完掘状況　南より

S027　出土遺物状況　北より

S027　完形出土遺物状況

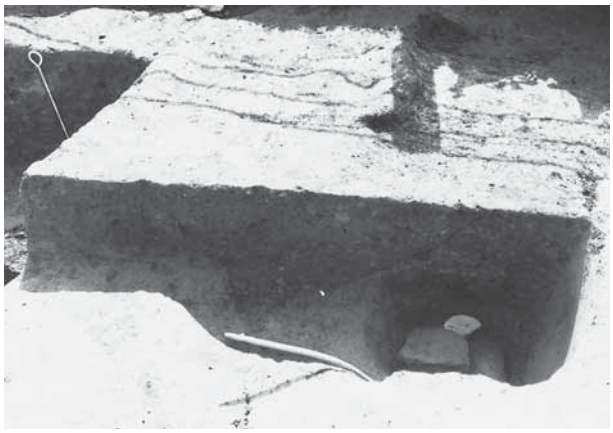
S027　布目瓦出土状況　北より

S042　土層断面　北より



S047　出土遺物状況　南より

S062　土層断面　西より

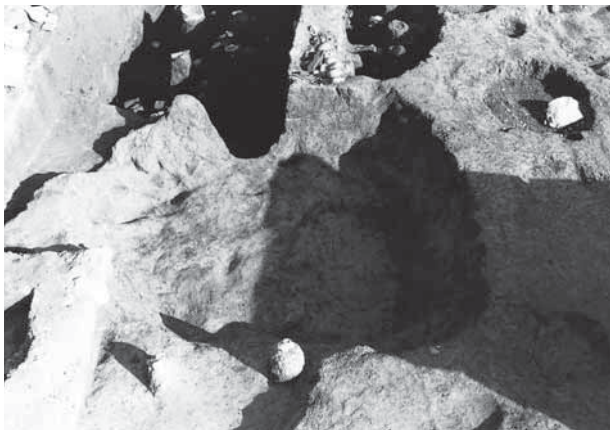


S063　土層断面　北より

S066　土層断面　南より

S066　完掘状況　東より

S072　土層断面　西より



S072　完掘状況　西より

S073　出土遺物状況　南より

S131　完掘状況　北より

S134　出土遺物状況　南より

S134　整地土層状況　南より

S134　出土遺物状況　東より

S134　出土遺物状況　西より

S134　出土遺物状況　東より

S134　出土遺物状況　西より

S134　出土遺物状況　北より

S134　遺構検出状況　西より

S134　土層断面　南より

S134　出土遺物状況　南より

S134　出土遺物状況　南より

S134　出土遺物状況　西より

S134　出土遺物状況　東より

S134　出土遺物状況　南東より

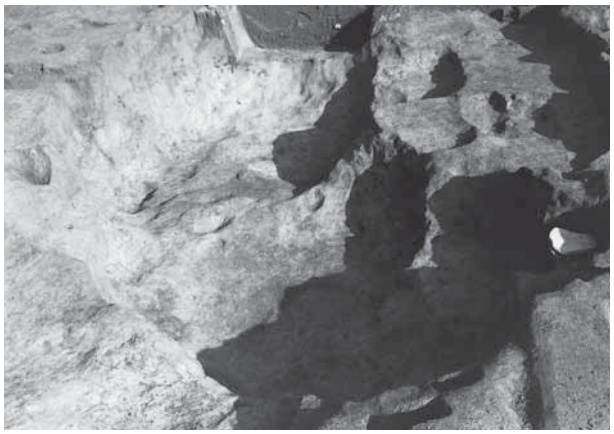
S134　出土遺物状況　西より

S134　出土遺物状況　北より

S134　出土遺物状況　北より

S134　出土遺物状況　南より

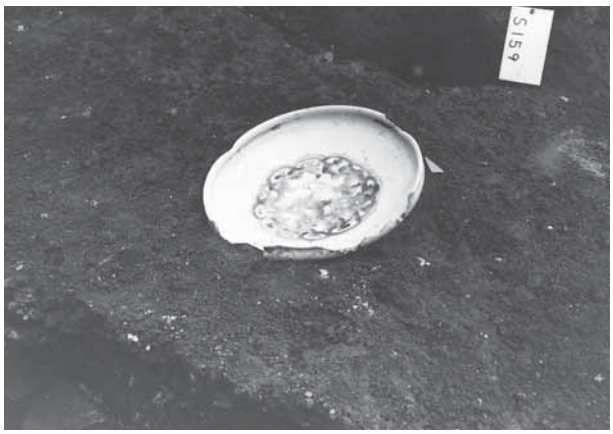
S134　土層断面　南より



S134　完掘状況　南より

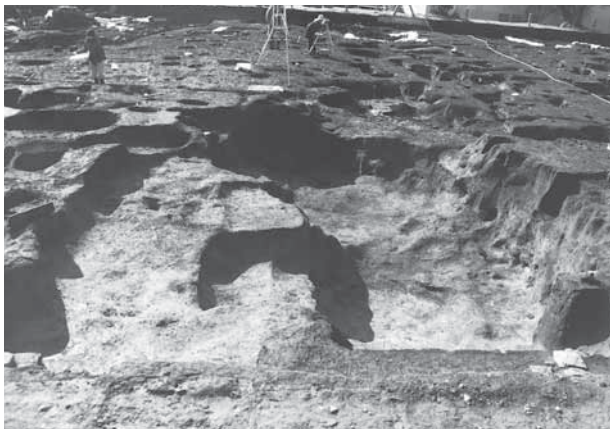
S134　土層断面　西より

S134　土層断面　西より

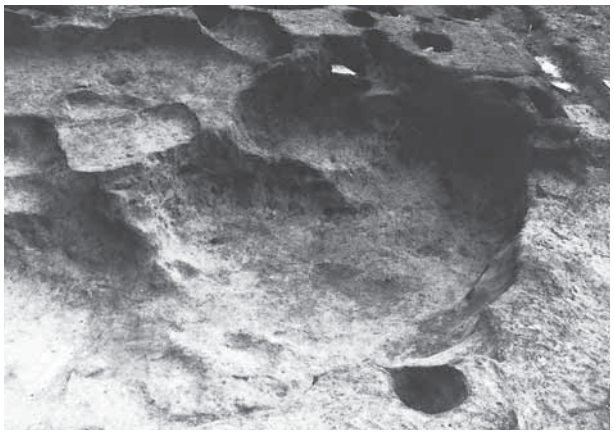


S134　出土遺物状況　北より

S 134　完掘状況　東より



S 134　完掘状況　北より

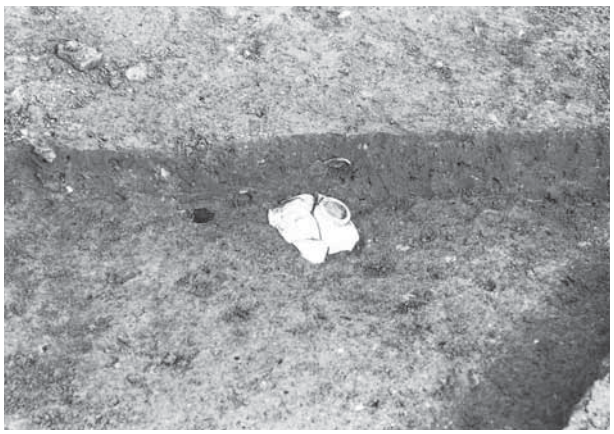


S 134　完掘状況　西より

S 147　完掘状況　東より

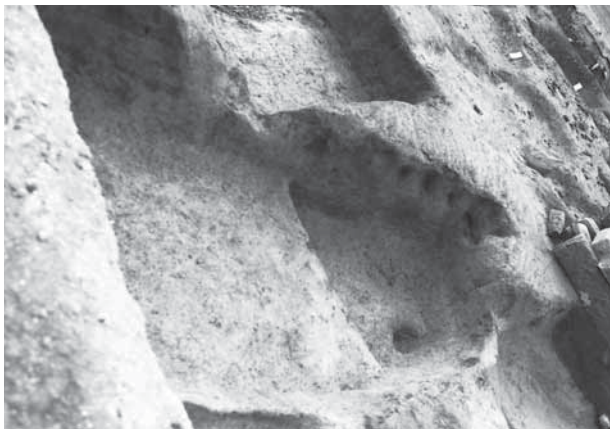
S 152　遺構検出状況　南より

S 152　完掘状況　北より



S 153　出土遺物状況　南より

S 153　遺構検出状況　東より



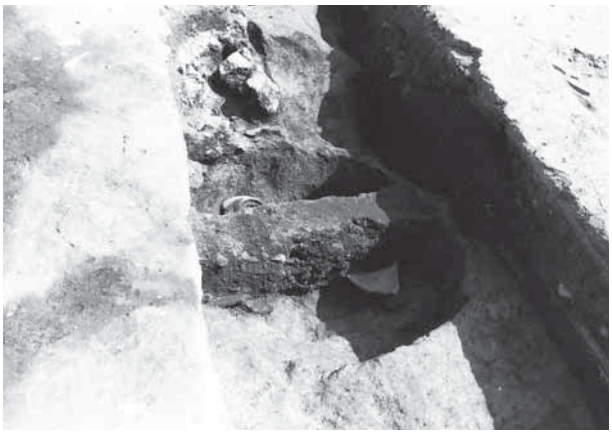
S153　完掘状況　北より

S010　出土遺物状況　東より

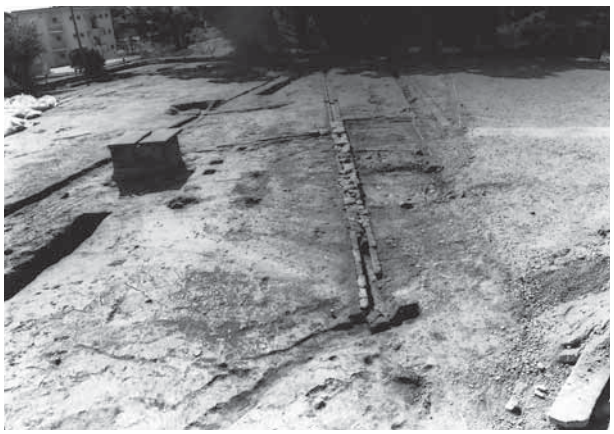
S010　土層断面　東より

S013　礫出土状況　南より

S013　完掘状況　北より



S017　土層断面　西より



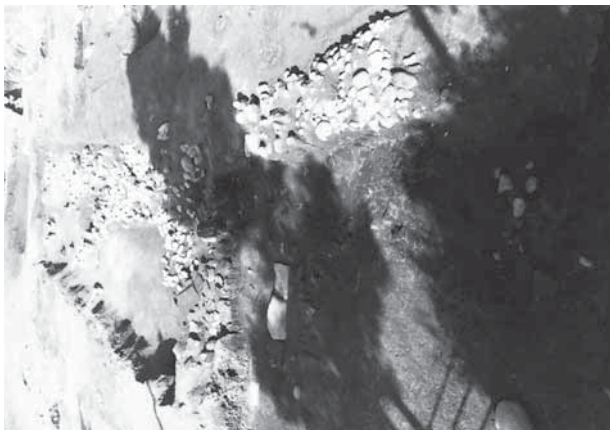
S020　魚骨出土状況　北より

S020　出土遺物状況　南より

S020　土層断面　北より

S020　階段遺構状況　北西より

S020　完掘状況　西より

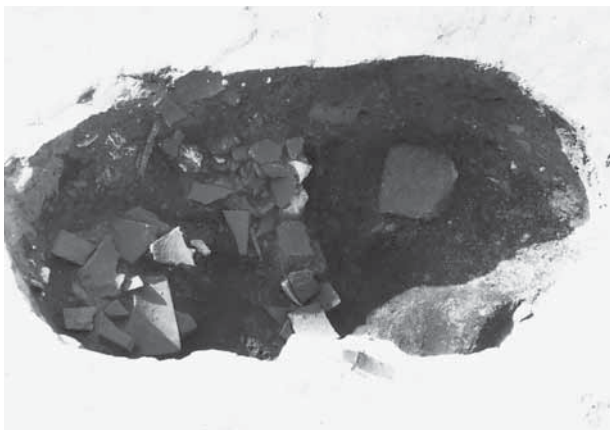


S048　礫出土状況　南より

S048　出土遺物状況　西より

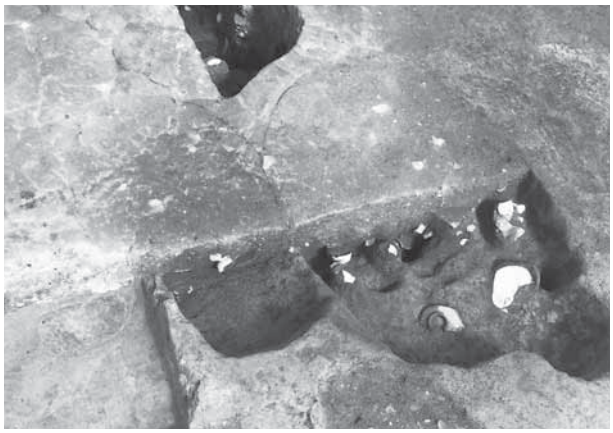
S053　出土遺物状況　東より

S057　土層断面　東より



S068　出土遺物状況　東より

S068　土層断面　北より

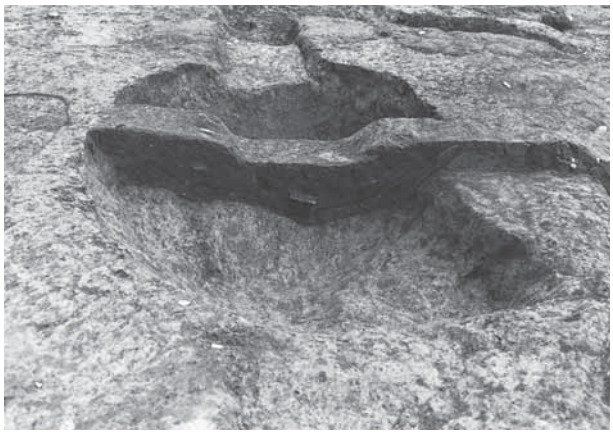


S070　土層断面　東より

S071　土層断面　南より

S089　土層断面　西より

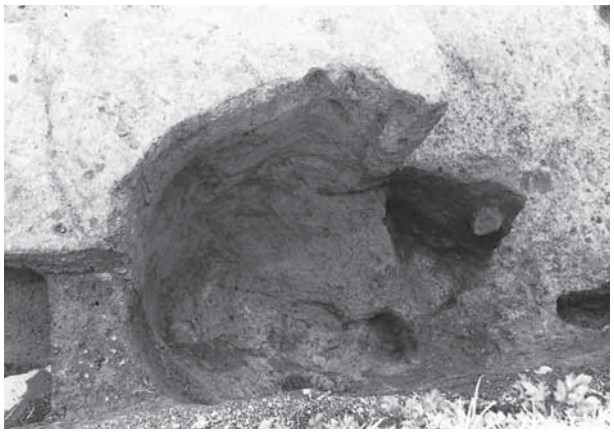
S089　完掘状況　北より



S099　土層断面　西より

S100　土層断面　東より

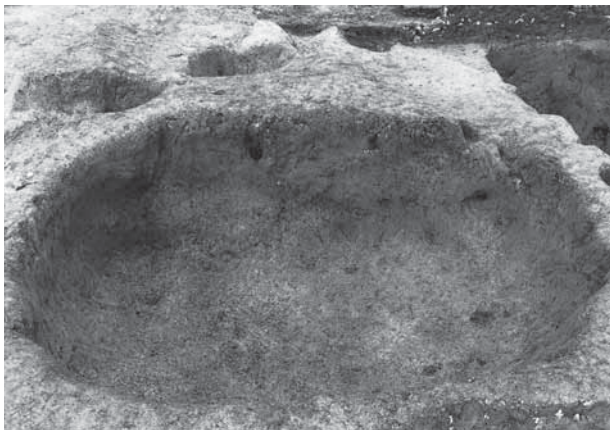
S100　完掘状況　東より



S124　完掘状況　南より

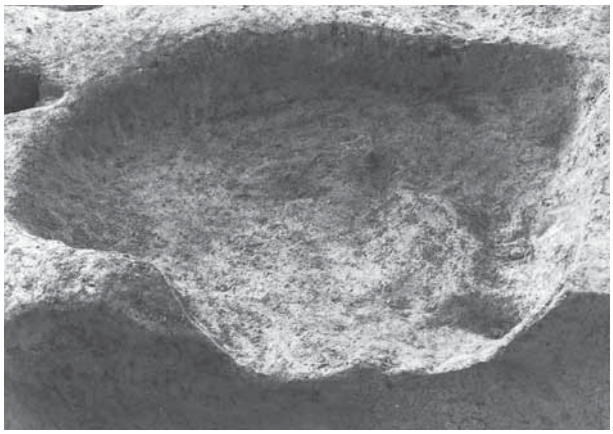
S130　土層断面　東より

S141　土層断面　北より



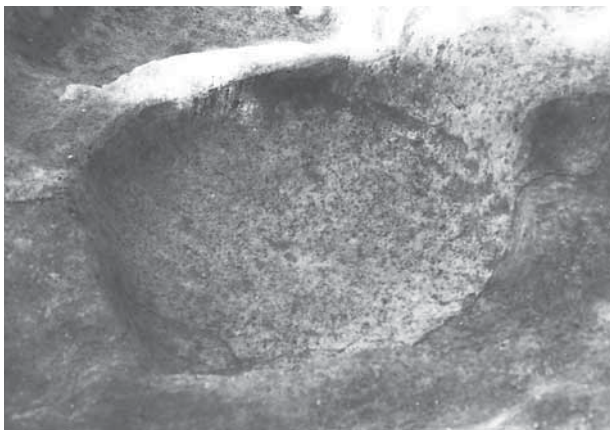
S141　完掘状況　東より

S142　遺構検出状況　南より



S142　完掘状況　東より

S177　土層断面　北より

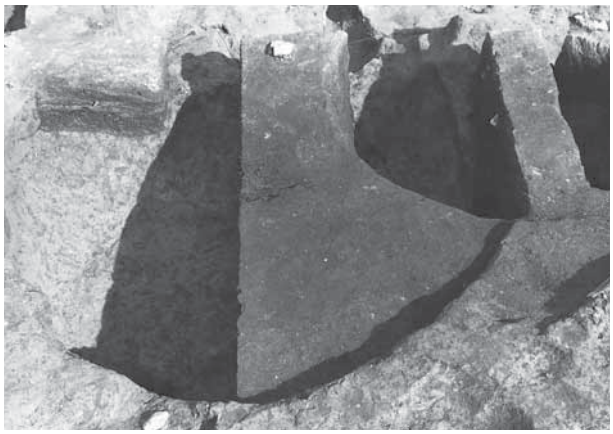


S035　完掘状況　東より

S041　完掘状況　東より

S081　完掘状況　南より

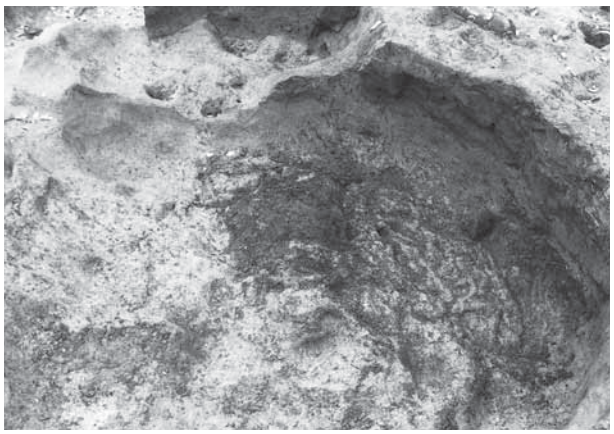
S091　土層断面　西より



S091　遺構検出状況　南より

S091　完掘状況　東より

S092　遺構検出状況　南西より



S092　カーボン出土状況　西より

S092　完掘状況　東より

S106　土層断面　北より

S115　完掘状況　南より

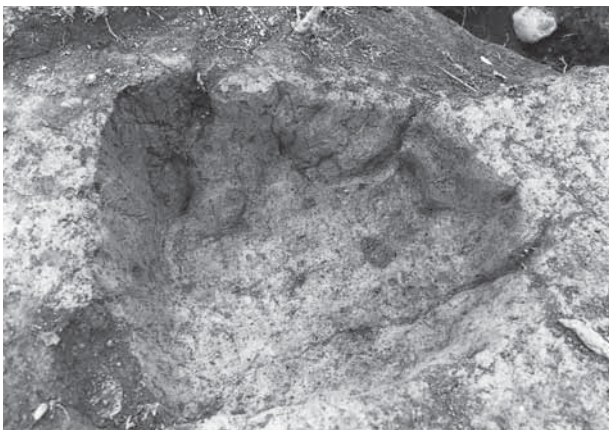
S137　遺構検出状況　北より

S139　土層断面　北より

S139　完掘状況　北東より

S148　土層断面　南より

S148　完掘状況　東より

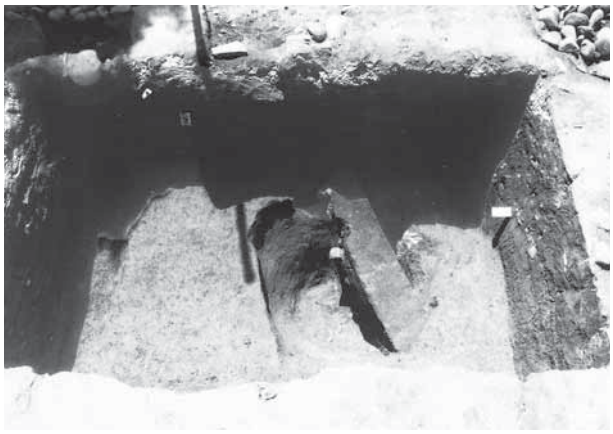


S149　完掘状況　北より

S148　出土遺物状況　南より

S156　完掘状況　北より

6Tr　土層断面　北西より



5T　土層断面　北より

S 143

S 018

S 023

S 138

S 151

S 014

S 014

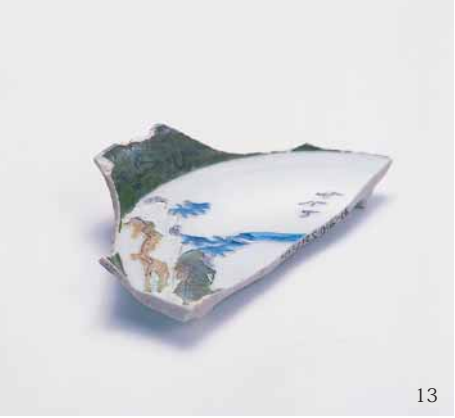
S014

S014

S014

S047

S005



S016

S016

S047

16

17

19

21

18

22

20

23

24

25

26

27

28

29

30

S047

S047

S047

S047

S047

S073

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

52

53

51

54

51

57
56
55

59

60

61

62

S 073

S 073

S 073

S 073

S 073

S 073

S 073

S 134

69

70

71

83

72

73

74

80

75

76

77

76

77

81

78
79

78
79

82

84

85

86

87

88

89

92

90

91

93

96
95
94

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

119

117

58(S 073)

253

118

120

124

122

121

126

123

125

128

127

129

130

131

132

133

135

134

137

136

140

141

143

148

144

145

146

142

S 134

S 134

S 134

S 153

S 153

S 153

S 010

S 010

S 010

155

156

159

160
158

161

162

166

163

166

166

164

165

168

S010

S010

S020

S020

S020

S020

S020

S020

S035

S020

S035

S149

S035

S149

S 148

S 040

S 195

S 035

S 040

S 149

S 195

S 195

S 195

S 195

S 195

S 195

S 195

グリッド

グリッド

S055

S002

S047

グリッド

S055

S055

S114

S018

12Ｔｒ　白磁線刻大皿

S080　河南三彩

S152　志野

㊤S005　㊦S047

S136　オランダ・デルフト

S153　鼠志野(e)　S154　織部(f)

S134　瀬戸

S010　茶入

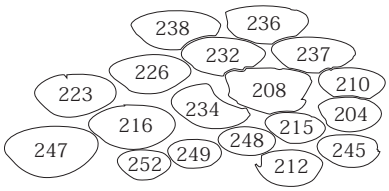
S056　香合

S056　茶入

S141　象嵌　袋物

S035　染付　蓮華

士師皿



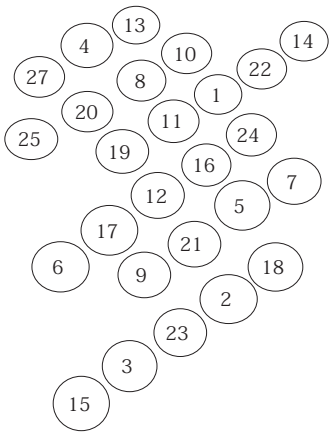
257
256
255
254
258

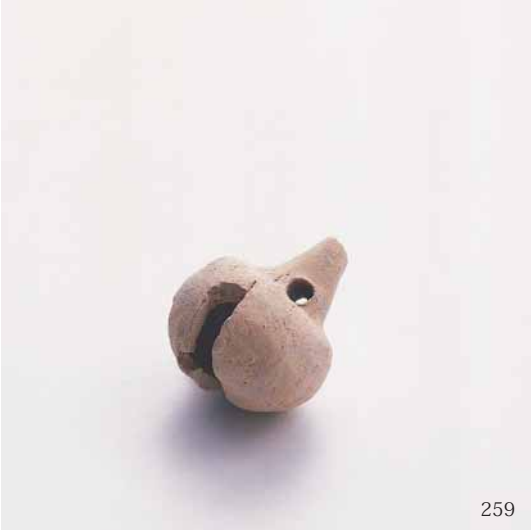
青銅品

349
357
354
348
352
359
356
355
353
346
358
351
347
350

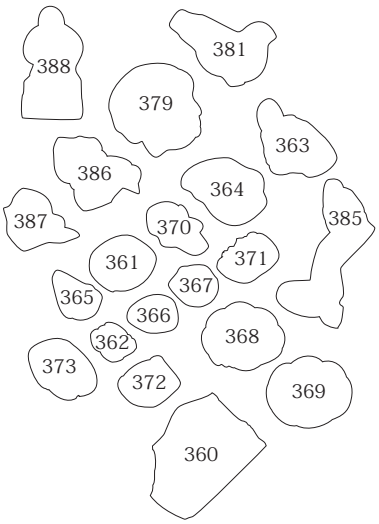
煙管

古銭


13
4
10
14
27
8
22
1
20
11
25
24
19
16
7
12
5
17
21
6
9
18
2
23
3
15

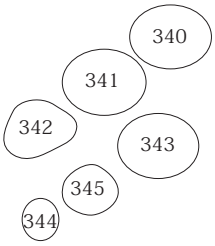


S047　土鈴



土人形・泥面子

土人形



碁石・ガラス玉(344)・金銅製(345)

S010　硯

S168　水輪

貝類

S240　火輪

326

330

334

327

325

329

337

333

瓦　1

335

332

331

323

336

338

瓦　2

報告書抄録

ふりがな	くまもとじょういせきぐん-ふるしろじょうだん
書　名	熊本城遺跡群古城上段
副書名	国立熊本病院新築工事に伴う埋蔵文化調査報告
巻　次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第 269 集
編著者名	村﨑孝宏
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	2012年3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
熊本城遺跡群古城上段（くまもとじょういせきぐんふるしろじょうだん）	熊本市（くまもとし） 二の丸（にのまる） 1ー5	432016	246	32 度 48 分 14 秒	130 度 42 分 56 秒	H14.8.1 ～ H15.3.31	2,200㎡	国立熊本病院新築事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊本城遺跡群古城上段	城郭	中世	柵、櫓、横壕、 掘立柱建物	土師質土器 磁器、瓦質土器	
		近世	道路遺構 掘立柱建物跡 土坑 掘 地下式倉庫 溝	陶磁器 軒丸瓦、軒平瓦、平瓦 煙管 銭貨 焼塩壺 土人形 スラグ	加藤期の道路遺構の検出 細川期の建物遺構の検出

熊本県文化財調査報告第269集

熊本城遺跡群古城上段

発行年月日　平成24年 3月23日

編　集　　熊本県教育委員会
発　行　　〒862-8609　熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号

印　刷　　株式会社　松本コロタイプ光芸社
製　本　　〒862-0976　熊本県熊本市九品寺6丁目5番47号
TEL 096-364-2271

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 269 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 熊本城遺跡群古城上段
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日